

神戸市兵庫区

兵庫津遺跡Ⅰ

(西出地区の調査)

一般国道2号共同溝整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

2002年3月
兵庫県教育委員会

神戸市兵庫区

兵庫津遺跡Ⅰ

(西出地区の調査)

一般国道2号共同溝整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書



2002年3月
兵庫県教育委員会



銅製品



銅製煙管 (M66)



I - 5 区出土木製容器① (表)



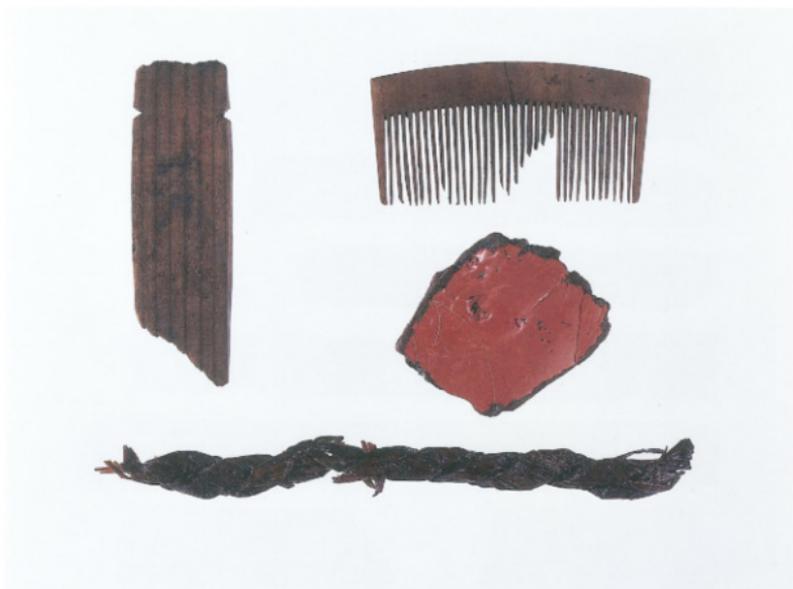
I - 5 区出土木製容器① (裏)



1-5区出土木製容器②(外)



1-5区出土木製容器②(内)



I - 5 区出土木製器及び縄紐

例 言

1. 本書は、兵庫県神戸市兵庫区東川崎町7丁目～西出町2丁目に所在する兵庫津遺跡（西出地区）の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査については、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
3. 整理作業については、国土交通省近畿地方建設局の依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
4. 確認調査及び全面調査は、株式会社日産建設に作業を依頼して実施した。
5. 整理作業は、平成11～13年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
6. 遺物写真の撮影にあたっては、株式会社タニグチ・フォト、及び株式会社イーストマンと委託契約を交わして、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
7. 本書に使用した方位は国土座標V系を基準にし、水準は大阪湾平均海水準（O.P.）を使用した。また、各遺構図面で使用している方位は座標北を指す。
8. 本書において使用した遺跡分布図等の地図については、国土地理院発行2万5千分の1地形図「神戸首部」・「神戸南部」図幅を使用した。
9. 本書の作成に当たっては、宮田麻子の補助を得て、編集は当初岡崎正雄が担当していたが、諸々の事情により、岡田章一と深江英憲が共同で引き継ぎ、執筆は主に遺物について岡田が、遺構について深江が其々担当した。なお、各執筆担当は本文目次に記した。
10. 本書の執筆（特に遺構）については、発掘調査担当者作成による「兵庫津遺跡（西出地区）発掘調査実績報告書」の記述を基本としており、特に震災復興支援職員の調査部分（C～G区）に関しては、遺構の性格等の細かな内容の記述までほぼこれに準拠した。
支援職員の諸氏には、本来であれば本書の執筆に係っていたが、本文目次にも執筆担当者を明記すべきであったが、作成上の諸事情により困難となった。
これは、偏に編集担当者の不徳の致すところである。お詫びすると共に、ここにご芳名を記して、執筆関係者として明記することをご容赦頂きたい。
兼康保明（滋賀県）、岸岡貴英（京都府）、中山浩彦（埼玉県）

本文目次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経過	(深江英憲) 1
第2節 発掘調査の経過	(深江) 1
第3節 整理の経過	(深江) 3
第2章 遺跡をとりまく環境	
第1節 兵庫津の沿革	(岡田章一) 5
第2節 発掘調査の成果	(岡田・松岡千寿) 6
第3節 小結	(岡田) 15
第3章 確認調査	(深江) 17
第4章 全面調査	
第1節 概要	(深江) 19
第2節 遺構	
1. C区～G区の調査	(深江) 19
2. I区の調査	(深江) 24
第3節 遺物	
1. 土器・土製品	(岡田) 29
2. 金属器	(深江) 89
3. 木器・木製品	(深江) 93
第5章 まとめ	(岡田) 98

巻頭図版

図版 1	上：銅製品 下：銅製煙管 (M66)	図版 3	上：I-5区出土木製容器② (外) 下：I-5区出土木製容器② (内)
図版 2	上：I-5区出土木製容器① (表) 下：I-5区出土木製容器① (裏)	図版 4	I-5区出土木製品及び縄紐

挿図目次

第1図	整理作業状況	4
第2図	兵庫津遺跡と周辺の主要遺跡分布図	8
第3図	元禄兵庫津絵図	10
第4図	兵庫津遺跡の調査地点	12

表目次

表 1	兵庫津遺跡と周辺の主要遺跡地名表	9
表 2	兵庫津遺跡の調査地点	13
表 3	兵庫津遺跡 (西出地区) 出土遺物観察表	49~88

図版目次

- | | | | |
|------|--------------------------------|------|---------------|
| 図版1 | 兵庫津遺跡（西出地区）調査区位置図 | 図版35 | I-7区遺構（井戸） |
| 図版2 | C～G区確認調査断面位置図 | 図版36 | I-3区遺構配置図 |
| 図版3 | C～G区確認調査断面柱状図及び
13-S区石垣検出状況 | 図版37 | I-3区SD01土層断面図 |
| 図版4 | C区土層断面図 | 図版38 | C区出土土器1 |
| 図版5 | D区土層断面図 | 図版39 | C区出土土器2 |
| 図版6 | E区土層断面図 | 図版40 | C区出土土器3 |
| 図版7 | F区土層断面図 | 図版41 | C区出土土器4 |
| 図版8 | C区～F区土層断面図注記 | 図版42 | C区出土土器5 |
| 図版9 | C区～G区調査区割り図 | 図版43 | C区出土土器6 |
| 図版10 | C区遺構配置図 | 図版44 | C区出土土器7 |
| 図版11 | D区遺構配置図と主要遺構 | 図版45 | C区出土土器8 |
| 図版12 | E区遺構配置図と主要遺構 | 図版46 | C区出土土器9 |
| 図版13 | F区土層遺構配置図と主要遺構 | 図版47 | C区出土土器10 |
| 図版14 | F区下層遺構配置図と主要遺構 | 図版48 | C区出土土器11 |
| 図版15 | I区確認調査断面図① | 図版49 | C区出土土器12 |
| 図版16 | I区確認調査断面図② | 図版50 | C区出土土器13 |
| 図版17 | I-6区断面図 | 図版51 | C区出土土器14 |
| 図版18 | I-4区断面図 | 図版52 | C区出土土器15 |
| 図版19 | I-5区断面図 | 図版53 | C区出土土器16 |
| 図版20 | I-7区断面図 | 図版54 | C区出土土器17 |
| 図版21 | I-2区断面図 | 図版55 | C区出土土製品 |
| 図版22 | I区調査区割り図 | 図版56 | D区出土土器1 |
| 図版23 | I-6区土層遺構配置図 | 図版57 | D区出土土器2 |
| 図版24 | I-6区土層遺構①（井戸） | 図版58 | D区出土土器3 |
| 図版25 | I-6区土層遺構②（柱穴） | 図版59 | D区出土土器4 |
| 図版26 | I-6区下層遺構（水田） | 図版60 | D区出土土器5 |
| 図版27 | I-4区土層遺構配置図 | 図版61 | D区出土土器6 |
| 図版28 | I-4区土層遺構①（SX02・SX01） | 図版62 | D区出土土器7 |
| 図版29 | I-4区土層遺構②（SD01） | 図版63 | D区出土土器8 |
| 図版30 | I-4区下層遺構配置図 | 図版64 | D区出土土器9 |
| 図版31 | I-5区土層遺構配置図 | 図版65 | D区出土土器10 |
| 図版32 | I-5区下層遺構（竈・鋤溝） | 図版66 | D区出土土器11 |
| 図版33 | I-5区最下層遺構（SX02） | 図版67 | D区出土土製品 |
| 図版34 | I-7区遺構配置図 | 図版68 | D・E区出土土器 |
| | | 図版69 | F区出土土器1 |

- 図版70 F区出土土器2
- 図版71 D・F区出土土製品(土鍾)
- 図版72 C・D区出土土製品(羽口)
- 図版73 D・F区出土土製品(羽口)
- 図版74 I-1・2区出土土器
- 図版75 I-3区出土土器①
- 図版76 I-3区出土土器②
- 図版77 I-4区出土土器①
- 図版78 I-4区出土土器②
- 図版79 I-4区出土土器③
- 図版80 I-4区出土土器④
- 図版81 I-5区出土土器①
- 図版82 I-5区出土土器②
- 図版83 I-5区出土土器③
- 図版84 I-5区出土土器④
- 図版85 I-5区出土土器⑤
- 図版86 I-6・I-7区出土土器①
- 図版87 I-7・I-10区出土土器①・その他
- 図版88 土製品①(人形等)
- 図版89 土製品②(土鍾)
- 図版90 土製品③(土鍾)
- 図版91 土製品④(羽口)
- 図版92 金属器①
- 図版93 金属器②
- 図版94 金属器③
- 図版95 金属器④
- 図版96 金属器⑤
- 図版97 金属器⑥
- 図版98 金属器⑦
- 図版99 木器・木製品①
- 図版100 木器・木製品②
- 図版101 木器・木製品③
- 図版102 木器・木製品④
- 図版103 木器・木製品⑤
- 図版104 木器・木製品⑥
- 図版105 木器・木製品⑦
- 図版106 木器・木製品⑧

写真図版目次

- | | | | |
|------|--|------|---|
| 図版1 | 西出地区調査前状況（南側歩道橋から）
西出地区調査前状況（南から） | 図版13 | F区調査状況
上：F区土層断面（西から）
左下：F区上層遺構北側（北から）
右下：F区上層遺構南側（南から） |
| 図版2 | C区調査前状況
C区畦土層断面（北から）
C区全景（南から） | 図版14 | F区石垣5検出状況（南西から）
F区石垣5南側（南から）
F区石垣5攪乱除去後（南西から） |
| 図版3 | D区重機掘削状況（北から）
D区畦石垣2付近土層断面（北西から）
D区畦石垣1側土層断面（南西から） | 図版15 | F区SX02（西から）
F区SX02北側（南から）
F区SX02北側裏込め土層断面（西から） |
| 図版4 | D区北側全景（南から）
D区石垣1（南から）
D区石垣1裏込め土層断面（北から） | 図版16 | F区上層南側遺構群（北から）
F区SE04検出状況（東から）
F区SE04井戸組み検出状況（東から） |
| 図版5 | D区南側全景（北から）
D区石垣2（北から）
D区石垣2裏込め土層断面（西から） | 図版17 | F区下層遺構北側（北から）
F区下層遺構南側（南から）
F区下層土坑と上層SE04（北から） |
| 図版6 | D区南側全景（北から）
D区石垣3（北から）
D区石垣3裏込め土層断面（北から） | 図版18 | F区下層SK01（西から）
F区下層SK05（東から）
F区下層SK05（北から） |
| 図版7 | D区石組み遺構（東から）
D区SE01断面（西から）
D区SE01（西から） | 図版19 | G区重機掘削状況
G区調査完了状況（南から）
G区土層断面（西から） |
| 図版8 | E区重機掘削状況
E区調査状況
E区土層断面（西から） | 図版20 | I区確認調査風景（南から）
I区確認調査風景（北から） |
| 図版9 | E区全景（北から）
E区石垣4（南から）
E区石垣4（西から） | 図版21 | I-6区調査状況
I-6区断面東壁（南西から）
I-6区断面西壁南側（東から） |
| 図版10 | E区石垣4裏込め土層断面（西から）
E区石垣4（北から）
E区南半部遺構検出状況（北から） | 図版22 | I-6区上層遺構全景（北から）
I-6区上層遺構南側（北から）
I-6区上層遺構北側（北から） |
| 図版11 | E区SE02検出状況（東から）
E区SE02井戸組み状況（東から）
E区SE03検出状況（西から） | 図版23 | 左上：I-6区P-15断割り状況
右上：I-6区P-17断割り状況
中：I-6区P-6・7断割り状況
左下：I-6区P-29断割り状況
右下：I-6区P-29出土柱在 |
| 図版12 | E区SE03井戸組み状況（西から）
E区SX01検出状況（西から）
E区SX01付設溝断面（東から） | | |

図版24	I-6区SE01(西から) I-6区SE01井戸組み状況(北から) I-6区SE04(北西から)	図版35	右: I-5区下層晶・鍍溝検出状況(南から) 下: I-5区下層晶・鍍溝検出状況(東から)
図版25	I-6区SE03(北から) I-6区SE03断割り状況(南から) I-6区SE02断面状況(西から)	図版36	I-5区最下層SX02完掘状況(南から)
図版26	I-6区SE02完掘状況(西から) I-6区SE02礎盤検出状況(西から) I-6区SE02礎盤除去状況	図版37	I-5区最下層SX02完掘状況(南から)
図版27	I-6区下層水田遺構全景(北から) I-6区下層水田遺構畦畔土層断面(東から) I-6区下層水田遺構(東から)	図版38	I-5区最下層SX02転用舟材出土状況(東から)
図版28	左: I-4区調査状況 下: I-4区調査状況 左: I-4区上層遺構全景(南から) 下: I-4区上層遺構全景(北から)	図版39	I-5区最下層SX02転用舟材出土状況(北から)
図版29	左上: I-4区上層SD01(東から) 右上: I-4区上層SD01(西から) 左: I-4区SD01西側近景(東から) 下: I-4区SD01西側近景(北から)	図版40	I-7区遺構面検出状況(北から) I-7区遺構完掘状況(北から) I-7区SE01(北東から) I-7区SE01(上から) I-7区SE05(東から) I-7区SE05井戸組(北東から)
図版30	I-4区上層SX02(南東から) I-4区上層SX03火災層(東から) I-4区上層SK01・02土層断面(東から)	図版41	I-7区SE01完掘状況(南から) I-7区SE08井戸組(南から) I-7区SE06及びSK03遺物出土状況(東から)
図版31	I-4区上層SE01検出状況(西から) I-4区上層SE01井戸組検出状況(上から) I-4区上層SX01検出状況(北から)	図版42	I-2区調査状況 I-2区上層遺構検出状況(南から) I-2区上層遺構検出状況(西から)
図版32	左上: I-4区下層遺構全景(南から) 右上: I-4区下層SD02検出状況(北から) 中: I-4区下層柱穴検出状況(西から) 下: I-4区下層柱穴断割り状況(南から)	図版43	I-2区下層鍍溝(南から) I-2区上層土坑断面(西から) I-2区土層断面(南から)
図版33	右: I-5区調査状況 下: I-5区調査状況 右: I-5区上層遺構全景(北から) 下: I-5区上層遺構全景(南から)	図版44	I-3区作業状況 I-3区遺構検出状況(北から) I-3区焼失建築部材出土状況(南から)
図版34	I-5区上層SX01・SD01(東から) I-5区上層SX01(東から) I-5区上層SK01(東から)	図版45	I-3区SD01掘削状況 I-3区SD01畦土層断面(西から) I-3区SD01(北から)

- 図版44 C区出土土器①
- 図版45 C区出土土器②
- 図版46 C区出土土器③
- 図版47 C区出土土器④
- 図版48 C区出土土器⑤
- 図版49 C区出土土器⑥
- 図版50 C区出土土器⑦
- 図版51 C区出土土器⑧
- 図版52 C区出土土器⑨
- 図版53 C区出土土器⑩・その他
- 図版54 C区出土土器⑪
- 図版55 C区出土土器⑫
- 図版56 C区出土土器⑬
- 図版57 C区出土土器⑭
- 図版58 C区出土土器⑮
- 図版59 C区出土土器⑯
- 図版60 C区出土土器⑰
- 図版61 C区出土土器⑱
- 図版62 C区出土土器⑲
- 図版63 C区出土土器⑳
- 図版64 D区出土土器①
- 図版65 D区出土土器②
- 図版66 D区出土土器③
- 図版67 D区出土土器④
- 図版68 D区出土土器⑤
- 図版69 D区出土土器⑥
- 図版70 D区出土土器⑦
- 図版71 D区出土土器⑧
- 図版72 D区出土土器⑨
- 図版73 D区出土土器⑩
- 図版74 D区出土土器⑪
- 図版75 E区出土土器①
- 図版76 E区出土土器②・F区出土土器
- 図版77 土製品①
- 図版78 上：土製品②
下：土製品③
- 図版79 上：土製品④
下：土製品⑤
- 図版80 上：I-1区出土土器
下：I-2区出土土器
- 図版81 I-3区出土土器①
- 図版82 I-3区出土土器②
- 図版83 上：I-3区出土土器③
下：I-3区出土土器④
- 図版84 上：I-3区出土土器⑤-表
下：I-3区出土土器⑤-裏
- 図版85 上：I-4区出土土器①
下：I-4区出土土器②
- 図版86 I-4区出土土器③
- 図版87 I-4区出土土器④
- 図版88 上：I-4区出土土器⑤
下：I-4区出土土器⑥
- 図版89 I-4区出土土器⑦
- 図版90 上：I-5区出土土器①
下：I-5区出土土器②
- 図版91 上：I-5区出土土器③
下：I-5区出土土器④
- 図版92 I-5区出土土器⑤
- 図版93 上：I-5区出土土器⑥
下：I-5区出土土器⑦
- 図版94 上：I-5区出土土器⑧
下：I-5区出土土器⑨
- 図版95 上：I-5区出土土器⑩
下：I-5区出土土器⑪
- 図版96 上：I-6区出土土器①
下：I-6区出土土器②
- 図版97 上：I-7区出土土器①
下：I-7区出土土器②
- 図版98 I-6区出土土器③・I-7区出土土器③・確認調査出土土器
- 図版99 上：I区土製品①（土人形）
中：I区土製品②（土鍾）
下：I区土製品③（土鍾）
- 図版100 I区土製品④（羽口）
- 図版101 上：金属器①（C～G区鉄釘）
下：金属器②（I区鉄釘）

- 图版102 上：金属器③（I区铜製品）
下：金属器④（I区铜線）
- 图版103 上：金属器⑤（C~G区铜製品）
下：金属器⑥（C~G区铜製品）
- 图版104 上：金属器⑦（I区铜製品）
下：金属器⑧（C~G区鉄釘）
- 图版105 上：金属器⑨（I区铜製品）
下：金属器⑩（C~G区鉄製品）
- 图版106 金属器⑪（I-3区铜製煙管）
- 图版107 上：金属器⑫（C~G区鉄製品）
下：金属器⑬（I区铜線）
- 图版108 上：金属器⑭（I区鉄製品）
下：金属器⑮（I区鉄製品）
- 图版109 上：金属器⑯（I区鉄釘）
下：金属器⑰（I区鉄釘）
- 图版110 金属器⑱（銅錢）
- 图版111 金属器⑲（銅錢）
- 图版112 金属器⑳（鉄滓）
- 图版113 I-5区出土木製品①（木筒・櫛・漆器・丸箸）
- 图版114 上：I-5区出土木製品②（容器類）-内
下：I-5区出土木製品③（容器類）-外
- 图版115 上：I-5区出土木製品④（容器類）-表
下：I-5区出土木製品⑤（容器類）-裏
- 图版116 I-5区出土木製品⑥（下駄）
- 图版117 I-5区出土木製品⑦（下駄）
- 图版118 I-5区出土木製品⑧（下駄・漆器）
- 图版119 I-5区出土木製品⑨（容器類）
- 图版120 I-5区出土木製品⑩（容器類）
- 图版121 I-5区出土木製品⑪（容器類）
- 图版122 I-5区出土木製品⑫（容器類・繩）
- 图版123 I-5区出土木製品⑬（舟材）

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

兵庫津は、古くは「大輪田の泊」と呼ばれ、「五泊」の一つとしてしばしば史料にも登場する。12世紀後半には、平清盛の大改修により、平氏政権の経済的基盤として急成長を遂げた。

平氏滅亡後は、博多や瀬戸内各地の港と、大消費地である京都とを結ぶ集荷港として、大いに賑わいをみせ、中世を通じて重要な港湾都市としての機能を維持していた。

その後、応仁・文明の大乱の兵火にかかり、その大部分を焼失し、また同じく大港湾都市である堺の台頭によって一時衰退するが、近世にはいり、瀬戸内航路の中継基地としての機能を取り戻した兵庫津は、以後明治にいたるまで港町としての重要な地位を占めていた。

兵庫津遺跡については、神戸市立博物館収蔵地図史料（「兵庫津元禄絵図」・「岡方文書」等）により、概ね現在の地図との重ね合わせが可能である。特に、元禄時代には、北船入江の北と西国街道の交わる部分に淡口惣門を配し、それより内を町方、外を地方と称した。町方には岡方・浜方があり、現存する「岡方文書」により、当時の様子をうかがい知ることができる。また、幕末までには、東の地方であった淡町・西出町・東出町が町方として発展していた。

以上のように、兵庫津遺跡については、以前よりその存在が周知されていた。

一方、建設省が計画する一般国道2号共同溝整備事業は、施行計画段階で、周知の遺跡である兵庫津遺跡内への影響が想定されたため、建設省との協議を重ねながら調査を行うこととなった。

時、ほぼ同じくして起こった、あの未曾有の大災害をもたらした阪神・淡路大震災の後、共同溝整備事業は災害時のライフライン確保という目的のもと、本体工事が急ピッチで進められ、それに伴った発掘調査も遅滞の無い事を求められた。

調査は、通常の工事立会を含む直接執行調査から、震災復興調査へと変わり、他府県より派遣された支援職員も調査に加わった。

第2節 発掘調査の経過

建設省が計画する神戸共同溝建設は、一般国道2号線の道路用地内に大規模なライフラインを埋設する事業であり、復興5ヶ年計画に位置づけられている。しかし、事業予定地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である兵庫津遺跡が存在しているため、平成6年に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所と建設省近畿地方建設局兵庫国道工事事務所共同溝課が協議を行った。

協議の結果、現国道下に敷設する共同溝工事における発掘調査の方法は、厳しい条件下での実施が予想され、工事請負に馴染まないとの判断から、建設省の直接執行による発掘調査を行うこととなった。従って、発掘調査の計画は、共同溝本体工事を施工する日産建設株式会社と工事監督である建設省監督官との日程調整を図りながら行うこととした。

調査は、先ず本体工事の施工順序に従って、神戸市兵庫区西出町2町目を中心とするエリアについて、平成6年6月29日及び7月15日の2度にわたり、工事立会という形式で確認調査を実施し（調査番号：940243）、同年9月19日～11月2日にはその確認調査の結果を受けて全面調査を実施した（I区の全面調査）。

続いて、平成8年6月29日～8月28日には、神戸市中央区川崎町7丁目～兵庫区西出町2丁目の確認調査を実施し（調査番号：960233）、その結果を受けて、翌平成9年1月7日～2月27日には全面調査を実施した（C～G区の調査／調査番号：960450）。

各年度の確認調査及び全面調査の体制は以下の通りである。

・平成6年度の調査体制

確認調査・全面調査（調査番号：940243）

調査担当者	調査第1班	主査	岡崎正雄
(調査事務担当)	企画調整班	調査専門員	韓老拓治
		主任	西口圭介
		調査第1班	調査専門員
	整理普及班	主任	藤田 淳

(調査補助員) 大岡ゆき子 (神戸女子大学) ・勝野 正 (東京学芸大学)

・平成8年度の調査体制

確認調査（調査番号：960233）

調査担当者	復興調査第2班	支援職員	兼康保明 (滋賀県)
		支援職員	岸岡貴英 (京都府)

全面調査（調査番号：960450）

調査担当者	復興調査第2班	支援職員	兼康保明 (滋賀県)
		支援職員	中山浩彦 (埼玉県)

第3節 整理の経過

整理作業にあたっては、発掘調査において膨大な量の遺物が出土したため、整理事業契約を兵庫津遺跡（西出地区）と兵庫津遺跡（浜崎地区）に二分して行う事となり、調査が先行している西出地区について、先に整理事業を開始することとなった。

兵庫津遺跡（西出地区）の整理作業は、遺物の水洗い及びネーミングについては全面調査時に現場事務所で行った。それ以後の作業については平成10～13年度にかけて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

整理作業開始当初、編集及び執筆については岡崎正雄が一人で担当していたが、勤務地異動等の諸事情により作業の進行が危ぶまれたため、止むを得ず刊行年度のみ岡田章一と深江英憲が作業を引き継ぎ、執筆及び編集を行った。

各年度の作業内容及び職員の体制は以下の通りである。

平成10年度の整理作業

実施した作業は、接合補強・遺物実測作業である。

整理担当職員	整理普及班	調査専門員	岡崎正雄
	整理普及班	技術職員	長濱誠司

平成11年度の整理作業

実施した作業は、土器の復元・金属器の実測と金属保存処理・木器の実測と木器の保存処理である。

整理担当職員	整理普及班	調査専門員	岡崎正雄
		主 査	加古千恵子
		主 査	岡田章一
		主 任	中村 弘

平成12年度の整理作業

実施した作業は、写真整理・遺構図補正・トレース作業である。

整理担当職員	整理普及班	調査専門員	岡崎正雄
		主 査	岡田章一

平成13年度の整理作業

実施した作業は、遺物写真撮影・トレース・レイアウト・写真整理、報告書刊行である。

編集担当者人事異動等により、執筆・編集担当職員を変更して刊行にいたった。

整理担当職員

整理普及班 主 査 岡田章一
主 任 深江英恵



第1図 整理作業状況

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 兵庫津の沿革

兵庫津は古代には大輪田泊とよばれ、古代より中世、近世にかけて、瀬戸内航路の中継基地あるいは対中国貿易の拠点として連絡として繁栄を続けてきた港町である。

兵庫津の前身、大輪田泊の名が史書に現れるのは『日本後紀』弘仁3年(812)の改修記事が初現である。このことから、9世紀前半には大輪田泊が国家管理の下、瀬戸内航路の地方港として存在していたことが文献上確認できる。

この大輪田泊がいつつくられたかについては、それを示す確実な文献は存在しない。しかし、平安時代後期に成立した、奈良時代の高僧行基の伝記である『行基年譜』には、行基が大輪田船息を修築したと記されていることや、万葉集巻六 田辺福麻呂の歌に「浜清み 浦うのわしみ 神代より千船の泊つる 大和太浜」とあることなどから少なくとも奈良時代には、すでに存在していたことが窺われる。

さて、大輪田泊の修築は弘仁3年(812)以降、たびたび史書に登場するが、その後、10世紀中葉の『日本紀略』天曆元年(947)の記載を最後に史書には現れなくなる。

これは、律令国家の衰退とともに、港の維持管理が国家管理の枠からはずれたことを意味しており、必ずしも港そのものの存在を否定するものではないが、10世紀中葉以降の大輪田泊の実態については、文献からは窺い知れない。

大輪田泊が再び歴史の表舞台に登場するのは平安時代末の平清盛による承安年間(1171~74)及び治承3年(1180)の2度にわたる大改修である。

平氏は清盛の父忠盛の代から、安芸、播磨の国司を歴任し、日宋貿易によって巨万の富を蓄えたとされる。清盛は、平治の乱に勝利を得、朝廷内での実権を手中にすると、従来より一門の山荘が存在したこの地に着目し、宋船の大輪田泊への直接の入港を図った。経ヶ島と呼ばれる人工の埠頭が造営され、この地は日宋貿易の拠点として大いに発展することになる。

しかし、平氏の栄華は長くは続かず、治承4年(1180)の以仁王の挙兵を契機に源頼朝・木曾義仲などの挙兵が相次ぎ、源平の争乱の中で、治承3年(1180)に始まる2度目の改修は中断を余儀なくされる。平氏滅亡後、この港は東大寺の復興に尽力した俊乗坊重源によって改修される。

藤田明良氏によれば、鎌倉時代に入ると、法然、一遍、叡尊などの高僧がこの地を訪れ、布教活動を行うようになり、その活動の様子を描いた絵巻などには、多種多様の姿をした人々とともに大小の建物が描かれ、多くの人が集まり住む町場が形成されていったとされている⁹⁾。

さらに、藤田氏は、当時この港町は「兵庫島」と呼ばれ、その確実な初現は『実朝御記』弘安8年(1285)の亀山上皇の訪問記事であるとされ、同記にはまた、係留されている船が数百隻にも上るとの記載があると述べている¹⁰⁾。

このように、港に町場が形成され、港が活況を呈するようになると、朝廷・幕府は港に関を設け、升米、置石などの名で、入港する船から税を徴収し、それを港の維持管理費に充てるようになる。

その後、元寇の際、敵国降伏の祈禱にあたった大社寺に対して、その恩賞として、関銭の徴収権が寄進されるようになり、ついに、鎌倉時代末期の延慶元年(1308)には、伏見院より、東大寺に兵庫島升米・置石の寄進が行われ、東大寺による関料の徴収が開始される。

時代はやや下るが、15世紀中頃の文安2年(1445)の記録である『兵庫北開入船納帳』は東大寺領摂津兵庫北開の関銭賦課の記録帳簿であり、その内容は、(1)船籍所在地、(2)積載品目、(3)その数量、(4)関銭、(5)関銭の納入日、(6)船頭名、(7)問丸名などである⁹⁾。このような史料は世界的にみても、同時代史料では、当時北ドイツにあった、ハンザ同盟の中心都市リューベックに残る史料と並んで、他に例を見ないものであり、中世の物流、交易を考える上で希有の貴重な史料となっている。

更に、藤田氏によれば、この時期は京都や鎌倉などの中世都市に特徴的な辻子と呼ばれる街区の中央を走る大路から派生した小路の形成が行われた時期であり、辻子に住む者も少なくなく、応長元年(1311)には東大寺の関所に敵対した問丸の住所として「鋳物師辻子」の名が見られると言う¹⁰⁾。

室町時代に入ると幕府は東大寺の関所に加え、興福寺にも関銭徴収権を与え、関銭徴収権は、この南都の二大寺に固定されるようになる。

また、一方、三代将軍足利義満により、日明貿易が再開され、兵庫津は遣明船の発着基地としての機能も併せもつようになり、博多と並ぶ対中国貿易の中心地として大いに発展することになる。

以後、応仁・文明の乱の勃発まで、遣明船の発着に際して、將軍の兵庫下向記事が、たびたび文献に現れる。

藤田氏是对中貿易の中で、寺院特に禅宗寺院の存在の重要性について言及され、例えば、兵庫区門口町の福蔵寺は、室町時代には来日した中国使節との交渉の場や宿舎にもなり、外来文化の発信や外交の窓口など、国際交流センターの役割を果たしていたとされている¹¹⁾。

このように、瀬戸内航路の中継基地、勘合貿易の拠点としてして繁栄を誇った兵庫津も、応仁元年(1467)に、幕府を支える有力守護の一つであった畠山氏の内訌をきっかけに勃発した応仁・文明の大乱の兵火に罹り荒廃し、乱の終了後、町は復興するものの、国際貿易港としての地位は堺の台頭により奪われ、以後衰亡に向かうとされている。

天正8年(1580)、織田信長の家臣であった池田恒興によって兵庫城が築城され、新たに都賀堤が作られ、兵庫津はその城下町、近世都市として再出発する。

また、慶長元年(1596)に発生した慶長の大地震によって、兵庫津は再び壊滅的な被害を被るが、江戸時代になると、摂津国尼崎藩領となり、港町としての機能を回復する。

明和8年(1796)には天領となり以後、幕末の開港を迎えるまで、兵庫津は瀬戸内航路の中継基地として、また、天下の台所と呼ばれた当時の経済の中心地大坂と兵庫を結ぶ兵庫船の発着基地として、繁栄を続ける。

近世の兵庫津の実態を窺わせる資料には、文献では有名な岡方文書があり、また、元禄年間(1688-1704)の町の様子を克明に伝える『元禄兵庫津絵図』を始めとして、『摂津花隈城絵図』、『文久兵庫津絵図』など絵図も複数存在し、近世の兵庫津を語る上で欠かせない貴重な史料となっている。

第2節 発掘調査の成果

上記のように、中世から近世にかけて繁栄した兵庫津に関しては、中世では有名な『兵庫北開入船納帳』、近世では『岡方文書』などの文献史料、『一遍上人絵伝』などの絵巻資料、『元禄兵庫津絵図』などの絵図資料など、その実態の一端を窺わせる貴重な資料が豊富に残り、中世、近世の経済史、交通史を研究する上で貴重なフィールドとして、研究者の注目を集めてきた。

しかし、発掘調査を伴う考古学的アプローチによる実態解明については、同様の性格をもつ港町であ

る博多、堺などと比べると遅れていると言わざるをえない。

現在、『元禄兵庫津絵図』に描かれた範囲内は兵庫津遺跡として周知の遺跡に登録され、神戸市教育委員会が発行する遺跡分布図に掲載されている。この範囲内で現状変更を伴う工事が行われる際には確認調査、全面調査が、また、軽微なものについても工事立会などが必要とされ、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会などによって発掘調査が実施されている。

このような兵庫津遺跡関連の発掘調査は昭和63年に実施された大手前女子大学による調査⁵⁶を嚆矢として、現在まで数十回にわたって行われている。

しかし、遺跡が市街地に位置し、調査面積が小規模なものが多いこと、阪神・淡路大震災に伴う復興調査では、掘削深度が地下の遺構に影響を与える範囲内に留められ、最終遺構面まで調査されたものが少ないこと、各年度の調査成果については現在整理中のものが多く、正報告書が発行されているものがほとんどなく、概報、年報、現地説明会資料、講演会資料などでその成果の一部が発表されるに留まっていることなどから、遺跡の全容を推定するには資料不足の感は否めない。

発掘調査のデータに関しては上記のような状況にあり、これをもって兵庫津遺跡の実態解明に迫るのは、いささか大胆ではあるが、ここでは実態解明へのアプローチの初歩的段階として、手元にある資料をもとに、ここ10数年間の発掘調査の成果から何が分かり、何が課題とされているかについて、時期を

(1) 清盛以前の大輪田泊、(2)、清盛の大輪田泊の大改修、(3) 中世の兵庫津、(4) 近世の兵庫津、(5) 近代以降の兵庫津の5時期に区分し、その概要について触れてみたい。

(1) 清盛以前の大輪田泊

第5図は現在の兵庫津遺跡の範囲とその周辺に存在する遺跡を兵庫県教育委員会発行の遺跡分布図から拾いだしたものである。この中で、現在の兵庫津遺跡に近接し、大輪田泊築造に先行する奈良時代以前の遺跡としては、大開遺跡(第2図 18)、上沢遺跡(第2図 23)、榑・荒田町遺跡(第2図 14)、宇治川南遺跡(第2図 10)などがあり、いずれも縄文時代～古墳時代の遺跡である。

しかし、いずれも、現在の兵庫津遺跡の範囲外に存在し、兵庫津遺跡の範囲内では、現在のところ、この時期の遺構、遺物は発見されていない。

続く奈良時代の遺跡は兵庫津遺跡の周辺での調査例は数少ないが、北側に近接する遺跡としては先に触れた上沢遺跡がある。ここでは、掘立柱建物群が検出されており、この時期の中心的集落と考えられている⁵⁷。

先に述べたように、文献の記載からは間接的にはあるがすでに奈良時代には大輪田泊の存在が窺われ、『行基年譜』には行基が摂津国菟原郡宇治郷に大輪田船息を築いたとの記載がある。しかし、それが現在のどの地点に存在するかについては定説はない。

足利健亮氏は『元禄兵庫津絵図』に記載された逆瀬川町付近に奈良時代の旧河道が存在していたとし、このラインが菟原郡と雄伴郡の境にあたり、大輪田泊が菟原郡にあったと言ふ説は成立するとしている⁵⁸。

しかし、現在までの発掘調査の成果からは、逆瀬川町付近からは、奈良時代の旧河道あるいは集落などの遺跡は発見されておらず、清盛以前の大輪田泊に関しては、その位置、存在とも確認されていないのが実情である。

(2) 平清盛の大輪田泊の大改修

平清盛による12世紀後半の承安年間の経ヶ島の築造は歴史上広く知られており、清盛が工事を急ぐあ



大 阪 市

第2図 兵庫津遺跡と周辺の主要遺跡分布図

表1 兵庫津遺跡と周辺の主要遺跡地名表

No	遺跡名	所在地	No	遺跡名	所在地
1	散布地	神戸市中央区熊内町2丁目	21	東川崎町遺跡	神戸市中央区東川崎町
2	脇浜西遺跡	神戸市中央区脇浜海岸通	22	水木遺跡	神戸市兵庫区大開通9丁目
3	日暮遺跡	神戸市中央区日暮通1丁目他	23	上沢遺跡	神戸市兵庫区上沢通8丁目
4	吾妻遺跡	神戸市中央区日暮通5丁目	24	室内町遺跡	神戸市長田区前原町
5	滝山城	神戸市中央区	25	御蔵遺跡	神戸市長田区御蔵通4～6丁目他
6	花隈城向城跡	神戸市中央区中山手通2丁目他	26	御船遺跡	神戸市長田区御船通・大道通
7	磯上遺跡	神戸市中央区磯上通7丁目	27	神楽遺跡	神戸市長田区御船神楽町他
8	花隈城跡他	神戸市中央区花隈町他	28	苺藻遺跡	神戸市長田区苺藻通
9	元町遺跡	神戸市中央区元町通5丁目	29	苺藻遺跡	神戸市長田区苺藻通他
10	宇治川南遺跡	神戸市中央区橘通1～5丁目	30	双葉町遺跡	神戸市長田区久保町・双葉町
11	祇園遺跡	神戸市兵庫区上祇園町	31	長田野田遺跡	神戸市長田区野田町
12	雪御所遺跡	神戸市兵庫区雪御所町	32	若松町遺跡	神戸市長田区若松町10・11丁目他
13	菊水町遺跡	神戸市兵庫区菊水町	33	戎町遺跡	神戸市須磨区戎町
14	楠・荒田町遺跡	神戸市兵庫区荒田町他	34	大田町遺跡	神戸市須磨区大田町・戎町
15	兵庫松本遺跡	神戸市兵庫区松本通2丁目	35	権現町遺跡	神戸市須磨区権現町3丁目
16	福原遺跡	神戸市兵庫区福原町	36	大手町遺跡	神戸市須磨区大手前町
17	湊川遺跡	神戸市兵庫区下沢通	37	若木町遺跡	神戸市須磨区若木町
18	大開遺跡	神戸市兵庫区大開通4丁目	38	須磨東町遺跡	神戸市須磨区東町4丁目
19	塚本遺跡	神戸市兵庫区塚本通6丁目	39	衣掛遺跡	神戸市須磨区衣掛町4丁目
20	兵庫津遺跡他	神戸市兵庫区西出町・三川口町他			



第3図 元禄兵庫津絵図 (西撰大観より転載)

まり、西に沈む夕日を呼び戻したというエピソードは広く人口に膾炙している。

平氏とこの地との関係は平氏がその別邸をこの地に構えたことから生じ、清盛が遷都を強行した福原京と並んで、その実態解明への調査が積み重ねられてきた。

福原京に関しては1981年以來、その推定地とされる楠・荒田町遺跡を中心に調査が行われ、1981年度の調査では、大型掘立柱建物と二重堀¹⁰が、また、その北側に存在する祇園遺跡では庭園とそれに伴う池が検出され、その中から、大量の京都系の土師器皿や吉州窯系の玳瑁変が出土し、平氏一門に関連する遺跡と考えられている¹¹ものの、福原京の位置の確定には至っていない。

同様に、清盛が改修したとされる大輪田泊についても、遺物については白磁碗、青磁碗、土師器皿などを中心に12世紀後半代にまで遡る遺物の出土が見られ、遺構についても、断片的に土坑、ピットなどが検出されているが、港湾施設あるいは集落など、清盛が改修した港に伴う確かな遺構は検出されておらず、現状では清盛の改修した時期の大輪田泊の位置、存在はいずれも考古学的には実証されていない。

(3) 中世の兵庫津

先述したように、藤田明良氏によれば、鎌倉時代以降、陸続きとなった経ヶ島を中心に町場が形成されはじめ、当時、この港町は兵庫島と呼ばれていたとされている。

考古学にも、この時期になると、部分的にはあるが、その実態が漸く明らかになってくる。

平成9年度に兵庫県教育委員会によって行われた表2(12)の調査は、中世の町屋群がまとまった形で発見され、町場の存在が明らかになった最初の調査となった。

この調査では中世の港町に伴うと考えられる町屋群が『元禄兵庫津絵図』に描かれた範囲の北西部で、北東から南西方向に、ほぼ280mの範囲内で密集した形で検出され、中世の兵庫津の片鱗が初めて姿を現した。また、溝、掘立柱建物群の他に、井戸、建物を囲む横列、炉跡、土器廃棄土坑などが見つかり、その中から土師器鉢・釜・皿、東播系須恵器鉢・甕、備前焼指鉢・甕、丹波焼甕、瀬戸・美濃焼天目碗・水漬、中国製天目碗、白磁碗・皿、青磁碗・皿などの遺物がおびただしく出土した。

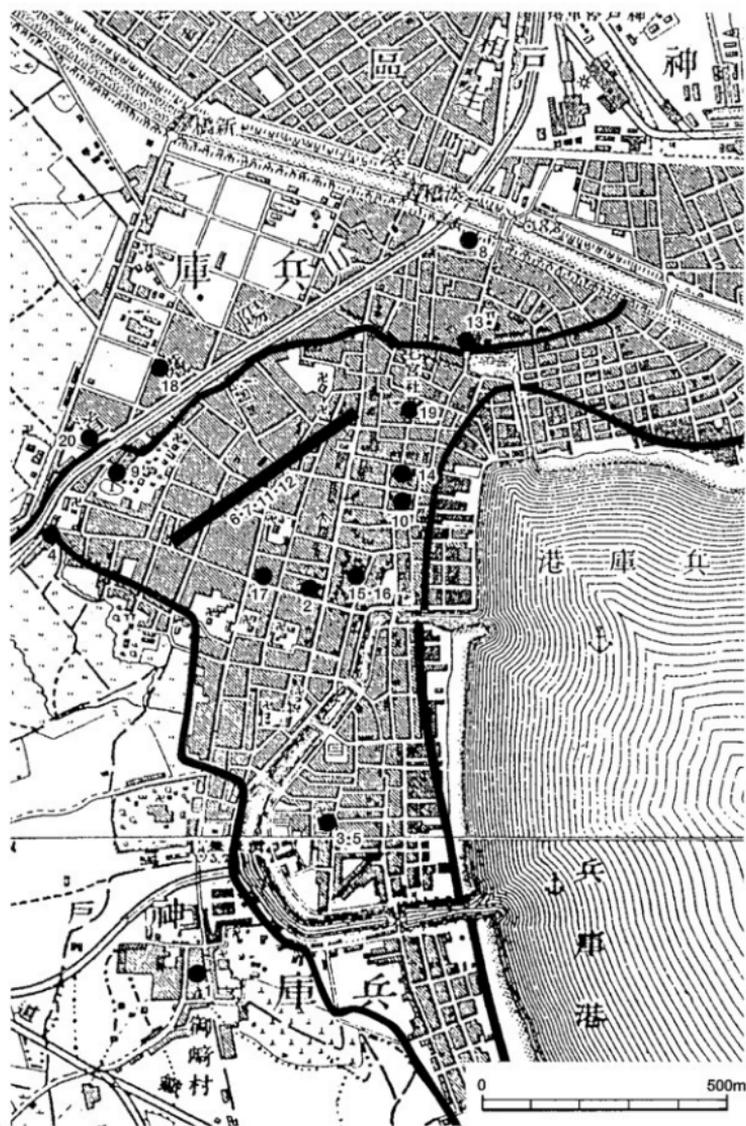
また、この他、港町にふさわしい倉庫の基礎部と考えられる石組の建物基礎などが検出されて、中世の兵庫津の存在が考古学的に実証されることになった¹²。

この調査の整理作業は現在進行中で、出土遺物の詳細な検討は経っていないが、日常的に使用され、また、長く伝世することが少ない土師器鍋を取り上げて、部分的に検討した結果、鍋は最も古いものは13世紀前半にまで遡るものの、主要なタイプが出そろっているのは13世紀後半の時期で、この時期にこの地点では町屋群が形成され、それは14世紀後半～15世紀後半の時期をピークとして、17世紀前半まで継続することが明らかになった。

このように、表2(12)の調査では町屋の存在、その存続時期、町屋内の施設などについては、ある程度明らかになっが、調査範囲が幅6m、長さ600mという細長い範囲で行われたため、町屋によって構成される町場の地割り構造を明らかにするには至らなかった。

その後、平成10年度に神戸市教育委員会によって行われた表2(14)の調査で、この問題はある程度解決されることになる。

この調査では近世から中世の13世紀後半代にまで遡る町屋群及び遺構面が検出され、16世紀後半代にはすでに後の元禄絵図に描かれたものと一致する短冊形地割りが存在するが、それ以前の15世紀後半から16世紀前半の時期の地割りは、それとは構造を異にすることが明らかとなった¹³。その結果、16世紀のある段階で、近世に継続する地割りが形成されたことが実証された。



第4図 兵庫津遺跡の調査地点 (大日本帝国参謀本部陸軍測量局 明治18年測量図に加筆)

(太線は『元禄兵庫津絵図』に描かれた町場の範囲)

表2 兵庫津遺跡の調査地点

番号	調査年度	名前	調査主体	調査種類	所在地	近代	近世	中世	古代	原始	備考
1	昭和63年度	兵庫津遺跡	大手前女子大学	全面調査	兵庫区御崎本町	○	○	○	△	△	第4遺構面では佐入江の行跡検出。
2	平成2年度	兵庫津遺跡	神戸市教育委員会	全面調査	兵庫区西中町1丁目		○	○			
3	平成3年度	兵庫津遺跡	神戸市教育委員会	全面調査	兵庫区中ノ島2丁目(阿弥陀寺)		○				阿弥陀寺創建時(1271年)の遺構は検出されず。
4	平成6年度	兵庫津遺跡	神戸市教育委員会	全面調査	兵庫区西柳原6～7丁目		○				
5	平成7年度	兵庫津遺跡	神戸市教育委員会	全面調査	兵庫区中ノ島2丁目(阿弥陀寺)		○				擾乱が多く、工事影響程度が近世の包含層に到達せず。
6	平成8年度	兵庫津遺跡(1)	兵庫県教育委員会	全面調査	兵庫区西宮内町1丁目		○	○			
7	平成8年度	兵庫津遺跡(2)	兵庫県教育委員会	全面調査	兵庫区西宮内町～三川口町		○	○	△	△	近世の道路状遺構検出。
8	平成8年度	兵庫津遺跡(3)	兵庫県教育委員会	全面調査	兵庫区西出町2丁目		○				
9	平成8年度	兵庫津遺跡	神戸市教育委員会	全面調査	兵庫区門町5丁目		△	△			
10	平成8年度	兵庫津遺跡	神戸市教育委員会	全面調査	兵庫区鍛冶屋町		○				鍛冶工房検出。
11	平成8年度	兵庫津遺跡	神戸市教育委員会	全面調査	兵庫区西柳原町～兵庫町1丁目		○	○	○		
12	平成9年度	兵庫津遺跡	兵庫県教育委員会	全面調査	兵庫区兵庫町1丁目～東柳原町1丁目	○	○	○			
13	平成10年度	兵庫津遺跡	兵庫県教育委員会	全面調査	兵庫区西出町2丁目～兵庫町1丁目		○				江戸中期以降の「船入江」検出。
14	平成10年度	兵庫津遺跡(第15次)	神戸市教育委員会	全面調査	兵庫区七宮町2丁目		○	○			「宝永の大火」の焼土面検出。
15	平成10年度	兵庫津遺跡(第17次)	神戸市教育委員会	全面調査	兵庫区本町1丁目		○				
16	平成11年度	兵庫津遺跡(第18次)	神戸市教育委員会	全面調査	兵庫区本町1丁目		○				
17	平成11年度	兵庫津遺跡(第19次)	神戸市教育委員会	全面調査	兵庫区本町2丁目		△	○			近世の道路状遺構検出。
18	平成11年度	兵庫津遺跡(第22次)	神戸市教育委員会	全面調査	兵庫区三川1町		○				木田検出。
19	平成11年度	兵庫津遺跡(第22次)	神戸市教育委員会	全面調査	兵庫区七宮町2丁目	○	○	○			海拔-30cmで中世の遺構面検出。
20	平成11年度	三川口遺跡	神戸市教育委員会	全面調査	兵庫区三川口町		○				木田検出。

それでは、13世紀後半には形成され、16世紀代にその地割り構造を変えて近世に継続して行く中世の兵庫津の町場の範囲はどの程度の規模が想定されるのであろうか。

この問題を考えるには、中世の兵庫津の南に存在した内海、すなわち須佐入江がどの範囲にまで入り込んでいたかを検討する必要がある。

発掘調査で当時の汀線が確認されたものとしては、昭和63年に大手前女子大学によって調査された表2(1)の事例がある。もう一つ、汀線を考える上で鍵となるのは一瀬入寂の地として知られる真光寺の位置である。この寺には一瀬の墓と伝えられる五輪塔が現在も残っている。この五輪塔は鎌倉時代後期に成立した「一瀬上人絵伝」⁴⁾に描かれており、そこではその間際にまで海岸線が迫っている様子が描かれている。

真光寺の位置が当時のままであったとすると、鎌倉後期すなわち13世紀後半には、真光寺より南は海すなわち須佐入江が入り込んでいたことになり、兵庫津の南端は現在の真光寺付近に求められる。また、北端は表2(14)の調査で、少なくとも13世紀代にまで遡る遺構群が見つかっており、この付近にまで町屋が及んでいたことが分かる。

海岸部に面した東限については15世紀中葉の「兵庫北関入船納帳」にその名が現れ、元禄絵図に海に面して描かれている鶴上町付近に求めよう。

西限については、明確ではないが、表2(20)の調査で、この付近は中世段階では水田であったことが分かっており、少なくとも町場の範囲がここまでは及んでいなかったことが分かる。

以上をまとめると、中世の町場は表2(14)の調査地点を北限とし、現在の真光寺を南限として、近世の兵庫津の範囲内の北側部分の近世よりやや狭い範囲内に存在していたと推定される。

この場合、重要な鍵になるのは真光寺の位置である。真光寺に限らず、中世の兵庫津の構成要素としての寺院の存在は藤田明良氏が指摘されるように、港町の機能、構造を考える上で極めて重要であると考えられる。

今後の調査ではこれら寺院跡の位置の確認、その建物配置、存続時期、出土遺物の検討などが、重要な検討課題として残されている。

(4) 近世の兵庫津

近世の兵庫津については、これまでたびたび引用した元禄6年成立の「元禄兵庫津絵図」が残されており、港町の規模、範囲だけでなく、道路、街区など町割りを構成する施設、船入江などの港湾施設、鍛冶屋町、大工町など住人の職種を表した町名、また古くは「兵庫北関入船納帳」の時期にまで遡る町名の記載、町の周囲を巡る水路など様々な情報が詳細に記録されている。

また、同時に発掘調査のデータも、中世に比べると格段に多くなり、町場の規模のみならず、町屋の構造に至るまでの細かいデータも部分的にはあるが、着実に蓄積されつつある。

特に、先にもふれた表2(14)の調査結果は、遺構の残りが良好であったこと、調査面積が約400m²と比較的規模が大きかったことなどから、町屋の全容が解明され、近世の兵庫津の町場構造を考える上で貴重な資料を提供した⁵⁾。

まず、元禄絵図に描かれた町がいつごろ成立したかについては、先にも触れたように、16世紀の後半代には絵図と一致する地割りが形成されていることから、部分的にはあるが、近世の町割りは16世紀後半すなわち、天正8年(1580)の兵庫城の築城とそれに伴う城下町の整備に伴い成立したことが推定できる。また、慶長元年(1596)の慶長の大地震の痕跡も検出されており、その後も地割りは変わることな

く、復興している。

町屋については16世紀後半から18世紀代に至る町屋が4面にわたって検出されているが、その構造はいずれも街路に取り付く礎石建物で構成される町屋で、街区は短冊形地割り呈し、『元禄兵庫津絵図』に描かれた地割りと一致している。町屋の内部は建物の片側に1列に数部屋を設ける縦長の構造で、町屋群の裏手には、ゴミ穴などの遺構が存在するなどの各時期に共通した特徴がある。

町屋の規模に関しては、間口は2～3間と一定であるものの、奥行きは、織豊期では5～6間、江戸中期では7間と時代が下るにつれて奥行きが広くなって行く傾向を示している。

このように、街路を挟んで両側に間口の狭い町屋が軒を連ねるといふ『元禄兵庫津絵図』に見られる近世の兵庫津の景観は兵庫城の築城とそれに伴う城下町の整備が行われた天正年間以來まで遡り、それを踏襲する形で近世の町場が形成されていったことが明らかになった。

また、兵庫津絵図には鍛冶屋町、大工町などそこに住む住人の職種を示す地名が記載され、それが現在も地名として残っている例が少なくないが、そのことを示す調査事例として、神戸市教育委員会が平成8年度に実施した表2(10)の調査がある²⁰⁾。

この調査では2間×2間の礎石建物、鍛冶がと考えられる石組遺構などが検出され、先端に鉄滓の付着した礎の羽目が大量に出土した。これらは出土遺物から17世紀代の鍛冶工房と考えられている。この付近一帯は、元禄絵図に描かれた鍛冶屋町に相当し、現在も鍛冶屋町の地名が残っている。この結果は元禄絵図の地名標記の精度の高さを証明したのみならず、それが現地名にまで残っていることを示すものとして貴重な成果を提供した。

港町の中枢施設である港湾施設に関しては、兵庫県教育委員会が平成10年度に調査した表2(13)の調査がある。この調査では『船入江』の石垣の一部が検出されている。石垣は新旧2時期あり、いずれも元禄絵図には描かれていないことから、元禄年間以降、すなわち江戸時代中期以降に築造され、その後、改修が行われたことが分かる²¹⁾。

また、港町を構成する施設として、中世の項でもその重要性を指摘した寺院関連の調査事例としては、平成7年度に神戸市教育委員会が行った阿彌陀寺の調査(表2-3)がある。この調査では阿彌陀寺の創建時とされる文永8年(1271)にまで遡る時期の遺構は検出されず、基盤層から近世の石組が検出されたのみであった。この結果から、阿彌陀寺は近世以降、現在地に移転した可能性が高い。

このように、近世の兵庫津に関連する調査結果は、現況は大いに改変され、往時を偲ぶ縁もないが、地下にはまだ、遺構、遺物が数多く保存されており、豊富に残る絵図、文献などとともに、当時の町並み、景観を復元できる可能性が高いことを実証している。

(5) 近代以降の兵庫津

兵庫津に大きな変化をもたらしたのは幕末の慶応4年(1868)の開港である。開港に伴い、内海航路の中継基地であった兵庫津はかつての国際貿易港としての地位を回復し、新たな活動を始める。

明治に入ると、山陽鉄道が敷設され、船入江は埋め立てられ、新たに兵庫運河が開鑿されて、兵庫津の景観は大きく変貌をとげる。この時期の調査事例は乏しいが、先に述べた表2(13)の調査で明治8～15年以降に築造され、明治23年の入江小学校の開校に伴い埋め立てられた船入江の石垣が発見されている²²⁾。

第3節 小結

以上、概観してきたように、近世の兵庫津については、「元禄兵庫津絵図」に描かれた町並が発掘調査によって、徐々に復元されつつある。

しかし、中世まで遡ると、その存在は確認され、規模あるいは存続時期についても、ある程度は推定できるようになってはいるが、その構造、町場の変遷、港湾施設の内容、寺院跡の位置と構造など解明すべき残された課題は山積している。

以前から注目されてきた、平清盛の経ヶ島の造営は、古代から中世への過渡期にあたり、後の兵庫津の繁栄の礎となった重要な歴史的事象であるが、それと並ぶ福原京とともに、その実態は考古学的には未だ闇の中にあると言わざるをえない。

清盛以前の古代の大輪田泊については、考古学的にもあるいは文献上もその存在については、ほとんど解明されていないのが実情であろう。

注

- (1) 藤田明良 2000年 「中世における港町兵庫のあゆみ」 『歴史と神戸』 第39巻 第2号 神戸史学会
- (2) 同上
- (3) 今谷 明 1981年 「瀬戸内制海権の推移と入船納帳」 『兵庫北関入船納帳』 中央公論美術出版
- (4) 注1)
- (5) 同上
- (6) 藤井直正 藤本史子 1993年 「兵庫津 兵庫津遺跡発掘調査概報」 大手前女子大学史学研究室
- (7) 神戸市教育委員会 1999年 「上沢遺跡 第3次調査」 『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』
- (8) 足利健亮 1999年 「清盛時代の大輪田泊と福原、和田京」 『歴史の中の神戸と平家』 神戸新聞出版総合センター
- (9) 須藤 宏 1999年 「地中から語る清盛の時代」 『歴史の中の神戸と平家』 神戸新聞出版総合センター
- (10) 神戸市教育委員会 1998年 「祇園遺跡 第3次調査」 『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (11) 富山直人 2000年 「祇園遺跡 第5次発掘調査報告書」 神戸市教育委員会
- (12) 岡田章一 2000年 「兵庫津遺跡の調査」 『歴史と神戸』 第39巻 第2号 神戸史学会
- (13) 内藤俊哉 2000年 「中世の兵庫津の町並み」 『歴史と神戸』 第39巻 第2号 神戸史学会
- (14) 小松茂美 1988年 「一瀬上人絵伝 解説」 『日本の絵巻』20 中央公論社
- (15) 注3)
- (16) 神戸市教育委員会 1999年 「兵庫津遺跡」 『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』
- (17) 兵庫県教育委員会 1999年 「兵庫津遺跡」 『平成10年度 年報』
- (18) 同上
- (19) 仲彦三郎編 1911年 「西摂大観」 明輝社

第3章 確認調査

兵庫津遺跡における確認調査は、平成6年6月29日・7月15日及び平成8年6月29日～8月28日の2度に渡って行った。

・平成6年度の確認調査：遺跡調査番号940243（図版14・15）

平成6年度の確認調査は、施工順の工区毎で幅約1mのガイドウォール付設部分（延長約100mの南北2本を中心とする）掘削（布掘り）を確認トレンチとする工事立会の形で行った。本確認調査では、ほぼ重機による掘削であったため、遺構等の把握は困難であるが、土層及び土層断面の状況から遺構の確認を試みることとなった。

調査対象区南側は、現歩道からの雨水排水施設での攪乱が著しく、北側・東側・西側のみでの土層堆積状況の確認に止まった。東端20mの区間（全面調査I-1区部分）は、現国道面下から浅く砂礫層が認められ、上層遺構の残りは悪く、内西側約15m区間については、工事の掘削時に再度立会調査を行った。

・平成8年度の確認調査：遺跡調査番号960233（図版2・3）

平成8年度の確認調査は、一昨年度の調査同様に布掘り部分におけるトレンチ調査を行った。調査は現道路面から路盤までが予め除去された状態から重機による掘削を開始し、適宜人力による断面整形等を行い、遺構・遺物の検出に努めた。ただし、安全上の問題から、最終遺構面の確認や地山面の検出までいたらなかったトレンチも複数存在した。また、トレンチ調査終了後は点圧を加えながら埋め戻しを行った。

確認調査の結果、7～14のトレンチにおいて其々以下の成果を得た。

7～8-n・s トレンチ 近代以降の堆積土の下層は、江戸時代後期以前に形成された黄褐色土～黄灰色土の砂質土層からなる。この層からは遺物は出土しなかった。

9-n トレンチ 東端部において江戸時代後期の包含層である黒灰色砂質土からなる落ち込みを検出した。落ち込みからは多量の陶磁器とともに、凝灰岩製の鋳型・鑪の羽口やスラグ、及び魚の骨や貝殻等が出土した。

9-s トレンチ 東端部の北壁において、黒灰色砂質土の江戸時代後期の包含層を確認した。

10-n トレンチ 西側と東側の2箇所で石垣を検出した。ともに花崗岩のケンチ石や切石、さらに自然石を加工したものを使用している。東側のものは西側に面を揃えて、西側のものは3段で東側に面を揃えて構築されている。前者は1段まで確認した。構築時期はともに江戸時代後期から末期にかけてであるが、西側のものは石垣上面を基礎として煉瓦建物が構築されており、近代以降も機能していた可能性が高い。また、石垣の下層からは黒灰色砂質土の江戸時代後期の包含層を確認した。

10-s トレンチ 東側で西側に面を持つ石垣を検出した。石垣は一部損壊しているが、2段まで確認した。これは切石と自然石を加工したものからなり、石垣自体は黒灰色砂質土の上面から構築されている。構築時期は江戸時代後期から末期までの間が考えられる。また、石垣の下層に堆積する黒灰色砂質土層は、厚さ約40cm前後を測り、陶磁器・スラグ・魚の骨・貝殻等が出土した。

11-n・s トレンチ 江戸時代後期の包含層を確認した。

12-n・s トレンチ 江戸時代後期の包含層を確認した。比較的遺物を多く含む黄灰色粗砂及び茶褐色土の堆積を除去した後、黄灰色～灰白色土層の上面でピット落ち込みを検出した。

13-n トレンチ 江戸時代後期の包含層を確認した。黄灰色粗砂の堆積土中からは、比較的多くの瓦・陶磁器類が出土した。

13-s トレンチ 東側で「L」字形に曲がる石囲い遺構と石垣を検出した。両者とも茶褐色土を掘り込んで構築されており、4段まで確認した。これらは自然石を加工したものが多い。石囲い遺構は北側と西側に面をもち、石垣が西側に面をもち、構築時期は江戸時代後期から末期にかけてであるが、石垣はその前面の堆積土から煉瓦が出土するため、近代以降も機能していた可能性が高い。

14-n・s トレンチ 近代以降の堆積土の下層は、江戸時代後期以前に形成された黄灰色～灰白色細砂～中砂の砂質土層からなる。この層からは遺物が出土しなかった。

以上、2度の確認調査の結果、平成6年度の確認調査部分では、工事工区内の調査対象地において、平成6年9月より全面調査を実施することとなった（I区）。また、平成8年度の確認調査部分においても、江戸時代後期の遺構及び遺物包含層を確認した調査対象延長約123mについて、平成9年1月より全面調査を実施することとなった（C～G区）。

第4章 全面調査

第1節 概要(図版1・8・21)

兵庫津遺跡(西出地区)の全面調査は、2度の確認調査を実施した同年度内において実施している。各調査区については前述の通り、平成6年度調査分(遺跡調査番号940244:面積約370㎡)は「I区」と呼称し、その中を工事の工区の順番に1～7区に区分して全面調査を実施した。また、平成8年度調査分(遺跡調査番号960450:面積約740㎡)は、当初設定した調査区分「A～G区」に対して、遺構及び遺物包含層を検出した「C～G区」について全面調査を実施した。

ところで、全面調査の調査区は、其々単独で二分されているが、位置的には隣接し、確認調査の結果から同時期、同様の遺跡である。本来であれば、調査時期の古い調査区から記述するところであるが、ここでは北側から南下する形での記述を行う。従って、まず平成8年度の調査「A～G区」、次に平成6年度の調査「I区」の順で行うものとする。

第2節 遺構

1. C～G区の調査

調査は、現道路面から路盤まで、予め除去された状態から機械で掘削を始め、適宜人力による掘削・断面整形を行って、遺構・遺物の検出に努めた。ただし、遺跡は砂帯上に形成されており、湧水点より下層は、土留めや常時排水などの特別な防護策が施されていないため、井戸等の遺構も含めてそれ以上の深度での調査は実施不可能であった。

調査区は、北東から南西にのびる路線内において設定されていた本体工区用工区の「A～G」ブロックをそのまま活用し、調査区名もそれに従った。ただし、実際の調査では、「A～G」の内の確認調査で遺物包含層の確認されたCブロックの一部(南西半)より開始し、本体工事に先行する形でD・E・F・Gブロックと順次移動していった。

調査方法は、共同溝掘削幅の量サイドが既に目鋼を打ち込んであり、壁面での土層観察が困難なため、調査区中央に大きく畦を残し、まず国道側(北側及び東側)を掘削しながら土層断面図を作成した。その後、層位に従って南側の掘削、及び畦の除去を行い、遺構面の検出を行った。

以下、調査の結果についてC区から順次記述を行う。

C区の調査(図版4・9・10 写真図版2)

厚さ100～110mの遺物包含層を検出しD区へと続く。遺物包含層は、何層もの厚さや土質の異なる層より構成されるが、大きくは黒色から褐色の砂質土と黄褐色砂である。そして、各層の遺物出土状況や出土遺物からは、極めて短期間にも何回にも分けて運び込まれて、堆積した可能性が高い事が看取される。特に、遺物を多量に含む層中には、貝殻や魚骨、瓦、スラッグ、籾、漆喰等の特定の遺物が集中する層が確認でき、C～G区の中でも最も遺物出土量が多い。遺物包含層の堆積状況は、国道に平行する北東から南西方向では比較的レベルに堆積しているが、国道に直行する北西から南東方向では地形に合わせて浜側(南東方向)に向かって傾斜して堆積している。この遺物包含層は、江戸時代後期の造成土と考え

られる。造成時期は、層中より出土した陶磁器や力士「柏戸」を現した泥面子などよりみて、江戸時代後期でも19世紀前半頃と推定される。

また、包含層を除去すると、神戶駅方面の北東端が斜面となる。幅約6m程の調査区内ながら、斜面裾の方向は旧湊川に平行していることから、江戸時代後期の湊川右岸の土手の裾と考えられる。

D区の調査（図版5・11 写真図版3～7）

C区から石垣1までの北東端は、C区から続く造成層である。石垣1背後の北東部では、造成土を除去した段階で畝の畝痕かと思われる同方向に並ぶ小溝が確認された。

向かい合う石垣1と石垣2との間は11.4mあり、石垣構築当初は開放状態であったと考えられる。この空間は、現在の西出町の道路の地割りととは合致しない。また、石垣下部に見られる土層の堆積から、積極的に水路といった施設とは断定し難い。そして、この石垣間の空間は、近代になって山砂で一気埋め立てられたようである。

石垣1の基底部下層には、江戸時代後期の遺物包含層（図版5包含層1）があるが、石垣2の手前で終息する。この遺物包含層に含まれる遺物は、陶磁器・スラッグ・糶・漆喰等の造成土と共通する。調査区南西半では、石垣2から南西に5m程のところで、新たな遺物包含層（図版5包含層2）が現れるが、遺物の包含量はそれまでと比較すると急激に少なくなる。この包含層を除去した面が遺構面である。この遺構面では、井戸（SE01）を検出した。遺物包含層より上の近・現代の擾乱層までの堆積は、遺物を殆ど包含しておらず、汚れの薄い砂層であるが、道路方向では水平堆積を呈しており、造成時の砂層と考えられる。

主な遺構の詳細は、以下の通りである。

石垣1（写真図版4）

南西側に面を持つ石垣で、C・D区の造成土層の端である。積み方はやや乱れるが粗い布積みで、石材は3段残り、残存高は0.9mである。花崗岩の切り石（ケンチ石）を主に用いている。石材には表面に連続矢欠痕を残すものも見られる。石垣基底部の層位からみて、江戸時代後期に積まれたものと考えられる。

また、本石垣の全面には、厚さ5cm、幅30cmの砂岩製の板石を立て、幅20cm程の溝を作っているが、この溝は後に埋めて、その上にケンチ石を設置している。溝内の埋土にはガラス等の現代の遺物を含んでおり、板石の基底部が石垣1の基底部より高いことから、土層の状況とも合わせて、近代に溝に作り替えられたものと推定される。

石垣2（写真図版5）

北東側に面を持つ石垣で、布積みの石材は3段残り、残存高は0.9mである。上2段には長方形に面を整えた花崗岩の切り石を主に用い、基底部には自然石を据えている。最上段の石の上には、建物の基礎に関連する竜山石製の延べ石があったようである。石垣2は石垣1ほど基底部下の遺物包含層が明瞭でないが、恐らく江戸時代後期のものと考えて良いであろう。ただし、確認調査時の所見では、石垣上に煉瓦が積まれていたということから、国道が拡幅されるまでは、近代になってからも建物の一部として利用されていたようである。

石垣3 (写真図版6)

調査区の南西端で検出し、南西側に面を持つ石垣であるが、南西側にはヒューム管が埋設され、コンクリートが流し込まれているため、石垣の本来の面は、コンクリートより上に残っている石垣の上部のみ観察可能であった。

石垣は布積みで、石材は5段残っており、残存高は1.6mである。基底部は自然石を用いているが、それ以外は花崗岩の切石(ケンチ石)を主に用いているようである。時期は基底部と遺物包含層との関係からみて、江戸時代後期のものと推定される。

台座(石組み遺構 写真図版7)

石垣2の南西部で畦除去中に検出したもので、自然石3石を1.0~2.8mの範囲に配し、その上に台座状の切石を1石置く。残存高は0.5mである。石材は全て花崗岩である。台座下に遺物等の埋納は確認できなかった。石垣2に伴う施設との関連も考えられるが不明である。

SE01(図版11 写真図版7)

調査区のはは中央、石垣2と石垣3との間に位置する。直径0.75cmの円形の掘り方いっぽいに木杵を入れた井戸で、検出面より1.1m掘削したところで湧水が激しくなり調査を中止した。検出した遺構面や当該調査地の他の井戸からみて、江戸時代後期のものと推定される。なお、井戸の木杵は腐蝕が著しく、僅かに痕跡を止めるのみであった。

E区の調査(図版12 写真図版8~11)

D地区で検出した石垣3及び本調査区北側で検出した石垣4は、現国道と直交する西出町の町並みの道路側溝に対応するものと考えられる。遺構はD地区同様に砂層の造粗土を除去した遺構面(暗赤褐色粗砂上)で、井戸及び水溜状の遺構等を検出した。

主な遺構の詳細は以下の通りである。

石垣4(写真図版9)

調査区北東端で検出した石垣積みの、幅45cmの溝である。石垣は、北東と南西に面を持ち、調査区を直交して横切るように走る。

北東側にある石垣は、南西側に面を持ち、布積みで、石材は4段残り、残存高は1.2mである。上2段はケンチ石を用いているが、下2段は自然石を用いている。石垣の頂部と同じ高さで、竜山石製の5寸角の礎石や建築材の延べ石等を検出した。

石垣積みの溝は、南西側の石垣の頂部から深さ85cm程で瓦敷きの底になる。埋土には、コンクリートや磚子、ビニール、煉瓦等を含み、床面上で兵庫牛乳の牛乳ビンが出土した。ビンは戦後のもので、埋没時期はここ30年前後ではないかと考える。床面の瓦を除去すると、深さ約10cmのところ、溝幅ほどの自然石の粗い敷石となる。これが両石垣に伴う本来の床面である。両石垣の基底部と遺物包含層との関係からみて、石垣の構築時期は江戸時代後期のものと推定される。

SX01 (図版12 写真図版12)

遺構は、歩道側(南東側)の壁面にのびているため、完全な形で検出されていないが、平面形は一辺2.4mの六角形または八角形を呈し、深さ10cm程の竪穴状遺構を検出した。各辺に沿って板が貼られていたようで、板を留めるためのものと考えられる杭痕を検出した。また、一辺に沿って木の根が走っているものもあり、仮に上部が削平されていなければ、浅い水溜用の施設の可能性が考えられる。

SE02 (図版12 写真図版11)

検出した井戸の掘り方は、直径1.6mを測り、掘り方内で複数の井戸杵を確認した。廃絶時の井戸杵は、瓦を囲うようにして杵としたもので、直径80cmを測る。井戸内は検出面から深さ約40cmで湧水したため、それ以下の調査を中止した。上部の埋土には瓦・漆喰・鉄製品の薄い鉄板等が入っていたが、煉瓦は認められなかった。瓦杵の外側には、D区SE01同様に直径1.0mの木杵があったが、腐蝕が著しく、僅かに痕跡を止めのみである。このことから、SE02は途中補修し、ひとまわり小さくなって使用されていたと想定される。

SE02の西側部分からは、幅17.5cmの木樋が国道(西側)に向かってのびている。地形から水の流れる方向をみると、本来は海側(東側)で、木樋とは逆方向となる。文久絵図によれば、現在の国道中央部と思われる部分に、湊川右岸から北浜の入江に向かって水路が流れているため、井戸から流れた水は、その水路に落とされた可能性が考えられる。

SE03 (図版12 写真図版11・12)

検出した井戸は、直径72cm程の木杵を用いたもので、SE02のように補修はされていない。木杵の上部は腐蝕が著しく、井戸内を若干掘り下げた所で木杵を確認できた。出土遺物からみて、江戸時代後期に掘られたものと考えて良いであろう。

なお、SE02・SE03はともに、井戸を埋める際の息抜き竹等の痕跡は認められなかった。

F区の調査 (図版13・14 写真図版13~18)

F区では、複数の遺構面を確認しているが、調査区南西端は交差する現道路に埋設したヒューム管などによって攪乱されている。

上層遺構面 (図版13 写真図版13~16)

検出した遺構は、石垣・石囲み遺構・方形土坑・井戸・小溝列である。詳細は以下の通りである。

石垣5 (写真図版14)

調査区北半部の石囲み遺構(SX02)の南西側に隣接し、南西側に面を持つ石垣である。積み方はやや乱れるが粗い布積みで、石材は3~4段残り、残存高は0.8mである。花崗岩の自然石(玉石)を割ったものを主に用いている。石垣基底部の層位からみて、江戸時代後期に積まれたものと考えられる。石垣の全面にはヒューム管が埋設されているが、その掘り方内にケンチ石が多くみられることから、本来は石垣5の南西側に対面して平行する石垣が存在していたようである。

SX02 (写真図版15)

調査区北半部の石垣5の北東側に隣接する。石垣5とほぼ平行に走り、其々南西と北東に面を持つもので、残存高0.5~0.6mの低い石積みが検出された。石積み間の距離は約3.8mを測る。両石積みはともに、石積みの全面に直径15cm程の浅いピットが並ぶ。ピットの底は平らで、杭痕でないことが分かる。確認調査時において本遺構の東側で、石積みと直交する別の石積み列を確認しており、石積みが方形に巡る石囲い状のものと想定される。ただし、その西側では同様に直交するような石積みを確認できておらず、「コ」の字形を呈する可能性もある。用途については不明である。

SE04 (写真図版16)

調査区南半部に位置する。井戸はSE02でみられた瓦間みの井戸枠をもつもので、検出面から深さ70~80cm程掘り下げたと湧水が激しくなり、調査を中止した。埋土内の出土遺物は、煉瓦・ガラス・現代の陶磁器類などであった。また、本遺構に切られる形で井戸 (SE05) を僅かに検出したが、詳細は不明である。

小溝列 (図版13 写真図版16)

調査区の北東端に位置する。SX02下層の黄褐色粗砂 (53層) を除去すると、鉄痕の小溝を検出し、石垣よりさらに南西部までのびることを確認した。また、そのさらに南西部では、高に関連するものと推測される土坑及び幅広く浅い溝も検出したが、各遺構とも、遺物は陶磁器の小片が極僅かに出土するのみであった。

下層遺構面 (図版14 写真図版17・18)

検出した遺構は、ピット及び土坑等で、何れも層位及び出土遺物からみて、江戸時代後期のものである。詳細は以下の通りである。

SA01 (写真図版17)

調査区北東側に位置する。南北に5基のピットが列状に並び、最も南よりのピットから東側へ直行する位置に1基のピットが認められる。一見して掘立柱建物を思わせるような規則性を持つが、何れの掘り方も浅く、恒久的な建造物ではない。

SK05 (図版14 写真図版18)

調査区北東側に位置し、SP01の南西側に隣接する。一辺1.8mの方形と推定される土坑で、その中に長さ1.1m、幅20cmの板を並べて方形の枠とする。遺構の性格については不明ながら、水溜あるいは井戸等の可能性が考えられる。

G区の調査 (写真図版19)

本調査区は、国道と交差する道路下が確認調査できなかつたため、本調査を以て遺構の有無を確認した。その結果、現代のヒューム管等の埋設で激しく攪乱を受けていることが分かった。しかし、ヒューム管の埋土にケンチ石が多量に混入しており、E区・F区でみられたものと同様に、西出町の地割りに

あった石垣が築かれていた可能性が考えられる。

調査の結果通り、石垣の痕跡を忍ばせる石材の散乱はみられるものの、それ以外の遺構及び、明瞭な遺物包含層も確認できなかった。ただし、一部において畚の軌痕を思わせる幅25～65cm、深さ16～25cmの断面U字形の溝の痕跡を、国道の方向に直行する形で確認した。

2. 1区の調査 (図版15～37 写真図版20～43)

本地区の調査は、本体工事自体の工期が非常に厳しい状態であり、土・日曜日も工事を稼働させるといったものであった。従って、工事工程に並行した本地区の発掘調査についても最短消化を余儀なくされた。発掘調査にあたっては、重機掘削の後、適宜人力による断面整形、遺構面精査及び遺構掘削を行った。

発掘調査の調査区割りは、本体工事の路面覆工の各ブロック毎に計7地区に小区分した。小地区内での調査工程については、工事工区の順序に従い、1区・2区・4区・3区・5区・6区・7区の順序で調査を実施した。

ところで、調査区の番号は、工事工程によって決定される関係上、必ずしも連続した序列ではない(例えば北から南へと1区・2区・3区といった感じではない)が、本文の解説及び図版等の序列は北から南へと移行することとした。従って、各調査区の解説において、調査区番号が1区・6区・4区・5区・7区・2区・3区と煩雑になるのをご容赦されたい。

以下、各調査区毎の詳細を述べるが、各調査区を表記については、例えば1区ならばI-1区といった形で行う。

I-1区の調査

本調査区については、前回の確認調査後の取り扱いで、再度確認調査(工事立会)を実施することになっていた。調査対象面積は70㎡である。

調査の結果、遺構面等を明確に確認できなかったので、重機を使って順次掘り下げを行い、砂層面で木樋跡の根列、その下層に杭跡を発見したのみで、その他は土層堆積の確認をして調査を終了した。

本報告書においては、調査区位置の明示のみに止まり、個別の図版等は割愛した。

I-6区の調査 (図版23～26 写真図版21～27)

本調査区の調査対象面積は70㎡である。調査の結果、2面の遺構面を確認し、井戸・土坑・溝・柱等を検出した。

上層遺構面 (図版23 写真図版22)

検出した遺構は、井戸3基、土坑3基、柱穴29基等がある。主な遺構の概要は以下の通りである。

井戸 (図版24 写真図版24～26)

SE01は井側種組の井戸で、19世紀後半以降のものである。SE02は井側種組1段4枚組で、木製礎盤とも言うべき八角車輪木組の上に据え付けている。18世紀後半以降のものと考えられる。

柱と柱穴列 (図版25 写真図版23)

柱 (SP06・SP07・SP29) は、直径15~20cmの柱で、1.2~1.6mと非常に深く打ち込んで、3本1組としており、門跡と考えられる。また、3本の柱付近から派生する柱穴列 (SA02) は、調査区に並行する形で北東方向へのび、調査区東端で北西方向へほぼ直角に曲がる。さらに、その角にあたる部分の西側には、SA02と近接しつつ並走するSA03を検出した。先述の柱を門跡として捉えてよければ、建物を囲む塀、あるいは生け垣状の施設が考えられる。ただし、南隣の調査区 (4区) に同様の施設がのびるかどうかについては、断定が困難な状況である。

下層遺構面 (図版26 写真図版27)

遺構は、調査区の北半部で検出し、検出状況から水田と考えられる耕作跡と考えられる。主な遺構は北西-南東方向にのびる畔 (畦畔) である。出土土器等から17世紀代と考えられる。

I-4区の調査 (図版27~30 写真図版28~32)

本調査区の調査対象面積は85㎡である。調査の結果、2面の遺構面を確認し、井戸・土坑・溝・柱穴等を検出した。

上層遺構面 (図版27 写真図版28)

検出した遺構は、井戸・溝・不明遺構・土坑・柱穴である。主な遺構の概要は以下の通りである。

井戸 (写真図版31)

SE01は、調査区南半部の東側壁面に位置し、一部が調査区外に出ている。直径24cmを測る円形の掘り方内に、直径92cmの木桶組の枠を持つものである。桶組の板材は腐蝕が著しく、一部欠損している状態である。出土遺物等から18世紀後半以降の構築と考えられる。

不明遺構 (図版28 写真図版30・31)

SX01は、直径約1.25mの不定な円形の掘り方内に、直径約52cmの円形状の棧瓦組み遺構である。性格については不明ながら、砂を入れ込んだ便所遺構とも考えられる。

SX02は、「へ」の字状に並べ立てた、棧瓦組みの遺構である。これについても性格は不明であるが、花壇の仕切りなどの庭先の施設を思わせる遺構である。

溝 (図版29 写真図版29)

SD01は、陶器製土管5本組みつなぎの排水施設である。各土管のつなぎ目には、水漏れ防止の漆喰の目貼りが施されている。出土した土管等からみて、18世紀後半から19世紀にかけて使用していたと考えられる。

下層遺構面 (図版30 写真図版32)

検出した遺構は溝及び柱穴である。主な遺構の概要は以下の通りである。

溝 (図版30 写真図版32)

SD02は、耕作に伴う水路と考えられる。

柱 (図版30 写真図版32)

遺構は、調査区北東端に位置する。下層遺構としてあげたが、状況からみて本来は上層遺構面に伴う遺構と考えられる。また、柱が3本まとまった状況から、I-6区南西端で検出した門跡と対応するとも考えられる。

I-5区の調査 (図版31~33 写真図版33~36)

本調査区の調査対象面積は45㎡である。調査の結果、3面の遺構面を検出し、土坑・溝・不明遺構等を検出した。

上層遺構面 (図版31 写真図版33・34)

検出した遺構は、土坑・溝・不明遺構・柱穴等である。主な遺構の概要は以下の通りである。

不明遺構 (図版31 写真図版34)

SX01は、63cm×125cmの長方形を呈する煉瓦積み土坑である。炉あるいは竈状の遺構と考えられる。近・現代の遺構である。

溝 (図版31 写真図版34)

SD01は、幅2.2m検出面からの深さ34cmを測る、東西方向を走る溝である。埋土内からは、櫛の羽口が多量に出土した。また、SD01の南側には、SD01と並行に走るSD02があるが、殆どが調査区外にあり、詳細は不明である。

下層遺構面 (図版32 写真図版35)

遺構は調査区南半部で検出した島の鋤溝跡で、南北方向を主体として10数条の鋤溝を検出した。鋤溝付近は、さらに下層(最下層遺構面)において池状の落ち込みを検出しており、その池を埋め立てた後に、畝地として耕作したことが考えられる。

最下層遺構面 (図版33 写真図版35~36)

遺構は、検出延長(東西幅)4.5m、幅(南北幅)3.6mの恐らく楕円形を呈する池状遺構(SX02)で、検出面からの深さは約1mである。南側の護岸材には、和船材(舷側)を転用している。遺構の最下層に沈殿した木質層とその上層の砂層中からは、木簡(付け札)や漆器椀・箸・下駄等の多量の木製品とともに、肥前陶磁器類・丹波焼・漁具(蛸壺・土鍾)・櫛の羽口等が出土した。

I-7区の調査 (図版34・35 写真図版37~39)

本調査区の調査対象面積は45㎡である。調査の結果、2面の遺構面を検出し、井戸・土坑・不明遺構等を検出したが、下層遺構面については、結果的に上層遺構の残存であったので、図面等の明示は割愛した。

上層遺構面 (図版34 写真図版37)

検出した遺構は、井戸・土坑等であるが、特に井戸は計8基が切り合い関係を持ちながら集中している。主な遺構である井戸の概要は以下の通りである。

井戸 (図版34・35 写真図版37-39)

SE01は、井甕を井戸瓦(1段5枚組)で積み上げ、上部は花崗岩を井戸の径に合わせてくり抜いて、7石で1周を組み上げている。掘り方は直径約1.7m、井戸枠は直径約1.1mである。

SE02は、井甕は不明であるが、井甕の礎として井甕の内弧をくり抜き、細工を施した8枚組みの板材が、井戸の底の部分から検出された。掘り方は直径約1.9m、井戸枠は直径約1.2mである。

SE03は、SE01に切られる。掘り方は直径約2.3mである。

SE04は、下部が桶組の井甕で、上部は井戸瓦組み(1段5枚組)の小振りの井戸であり、SE02に切られる。掘り方は直径約2.2m、井戸枠は直径約0.8mである。

SE05は、下部桶組井戸側に残る上部段は、井戸瓦組み(1段5枚組)井戸で、他の井戸からやや離れた、調査区の南端に位置する。方形の掘り方は一辺約1.7m、井戸枠は直径約0.9mである。

SE08は、桶組の井甕が残る小振りの井戸であり、SE02に切られる。掘り方は直径約0.7m、井戸枠は直径約0.6mである。

I-2区の調査 (写真図版40・41)

本調査区の調査対象面積は25㎡である。調査の結果、計4面の遺構面を検出したが、最下層遺構面において杭を確認した他は、特に遺構の検出はなかったため、図面等の明示は割愛した。

I-3区の調査 (図版36・37 写真図版42・43)

本調査区の調査対象面積は35㎡である。調査の結果、計2面の遺構面を確認し、焼失建物・溝・土坑等を検出した。

上層遺構 (写真図版42)

検出した遺構は、近代以降の火災時に焼失した瓦礫を片付けた塵穴、またその火災に焼失したと考えられる(物置小屋風の)簡易な建物である。遺構の詳細な個別図等が無かったため、写真図版のみを掲載した。

下層遺構 (図版36・37 写真図版43)

検出した遺構は、溝・土坑・柱穴である。主な遺構の概要は以下の通りである。

溝 (図版36・37 写真図版43)

SD01は、調査区内において北側の掘り方のみ検出したもので、検出面からの深さ約1mまでの確認はできたが、湧水が激しく、これ以上は危険と判断して、調査を終了した。遺構の位置関係から、絵図等にもみる兵庫北船入江東護岸の掘り方際の遺構ではないかと想定した。

溝の最下層からは、17世紀代の肥前系磁器や丹波焼等が出土していることから、17世紀末から18世紀

前半には溝として機能していたと考えられる。また、その後に、護岸の改修等で埋め立てられ、18世紀後半と考えられる火災層からは、鑄羽目や鋸細工及び細工片が多量に出土することから、調査区近隣に鋸鋸り職工房があったと想定している。

第3節 遺物

1. 土器・土製品

C区出土遺物

A. 土器・陶磁器

C区から出土した土器・陶磁器には土師器、瓦質土器、無釉陶器、施釉陶器、磁器がある。

1. 土師器

(1) 皿 (図版38 1~4・図版47 122・123・図版48 132・図版51 182~187・図版56 256・257) 皿はいずれも回転台を使用して成形する。平底で体部は緩やかに斜め上方に延び、内面に透明釉を施釉するいわゆる柿釉の灯明皿である。外面は露胎で底部外面には糸切り痕が残る。これについては軟質の施釉陶器として分類する見方もあるが、基本的には土師器皿に透明釉を掛けただけのものにとらえられ、ここでは土師器皿として分類する。

(2) 焼塩壺 (図版38 5・6・図版54 226) 5・6は型造り成形で内面には布目瓦痕が残る。226は蓋で型造りされ、下面に布目瓦痕が残る。

(3) 火消壺 (図版38 7~10・図版47 125) 7・8・125は底部は平底で、体部は上半部で「く」の字状に大きく屈曲する。口縁部は無頸で端部は丸みをもつ。蓋(10)は外面に浅い凹線を1条もち、体部外面に強いヨコナゲ調整を加える。

(4) 硝壺 (図版38 11) 水挽きロクロ成形で、体部はほぼ直立し、口縁部は外反する。内・外面ともロクロ目がみられる。

(5) 火鉢 (図版38 12・図版50 170・図版51 189) 火鉢には丸形(12・189)と方形(170)のものがある。12・189平底で「ハ」の字状にひろく高台状の脚部をもつ。170は型造り成形で、板状の粘土を貼り合わせ、底部の四隅に低い脚を貼り付ける。

(6) 風炉 (図版38 13・図版48 137) 13は底部に扁平な脚部を3カ所貼り付け、内面に突起を1カ所貼り付ける。137は薄手に成形し、透かしをもつ。外面に4文字をヘラ状工具で刻む。煎茶用の風炉であろう。

(7) 火舎 (図版38 14) 型造りの板状粘土を貼り合わせて成形する。底部外面の四隅に脚を貼り付ける。

(8) ひょうそく (図版38 16) 型造り成形で、灯芯台を中央に貼り付ける。灯芯台の上には煤が付着する。

(9) 燭台 (図版43 56・57) いずれも、皿部の内面に透明釉を施釉するいわゆる柿釉の燭台で19世紀前半以降の時期が考えられる。

(10) 焙烙 (図版47 124・図版38 133・図版51 188) 焙烙には口縁部に把手をもち、穿孔するもの(188)と把手をもたないもの(124・133)とがある。いずれも型造り成形で、体部は短く、底部と体部の界は直角になる。

(11) 増塙 (図版48 134) 丸底で体部は直立する。内面に融解した銅滓が付着する。

(12) 鉢 (図版51 173) 平底で口縁部は外方に水平に折り曲げる。榎木鉢のミニチュアであろう。

2. 瓦質土器

(1) 羽釜 (図版38 17) 断面長方形の鍋をもち、体部外面に凹線を3条施す。鉄釜を忠実に模倣した瓦質の羽釜である。

(2) 擬土器形(図版48 135) 型造り成形で内面は空洞である。外面はヘラ磨きを施し、銀化する。瓦の一部であろう。

3. 無釉陶器

無釉陶器には産地別にみると、丹波、堺・明石、備前と産地不明のものがある。ここでは、産地ごとにその概要及び特徴をのべる。

(1) 丹波

① 水鉢(図52 194) 口縁部は波状に成形し、波状文を貼り付ける。体部外面には型押し成形の草花文を貼り付け、ヘラ描きの蔓草を施文する。外面は鉄泥漿を塗布し、茶褐色に発色する。

(2) 堺・明石

① 播鉢(図版39 18・20・21・図版50 172・図版52 192) 播鉢には、明石の播鉢職人である久保屋喜兵衛を示す「久喜」の銘をもつもの(172)など明らかに明石産播鉢の特徴をもつものもあるが、現段階では堺産と明石産を厳密に同定できないため、堺・明石産として報告する。

これらの中で底部内面に放射状の播目を施文するもの(18・20・21・192)は明石産播鉢では18世紀後半～19世紀代に比定されるⅡ類のものに多いとされ、18世紀後半～19世紀代の時期が考えられる。

(3) 備前

① 播鉢(図版39 19・図版40 22・23) 播鉢には底部外面を若干削って、浅い高台状につくるもの(23)と平底のもの(19・22)とがある。いずれも、底部内面に放射状の播目を施す。

② 土管(図版48 140) 外面に鉄泥漿を塗布し、胡麻状に灰被りが見られる。

③ 壺(図版40 24) 24は体部外面上半部に沈線11条施し、口縁部内面～外面全体に鉄泥漿を塗布して器面を平滑に仕上げる。備前焼の朱泥小壺である。

④ 徳利(図版50 171) 171は体部の3方を押さえて凹部をつくり、その1カ所に型造りの布袋像を貼り付けるいわゆる布袋徳利である。外面には鉄泥漿を塗布する。

4 産地不明の無釉陶器

この他、産地の明確でない無釉陶器には、風炉(図版40 27・28)、播鉢(図版30 15・図版47 126)、土管(図版52 195)、植木鉢(図版53 200)などがある。

4. 施釉陶器

施釉陶器には産地別にみると、肥前、常滑、丹波、瀬戸・美濃、舞子・明石及び産地不明のものがある。ここでは、産地別にその概要、特徴を述べる。

(1) 肥前

① 甕(図版41 29) 内面に格子目状の叩き目が残り一部は板ナデによりナデ消す。内外面とも鉄釉を施し茶褐色に発色する。口縁部外面には白濁釉を施釉する。肥前産の製品と考えられ、18世紀後半～19世紀中頃の時期が与えられる。

② 片口鉢(図版42 36) 内外面とも鉄泥漿を塗布し、内面～外面上半部には鉄釉を施釉する。18世紀前半の時期が考えられる。

③ 鉢(図版42 42) 外面に鉄釉施釉の後、白濁釉を波状に施釉し、内面は白濁釉のみを施釉する。17世紀後半～18世紀前半の肥前系の刷毛目唐津である。

(2) 常滑

① 土管(図版40 26) 26は外面に鉄釉を全面施釉し、内面は露胎である。近代以降の製品であろう。

(3) 丹波

① 甕 (図版41 30・31・図版51 174) 30・31は外面に鉄釉を施釉の後、黒釉を鉢状に施釉する。内面は灰釉を施釉し、淡緑色に発色する。19世紀前半の製品であろう。174は内外面とも赤土部状の茶色釉を施釉する。近代以降の製品と考えられる。

② 徳利 (図版43 64・図版54 227) 64は外面は底部以外、白濁釉を施釉した後、赤絵で草花文を描く。底部外面は露胎で「口上」の墨書がある。いわゆる白丹波である。227は外面は鉄釉を施釉し、内面は露胎である。

③ 壺 (図版52 196) 外面は鉄釉を施釉し、胡麻状に灰を被る。

④ 壺 (図版54 230) 外面は黒釉施釉の後、さらに黒釉で格子目状に施文する。内面は露胎である。仕上げは粗雑で胎土中に砂粒を多く含む。近代以降の製品であろう。

(4) 京・信楽

① 椀 (図版42 33) 33は内外面とも白濁釉を施釉し、器面には貫入がはしる。外面の高台脇以下は露胎である。

② 灯明皿 (図版42 34・図版50 161・図版51 186) 34は内面に沈線を3条施文し、灰釉を施釉する。外面は露胎である。161は内面にヘラ状工具で斜格子文を施文し内面に透明釉を施釉する。口縁部内面には円形浮文を貼り付ける。19世紀前半の時期が考えられる。186は体部内面に比較的高い凸帯をもち、内面～口縁部外面に白濁釉を施釉する。

③ 香炉 (図版43 44) 外面は灰釉を施釉し、底部外面は露胎で「子り」の墨書がある。19世紀前半の製品であろう。

④ ひょうそく (図版48 138・139・図版54 225) 138・139は口縁部内面～体部外面は黒色釉を施釉し、底部外面は露胎で糸切り痕が残る。19世紀前半の時期が考えられる。225は口縁部に注口状の芯受けと把手を貼り付け、注口には透かし孔を穿孔する。内外面とも、白濁釉を施釉する。19世紀前半以降の製品である。

(5) 瀬戸・美濃

① 水鉢 (図版42 37・38) 37は外面に釘形りで簡略化された草花文を施文し、内外面に白濁釉を施釉した後、外面上面に濃暗赤褐色釉をタンパン状に施釉する。38はヘラ状工具で波状文を施文し、内外面とも灰釉を施釉する。さらに外面上面に飛青磁風に鉄釉を施釉する。いずれも、19世紀前半の時期が考えられる。

② 植木鉢 (図版42 39・図版53 199) 39は内外面とも透明釉を施釉し、口縁部外面には緑釉を施釉する。体部外面には灰釉で樹木、建物を施文する。19世紀前半の製品である。199は口縁部外面～体部外面下半まで灰釉を施釉し、体部下半以下は露胎である。

③ 鉢 (図版42 40) 内外面とも灰釉を施釉し、外面の高台脇以下は露胎である。18世紀後半以降の製品である。

④ ひょうそく (図版43 58) 内面及び外面の口縁部～体部下半は灰釉施釉の後、鉄釉を施釉する。底部外面に1カ所穿孔がある。

⑤ 甕 (図版43 63) 外面に鉄釉を施釉し、細かい黒斑が認められる。

⑥ 椀 (図版44 75・76) 75は内外面とも灰釉施釉の後、口縁部外面に緑釉を施釉する。76は水挽きロクロ成形の後、体部外面を型押しにより亀甲状に成形する。底部外面にはヘラ状工具により蓮弁文を

施文する。いずれも京焼風のプロポーションを呈する。

(6) 舞子・明石

① 壺 (図版43 51~55・図版53 205) 51~53は外面は51・52は灰釉、53は白濁釉をそれぞれ施釉し、内面はいずれも露胎である。54は外面は灰釉施釉の後、白泥をイッチン掛けする。55・205は灰釉施釉の後、白泥のイッチン掛けて網目文、雲形文を描く。いずれも19世紀前半以降の製品であろう。

② 椀 (図版51 175・図版53 197) 175は内外面とも灰釉施釉の後、白濁釉を施釉し2釉が靨青釉風に滲む。197は内外面とも灰釉を施釉し、外面の高台脇以下は露胎である。

③ 鍋 (図版43 45・図版48 136) 43は外面は鉄釉を施釉し体部下半以下は露胎である。136は内外面とも灰釉を施釉し、底部外面以下は露胎である。いずれも19世紀前半以降の時期が考えられる。

(7) 産地不明の施釉陶器

この他、産地の明確でない施釉陶器には壺 (図版40 25)、椀 (図版42 32)、皿 (図版42 35)、ひょうそく (図版43・60・61・図版50 159)、小壺 (図版43 62)、徳利 (図版53 201)、灯明皿 (図版54 224)、鉢 (図版42 41・図版53 198)、ミニチュア鍋 (図版43 43)、土瓶 (図版43 46)、水注 (図版43 47)、壺 (図版43 48~50・図版50 160・図版51 177・図版53 202~206・図版54 228・229) などがある。

5. 磁器

磁器には産地別では肥前、三田、瀬戸・美濃、及び産地不明のものがあり、種別では白磁、青磁、染付青磁、染付、色絵磁器がある。ここでは、産地別にその概要及び特徴を述べる。

(1) 肥前

A. 白磁

① 紅皿 (図版43 65・図版53 207) 65・207は型造り成形で外面に放射状の菊花文を施文し、内外面とも透明釉を施釉し、乳白色に発色する。

② 小碗 (図版43 67) 器壁は非常に厚く、所々釉切れが認められる。

③ 皿 (図版45 107・図版48 141) 107は蛇ノ目形高台で、型押し技法により内外面とも菊花文を施文する。19世紀前半の製品であろう。141も型押し技法で内外面とも菊花文を施文する。口縁端部は口紅と呼ばれる鉄釉を施釉する。19世紀前半の製品であろう。

B. 青磁

① 碗 (図版43 69) 69は内外面とも型押しにより蓮弁状に成形し、口縁部はヘラ切りにより蓮弁の剣頭状に整形する。

C. 染付青磁

① 鉢 (図版49 150・図版50 168) 150は水挽き口クロ成形の後、型押しにより口縁部を輪花状に整形する。口縁部内面~外面は青磁釉を施釉し、内面は呉須で飛鳥に荒礎文を描く。18世紀前半の時期が考えられる。168は蛇ノ目高台で、体部内面~口縁部は花弁状に整形する。内面は青磁釉を施釉し、外面は呉須で「赤壁賦」を施文する。19世紀前半代の時期が考えられる。

② 碗 (図版53 209) 外面は青磁釉を施釉し、内面は呉須で斜格子文、界線、草花文、底部外面は渦福文を施文する。

D. 染付

① 碗 (図版44 73・74・78・80・89・91~98・図版47 129・130・図版48 148・149・図版50 163

・図版53 210・212・213・図版54 231) 碗には器壁が厚く、コンニャク印判や手描きで施文するいわゆるくらわんか手の碗(73・74・78・96・97・148)、細く高い高台をもつ広東碗(91・149・212・231)、口縁部が僅かに外反する端反碗(89・130)などがある。また、この他に、高台が「ハ」の字状にひらくもの(92~94)、薄手に成形され、外面に蓮弁文と蛸唐草文を施文するもの(98・213)、小型の碗(163)などがある。くらわんか手は18世紀前半~後半代に、広東碗は18世紀後半~19世紀前半代に、端反碗は19世紀前半以降の時期にそれぞれ比定される。また、高台が「ハ」の字状にひらく92~94は18世紀後半~19世紀前半の時期が考えられる。

② 蕎麦猪口(図版45 100~104・図版48 145~147) 蕎麦猪口は蛇ノ目凹形高台のもの(100)と輪高台のもの(101~104・145~147)がある。輪高台のもの外面の文様には半載菊花文(101・104・146)、幾何学文(102)、老松文(103)、柳・舟・山水文(145)、草花文・唐草文(147)などがあり、いずれも19世紀前半代に比定される。

③ 鉢(図版45 109) 水挽きロクロ成形の後、型押しにより輪花状に整形する。内面は丸文、笹葉文などを墨弾き技法により施文する。

④ 壺(図版46 115・116) いずれも球形の体部をもつ。外面は梅花文(115)、草花文(116)を呉須で描く。18世紀後半の時期が考えられる。

⑤ 仏花瓶(図版46 117~119・図版49 153) 仏花瓶には体部が球形で長い頸部をもつもの(117)、体部が直立し短い頸部をもつもの(118)、梅瓶形のもの(119)、やや大型で体部が球形を呈し口縁部が外反するもの(153)などがある。いずれも18世紀後半~19世紀前半の時期が考えられる。

⑥ 杯(図版48 143・図版49 151・155) 杯には外面に簡略化された草花文を描くもの(143・151)と蛸唐草文を描くもの(155)があり、143・151は18世紀代に、155は19世紀前半にそれぞれ比定出来る。

⑦ 皿(図版49 152・157・図版50 166・図版53 214・216・図版54 217・218・図版56 255) 皿には外面の高台脇以下が露胎の粗製のもの(152)、器壁が厚く、淡い呉須で文様を描くいわゆるくらわんか手のもの(157・166・216)、高台が蛇ノ目凹形高台のもの(217・218)などがある。152は18世紀前半、157・166・216は18世紀後半、217・218は19世紀前半の時期がそれぞれ考えられる。

E. 色絵

① 碗(図版50 165) いわゆる広東碗で外面に呉須で草葉文、朱で平行線、雲形文、格子目文、さらに金泥で竹葉文を描く金襴手の碗である。

② 皿(図版54 219) 口縁部は輪花状に整形する。文様は紅葉、麒麟、唐草を描くが紅葉の一部が金襴手になっている。また、内面の唐草は墨弾きで施文する。高級品と考えられる。

(2) 三田

① 鉢(図版43 70・71・図版142) 鉢には型造り成形で外面に型押しで竹を施文するもの(70)、内面に型押しで芭蕉文を施文するもの(71)、水挽きロクロ成形の後、型押しによって整形し、無文のもの(142)などがある。いずれも19世紀前半の時期が考えられる。

② 皿(図版43 72・図版53 208) 72は内面に型押しで牡丹文を施文する。また208は型造り整形で内面に蝶と花文を交互に配し、底部内面は牡丹文を施文する。

(3) 瀬戸・美濃

① 碗(図版44 81~84・86・88・図版47 128・図版50 164) 碗は全て口縁部が僅かに外反する端反碗で、外面の文様には、「寿」字文(81)、よろけ文(82)、牡丹唐草文(83・88・164)、草花文

(84・86)、蓮弁文(128)などがある。いずれも、19世紀前半以降の時期が考えられる。

② 杯(図版45 99) 99は浅く削りだす内反り高台をもち、外面には水仙、流水、蝶などを描く。幕末から近代の製品であろう。

(4) 産地不明の磁器

その他、産地の明確でない磁器には、白磁の小皿(図版43 66)・蓋(図版43 68)、青磁の龍泉窯写しの割花紋碗(図版48 144)、染付碗(図版44 79・85・87・90・95・図版47 131・図版53 211)・皿(図版49 156・図版53 215)、鉢(図版45 110・図版50 167)、蓋(図版46 111~114)、杯(図版50 169)、色絵鉢(図版45 108)などがある。

B. 土製品

① スタンプ(図版49 158) 何らかの器物に菊花文を施文するためのスタンプと考えられる

② 人形・動物形・器物形(図版51 190・図版54 223・232・図版55 234・235・237・239・245~254) これらは何れも型造り成形されるが、一つの外型で成形する灯籠型(190・223)・唐獅子あるいは犬犬の脚部(232)、二つの型で作られ、それを中央部に貼り合わせる両型造りのもの(233・235・237・239)及び片面のみ施文し、裏面は平滑な片型造りのもの(238・245~254)がある。両型造りのものには、虚無僧形(233)、狐形(235)、釣鐘形(237)、宝珠形(239)などがある。また、片型造りのものには、樓閣と水車形(236)、茶室形(238)、筆形(245・246)、太鼓形(247)、人面形(248・252・253・254)、蜻蛉形(249)、草履形(250)、胡瓜形(251)などがある。いずれも、当初の彩色は剥落している。

③ 鞠の羽口(図版72 492~498) 鞠の羽口には小型のもの(492・493)と大型のもの(494~498)とがある。いずれも先端には鉄滓が付着し、表面は平滑に仕上げられ、高温で先端は、黒色から橙色に変色している。

C. 瓦類(図版49 154・図版51 180・図版54 221)

154は巴文軒丸瓦である。珠文数は13で、巴の尾は長い。180は道具瓦の鳥袋である。珠文数は15で、巴の尾は長い。221は棧瓦である。珠文数は11で、巴の尾は長い。近代以降のものであろう。

D. 石製品(図版46 120・図版51 181・図版54 222)

① 砥石(図版46 120・図版54 222) 120は頁岩製で既に破損しているが、破損後も刃先状のもの研磨に再利用している。222は凝灰岩製で四面すべてを研磨面として使用している。

② 軽石(図版51 181) 181は中央部に穿孔が1箇所認められる。軽石製の浮子であろう。

D地区出土遺物

A. 土器・陶磁器

D地区から出土した土器・陶磁器には土師器、無釉陶器、施釉陶器、磁器がある。

1. 土師器

① 皿(図版56 256・257・261・262・図版62 341~343・図版63 359・図版66 403・404) 皿はいずれも回転台を使用して成形し、内面に透明釉を施すいわゆる釉裏の灯明皿である。

② 焼塩壺(図版56 258) 粘土板を筒状にして、底板を貼り付けたもので、外面には縦方向の粘土のつなぎ目が残る。

③ 火消壺(図版56 263・図版65 393) 263は蓋のつまみである。393は体部は内彎し、口縁端部は

丸みをもつもので、底部外面には板起こしの痕跡が認められる。

④ ひょうそく (図版62 344) 内面に灯芯台を貼り付け、底部外面には型押しによる「下久」の銘がある。

⑤ 甕 (図版63 361) 脚部の接地面に浅いえぐりを入れる。外面には化粧土を塗布し、暗赤褐色に発色する。

⑥ 燗台 (図版56 261・262・図版66 405) 燗台はいずれも回転台を使用して成形し、皿部の内面には凸帯を巡らし、透明釉を施軸するいわゆる柿釉の燗台である。

2. 無釉陶器

無釉陶器は産地別にみると、丹波、備前、堺・明石及び産地不明のものがある。

(1) 丹波

① 匣鉢 (図版56 260) 体部は外反気味に直上に延び、口縁部には蓋の受け部をもつ。

② 鉢 (図版63 364) 内外面とも鉄泥漿を塗布し、外面には墨書とヘラ描きの窯印がみられる。

(2) 備前

① 播鉢 (図版56 264) 体部内面に9条1単位の播目を施文し、内外面とも鉄泥漿を塗布する。堺・明石産播鉢に形態は類似するが、胎土からみて、備前産と考えられる。

② 花瓶 (図版56 269) 体部は算盤玉状に成形し、頸部は直立、口縁部は大きく外反する。頸部の下部に型造りの獅子頭を貼りつける。口縁部内面～体部外面に鉄泥漿を塗布し器面を平滑に調整する。朱泥の尊形花瓶である。

③ 壺 (図版56 270・図版66 406) いずれも平底で体部は内埴し、口縁部は外側にひらく。内外面とも鉄泥漿を塗布して器面を平滑に調整する朱泥の小壺である。270は底部内面に鉄分が付着していることから、お満黒壺の可能性が高い。

④ 皿 (図版58 278) 非常に薄手に成形され、内面に草花文をスタンプする。内外面とも鉄泥漿を塗布する朱泥の皿である。

⑤ 蓋 (図版58 284) 無釉で暗赤褐色に発色する。小壺の蓋であろう。

⑥ 徳利 (図版62 348) 外面に鉄泥漿を塗布し、ガラス質の光沢をもつ。一部に灰被りがみられる。近代以降の製品であろう。

⑦ 火入れ (図版63 363) 内外面とも鉄泥漿を塗布し、体部外面に籐竹の竹管文を施文する。上質の製品である。

(3) 堺・明石

① 播鉢 (図版56 266・図版63 362・図版65 402) 底部内面の播目が放射状を呈する266・362は明石産播鉢のⅡ類に多く含まれ、18世紀後半～19世紀前半の時期が考えられる。

(3) 産地不明の無釉陶器

産地の明らかでない無釉陶器には播鉢 (図版56 265)、植木鉢 (図版56 267・268)、土管 (図版61 330)、鉢 (図版62 345) などがある。

2. 施釉陶器

施釉陶器には産地別にみると、丹波、肥前、京・信楽、瀬戸・美濃及び産地不明のものがある。

(1) 丹波

① 甕 (図版57 271) 内面は全面に灰釉を施軸し、外面は赤土部を塗布した後、灰釉を鉛状に施軸

する。18世紀後半以降の製品であろう。

② 香炉(図版58 273) 平底を削り込んだ内反高台で、底部外面に粘土塊を3箇所貼り付けて脚とする。外面のみ施釉し、底部外面、内面は露胎である。19世紀前半以降の製品であろう。

③ 蓋(図版63 369) 外面の中央に宝珠つまみを貼り付け、外面に灰釉を施釉し、暗灰緑色に発色する。

(2) 肥前

① 甕(図版57 272) 頸部が直立し、口縁部が内側に玉縁状に肥厚する。内外面とも鉄釉施釉の後、白濁釉を流し掛けし、赤味を帯びた白濁色に発色する。唐津産と考えられる。

② 鉢(図版62 357) 内外面とも暗黒灰色釉施釉の後、内面に白濁釉を一部施釉する。底部内面には蛇ノ目状軸ハギがみられる。現川焼の可能性はある。

③ 皿(図版63 367) 内外面とも鉄釉を施釉し、外面の高台脇以下は露胎である。内面は白濁釉を波状に施文し、底部内面には蛇ノ目状軸ハギがみられる。刷毛目唐津で17世紀後半～18世紀前半の時期が考えられる。

④ 壺(図版65 400) 外面に鉄泥漿を塗布した後、灰釉を施釉し白泥で斑点状に施文する。油壺と考えられる。

(3) 京・信楽(図版62 347・394)

① 灯明皿(図版62 347・394) いずれも内面に白濁釉を施釉し、外面は露胎である。347は内面に斜格子状沈線を施文し、円形浮文を貼り付ける。394は内面に4条1単位の櫛描文を施文する。

(4) 瀬戸・美濃

① 水鉢(図版58 276・図版63 368) 276は外面にヘラ状工具で草花文、点文を施文し、内外面とも全面に灰釉を施釉した後、草花部分に緑釉あるいは鉄釉を一部施釉する。18世紀後半以降の製品と考えられる。368は内外面とも灰釉を施釉し、外面はさらに緑釉を施釉する。19世紀前半以降の製品であろう。

② 火舎(図版58 280) 口縁部上面～体部外面のみ施釉し、一部緑釉・鉄釉をたらし掛ける。19世紀前半以降の時期が考えられる。

(5) 舞子・明石

① 椀(図版58 277) 外面は灰釉を施釉し、内面は白濁釉施釉の後、鉄釉でのお多福を施文する。

② 蓋(図版58 289・290・図版61 334・図版63 370・371・図版65 397) 蓋には壺の蓋と考えられる蓋蓋(289・370・371)、外面に灰釉を施釉し、白泥をイチン掛けするもの(289)・白泥を刷毛で巴状に施文するもの(397)、内外面とも灰釉を施釉し飛青磁風に鉄釉を施釉(334)するものなどがある。

③ 鍋(図版66 408) 外面に粗いヘラ削りが見られ、内外面とも灰釉を施釉し、外面の体部下半以下は露胎である。19世紀前半以降の時期が考えられる。

④ 鉢(図版66 409) 409は内外面とも灰釉を施釉し、外面の体部下半以下は露胎である。19世紀前半以降の製品であろう。

(6) 産地不明の施釉陶器

この他、産地の明確でない施釉陶器には椀(図版58 275・図版61 331・332・図版63 366)、鍋(図版58 279)、盃台(図版58 281)、水滴(図版58 282・図版67 417)、ミニチュア壺(図版58

283)、蓋 (図版58 285・286・288・図版61 333)、鍋 (図版61 335)、仏花瓶 (図版61 336)、ミニチュア壺 (図版62 346)、植木鉢 (図版65 395)、ひょうそく (図版65 396)、鉢 (図版65 399) などがある。

4. 磁器

磁器には産地別にみると、肥前、三田、瀬戸・美濃及び産地不明のものがあ、また、種別では白磁、青磁、染付青磁、染付、色絵などがある。

(1) 肥前

a. 白磁

① 皿 (図版59 318・図版64 372) 318は蛇ノ目凹形高台で、形押しで内面に菊花文を施文し、口縁端部には鉄軸を施軸するいわゆる口紅の皿である。19世紀前半以降の時期が考えられる。372はやや青味を帯びた灰白色に発色し、一部軸切れが認められる。紅皿の退化形態とも考えられ、近代以降の製品であろう。

② 紅皿 (図版62 349) 349は型造り成形で外面は型押しにより花卉状に整形する。内面は透明釉を施軸し、乳白色に発色する。外面は露胎である。

b. 青磁

① 鉢 (図版58 292) 口縁部を型押し技法により整形し、高台は蛇ノ目高台である。内外面とも施軸するが、高台裏は中央部のみ施軸し他は露胎である。19世紀前半以降の製品と考えられる。

② 花瓶 (図版58 296) 頸部下部に1対の貼り付け浮文を施文する。口縁部内面～外面は青磁釉を施軸し淡青緑色に発色する。龍泉窯系の尊形花瓶の写しであろう。

c. 染付

① 碗 (図版59 298・303・305・311・図版338・339・図版62 351・352・図版64 373・376・380・381・図版66 411) 碗には器壁が厚く、淡い呉須で施文する粗製のいわゆるくらわんか手 (298・311・373)、細く高い高台をもつ広東碗 (303・305・338・339・352・380・381・411)、広東碗タイプで、大型で底部内面の広いもの (351)、外面の文様がコンニャク印判のみで構成されるもの (376) などがある。くらわんか手は18世紀後半に、広東碗は18世紀後半～19世紀前半に、351は19世紀前半～中頃に、376は18世紀前半にそれぞれ比定される。

② 杯 (図版64 374) 外面は淡い呉須で二重網目文、内面は菊花文を施文する。

③ 蕎麦猪口 (図版59 306・307・309・310・図版64 378) 蕎麦猪口には底部内面にコンニャク印判で五弁花文を施文し、外面に雪輪に笹葉文を描くもの (306)・簡略化した草花文を描くもの (307)・松葉と唐草文を描くもの、内面の文様がコンニャク印判ではなく、外面に赤絵で紅葉を描くもの (309)・呉須で二重網目文を描くもの (374) などがあり、いずれも19世紀前半からそれ以降の時期が考えられる。

④ 皿 (図版59 317・図版60 323・324・図版24・353・384) 皿は器壁が厚く、粗製のくらわんか手 (317・384)、大型で底部外面にハリ支え痕の残る高級品 (323・324)、底部の器壁が厚く、口縁部が玉縁状に肥厚するもの (353) などがある。くらわんか手は18世紀後半に、323・324は17世紀中葉～後半に、353は19世紀前半以降に、それぞれ時期が比定される。

⑤ 鉢 (図版60 321・図版61 340・図版64 388・図版66 413) 鉢には底部の器壁の非常に厚いくらわんか手のもの (321)、型押しで体部を「く」の字状に屈曲させるもの (413)、口縁端部の軸をかき

とするもの(413)などがある。340は底部のみの残存で面子として再利用したものと考えられる。

- ⑥ 油壺(図版60 325) 外面に蜻蛉草文を施文する。19世紀前半の製品であろう。
- ⑦ 仏花瓶(図版60 326) 梅瓶形を呈し、外面は蜻蛉草文を施文する。
- ⑧ 仏具碗(図版62 358) 蛇ノ目凹形高台をもち、外面に蜻蛉草文を施文する。18世紀後半～19世紀前半代の製品であろう。
- ⑨ 徳利(図版64 387) 平底で底部中央を浅く削りだす。外面に淡い呉須で笹葉文を施文する。18世紀代の製品と考えられる。

(2) 三田

- ① 碗(図版58 291・図版65 398) 291は口縁部が僅かに外反する。内外面とも青磁釉を施釉するが無文である。398は型造り成形で、高台は六角形を呈し、体部外面下半は広形蓮弁文風に整形する。高台畳付の露胎部は淡赤褐色を呈する。
- ② 角鉢(図版58 293～295・図版61 337) 角鉢はいずれも型造り成形で、高台、体部の形が八角形を呈するもの(293)、方形を呈するもの(294・337)、三角形を呈するもの(295)などがある。いずれも19世紀前半の時期に比定される。

(3) 瀬戸・美濃

- ① 碗(図版59 300・図版62 350・図版64 379・382) 碗は口縁部が外反し、外面に窓絵風に吉祥句を書くもの(350)、内面に「寿」字文を施文し外面によろけ文を施文するもの(300)、底部内面に草花文を施文し、外面に蓮弁文を描くもの(382)、高台が「ハ」の字状にひらき、外面に海浜風景を描くもの(379)などがある。
- ② 蕎麦猪口(図版59 308) 外面に笹葉文、雪輪文などを描き、底部内面にはくずれた五弁花文をコンヤク印で施文する。呉須の発色は滲む。

(4) 産地不明の磁器

この他、産地の明確でない磁器には、白磁壺(図版58 287)、青磁小碗(図版66 407)、染付碗(図版59 302・304・図版64 375)、蕎麦猪口(図版59 310)・鉢(図版59 313・図版60 322・図版64 385)・皿(図版59 314・図版64 383・図版65 401)・蓋(図版59 319・320・図版66 412)、色絵の碗(図版59 299・301)・蓋(図版64 386)などがある。

B. 土製品

- ① 硯(図版66 414) 型造り成形で、海の部分は欠失している。底部外面に「人□」の文字を刻印する。
- ② 人形・器物形(図版67 415・416・418～421) いずれも、正面と背面を別々に型造りし、中央部で貼り合わせる両型造りで、人形には、僧形像(415)、鯛を担ぐ恵比寿像(416)、力士像(418)、器物形には先端の欠落した三重塔(419)などがある。
- ③ 面子(図版66 420・421) いずれも、背面は平滑な片型造りで、上面に江戸時代後期の力士名である「小柳」を刻印するもの(420)と小判形を刻印するもの(421)がある。
- ④ 土錘(図版71 477～491) 土錘はいずれも、てずくね成形で表面は磨耗して、平滑になるものが多い。
- ⑤ 轆の羽口(図版72 499～502・図版73 503・504) 轆の羽口はいずれも円柱状を呈し、先端には鉄滓が付着する。いずれも表面は平滑に仕上げられ、先端は高温によって、黒色から橙色に変色してい

る。

C. 瓦類 (図版61 327・図版62 354・355)

瓦はいずれも軒丸瓦である。327・354は巴文軒丸瓦である。327は珠文数は16、354は珠文は16珠で、いずれも腫し瓦で巴の尾は長い。355は小菊文軒丸瓦で花卉の数は16弁である。

D. 石製品

① 硯 (図版61 328・329・図版65 389) 328は上面は剥離する。海部は線条状と墨痕が顕著である。329は粘板岩製で、中央で2区画に区分し、一つは朱筆用である。硯面、両側面、裏面とも平行条痕が顕著にみられ、砥石として再利用された可能性がある。389は砂岩製で使用頻度は高く、海部は一部欠損する。

② 砥石 (図版65 390～392) いずれも砥石の一部で破損した後も再利用されており、研磨面は磨耗して平滑になっている。

E区出土遺物

A. 土器・陶磁器

E区から出土した土器・陶磁器には土師器、無釉陶器、施釉陶器、磁器がある。

1. 土師器

① 五徳 (図版68 436) 体部内面に3箇所縦長のすべり止めを貼り付け、内面には煤が付着する。

② 皿 (図版68 441) 回転台を使用して成形し、内面は透明釉を施釉し、淡暗褐色に発色する。底部外面は未調整で糸切り痕が残る。いわゆる柿種の灯明皿である。

2. 無釉陶器

無釉陶器には備前焼播鉢 (図版68 442) がある。平底で底部の器壁は非常に厚く、口縁端部は丸みをもつ。内面は鉄泥漿を塗布し、外面は灰被りにより光沢をもつ。

3. 施釉陶器

施釉陶器には瀬戸・美濃産の手水鉢 (図版68 437) がある。平底で、高台は蛇ノ目状凹形高台風に成形する。口縁部は外反し、端部は下方につまみ出す。内面～口縁部外面まで、白濁釉を施釉し、3箇所緑釉を施釉する。外面は鉄釉を刷毛塗りする。近世後半から近代の製品と考えられる。

4. 磁器

磁器には肥前系の染付青磁の蕎麦猪口と染付磁器の碗・仏飯具がある。

a. 染付青磁 蕎麦猪口 (図版68 443) 外面には青磁釉を施釉し、淡青緑色に発色する。内面には呉須で、斜格子文、底部内面にはコンニャク印判で五弁花文を施文する。18世紀後半～19世紀前半の製品であろう。

b. 染付

① 碗 (図版68 438・444・445) いずれも、底部の器壁が非常に厚く、外面に淡い呉須で施文する粗製の磁器で、いわゆるくらわんか手の碗である。外面の文様には雪輪文 (438)、雪輪と梅文 (444)、二重網目文 (445) などがあり、いずれも、18世紀前半～後半代の時期が考えられる。

② 仏具碗 (図版68 446・447) 446は平底で、周辺部を幅5mm程残して、浅く削る。体部外面に淡い呉須で雨降り文を描く。19世紀前半以降の製品と考えられる。447も平底で、中央部を浅く削って蛇ノ目高台風に成形する。文様は外面にラフに斜格子文を描く。猪掛けもラフで19世紀前半の粗製品と考

えられる。

F区出土遺物

A. 土器・陶磁器

F区から出土した土器・陶磁器には土師器、施釉陶器、磁器がある。

1. 土師器

- ① 焙烙 (図版69 448) 型造り成形と考えられ、口縁部は玉縁状に肥厚し、胎土中に多量の雲母片を含む。
- ② 羽釜 (図版69 449) 体部は直立し、体部上位に断面方形の鐶を貼り付ける。体部外面に粘土の継ぎ目が残る。比較的小形の羽釜である。
- ③ 提炉 (図版69 450) 断面台形状の脚部を3箇所貼り付け、体部下位に楕円形の透かしを入れる。体部外面下位に製作地あるいは窯名の刻印を押印する。

2. 施釉陶器

施釉陶器には産地別で見ると、丹波、舞子・明石の他、産地不明のものがある。

(1) 丹波

- ① 甕 (図版69 451) 平底で内外面とも鉄釉を施釉する。底部外面には胎土目跡がみられる。近世後半～近代の製品であろう。
- ② 花瓶 (図版69 452) 平底で体部は直立する。頸部外面に縦耳を貼り付ける。外面は鉄釉を施釉し黒褐色に発色する。底部外面は露胎で目跡が4箇所認められる。近世後半～近代の製品であろう。
- ③ 徳利 (図版69 453) 頸部は直立し、口縁部は玉縁状に肥厚する。外面は鉄釉を施釉し、白泥をイッチン掛けで施文する。釉はガラス質で光沢をもち、近代以降の製品と考えられる。
- ④ 植木鉢 (図版69 459) 体部は直立し、口縁部は内側に僅かにつまみだす。内外面とも露胎で、外面の一部を鉄釉で施文する。
- ⑤ 播鉢 (図版70 467) 平底で、周縁部に凹線を施し、浅い高台状に成形する。口縁部は直立し、外面に凹線が2条巡る。内外面に灰釉を施釉し、底部外面の周縁部は露胎で、中央部に輪状に砂が付着する。内面、底部内面に10条1単位の捕目を鉄製工具で施文する。近代以降の製品であろう。

(2) 舞子・明石

蓋 (図版69 454・460) 454は上面中央に円形つまみをもつ。外面は鉄釉を施釉し、内面は露胎である。壺の蓋と考えられる。460は環状つまみをもち、口縁部は水平に折り曲げる。外面は中央部と頸縁部を環状に鉄釉で施文し、鉄釉と鉄釉の間をトビガンナ施文し、さらに白濁釉、緑釉で施文する。内面は透明釉を施釉し暗黄褐色に発色する。いずれも19世紀前半以降の製品と考えられる。

(3) 産地不明の施釉陶器

この他、産地の明確でない施釉陶器には、外面に鉄釉で草花文を施文する向付 (図版69 458) の破片がある。

3. 磁器

磁器には産地別にみると、肥前、瀬戸・美濃の他、産地不明のものがある。

(1) 肥前

- ① 碗 (図版69 461・463・図版70 469) 碗には外面に「大坂 新町 お□□」と施文する小碗

(461)、外面に梅花文を描く小型の広東碗 (463)、外面に桔梗文を描き、底部内面に「寿」字文を描くもの (469) などがあり、いずれも18世紀後半～19世紀前半代に比定される。

② 花瓶 (図版69 456) 色調は青味を帯びた灰白色を呈し、淡い呉須で草花文を描く。底部外面を「一」字状に穿孔する。18世紀後半代の製品であろう。

③ 皿 (図版69 464) 底部の器壁が非常に厚く、外面に淡い呉須で唐草文、内面に松竹梅文、底部外面にコンニャク印判で五弁花文を施文するくらわんか手の皿である。18世紀後半代に時期が比定される。

④ 仏飯具 (図版69 466) 平底で中央部をあげ底気味に削りだす。外面は淡い呉須で半截七弁菊花文を施文する。18世紀前半の製品であろう。

⑤ 蕎麦猪口 (図版70 468) 外面は淡い呉須で施文し、内面は斜格子文、底部内面はくずれたコンニャク印判で五弁花文を施文する。19世紀前半以降の時期が考えられる。

(2) 瀬戸・美濃

462は口縁部が僅かに外反する端反碗で、外面にやや濃い呉須で「大坂 新町」の鏡文を施文する。19世紀前半以降の製品と考えられる。

(3) 産地不明の磁器

この他、産地の明確でない磁器には、青磁鉢 (図版70 470)、乗付碗 (図版69 455)・皿 (図版69 465)、色絵磁器碗 (図版70 471) がある。

B. 土製品

① 人形・動物形・器物形 (図版70 473・475・476) 人形・動物形・器物形には両型造りの大黒像 (473)、片型造りの狐面 (475)、型造りで内部が中空の釣鐘形 (476) などがある。

② 面子 (図版69 457 図版70 472・474) 面子には瓦片を転用したもの (457)、施釉陶器碗の底部を転用したもの (472)、片型造りで江戸時代後期の力士名小柳を押印したもの (474) などがある。

③ 桶の羽口 (図版73 506～509) 桶の羽口はいずれも円柱状を呈し、表面は平滑に仕上げられる。また、先端が高温によって黒色から橙色に変色している。

I 区出土遺物

A. 土器・陶磁器

I 区から出土から出土した土器・陶磁器には、土師器、瓦質土器、須恵器、無釉陶器、施釉陶器、磁器がある。

1. 土師器

(1) 皿 (図版74 516・517・図版75 538・539・図版81 638～640・647・図版83 667・図版85 714～716・719～721・図版87 760・763・764) 皿は平底で器壁が厚く底部外面に糸切り痕を残し、回転台を使用して成形するものが大部分を占めるが、器壁が薄く、てづくね成形のもの (517) も1点だけ含まれる。回転台使用のものにはやや大型のもの (716・764)、やや器高が高いもの (763)、把手状のものをもち、内面に透明釉のかかるもの (760) などがある。

(2) 焙烙 (図版75 540～542・図版77 587・図版78 614・図版81 634・641～646・図版83 668・669・図版85 717・722・図版87 765) 焙烙はいずれも型造り成形である。底部を底型で作りその上に粘土糺を積み上げ、外面の底部と体部の界が丸みを帯びる底型造りのもの (540・642・643・668・

669・717)と底部から体部までを型造りし、外面の底部と体部の界が垂直ないしは鈍角の端面をもつもの(541・587・614・634・644・645・646)とに大別される。また、口縁部上面を穿孔するもの(634)、耳をもち、耳に穿孔するもの(642)などがある。

(3) 鍋(図版74 518・519・520・図版87 766) 鍋には凸帯状の退化した鋳をもつもの(520・566)と鋳をもたないもの(518・519)とがある。518は体部がやや内傾し、体部外面の叩き目はナデ消す。519は体部外面に平行叩き目が残る。16世紀後半～17世紀初頭の時期が考えられる。520は上下の強いナデにより鋳を作りだす。16世紀代のものであろう。766は断面三角形の比較的しっかりとした鋳を貼り付け、体部外面には平行叩き目が残る。15世紀代の所産であらう。

(4) 火舎(図版75 543・図版77 588・図版83 670) 543は方形で、板状の粘土を貼り合わせて成形し、四隅に低い脚をもつ。588は円形で、形骸化した扁平な脚をもつ。670は体部は内彎し、口縁上面は水平に端面をもつ。

(5) 蜻壺(図版75 544・図版81 648・図版83 671～673・図版86 751) いずれも底部のみあるいは口縁部～体部までの残存で全体の残るものはないが、復元すると、平底で体部は直立し口縁部は外反する。成形技法の違いから粘土紐巻き上げ成形のもの(544・648・751)と水挽きロクロ成形のもの(671～673)とがある。

(6) 蓋(図版75 545・図版86 750) 545は型造り成形で、口縁部は花卉状に整形し、外面に梅花文、菊花文を型押しして施文する。ミニチュア茶釜の蓋と考えられる。750は上面を扁平に成形する焼塩壺の蓋である。

2. 瓦質土器

(1) 羽釜(図版77 604) 体部は大きく内彎し、体部中央よりやや下に断面長方形の鋳を貼り付ける。口縁部上面はシャープに面取りし、外面はへら磨きにより平滑に仕上げる。鋳物の茶釜を模倣したものである。

(2) 火舎(図版83 670・674) 670は体部は内彎し口縁部上面は水平に面取りする。674は口縁部外面に円形の連続浮文と捺文を貼り付ける。

3. 須恵器

(1) 皿(図版74 521) 521は平底で、体部は直線的に斜め上方に延びる。東播磨系須恵器で12世紀後半～13世紀前半の時期に比定される。

(2) 壺(図版83 682) 平底で体部は僅かに内彎気味に直上に立ち上がる。胎土中に砂粒を多く含む。

4. 無釉陶器

無釉陶器には産地別では丹波、堺・明石、備前その他、産地不明のものがある。

(1) 丹波

① 播鉢(図版74 522・524・図版79 621・図版83 677・678・図版85 724) 播鉢は口縁部の形態から、口縁部が断面三角形状に外側に肥厚するもの(522・678)・内側に肥厚するもの(677)、口縁部が上下に拡張して緑帯を形成するもの(724・725)、口縁部が肥厚せず、断面長方形を呈するもの(621)に分類される。また、底部内面に同心円状の播目を施文するもの(524)がある。522・678は大平分類のC類、長谷川分類のⅡB1a類に相当し、17世紀初頭～18世紀前半の時期が、724・725は大平分類のE類、長谷川分類のⅡB2a類に相当し、17世紀中頃～18世紀後半の時期が、621は大平分類のB類、長谷川分類のⅡA2類に相当し、16世紀末～17世紀中頃の時期が、それぞれ与えられる。

- ② 鉢 (図版74 523・図版83 687) 523は口縁部が内側に僅かに肥厚し、外面に鉄泥漿を塗布する。687は口縁部内外面に鉄泥漿を塗布し露胎部は明赤褐色に発色する。
- ③ 匣鉢 (図版75 550・図版83 679) 550は平底で体部は直立する。体部外面に鉄泥漿を塗布し、胡麻状の灰被りが見られる。679は平底で体部は外反する。外面に僅かに灰被りが見られる。
- ④ 蓋 (図版75 552) 薄い円盤状に成形し、内面に凸帯を1条巡らせる。外面に重ね焼き痕がある。
- ⑤ 植木鉢 (図版79 618) 底部中央に穿孔が1箇所あり、外面は胡麻状に灰被りがみられる。
- ⑥ 甕 (図版83 681) 体部から口縁部にかけて大きく屈曲し、口縁部は内傾する。外面には灰被りがみられる。
- ⑦ 壺 (図版85 726) 体部は内彎し、口縁部は玉縁状に肥厚する。外面は鉄泥漿を塗布し、口縁部上面に灰釉が付着する。

(2) 罍・明石

- ① 罍鉢 (図版75 546・図版77 589・594・図版81 649) 罍鉢はいずれも、口縁部が上下に拡張し、縁帯を形成するもので、口縁部外面には凹線もしくは沈線を施す。明石産罍鉢の編年観からは546・594は植原分類のⅡ-2類に、649はⅠ-1類に相当し、それぞれ18世紀中葉～19世紀前半、18世紀前半の時期が与えられる。

(3) 備前

- ① 罍鉢 (図版81 650・図版83 676・図版86 741) 650は口縁部が上下に拡張し、縁帯を形成するもので、口縁部外面に凹線を2条施文する。色調は暗赤褐色を呈し、外面は胡麻状の灰被りがみられる。676は体部内面に横方向の罍目が見られ、焼成は堅緻で胎土は精良である。備前焼Ⅴ期の製品で16世紀代に比定される。741は口縁部が縁帯を形成するが、外面には凹線を施さない。備前焼Ⅳ期の製品で15世紀代に比定される。
- ② 壺・甕 (図版85 727・図版87 767) 727は平底で体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。内外面とも鉄泥漿を塗布し、暗赤褐色に発色する。内面は胡麻状の灰被りがみられる。備前焼Ⅴ期の製品で16世紀代の時期が考えられる。767は甕で口縁部は肥厚し上下に延びた形を呈する。備前焼Ⅳ期の製品で15世紀代に比定される。

(4) 産地不明の無軸陶器

この他、産地の明確でない無軸陶器には、土管 (図版80 629～633)、罍鉢 (図版85 723・図版86 742・752)、植木鉢 (図版74 515) などがある。

5. 施釉陶器

施釉陶器には産地別にみると、肥前・丹波、備前、瀬戸・美濃の他、産地不明のものがある。

(1) 肥前

- ① 鉢 (図版74 525・図版77 590・図版82 653・図版84 696・図版85 730・図版87 759・770・771) 鉢は施釉の方法からみると、鉄釉、灰釉を施釉したのち、白泥あるいは白濁釉で施文するいわゆる刷毛目唐津が大部分を占め、17世紀後半～18世紀前半の時期が与えられる。口縁部の形態からは、外反するもの (525・759・770・771)、水平に折り曲げるもの (590)、玉縁状に肥厚するもの (653)、斜め上方にそのまま挽きあげたもの (696) などがある。底部のみ残存する730は内外面とも鉄釉施釉の後、白泥で施文するもので、現川焼の可能性が考えられる。
- ② Ⅲ (図版74 526・図版75 554・555・図版82 652・図版83 693・図版84 694・695・図版86

738・740・744) 皿には口縁部の形態からみると、口縁部が外反し、内面に1条の凹線を巡らすいわゆる溝縁皿(526・740・744)と口縁部を波状に整形するもの(555)とがある。また、底部内面の重ね焼きの痕跡からみると、蛇ノ目状軸ハギを行うもの(554・555・738)と砂目跡のもの(693・694)とがある。溝縁皿・砂目跡のものは17世紀前半に、蛇ノ目状軸ハギのものは17世紀後半～18世紀前半にそれぞれ時期が比定できる。

③ 椀(図版81 635・図版83 688・691・図版86 743) 椀は高台の形からみると端正な輪高台をもつ京焼風陶器(635・688)と粗く削り出し高台裏をト巾状に削り残すもの(691)とがある。691は17世紀後半～18世紀前半の時期が考えられる。743は底部を欠失するが、外面の体部下半以下は露胎で、17世紀前半代の時期が想定される。

(2) 丹波

① 甕(図版75 547・548・図版85 718・図版86 753) 甕は短く直立する頸部をもつもの(718・753)ともたないもの(547・548)とがある。いずれも、外面には鉄釉を施し、547は型押しした菊花文を貼り付ける。

② 花器(図版75 549) 口縁部に2箇所把手の貼り付け痕が、また、体部上面には注口の貼り付け痕跡が残る。外面の体部上面まで鉄釉を施し、体部下半以下は露胎である。水差し形の花器と考えられる。

③ 花瓶(図版77 597) 頸部下面に縦耳を貼り付け、中国製青磁の尊形に成形する。口縁部内面～体部外面の上半まで鉄釉を施し、肩部には灰釉、体部下半以下は露胎である。底部外面に墨書が認められる。

④ 徳利(図版77 598) 頸部は直立し、口縁部は玉縁状に肥厚する。外面は鉄釉を施し、光沢をもつ。近代以降の製品であろう。

(2) 備前

① 鉢(図版81 636) 内外面とも灰釉を施し、外面は火摩状に発色する。

(3) 瀬戸・美濃

① 皿(図版77 602・図版83 692・図版87 769) 皿には全面に灰釉を施し、口縁部を型押しにより波状に整形するいわゆるひだ皿(602・769)と灰釉を施し、外面の高台陰以下が露胎となるもの(692)とがある。ひだ皿は19世紀前半の時期が考えられる。

② 挿鉢(図版83 675) 口縁部は内側に肥厚し、内外面とも鉄釉を施す。

(4) 産地不明の施釉陶器

この他産地の明確でない施釉陶器には蓋(図版75 551) 椀(図版75 553・図版77 601・図版83 683～686・689・690・図版86 746・図版87 768)、皿(図版75 556)、甕(図版77 595)、急須(図版77 596・図版86 735)、杯(図版77 599・600)、壺(図版83 680)、土瓶(図版87 781)などがある。このうち、椀の553・601・683・689・690はいずれも京焼風のプロポーシオンをもつ。また、椀746は、高台は浅い平底高台を削り出し、内外面とも施釉し、淡暗灰緑色に発色する。高台登付には胎土目跡が5箇所あり、肥前産の可能性が考えられる。

6. 磁器

磁器には産地別にみると、中国、肥前、瀬戸・美濃及び産地不明のものがあり、種別では白磁、青磁、染付青磁、染付、色絵がある。

(1) 中国製

a. 白磁

① 皿 (図版74 528・図版87 775) 528は内外面とも透明釉を施軸し、乳白色に発色する。12世紀後半～13世紀前半の華南産白磁であろう。775は底部内面に蛇ノ目状軸ハギがみられる。13世紀代の華南産白磁と考えられる。

② 壺 (図版84 710) 底部は中央部を浅く削り出し、幅の広い低い高台を作り出す。内外面とも施軸するが、底部外面は露胎である。13世紀代の華南産の白磁四耳壺の底部であろう。

b. 青磁

① 鉢 (図版87 773) 内外面とも青磁釉を施軸し、釉層は厚い。14世紀代の龍泉窯系青磁鉢であろう。

c. 青花

① 碗 (図版74 530) 口縁部は外反し、外面に界線、草花文を施文する。16世紀後半の明青花である。

② 皿 (図版87 776・777) 776は色調は青味を帯びた灰色を呈し、内面に淡い呉須で文様を施文する。777は広く浅い高台を粗く削り出し、底部の器壁は非常に厚い。色調は青味を帯びた灰白色を呈し、内面に淡い呉須で草花文を描く。いずれも、17世紀初頭の漳州窯の製品と考えられる。

(2) 肥前

a. 白磁

① 碗 (図版74 510) 底部の器壁は非常に厚く、内外面とも透明釉を施軸する。

② 紅皿 (図版76 557・558) いずれも、型造り成形で、外面に放射線状の花文を施文する。内面～口縁部外面まで透明釉を施軸し、外面の体部下半以下は露胎である。

③ 皿 (図版82 663) 底部の器壁は非常に厚い。内外面とも透明釉を施軸するが、外面の高台脇以下は露胎である。底部内面には蛇ノ目状軸ハギが見られる。18世紀前半代の時期が考えられる。

b. 青磁

① 皿 (図版74 529・図版87 772) 529は内面の口縁部と体部の界に浅い段をもつ。内外面とも青磁釉を施軸し、淡い青灰色に発色する。底部内面には蛇ノ目状軸ハギが見られる。

② 鉢 (図版79 622) 底部は蛇ノ目凹形高台風に成形する。内外面とも青磁釉を施軸するが、底部外面には蛇ノ目状軸ハギがみられる。18世紀後半以降の製品と考えられる。

c. 染付青磁

① 鉢 (図版76 561) 浅い蛇ノ目凹形高台をもち、体部は直立し、口縁部上面は水平に切る。外面の口縁部から高台までは青磁釉を施軸し、高台裏は透明釉施軸の後、蛇ノ目状に軸ハギする。

② 碗 (図版82 654・655) 654・655はいずれも高台は比較的高く、外面は青磁釉を施軸する。高台裏は染付で渦福文を描き、底部内面にはコンニャク印判で五弁花文を施文する。いずれも18世紀中頃～後半の製品であろう。

d. 染付

① 皿 (図版74 532・533・図版76 577～581・図版78 615・616・図版79 623・図版82 651・664・665・図版84 698・705・706・708・709・図版85 731・図版86 736) 皿には、薄手に成形され、淡い呉須で施文し、高台畳付に砂が付着するなどの特徴をもつ17世紀前半代の初期伊万里の皿

(532・533・698・708・731)、底部の器壁が厚く、淡い呉須で施文し、外面の高台輪以下が露胎で、底部内面に蛇の目状輪ハギがみられるなるなどの特徴をもつ18世紀前半代の粗製染付(577・579・616・651・664)、厚手に成形され、色調は青味を帯びた灰白色を呈し、淡い呉須で施文し、内面にコンニャク印判で五弁花文を施文するなどの特徴をもつ18世紀代のいわゆるくらわんか手の皿(580・615・623・706・736)などがある。

② 碗(図版76 562~569・図版77 591・図版78 607~609・617・図版82 659・661・662・図版84 699・700・702・703・図版86 739・745・756・757・図版87 780) 碗は25点図化したのが、その中で最も量が多いのが、底部の器壁が非常に厚く、淡い呉須で施文し、底部内面にコンニャク印判で五弁花文を施文するなどの特徴をもつ粗製のくらわんか手の碗である(566~569・617・659・661・662・699・700・702・703・756・789)。くらわんか手の碗は外面の施文方法の違いから、コンニャク印判のみで施文するもの(567)、コンニャク印判と手描き文様を併用するもの(568)、手描きのみで施文するもの(566・569・617・659・661・662・699・700・702・703・756・789)に分類され、それぞれ18世紀前半、18世紀中頃~後半、18世紀後半の時期が考えられる。くらわんか手に後出のものには、口縁部を僅かに外反させる端反碗(607・608)があり、19世紀前半以降の時期に比定できる。また、形態的には全体に薄手に成形され、端正な輪高台をもち、京焼風のブローションエをもつ京焼風染付(562・609)がある。特に609は金漆で焼継されており、高級品と考えられる。この他外面の文様からみると、雨降り文を描くもの(563)、二重網目文を描くもの(564)、一重網目文を描くもの(608・745)、菊花文を描くもの(565)、草花文を描くもの(591)などがあり、概ね17世紀後半から19世紀前半代の時期が考えられる。

③ 仏飯具(図版76 582) 平底で脚部の整形も粗い粗製品で、外面に草花文を描く。

④ 瓶(図版76 583) 高台は幅が広く低い。色調は青味を帯びた灰白色を呈し、外面に松葉文を描く。

⑤ 杯(図版84 701・図版87 774) 701・774はいずれも高台は細く高く、口縁部は外反する。体部外面には呉須で草花文などを施文する。

⑥ 蕎麦猪口(図版77 592・図版82 660・図版86 737) いずれも体部が直立する筒形碗の形態をとる。外面の文様は蛸唐草文(592)、竹に笹葉文(660)、半截菊花文(737)などがあり、18世紀後半~19世紀前半の時期が考えられる。

⑦ 徳利(図版87 761) 色調は青味を帯びた灰白色を呈し、外面に一重網目文を施文する。

(3) 瀬戸・美濃

a. 白磁

① 碗(図版81 637) 高台は比較的高く、底部と体部の界は大きく屈曲する。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。

b. 染付

① 碗(図版76 572・図版78 605・606・図版79 624) 碗には大形で体部が直立するもの(572)と小形で口縁部が外反する端反碗(605・606・624)とがある。端反碗の外面の文様には馬ノ目文(605)、芭蕉文(606)、幾何学文(624)などがある。いずれも、19世紀前半以降の製品と考えられる。

② 杯(図版76 574) 574は高台は細く高く、口縁部は僅かに外反する。外面には淡い呉須で草花文、界線を施文する。

(4) 産地不明の磁器

この他、産地の明確でない磁器には白磁皿（図版85 729）、碗（図版76 559・560・図版85 728・図版87 760）、杯（図版84 697）、青磁瓶（図版74 527）、染付碗（図版74 511・513・530・図版76 570・571・573・576・図版82 658・図版84 704）・皿（図版74 531・図版78 610・図版84 707）・蓋（図版78 611）・香炉（図版78 612）・蕎麦猪口（図版76 575）・杯（図版82 656）、色絵角皿（図版77 603）などがある。

B. 土製品

土製品には人形・動物形・器物形、面子、土鍾、轆の羽口などがある。

① 人形・動物形・器物形（図版86 748・図版88 782～788） 人形・動物形・器物形には回転台を使用してつくられたミニチュア壺（748）、型造り成形のもの（782～788）、てづくね成形の女性の脚部（783）などがある。型造りのものには正面と背面を別々に型造りして、中央で貼り合わせた両型造りの菩薩像（782）、網を持つ漁師（785）、狐像（786）、金太郎像（789）と施文は片面のみで背面は平滑となる片型造りの菩薩像（784）・恵比寿像（788）などがある。いずれも表面の彩色は殆ど失われている。

② 面子（図版74 513・534・図版79 625・626・図版84 711・712・図版85 732・733・図版86 739・747・図版87 762・778・779） 面子はいずれも、瓦や陶磁器類の主に底部、あるいは胴部の破片の周縁を打ち欠いて再利用したものである。材料となった陶磁器には中国産白磁（534）国産白磁（762）、瓦（625・732）、瓦質土器（626）、染付（513・711・739）、丹波（747）、備前（735・779）、瀬戸・美濃天日桶（778）などがある。

③ 土鍾（図版89 789～833・図版90 834～843） 土鍾の出土量は港町と言う遺跡の性格上多く、同化したものだけでも54点にのぼる。いずれも、てづくね成形であるが、芯材を使用せず指のみで成形した小形の指造りのもの（789・802～804・816～820・833）が多く含まれる。

④ 轆の羽口（図版91 844～853） 轆の羽口はいずれも円柱状を呈し、表面は平滑に仕上げられ、また先端が高温によって黒色から棕色に変色している。

C. 瓦類（図版74 535・536・図版76 584～586・図版77 593・図版78 613・図版79 619・620・628・図版82 666・図版84 713・図版85 734） 瓦には丸瓦（535・593・713）、平瓦（536・619・620）、巴文軒丸瓦（584・585・613・627・628・666）、唐草文軒平瓦（586・734）などがある。軒丸瓦の珠文数は627が13、628が15、666が13で、いずれも巴の尾は非常に長い。

D. 石製品

石製品には花崗岩製の磨石（図版74 537）がある。表面は平滑に仕上げられる。

参考文献

- (1) 大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布－発掘資料を中心として－」 『国内出土の肥前陶磁』 九州陶磁文化館
- (2) 野上建紀 1984 「磁器の編年（色絵以外） 1 碗・小杯・皿・紅皿・紅猪口」 『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会

- (3) 大橋康二 1984 「磁器の編年（色絵以外） 2 鉢・猪口・蓋鉢・合子・蓋俵」 『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会
- (4) 川崎麻理子 1984 「磁器の編年（色絵以外） 4 仏飯器・水滴・灯火具・緒締玉・戸車」 『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会
- (5) 鈴田山紀夫 1984 「磁器の編年（色絵以外） 5 瓶・花生・仏花器・油壺・水注」 『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会
- (6) 稲原昭嘉 2000年 「明石播鉢の編年について」 『近世の実年代資料』 第12回 関西近世考古学研究大会資料集 関西近世考古学研究会
- (7) 白神典之 1992年 「堺摺鉢考」 『東洋陶磁』 第19号 東洋陶磁学会
- (8) 溝淵忠成他 1981年 『日本焼物集成 近畿Ⅰ』 平凡社
- (9) 稲垣正宏 2001年 「考古資料から見た信楽焼」 『近世信楽焼をめぐって』 研究集会資料集 関西陶磁史研究会
- (10) 畑中英二 2001年 「近世信楽に於ける陶器生産」 『近世信楽焼をめぐって』 研究集会資料集 関西陶磁史研究会
- (11) 鈴木祐子 2001年 「江戸遺跡出土の信楽焼」 『近世信楽焼をめぐって』 研究集会資料集 関西陶磁史研究会
- (12) 楢崎彰一他 1980年 『日本焼物集成 瀬戸 美濃 飛騨』 平凡社
- (13) 井上喜久男 1992年 『尾張陶磁』 ニューサイエンス社
- (14) 藤澤良祐 1987年 「本業焼の研究(1)」 研究紀要 VI 瀬戸市民俗資料館
- (15) 藤澤良祐 1988年 「本業焼の研究(2)」 研究紀要 VII 瀬戸市民俗資料館
- (16) 藤澤良祐 1989年 「本業焼の研究(3)」 研究紀要 VIII 瀬戸市民俗資料館
- (17) 稲原昭嘉 1997年 「明石城における17・18世紀の器種構成」 『関西近世考古学研究』 V 関西近世考古学研究会
- (18) 乗岡 実 1999年 「近世備前の播鉢」 『関西近世考古学研究』 VII 関西近世考古学研究会
- (19) 大平 茂 1992年 『下相野窯跡』 兵庫県教育委員会
- (20) 長谷川 眞 2000年 「近世丹波系播鉢とその系譜関係」 『関西考古学研究』 VIII 関西近世考古学研究会
- (21) 川口 云海 1998年 「有城・伊丹郡町遺跡出土の近世丹波焼製品」 『楢崎彰一先生古希記念論文集』 楢崎彰一先生古希記念論文集刊行委員会

表3 兵庫津遺跡(西出地区)出土遺物観察表

No	出土遺物	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
1	C区 1-N (遺物包含層)	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は丸味をもって収める。回転台を使用して成形。	内面 透明釉施釉。明赤褐色に発色。口縁部外面に黒附着。底部外面 未調整、糸切り痕。	いわゆる特種の灯明皿。
2	C区 1-N (遺物包含層)	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は尖り気味収める。回転台を使用して成形。	内面 透明釉施釉。明赤褐色に発色。口縁部外面に黒附着。底部外面 未調整、糸切り痕。	いわゆる特種の灯明皿。
3	C区 表採	土師器	皿	ややあげ底気味の平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は丸味をもつ。回転台を使用して成形。	内面 透明釉施釉。一部黒気味に腐変。口縁部外面に黒附着。底部外面未調整、糸切り痕。	いわゆる特種の灯明皿。
4	C区 1-N (遺物包含層)	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は丸味をもつ。回転台を使用して成形。	内面 透明釉施釉。明赤褐色に発色。口縁部外面に黒附着。底部外面 未調整、糸切り痕。	いわゆる特種の灯明皿。
5	C区 2-N (遺物包含層)	土師器	焼塩釜	平底。体部 直立。口縁部上向は部分的に凸部がある。	製造り成形。底部・体部内面に布目痕。	
6	C区 1-N (遺物包含層)	土師器	焼塩釜	平底。体部 直立。	製造り成形。内面に布目痕。	
7	C区 2-N	土師器	火消壺	体部は上半で「く」の字状に大きく屈曲。口縁部は無頸で丸味を以て収める。	内・外面とも 縦筋着。内・外面とも ヘラ削り調整。	
8	C地区 1-N (遺物包含層)	土師器	火消壺	平底。体部は僅かに外反して直上に延びる。	内面 指おさえ板。外面上半 指おさえの後ナゲ調整。外面下半 横方向の板ナゲ調整。	
9	C区 1-N (遺物包含層)	土師器	火消壺蓋	盃型。体部外側面は浅いヨコナデ。上面は狭いナゲ。下面は浅いヨコナデ。	下面は黒が附着し黒色に変色。	
10	C区 1-N (遺物包含層)	土師器	火消壺蓋	口縁部上面はほぼ水平に面取り。体部はほぼ直立。	外面 浅い凹線1条。体部 内・外面ナゲ調整。体部上面は未調整。内面 縦筋着。	
11	C区 1-N (遺物包含層)	土師器	鍋蓋	水掻きロクロ成形。体部はほぼ直立。口縁部は外反。	内・外面とも ロクロ目あり。	
12	C区 1-S (遺物包含層)	土師器	火鉢	「ハ」の字状に開く高台足の脚部をもつ。底部は平底。	内面ナゲ。外面 ナゲ調整。	胎土中に砂粒を含む。
13	C区 2-N (遺物包含層)	土師器	風炉	平底。底部に扁平な脚部を3ヶ所貼り付け。体部は僅かに内湾。口縁部は水平に切る。	内面に突起を1ヶ所貼り付け。内面～口縁部外面まで煤付着。外面は平滑にナゲ調整。	
14	C区 1-N (遺物包含層)	土師器	火舎	製造り成形の板状粘土を貼り合わせて成形。底部外面の凹部に脚部を貼り付け。	内・外面とも ナゲ調整。内面 ヘラ削り調整。	内面に黒附着。
15	C区 1-N (遺物包含層)	無釉陶器	播鉢	口縁部は尖り気味に成形。	内面 櫛状工具で3条1単位の櫛目施文。	焼成は丹波焼に似る。
16	C区 1-N (遺物包含層)	土師器	ひょうそく	平底。体部は外上方へ立ち上がる。製造り成形的後、灯芯台を中央部に貼り付け。	灯芯台上面にスズ附着。	
17	C区 1-N (遺物包含層)	瓦質土器	羽釜	脚は断面長方形。体部は直立。	外面 凹線3条。丁家に磨く→器面は傾化。	外面の脚部以下に煤附着。鉄銚を忠実に模倣した瓦質羽釜。
18	C区 2-N (遺物包含層)	無釉陶器	播鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縹帯を形成。口縁部外面凹線2条。内面 凹線あるいは凹線2条。	体部内面 8条1単位の櫛目施文。底部内面8条1単位の櫛目を放射状に施文。内面の体部と口縁部の界は明瞭。口縁部外面 片口をひょうそく用の指押え痕1ヶ所。	堺・明石産播鉢。
19	C区 2-N (遺物包含層)	無釉陶器	播鉢	平底(ややあげ底気味)。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張し縹帯を形成。口縁部外面に凹線2条。内面 凹線(凹部)2条。	体部内面 8条1単位の櫛目。底部内面 8条1単位の櫛目を放射状に施文。内面の底部と体部の界は不明瞭。	備前系。
20	C区 2-N (遺物包含層)	無釉陶器	播鉢	平底。底部外面に凹線1条。体部は直線的に斜め上方へ延びる。口縁部は上下に拡張し縹帯を形成。口縁部外面 凹線2条。内面 凹線2条。	体部内面 10条1単位の櫛目。底部内面 10条1単位の櫛目を放射状に施文。内・外面 鉄泥漿を塗布。胎土中に砂粒を多く含む。	堺・明石産播鉢。
21	C区 1-N (遺物包含層)	無釉陶器	播鉢	平底。若干あげ底気味。体部は直線的に斜め上方へ延びる。口縁部は上下に拡張し縹帯をつくる。口縁部外面 凹線2条。内面 凹線2条。	体部内面 9条1単位の櫛目。内面 9条1単位の櫛目を施文。鉄泥漿は塗布せず。	堺・明石産播鉢。
22	C区 表採	無釉陶器	播鉢	平底。底部外面 一条の浅い凹線が深る。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張し縹帯をつくる。口縁部外面 凹線2条。内面 凹線2条。	体部内面 11条1単位の櫛目。底部内面 10条1単位の櫛目を櫛状工具で施文。	内・外面とも 鉄泥漿塗布。23と類似→備前系。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
23	C区 2-N (遺物包含層)	無釉陶器	楕鉢	平底。周囲に1条の凹線が巡る。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張し縁帯をつくる。口縁部外面 凹線2条。内面 凹線2条。	内面 9条1單位の罫目を施文。底部内面 9条1單位の罫目を放射状に施文。内面の底部と体部の界は不明瞭。	楕形系。色調 暗赤褐色。底成は厚底。内・外面とも 鉄泥塗布。
24	C区 2-N (遺物包含層)	無釉陶器	壺	平底。体部は僅かに内彎して直上に延びる。口縁部は直立。頸部は丸帯をもつ。口縁部内面に蓋を受ける段あり。外面の口縁部と体部の界に段をもつ。	体部外面上部に沈線1条。口縁部内面→外面全体に鉄泥塗布を施す。内面は露胎。	壺形独特な直壺。外面の一部に次第が認められる。
25	C区 2-N (遺物包含層)	施釉陶器	甗	平底。体部は僅かに内彎して斜め上方に立ち上がる。体部と頸部の界は直線。頸部直立。口縁部は大きく外反。底部は内面を張り、高台風に成形。	内面 全面に鉄釉施釉。外面 体部下以下 露胎。外面の体部下以下はヘラ張り。露胎部は砂粒がふき出る。	産地不明。胎土中に砂粒を多く含む点が特徴。
26	C区 2-N (遺物包含層)	施釉陶器	土甗	水洗き口口成形で内面に口口目が明瞭に認められる。	外面に鉄釉?を全面施釉。内面 露胎。	胎土中 砂粒を多く含む。焼成はやや軟質。近代以降の常滑産。
27	C区 1-N (遺物包含層)	無釉陶器	風炉	平底。扁平な円柱状の脚を4ヶ所貼付。体部は直立。	体部下 部 酒内形状の浅し穴あり。外面 平滑に磨く。内面 ロクロ目跡。	煎茶用の風炉。
28	C区 表採	無釉陶器	風炉	平底。扁平な円柱状の脚を2ヶ所貼付。体部は直立。	外面は平滑に磨く。内面 ロクロ目跡あり。	煎茶用の風炉。
29	C区 2-S (遺物包含層)	施釉陶器	甗	体部 内彎。頸部(口縁部)は直立。口縁部は玉縁状に肥厚する。	内面に格子目状の明目跡あり。一部ナア版で滑す。内・外面とも 鉄釉施釉(茶褐色に染色)。口縁部外面 白濁釉施釉。	肥前系陶器
30	C区 1-N (遺物包含層)	施釉陶器	甗	平底。体部は内彎。口縁部は斜め横方向に拡張。	外面 鉄釉施釉の後、黒釉を胎状に施釉。内面 灰釉施釉。内面 目跡7ヶ所。外面 目跡7ヶ所	胎土中に砂粒を含む。丹波系。19C前半
31	C区 2-N (遺物包含層)	施釉陶器	甗	体部は内彎。口縁部は斜め横方向に拡張。	外面 鉄釉施釉の後、黒釉を胎状に施釉。口縁部上面→内面 灰釉施釉。淡褐色に染色。	胎土中に砂粒を多く含む。丹波系。19C前半
32	C区 2-N (遺物包含層)	施釉陶器	甗	高台は「ハ」の字状に外方にひろく。体部内彎。口縁部外反。	文様 外面 鉄釉施文の後、白泥でイッタン掛け施文。透明釉施釉。胎面に黒い貫入。高台脇以下露胎。	窯跡? 不明。在産地が 19C前半以降。
33	C区 2-N (遺物包含層)	施釉陶器	甗	高台は細く低い貼付け高台。体部は内彎気味。口縁部外反。	内・外面とも 白濁釉施釉。胎面に細かい貫入。外面の高台脇以下露胎。	器形は京焼風。京・信楽系。
34	C区 1-N (遺物包含層)	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は尖味をおびる。	内面 沈線3条施文、灰釉施釉。外面露胎。	京・信楽系。
35	C区 1-N	施釉陶器	皿	高台は幅が広く比較的低い。水洗き口口成形の後、胎の成形に準める。口縁部露胎外面にヘタ状に粘土板を貼り付け。	内・外面とも 施釉。外面の体部下以下 露胎。内面 鉄釉で縁の裏を施文。	産地不明。19C前半以降。
36	C区 2-N	施釉陶器	片口鉢	高台は幅が広く比較的高い。体部は内彎。口縁部は若干上縁風に成形。	内・外面とも 化粧土(鉄泥塗)塗布。内面→外面上半部 鉄釉施釉。外面の体部下以下 未施釉。	口縁部下の注口は割溝。底部中央部は再利用時に穿孔。底部外反。胎土。肥前系。19C前半以降。
37	C区 2-N (遺物包含層)	施釉陶器	水鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は受け口状に成形。	外面 釘形りで磨略化された京花文を施文。内・外面とも 白濁釉施釉。体部外面 濃褐色染を3ヶ所、タンパン状に施釉。一部にじむ。	器面に細かい貫入。瀬戸・美濃系。19C前半以降。
38	C区 2-N (遺物包含層)	施釉陶器	鉢(水鉢)	高台は低く幅が広い。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁部は受け口状に成形。	文様 ヘラ状工具で遊状文施文。内・外面とも 透明釉(灰釉)施釉。底部外面は露胎。口縁部付近 飛青磁風に鉄釉施釉。	瀬戸・美濃系。19C前半以降。
39	C区 1-N (遺物包含層)	施釉陶器	鉢	体部は直立。口縁部 外反。	内・外面とも 透明釉施釉。胎面に細かい貫入。口縁部外面に緑釉施釉。体部外面に灰釉で樹木・植物を施文。	縁の割溝が認められる。瀬戸・美濃系。19C前半以降。
40	C区 表採	施釉陶器	鉢	幅が広く低い高台を張り出す。体部は内彎。口縁部は外方に折り曲げ、玉縁状に成形。	内・外面とも 灰釉施釉。淡黄緑色に染色。外面の高台脇以下 露胎。底部内面に径1mmの目跡あり。	瀬戸・美濃系。18C後半以降。
41	C区 1-N (遺物包含層)	施釉陶器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外反。型造りあるいは型押し成形。外面高台状文を僅押し施文か?	六角形状をなす。灰釉(褐色に染色)施釉の後 白濁釉施釉。(2割かけ分)	焼成 軟質。産地不明。
42	C区 表採	施釉陶器	鉢	高台は比較的幅が広い。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁部は外方に折り曲げる。	外面 鉄釉施釉の後、白濁釉を液状に施文。内面 白濁釉のみ施釉。	底部外面(高台系)附帯着。肥前系(朝毛目跡)。18C前半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
43	C区 2-N (遺物包含層)	施釉陶器	ミニチュア罌	平底。底部と体部の界は緩やかに屈曲。体部は直立。口縁部は大きく外反して受け口状に成形。	底部外面に粒状の黒部3ヶ所貼り付け。上縁部外面に黒装の把手 2ヶ所貼り付け。内面・外面の体部上半は鉄粒釉施。以下 露胎。	鉄質黒装タイプの土製のミニチュア。
44	C区 2-N (遺物包含層)	施釉陶器	香炉	平底。内反り高台。3ヶ所 頸部の粘土層附着。(粘土目録?) 体部 直立。口縁部 欠損。	外面 灰釉施。底部外面 露胎。底部外面 子りの黒帯あり。内面 化粧土散布。灰被り。器蓋は全体に滑い。	底部外面に黒部3ヶ所。京・儀泰系。19C前半以降。
45	C区 1-N	施釉陶器	罌	平底(ややあげ底腹) 体部下端に溝状の粘土敷附着。	外面 鉄粒釉施。体部下以下 露胎。内面 露胎。	底部外面に黒帯あり。在地産(明石産)。19C前半以降。
46	C区 1-N (遺物包含層)	施釉陶器	土瓶	体部は下半部で大きく厚縮。蓋部玉状を呈する。口縁部は直立。体部上半部には注口貼付。つるの取付部を2ヶ所貼付。	外面の体部下すまで白濁釉施の後の鉄粒釉施。黒縁あるいは灰釉(暗緑色に染色)を施。灰被りにより白濁。内面及び底部外面は露胎。	湯手に成形。産地不明。
47	C区 1-N (遺物包含層)	施釉陶器	水注	幅が広く低い輪高台。体部は直立。口縁部は内傾し直立。体部上面に注口1ヶ所、把手 1ヶ所貼付。	口縁部内面・体部外面 鉄粒釉施。内面及び底部外面は露胎。底部外面(高台蓋に黒帯)	近代以降。
48	C区 1-N (遺物包含層)	施釉陶器	蓋	中央部に小さい棒状のつまみ貼付。上面は平坦で低い段をもつ。受け部は直立。	外面(上面) 白濁釉施。内面(下面) 露胎。	産地不明。
49	C区 1-N (遺物包含層)	施釉陶器	蓋	中央部に丸いつまみ貼付。体部は円盤状。受け部は直立。	外面(上面) 灰粒釉施。内面(下面) は露胎。	
50	C区 1-N (遺物包含層)	白磁	蓋	上面中央部に宝珠つまみをもつ。上面は平らに折り曲げる形。口縁部との間に低い段をもつ。体部は直立。	上面 透明釉施。灰白色に染色。下面 露胎。	産地不明。19C前半以降。
51	C区 2-N (遺物包含層)	施釉陶器	蓋	蓋し蓋。底部は平底。頸縁部は斜め上方に立ち上がる。体部は直立。口縁部は外方に折り曲げる形。中央部に三弁形状のつまみ貼付。	外面 灰釉全面施(淡灰緑色に染色)内面 露胎。外面の頸縁部は灰被り。	在地産(明石産)。
52	C区 2-N (遺物包含層)	施釉陶器	蓋	蓋し蓋。底部は平底。頸縁部は斜め上方に立ち上がる。体部は直立。口縁部は外方に折り曲げる形。中央部に耳形状のつまみ貼付。	外面 灰釉を全面施(暗緑褐色に染色)内面 頸縁部のみ鉄粒釉施。以下 露胎。	在地産(明石産)。19C前半以降。
53	C区 2-N (遺物包含層)	施釉陶器	蓋	蓋し蓋。底部は平底。頸縁部は斜め上方に立ち上がる。体部は直立。口縁部は外方に折り曲げる形。中央部に耳形状のつまみ貼付。	外面(上面) 白濁釉を全面に施。内面 露胎(淡暗赤褐色に染色)。	在地産(明石産)。19C前半以降。
54	C区 灰採	施釉陶器	蓋	受け部は直立。上面は水平に成形。つまみ部は欠欠。	上面 灰粒釉施のち白濁をイッチョン掛けで施文。上面には高ハリ支え筋。下面は露胎。受け部の一部に鉄分1ヶ所附着。	在地産(明石産)。19C前半以降。
55	C区 1-N (遺物包含層)	施釉陶器	蓋	上面は僅かに弧を描く。中央部につまみをもつ。受け部は直立。	上面 灰粒釉施(暗灰緑色に染色)の後の白濁のイッチョン掛けで額目文。雲形文 界線を施く。下面は露胎。	在地産(明石産)。19C前半以降。
56	C区 2-N (遺物包含層)	土師器	燗台	平底。棒状の脚部は直立。体部は横やかに斜め上方に延びる(皿状を呈する)内面に灯芯を敷せる凸帯あり。	内面 透明釉施。	いわゆる棒状の燗台。19C前半以降。
57	C区 1-N (遺物包含層)	土師器	燗台	平底。脚部は円柱状。頸部内面に凸帯1条。	頸部内面に透明釉施。	いわゆる棒状の燗台。19C前半以降。
58	C区 2-S (遺物包含層)	施釉陶器	ひょうそく	平底。体部は大きく内湾して斜め上方に立ち上がる。口縁部 内傾。	内面及び外面の口縁部一体部下半は灰粒釉施の後の鉄粒釉施。底部外面以下黒装。底部外面中央部 穿孔1ヶ所(釘穴)。糸切り痕。	瀬戸・美濃系。
59	C区 2-N (遺物包含層)	施釉陶器	ひょうそく	平底(円盤状に成形) 脚部は直立。体部は大きく内湾。口縁部 内傾。	内面・体部外面 鉄粒釉施。底部外面のみ黒装。底部外面中央部 穿孔1ヶ所(釘穴)糸切り痕。内面の中央部に凸装を貼付。	産地は軟質。産地不明。
60	C区 2-N (遺物包含層)	施釉陶器	ひょうそく	平底。体部は僅かに内湾して直線的に立ち上がる。口縁部は大きく外反。	内・外面とも 鉄粒釉施の後の内・外面とも 灰粒釉施(淡灰赤に染色)底部外面は未施釉。	19C前半以降。
61	C区 1-N (遺物包含層)	施釉陶器	ひょうそく	平底。体部は直立。口縁部 外反。体部下すで男部全縁をもつ。底部外面中央部 1ヶ所穿孔。内面中央部に凸装を貼付。	内・外面とも 黒色釉施。底部外面のみ黒装。	産地は軟質。産地不明。
62	C区 2-N (遺物包含層)	施釉陶器	小壺	平底。体部は大きく内湾。楕円形状の断面を呈する。	内面全面と外面の体部上半に鉄粒釉施。外面の体部下以下 露胎。	底部外面は赤装で糸切り痕が残る。産地不明。19C前半以降か?
63	C区 1-N	施釉陶器	壺		体部外面を円形に深くくぼめる。外面鉄粒釉施。細かい尾疵あり。内面 露胎。黒帯あり。	瀬戸・美濃系。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備 考
64	C区 2-N (遺物包含層)	施釉陶器	徳利	平底。体部は直立し上半部で内脣する。頸部は直立。口縁部は外反。口縁端部をひねって注口をつくる。	外面は底部以外全面に白濁釉施釉の後、赤絵で草花文(菖蒲文?)を施文。底部外面 鳥趾「口上」を墨書。	丹波系 (白丹波)。
65	C区 2-N (遺物包含層)	白磁	紅皿	製造成形。高台は狭く径は小さい。外面 菊花状に放射状施文。	内・外面 透明釉施釉。	肥前系。
66	C区 1-N (遺物包含層)	白磁	小皿	器形に比較して器壁が非常に薄い。		
67	C区 1-N (遺物包含層)	白磁	小碗	器形に比較して器壁が非常に薄い。	所々に種ギレが認められる。	肥前系。
68	C区 表採	白磁	蓋	上面中央部に宝珠つまみ附付。体部は若干上方に頸を擡ぐ。口縁部は水平。体部は直立。	外面 透明釉全面施釉。内面 磨蝕。	産地不明。19C前半以降。
69	C区 1-N (遺物包含層)	青磁	碗	高台は幅が広く比較的低い。体部は内脣して外上方へ立ち上がる。口縁部は垂弁の倒傘状に成形(へう切りによる)内・外面とも 摺押しにより垂弁状に成形。	内・外とも 全面施釉。高台懸付の胎のみかき取り。内・外面とも 灰被り。	肥前系。
70	C区 2-N (遺物包含層)	青磁	鉢	製造成形。高台方形。体部は直線的に外上方へ延びる。口縁端部は外方へ折り返した形。	文様 製造形によって外面は竹の幹を凹凸で表わす。口縁部にはほぼ水平に成形し、波状の凹凸をもつ。	高台懸付の縁部は一部赤かた赤茶(明赤褐色に発色) 三田青磁 瓦物角鉢。19C前半。
71	C区 1-N (遺物包含層)	青磁	鉢	比較的幅の広い懸付高台。口縁部は大きく外反。菊花状に成形。	水挽きロクロ成形の後 摺押し技法により 内面に芭蕉文を施文。高台懸付の縁部は赤褐色に発色。	三田青磁。19C前半。
72	C区 1-N (遺物包含層)	青磁	小皿	高台径は口徑に比べて比率は高い。体部は傾きや斜めに外上方に延びる。口縁部 外反。	口縁部内面 淡文。体部内面 草花文(牡丹文?)を摺押し施文。高台懸付の細かき取り。釉層は比較的厚い。	色調 暗灰褐色に発色。三田青磁。
73	C区 2-N (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は直線的に斜め上方にのびる。口縁端部は若干尖り気味。	文様 外面 菖蒲文施文の後 赤絵で小町紅 京都 口兼通江」の文字施文。	肥前系。染付碗に小町紅のコーションを載せたものか。18C後半。
74	C区 1-N	染付磁器	碗	高台は幅が広く低い。体部は内脣。口縁端部は尖り気味。	文様 外面 草花文。内面 無文。	肥前系くらわんか手。18C後半。
75	C区 1-N (遺物包含層)	施釉陶器	碗	高台径は比較的小さく端正。体部は僅かに内脣して斜め上方に立ち上がる。口縁部は外反。	内・外面とも 灰濁施釉(淡黄褐色に発色)の後、口縁部内・外面に緑釉施釉。外面の高台基以下 磨蝕。	京地風陶器 胎土から見て瀬戸・美濃系。
76	C区 1-N (遺物包含層)	施釉陶器	碗	高台は細く高い懸付高台。体部はほぼ直立。	水挽きロクロ成形の後、体部外面を摺押し技法により亀甲状に成形。底部外面へう状工具により花弁状施文。内・外面とも 透明釉施釉。	瀬戸・美濃系。19C前半以降。
77	C区 2-N (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は幅が広い。体部は内脣。口縁端部は尖り気味。底部の器壁は非常に厚い。	文様 外面 界線1条「大板新町」の跡あり。内面 無文。	肥前系くらわんか手碗に綻文を後で施文。18C後半。
78	C区 2-N (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は幅が広く比較的低い。体部は内脣。口縁端部は尖り気味。体部は内脣。口縁端部は尖り気味。	文様 外面 界線1条「大板本町」の跡文を施文 界線1・2条 内面 無文。	プロポーシオン 釉調は京生見産のくらわんか手碗に類似する。18C後半。
79	C区 1-N (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は細く高い。体部は僅かに内脣。口縁端部は尖り気味。器壁は全体的に薄い。	文様 外面 界線1条 不明文 界線2条。内面 界線2・1条。底部内面 変形の寿字文。	産地不明。
80	C区 表採	染付磁器	碗	高台は比較的高い。体部は内脣気味に斜め上方へ立ち上がる。口縁端部は尖り気味。	外面 淡い界線で「寿」字文のモチーフ化されたものを施文 界線2条。内面 界線 2条。底部内面 界線2条。「壽」字文施文。	肥前系。19C代。
81	C区 1-N (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は比較的傾く高い。体部は内脣気味に立ち上がる。口縁部 外反。	文様 外面 隈化コバネで界線1条 草花文 山水文 界線に1・3条。内面 界線1条。底部内面 界線2条 磨蝕。	瀬戸・美濃系。近代以降。
82	C区 2-S (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は比較的傾く外方に僅かにひらく。体部はほぼ直線的に外上方へひらく。口縁端部は丸味を帯びる。	文様 外面 界線1条 変形のよろけ文 界線1・2条。内面 太い界線 界線2条。底部内面 草花文。	瀬戸・美濃系。19C前半以降。
83	C区 2-N (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は比較的傾く高い。体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は外反。口縁端部は尖り気味。	文様 外面 太い界線 牡丹草文 界線1条 太い界線 界線2条。内面 太い界線 界線1・2条。底部内面 草花文。	種のノリが悪く花文のつれられた箇所あり。瀬戸・美濃系。19C前半以降。

No	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
84	C区 2-N (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は削り出しの輪高台。体部は直線的に外上へ立ち上がる。口縁部は僅かに外反。底部の器壁は比較的厚い。	文様 外面 界線1条 草花文 界線1・2条。内面 太い界線 界線1条。底部内面 くずれた草花文。	瀬戸・美濃系漏反り碗。19C前半以降。
85	C区 表採	染付磁器	碗	高台は細く高い。体部は僅かに内増して外上へ立ち上がる。口縁部は僅かに外反。全体に器壁は薄い。	文様 外面 雲文 波文 雲文 界線1・2条。内面 雲文。底部内面 草花文(濃紫)。	肥前系漏反り碗の構成タイプであるが、室高不明。19C前半以降。
86	C区 2-N (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部はほぼ直線的に外上へ立ち上がる。口縁部は僅かに外反。	文様 外面 太い界線 界線1条「王」に草花文 界線1条 太い界線1条 界線2条。内面 太い界線1・2条。底部内面「寿」字文。	瀬戸・美濃系。19C前半以降。
87	C区 1-N (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部は僅かに内増して外上へ立ち上がる。口縁部は外反。	文様 外面 退化した幾文に草花文。底部内面 牡丹のツボミ文。	白色地の藍色染付。少なくとも19C代以降。定代。呉須の藍色は鮮明。
88	C区 1-N	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部は内増気味に外上へ立ち上がる。口縁部は外反。口縁端部は尖り気味。	文様 外面 太い界線 牡丹唐草文 太い界線 界線1条。底部外面 角印。内面 太い界線 界線2条。底部内面 草花文。	瀬戸・美濃系。19C前半以降。
89	C区 2-N (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部は内増して斜め上方に立ち上がる。口縁部は僅かに外反。	文様 外面 花文の連続文 界線2・1条。内面 口縁部内面 (外面の逆)の連続文。底部内面 不明文施文。	肥前系の漏反り碗。19C前半。
90	C区 1-N	染付磁器	碗	高台は細く外方に踏んばる。体部は内増して外上へ立ち上がる。口縁部は外反。	文様 よろけ文で柙目を描く。体部下半は澀り軸状に施す。帯状に磨りきり高の目施文。内面 磨りきり雲文 界線2条。底部内面 草花文。	近代以降。
91	C区 2-N (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は細く高い。体部は僅かに内増して外上へ立ち上がる。口縁部には丸味をもつ。	文様 外面 丸文と斜格子文を交互に配する 界線2条。内面 界線2・1条。底部内面 菱形の「寿」字文。	肥前系広出茶碗。19C前半。
92	C区 2-N (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台部は比較的細く外方に踏んばる。体部は内増して外上へ立ち上がる。口縁端部は尖り気味。	文様 外面 丸文に唐唐草文 界線1条 蓮弁文 界線2条。内面 菱形文 界線2条。底部内面 蓮弁文。	肥前系。19C前半。
93	C区 表採	染付磁器	碗	高台は比較的細く外方に踏んばる。体部は内増して外上へ立ち上がる。口縁端部は尖り気味。	文様 外面 鶴1対と雲形文 界線2条。内面 菱形文 界線2条。底部内面 雲形文。	肥前系。19C前半。
94	C区 表採	染付磁器	碗	高台は細く高く、外方にひらく。底部から体部の界は大きく屈曲し、口縁端部は尖り気味に収める。	文様 外面 細かい草花文 蓮弁文 界線2条。内面 菱形文 界線2条。底部内面 松竹梅文。	肥前系。19C前半。
95	C区 1-N (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は「ハ」の字状に外方に踏んばる。体部は僅かに外上へ立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収める。器壁は比較的薄い。	文様 外面 記の連続文 界線1条 ラマ式蓮弁 界線1・2条。内面 菱形文 界線2条。底部内面 角印。	見込みの面が広い。室高不明。
96	C区 2-N (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内増気味に外上へ立ち上がる。口縁端部は尖り気味。	文様 外面 界線1条 4単位の内道文 界線2条。内面 界線2・2条。底部内面 つぶれた五弁花文(コンニャク印)。	肥前系くらわんか手碗。18C後半~19C前半。
97	C区 2-N (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は比較的幅広く高い。体部は内増。口縁端部は尖り気味。底部の器壁は薄常に厚い。	文様 外面 雷輪に梅枝文 界線1・2条。底部外面 不明文。内面 界線2条。底部内面 比較的しっかりした五弁花文(コンニャク印)。	口縁部内面に異物附着。肥前系くらわんか手。18C後半。
98	C区 1-N (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は比較的細く高く直立。底部は器壁心風。器壁は全体に非常に薄い。体部は内増して斜め上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味。	文様 外面 楚草唐文 蓮弁文 界線3条。内面 菱形文 界線2条。底部内面 松竹梅文。	肥前系。
99	C区 1-N (遺物包含層)	染付磁器	杯	高台は底部を狭く削り出す内反り高台。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味。	文様 外面 水石・流水・樹々の組み合わせ文。呉須の発色は薄い。内面 無文。	瀬戸・美濃系。幕末以降。
100	C区 2-N (遺物包含層)	染付磁器	筒瓦甍口	高台は比較的細く高く直立。口縁端部は尖り気味。	文様 外面 界線1条 草花文(帯花?) 界線1・2条。内面 菱形文。底部内面 界線2条。五弁花文(コンニャク印)。	肥前系。19C前半。
101	C区 2-N (遺物包含層)	染付磁器	筒瓦甍口	高台は比較的細く高く外方に踏んばる。体部 直立。口縁端部は水平に切れる。	文様 外面 露面を6分削って平截彫花文と菱形文を交互に施す。界線1条 草花文 界線2条。内面 菱形文。底部内面 界線1条 五弁花文(コンニャク印)。	肥前系。19C前半。
102	C区 2-N (遺物包含層)	染付磁器	筒瓦甍口	高台は幅が広く比較的低い。体部は直立。口縁端部は丸味をもって収める。	文様 外面 界線1条 退化した丸に菱形文の連続文 界線1条 雲雷文? 界線2条。内面 斜格子文。底部内面 界線1条 呉須が混入した不明文(五弁花文か?)。	肥前系。19C前半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
103	C区 1-N (遺物包含層)	朱付磁器	黄変開口	高台は比較的幅が広く低い。底部の器底は非常に厚い。体部は直立。口縁部は丸味をもつ。	文様 外面 波い具須で老松 界線1条 草花文 界線1条。内面 界線2・1条。底部内面 くずれた五弁文(コンニャク印)	肥前系。19C前半。
104	C区 2-N (遺物包含層)	朱付磁器	黄変開口	高台は比較的細く高く外方に開く。体部は直立。口縁部は水平に切る。	文様 外面 画面を6分割して半截筒化文と菱形文を交互に施文 界線1条 草花文 界線2条。内面 菱形文。底部内面 界線1条 くずれたコンニャク印で五弁文施文。	肥前系。19C前半。
105	C区 2-N (遺物包含層)	朱付磁器	皿	絶ノ目円形高台。体部幅かに内傾。口縁部は僅かに外反。肩部は玉縁状に成形。	文様 外面 紫彩文 界線2条。内面 桃折吉に鳥類 若雲に松文。	底部は外面に大量の砂屑層。産地不明。津州産写しか?
106	C区 1-N (遺物包含層)	朱付磁器	皿	絶ノ目円形高台。底部の器底は非常に厚い。平底。体部は僅かに内傾して外方へ立ち上がる。口縁部は丸味を帯びる。	文様 外面 草花文 界線1・2条。内面 柳文 草花文 釣人。	底部外面 中央部のみ施線。肥前系。19C前半。
107	C区 表採	白磁	皿	絶ノ目円形高台。高台は幅が広く比較的低い。体部は僅やかに外方へ立ち上がる。口縁部は丸味をもつ。	内・外面とも 型押し技法により、菊文文を施文。高台外縁面へ桃折吉行文施文。内・外面とも 透明珪状体白濁色に染色。底部外面(高台表)の口部のみ施線。口縁部は鉄線施線(口紅)	肥前系。19C前半。 (徳化藍白磁の型押し技法の影響あり)。
108	C区 1-N	色絵磁器	鉢	高台は幅が比較的広く高い。体部は内傾気味に外方へ立ち上がる。口縁部は外反。	文様 界線2条 梟須と赤絵(鉄絵か?)で草文(牡丹草文か?) 施文 界線2条。底部外面 スタンプの高。	高台裏付の種かキ取り。
109	C区 2-N (遺物包含層)	朱付磁器	輪花鉢	水遣きワタロ成形の後、型押しにより輪花状に整形。高台は幅が広く高い。体部には直線的に外方へ立ち上がる。口縁部は丸味をもつ。	文様 内面 丸文 雲巻等を墨書き等によって施文。底部内面 菊花 草花文等を施文。外面 簡略化された草文施文。	底部外面 漆で「井ノ口」書付。漆による他類きの跡の書付か。肥前系。
110	C区 表採	朱付磁器	鉢	高台は細く高い。体部は内傾し僅かに外方へ延びる。口縁部は僅かに外方へ曲り出す。	文様 外面 三頭の馬 底部内面 鳩一頭、鉄線施線(口紅)	内・外面とも 細かい貫入。焼成はややあまい。産地不明。
111	C区 1-N (遺物包含層)	朱付磁器	蓋	高台部(つまみ)は比較的細く高い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	文様 外面 ラフなタッチで草花文 界線1条。内面 簡略体 墨書き技法で水遣状文施文。底部外面 草花文施文。	産地不明。19C前半以降。
112	C区 2-N (遺物包含層)	朱付磁器	蓋	高台は比較的細く高い。体部は緩やかに外方へ伸びる。口縁部は丸味をもつ。器底は比較的薄い。	文様 外面 舟上で観をひく人物 山水樓閣文「青山萬里一孤舟」の題詞山水樓閣文 鳥獣文 鹿文? 内面 無文。	焼成よみあり。比較的新しい(幕末以降か?)
113	C区 1-N (遺物包含層)	朱付磁器	蓋	高台は比較的細く高い。体部は緩やかに外方へ伸びる。口縁部は尖り気味。	文様 外面 雲龍風に山文と山水樓閣文。内面 墨書きで雲文。底部内面 鳥状文施文。	産地不明。19C前半以降。
114	C区 1-N (遺物包含層)	朱付磁器	蓋	高台径は比較的大きい。高台は細く比較的高い。	文様 外面 草葉文。内面 界線2・1条 不明文(巾着文のくずれ)	産地不明(在産か?)。19C以降。
115	C区 1-N (遺物包含層)	朱付磁器	蓋	高台は幅が広く比較的低い。体部は大きく内傾して半球形を呈す。肩部は直立。口縁部は欠損。	文様 外面 梅花文施文。外面 ロク口部。	肥前系くわらんか手。18C後半。
116	C区 2-N (遺物包含層)	朱付磁器	油壺	高台は比較的幅が広く低い。体部は大きく内傾。半球形を呈す。肩部は短く、口縁部は外反する。	文様 外面 草花文。輪調 句や香味を帯びる灰濁色 高台表付の種はかキ取り。体部外面 ロク口目明。	肥前系くわらんか手。18C後半。
117	C区 2-N (遺物包含層)	朱付磁器	仏花瓶	高台は幅が広く比較的低い。体部は大きく内傾。肩部は直立。口縁部は僅かに外反。	文様 外面 草花文 亀甲文 界線1・1条。	肩部は焼け重む。肥前系。18C後半。
118	C区 1-N (遺物包含層)	朱付磁器	仏花瓶	高台は幅が広く比較的高い。体部は直立。肩部は短く。口縁部は外反。	文様 外面 繪唐草文 雲形の垂弁文。	肥前系。18C後半。
119	C区 表採	朱付磁器	仏花瓶	高台部は長く幅が広い。プロボーションは帯形。口縁部は外反。	文様 外面 繪唐草文施文 界線1・2・1条。輪調は香味を帯びる。	肥前系。19C前半。
120	C区 1-N (遺物包含層)	石製品	砥石	頁岩製 破損。	破損後も乃先状のもの研磨に使用。	
121	C区 1-N (遺物包含層)	骨角製品	牌	両先部分は欠損。背の部分は彎曲する。		骨製。
122	C区 2-S (遺物包含層)	土師器	皿	平底。体部は緩やかに外方へ立ち上がる。口縁部は尖り気味に収める。	内面~口縁部外面まで 透明輪施線(明赤褐色に発色)以下 露出。口縁部にはほぼ全面に凝着。	いわゆる柿種の灯明皿。
123	C区 2-S (遺物包含層)	土師器	皿	平底。体部は緩やかに外方へ立ち上がる。口縁部は尖り気味。	内面~口縁部外面まで 透明輪施線(明赤褐色に発色)以下 露出。口縁部に凝着。底部外面 赤切り直。	いわゆる柿種の灯明皿。
124	C区 2-S (遺物包含層)	土師器	焙壺	瓊瓊り成形。平底。体部は僅かに内傾。	内・外とも ココナ調整。	

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
125	C区 2-N (遺物包含層)	土師器	火消し壺	体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、上部で大きく「く」の字に屈曲する。口縁部は直立。底部は丸味をもって収める。	経造り成形の後、ヘラガキ調整。外面は平滑なナナ仕上げ。	
126	C区 2-S (遺物包含層)	無釉陶器	種鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は直立。縁部を形成。口縁部外面 凹線2条、内面 凹線2条。	体部内面 9条1線位の指目。底部内面10条1線位の指目を施す。内・外面とも 鉄堊塗布。底部外面 露胎。	使用時の摩耗が大きいが、胎土は釉前に近い。
127	C区 2-S	染付磁器	杯	高台は細く高く外方に外方へひろく。体部は緩やかに外上方へ伸びる。口縁部は尖り丸味。	文様 外面 一重網目文。内面 菊花状に一重網目文施文。	近代以降。
128	C区 表採	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部は内厚し外方に外上方へ立ち上がる。口縁部は外反。	文様 藍化コバルト(ペロ藍)で外面に外縁 界線2条 蓮弁文。内面 藍澤文で雲文。底部内面 界線2条と五弁文の變化したネズミあるいはワサギ文施文。	瀬川・次濃系。幕末～明治。
129	C区 2-S 包含層2	染付磁器	碗	高台は外方に開く。体部は内厚して外上方へ立ち上がる。口縁部は尖り丸味。縁部は特に底部の縁部が厚い。	色調 青味を帯びる灰色。文様 外面 紫花文 蓮文(濃紫) 界線1・2条。内面 無文。	肥前系くらわんか手。18C後半。
130	C区 2-S (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は細く高い。体部は内厚し外方に斜め上方に伸びる。口縁部は外反。	文様 外面 細線で草花文施文(型紙模写?)。内面 雲龍文。底部内面 蓮弁文で雲文。	濱入り碗以降の大型広底碗。肥前系。幕末～明治。
131	C区 2-S	染付磁器	碗	高台は細く高く外方へ開く。体部は内厚。口縁部は緩やかに外反する。	文様 外面 朝顔・菊・松・梅などの草花文施文 界線1・1条。内面 蓮弁文技法で雲文。底部内面 蓮弁文で雲文。	産地不明。19C前半。
132	C区 1-N (黄色砂2)	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は丸味をもって収める。	内面 透明釉施釉(明赤褐色に発色)口縁部に黒腐付。底部外面 木筒塗、赤切り肌。	いわゆる柿種の灯明皿。
133	C区 2-S (黄色砂)	土師器	焙烙	経造り成形。平底。底部と体部の界はほぼ直向に屈曲。口縁部は丸味をもって。	内・外面とも 凹紋ナナ調整。	
134	C区 1-N (黄色砂2)	土師器	丸底。体部 直立。	丸底。体部 直立。	内面に融解した銅澤附着。	別名 トリペ。
135	C区 1-N (黄色砂2)	瓦質土器	盤宝珠	盤宝珠形。型造り成形か? 内面 空面。	外面 ヘラ磨き調整 藍色化。内面 捺ナナ調整。	瓦の一部か?
136	C区 1-N	施釉陶器	碗	体部は内厚。口縁部は外反して受け口状に成形。口縁部上面に環状の把手2箇所施し付け。	内・外面とも 灰緑を施釉(灰緑色に発色) 底部外面以下 露胎。内面に部分的に貫入がはしる。	在途採(明石産)。19C前半以降。
137	C区 1-N	土師器	風炉	摩手に成形。遺しあり。	外面 煎鉢 4文字。内・外面ともコナテにより器面を平滑化。	徳楽川の風炉。
138	C区 1-N (黄色砂2)	施釉陶器	ひょうそく	平底。体部は外反。口縁部 外反。口縁部内面に1条の凸帯が巡る。凸帯部に重ね施釉あり。	口縁部内面～体部外面 黒色釉施釉(暗黒褐色に発色) 底部外面 露胎 赤切り肌。	京・信楽系。19C前半以降。
139	C区 1-N (黄色砂2)	施釉陶器	ひょうそく	平底。体部は外反。口縁部 外反。口縁部内面に1条の凸帯が巡る。凸帯部に重ね施釉あり。	口縁部内面～体部外面 黒色釉施釉(暗黒褐色に発色)。底部外面 露胎 赤切り肌。	京・信楽系。19C前半以降。138と同タイプ。
140	C区 1-N (黄色砂2)	無釉陶器	土管	接合部(継手部)は直立。断面三角形の縁部を貼り付け。	外面に塗りをナ(鉄泥漿)を塗布。外面 磨滅した灰皮。	備前焼。
141	C区 1-S (黄色砂)	白磁	皿	木造りロクロ成形の後 内・外面に型押し技法により菊文施文。	口縁部は鉄粉施釉(口紅)	肥前系。19C前半。
142	C区 1-N	青磁	鉢	高台は裾が広くかつ高い。体部は内厚。口縁部と体部の界は段をもち。口縁部は緩やかに伸びる。口縁部上面はヘラ切りで段状に成形。木造りロクロ成形の後 形得しにより整形。	内・外面とも 青磁施釉。高台登付の輪ガキ取り、高台登付は淡赤褐色に発色。	三田青磁。19C前半。
143	C区 1-N (黄色砂2)	染付磁器	杯	高台は裾が広く比較的低い。底部の器種は非常に高い。体部は内厚して斜め上方に立ち上がる。口縁部は尖り丸味。	文様 外面の口縁部下に雲文施文。	肥前系くらわんか手。18C後半。
144	C区 1-N	青磁	碗	高台は裾が広く比較的高い。体部は直立。口縁部は尖り丸味。縁部は全体に厚い。	文様 外面 片切彫りで草花文施文。内面 無文 粗い大きな貫入がはしる高台登付僅かに赤化。	文様は豊泉系系の刺花文鏡を模倣。産地は不明。18C後半以降。
145	C区 1-N (黄色砂2)	染付磁器	蕎麦鉢口	高台は比較的高く。外方に磨んぼる。平底。体部 直立。口縁部は丸味をもつ。	文様 外面 藤・舟・山水文 草花文 界線1条。内面 界線2条 界線1条。底部内面 ぐつれた五弁文(コンニャク印判)	肥前系。19C前半以降。高台登付に砂肌帯。
146	C区 1-N (灰色砂2)	染付磁器	蕎麦鉢口	高台は非常に低い。底部の器種は非常に厚い。平底。体部 直立。口縁部は丸味をもつ。	文様 外面 淡い呉須で平織帯花文と刺花文を交互に施文。底部内面 磨滅した五弁文。内面 界線2・1条 ぐつれた五弁文(コンニャク印判)	肥前系。19C前半。

No.	出土遺構	類別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備 考
147	C区 1-N (黄色砂)	染付磁器	青麦指口	高台は比較的低い外方に踏んばる。平底。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	文様 外向 界線1条 草花文 界線1条 春草文 界線2条。内面 斜格子状文 界線1条。底部内面 くすれた五弁花文 (コンニャク印判)	肥前系。19C前半。
148	C区 1-N (黄色砂)	染付磁器	碗	高台は幅が広く比較的高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内脣として外方に立ち上る。口縁端部は丸味を帯びる。	文様 外向 太い界線 丸文 3単位 界線1・2条。内面 界線1・1条 底部内面 くすれた五弁花文 (コンニャク印判)	高台裏付に砂多量に附着。肥前系くらわんか手。18C後半。
149	C区 1-N (黄色砂)	染付磁器	碗	高台は細く高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内脣状に斜め上方に立ち上る。口縁端部は尖り気味。	色調 青味を帯びる灰色。文様 外向 蓮華で柄束と葉文 界線なし。内面 界線2条。底部内面 界線1条「寿」字文の縦長形。	肥前系広東流。19C前半。
150	C区 1-N	染付青磁	鉢	木掻き口ロコ成形の後、型押しにより内面を輪花状に成形。高台は比較的幅が広く低い。平底。体部は内脣として立ち上がり体部中央で直曲。口縁部は直線的に外上方へ延びる。	口縁部内面-外面 青磁輪花軸。底部外面は白磁。底部内面 染付 飛鳥に寛政文施文。底部外面に針文え痕 3ヶ所。	肥前系。18C前半。
151	C区 1-N (黄色砂)	染付磁器	杯	体部 内脣。口縁端部尖り気味。	文様 外面 界線1条 胡蝶草文 界線1・1条。	肥前系。18C代。
152	C区 1-N	染付磁器	皿	高台は幅が広く低い。器壁は全体に非常に厚い。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	文様 外面 景文。内面 3単位の内面 2条による文様。界線2条。底部内面 純ノ目状様ハギ。	酸化が強すぎて呉須が暗茶褐色に発色。肥前系。18C前半。
153	C区 1-S (黄色砂)	染付磁器	仏花歌	高台は幅が広く比較的高い。体部は大きく内脣、半球形を呈す。底部 直立。口縁部 外反。	色調 やや青味を帯びる灰白色。文様 外面 淡い呉須で濃華を用いて鳥輪施文 界線2条。	高台裏付の釉カキ取り。裏面は淡茶褐色に発色。肥前系くらわんか手。18C後半。
154	C区 1-S (黄色砂)	軒丸瓦	巴文軒丸瓦	巴の尾は長い。珠文 13劃。	雫し瓦。	
155	C区 2-S (黒褐色砂)	染付磁器	小碗	高台は比較的細く低い。底部の器壁は非常に厚い。体部 内脣。口縁端部は尖り気味に取める。	色調 やや青味を帯びる灰白色。文様 外面 口縁部外面に花草文 (葉文か?) 内面 無文。	肥前系くらわんか手。18C後半。
156	C区 表棟	染付磁器	皿	高台は幅が広く低い。体部は緩やかに外上方に立ち上る。口縁端部は尖り気味。	文様 内面 蓮華枝技法を用いて鳥・雲・紋文施文。内面 不明文施文。	底部外面にハリ支え痕1ヶ所。近代以降か?
157	C区 2-S (黒褐色砂)	染付磁器	皿	高台は比較的幅が広く低い。体部は内脣状に斜め上方に立ち上る。口縁端部は尖り気味に取める。底部の器壁は非常に厚い。	色調 青味の強い灰色。文様 外面 草花文 界線3条。底部外周 界線1条 口縁文。内面 草花文 界線2条。底部内面 五弁花文 (コンニャク印判)	肥前系くらわんか手。18C後半。
158	C区 1-N (黒褐色砂)	土製品	スタンプ	つまみは短い円柱状。菊花文をスタンプで施文。	全周 露胎。	
159	C区 2ベルト (3層)	施轉陶器	ひょうそく	型造り成形か? 平底。体部は直線的に斜め上方へ延びる。口縁端部 外反。底部内面に灯芯孔を施付。	内・外面とも 輪割溝 (上給付のため)。全体にやや歪む。	
160	C区 1ベルト (包含層) 4層	施轉陶器	蓋	形態は円盤状。上面 つまみ貼付。一深欠縁。下面 中央部に残し、円柱状に残存。	外周 (上面) 灰輪軸輪。淡褐色に発色。	19C前半以降。
161	C区 1ベルト (包含層) 4層	施轉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は丸味をもつ。	内面 ヘラ状工具で斜格子文。内面 用難輪軸。淡青褐色に発色。口縁部内面に円形浮文施付。	宮・信楽系。19C前半。
162	C区 1ベルト (包含層) 4層	施轉陶器	碗	高台径は比較的小さく、外方に踏んばる。体部は僅かに内脣。口縁部 外反。	内・外面とも ガラス系質の鉄輪軸輪 (薄かい貫入) 外面の高台縁以下 露胎。	肥前系京流風陶器。
163	C区 1ベルト (包含層) 4層	染付磁器	碗	高台は比較的細く低い。体部内脣。口縁端部は尖り気味。	文様 外面 雨降り文 不明文。内面 界線1・1条。底部内面 菱形の「寿」字文か?	肥前系。19C前半以降。
164	C区 2ベルト (包含層) 4層	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部は僅かに外反して斜め上方に立ち上る。口縁部 外反。	文様 外面 界線1条 草花文 (牡丹・唐草文) 界線4条。内面 界線1・2条。底部内面 草花文。僅かに呉須が滲む感じ。	瀬戸・美濃系。19C前半以降。
165	C区 表棟	色絵磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部は僅かに内脣。口縁端部は尖り気味。	文様 外面 白色生地に呉須で葉文施文。朱で平行線 雲形 格子目文施文。金泥で竹葉状文施文。内面 朱で界線2条。底部内面 不明文施文。	肥前系小型の広東流。18C後半~19C前半。
166	C区 1ベルト (包含層) 4層	染付磁器	皿	高台は幅が広く低い。体部は内脣状に緩やかに斜め上方に立ち上る。口縁端部は尖り気味に取める。底部の器壁は非常に厚い。	色調 灰白色。文様 外面 無文。内面 難易な草花文 (斜格子状) 界線2条。底部内面の輪・輪軸にカキ取り、影附着。呉須の発色は非常に淡い。	肥前系くらわんか手。18C後半。

No	出土遺構	種別	群種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
167	C区 2ベルト (包含層1) 4層	朱付磁器	鉢	蛇ノ目凹形高台。高台は細く非常に高い。	内・外面とも 施釉。底部外周(高台裏)の釉、中央部を残してフキ取る。文様 内面 鶴亀文。	焼き継ぎ痕及び焼種所(高台裏)有り。高台品か? 灰色発色。18C後半以降。
168	C区 2ベルト (包含層)	朱付青磁	鉢	蛇ノ目凹形高台。体部内面～口縁部赤朱に成形。水挽きロクロ成形の後、彫り技法により整形。	内面 青磁釉施釉。外面 朱付 波状文、界線2条 赤磁釉。最後に東渡書の手、界線1・2条 蛇ノ目高台。中央部のみ施釉。口縁部部に鉄釉施釉(口紅)	焼き継ぎ痕あり。又底部外面に焼き継ぎ路あり。肥前系。19C前半。
169	C区 2ベルト (包含層1) 4層	朱付磁器	壺	高台は比較的細く高い。体部 直線的に斜め上方へ延びる。口縁部は丸味を帯びる。	色調 白色。文様 内・外面とも 点状文。	近代以降。
170	C区 2ベルト (5, 6, 7層)	土師器	火鉢	型造り成形。灰状粘土を貼り合わせる。底部の凹部に低い脚を貼り付け。	内・外面とも ナテ調整。特に外面は平滑に丁寧にナテ仕上げ。内面 保留釉。内・外面とも 鉄分附着。	
171	C区 1ベルト (6, 7層)	無釉陶器	徳利	平底。体部は内彎。肩部 直立。口縁部 外反。体部外面上下に沈線。三方を押して凹部を形成。	凹部の1ヶ所に赤発色(型造り成形)を貼付。外面 鉄沈線着色。	備前後者発色利。
172	C区 1ベルト (5, 6, 7層)	無釉陶器	鉢鉢	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は上下に膨脹。口縁部外面 凹線2条。内面 凹線(凹部)2条。	内面の底部と体部の界線。体部内面13条1単位。口縁部内面 10条1単位の横目地文。体部外面下部(入念)筋スタンプ。口縁部外面 灰被り(明赤褐色に発色)。	明石産鉢鉢。18C後半以降。
173	C区 1ベルト (5層)	土師器	ミニチュア鉢	平底。体部は直線的に斜め上方にのびる。口縁部外方へ水平に折れ曲げ。	内・外面とも ロクロ目跡 明確。	植木鉢のミニチュア。
174	C区 表層	施釉陶器	壺	体部僅かに内彎。口縁部水平方向に拡張。	内・外面とも 土師的的な茶色施釉。	丹波系。近代以降。
175	C区 1ベルト (5層)	施釉陶器	碗	唐津風の倒り出し高台。体部は中央で僅かに急曲。天目風。	内・外面とも 灰釉施釉の後、白濁釉施釉(澁青釉風ににじむ)外面の高白磁以下 露胎。	唐津風のプロポーション。在地産(明石産)。
176	C区 1ベルト (5層)	施釉陶器	碗	高台は比較的細く高く「ハ」の字状に広がる。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は尖り気味に収める。	体部外面下部 ヘラ状工具で沈線施釉。内・外面とも 黒色施釉の体白濁釉施釉。澁青釉風ににじむ。外面の高台脇以下 露胎。	肥前系(唐津碗)。
177	C区 1ベルト (5, 6, 7層)	施釉陶器	壺	落し蓋。底部は平底。舞飾部は斜め上方に立ち上がる。体部は直立。口縁部は外方に折れ曲げる形、中央部に耳状のつまみを施付。	外面 ガラス質の灰釉施釉。オリーブ灰色に発色。内面 露胎。	19C前半以降。
178	C区 1ベルト (5層)	施釉陶器(飯用内子)	飯かき	裡かきにあげ底気味の平底。	頸部部を丁寧に打ち欠いて面子に転用。	
179	C区 1ベルト (5, 6, 7層)	朱付磁器	碗	幅が広く比較的低い高台。体部は内彎。口縁部は丸味を帯びる。底部の膨脹は非常に厚い。	文様 外面 淡い呉須で丸文 界線1・2条。内面 界線1条。底部内面くずれた五弁花文(コンニャク印判)	底部内面 蛇ノ目状種ハギ。肥前系くらわんか手。18C後半。
180	C区 2ベルト (5, 6, 7層)	瓦	鳥矢	型造り成形。	巴文 珠文15 巴の尾は長い 纏し瓦。	
181	C区 1ベルト (5, 6, 7層)	石製器	軽石	中央部に穿孔。		軽石製の浮子からの転用か。
182	C区 1ベルト (7, 10層)	土師器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は丸味を帯びる。	内面の体部と底部の界に低い凸帯1条。内面 透明釉施釉。明赤褐色に発色。口縁部外面以下 露胎。	いわゆる柿輪の灯明皿。底部外面 赤切り痕。煤附着なし、未使用か。
183	C区 2ベルト (7, 10層)	土師器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は尖り気味に収める。	内面 透明釉施釉(赤褐色に発色) 底部外面 未調整、赤切り痕。	いわゆる柿輪の灯明皿。
184	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	土師器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は尖り気味。	内面 透明釉施釉(赤褐色に発色) 外面 露胎。底部外面 未調整、赤切り痕。	いわゆる柿輪の灯明皿。
185	C区 2ベルト (7, 10層)	土師器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	内面 透明釉施釉(赤褐色に発色) 外面 露胎。底部外面 未調整、赤切り痕。	いわゆる柿輪の灯明皿。
186	C区 2ベルト (7, 10層)	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁部は丸味を帯びる。体部内面に比較的高い凸帯が1条走る。	内面～口縁部外面 白濁釉施釉(器面に細かい凹入)	京・備前系。
187	C区 2ベルト (7, 10層)	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は丸味を帯びる。	内面 透明釉施釉(明赤褐色に発色) 外面 露胎。口縁部 煤附着。	底部外面 未調整、赤切り痕。
188	C区 2ベルト (6, 7, 9層)	土師器	焙烙	平底。体部と底部の厚はほぼ垂直に膨脹。体部は直立。口縁部に把手1ヶ所貼付。	把手部2ヶ所穿孔が貫通せず。底部外面 煤附着。	
189	C区 2ベルト (7, 10層)	土師器	火鉢	比較的幅が広く高い高台。体部は内彎。口縁部は水平に切る。	内面 横ナテ調整。外面 板ナテ調整によって器面に平滑に仕上げられる。	胎土中に書付を含む。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
190	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	土製品	灯籠形	燈物の灯籠。台部は六角形状に成形。脚部は円柱状。一部にしほりジワ。脚部上面 放射状にヘラ切り。		台部表面に布目直
191	C区 6・9・7 ベルト	無釉陶器	播鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に広がる。口縁部は上下に拡張。縁帯を形成。口縁部外面 凹線2条。内面 凹線2条。	体部内面 11条1単位の横目。内面 11条1単位の横目をウールマーク状に施文。内面の底縁と体部の草 比較的明瞭。底縁 軟工具による仕上げ。	内・外面 鉄澱装塗布。胎土からみて備前焼か?
192	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	無釉陶器	播鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁部は上下に拡張。縁帯を形成。口縁部外面 凹線2条。内面 凹線2条。	体部内面 11条1単位の横目。底面内面 11条1単位の横目施文。内面の体部と底部の草 明瞭。	堺・明石産播鉢。
193	表採	無釉陶器	播鉢	平底。	底面内面 12条1単位の横目をウールマーク状に施文。	在地産(明石産播鉢)。18C後半。
194	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	無釉陶器	水鉢	平底。三角形の脚部を3ヶ所高り付け。体部は緩やかに外上方へ広がる。口縁部は水平方向に拡張。上面に凹部をもつ。	口縁部は波状に成形 波状文を貼付。体部外面に型押し成形の草花文を貼り付け、ヘラ掻きの蕨草文施文。口縁部外面に凹形浮文貼付。外面 鉄澱装塗布(赤土部)、茶褐色に発色。	体部外面に墨書あり。丹波系。
195	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	無釉陶器	土甕	受け口部(接着部) 蹄状の凸帯貼付。	外面 鉄澱装塗布。胎土中に砂粒を多く含む。	在地産(明石産播鉢)。18C後半。
196	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	施釉陶器	壺	平底。体部は内彎。頸部は短い。口縁部 外反。肩部は丸味をもつ。口縁部内面 凹線1条。	外面 灰緑釉種(黒褐色に発色) 灰をゴマ状に絞る。裏面外面 蹄状。外面外面へ凸帯あり。内面 ロタロ目跡。底部外周 砂磨面。	丹波系。
197	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	施釉陶器	椀	高台は比較的高い。体部内・外面は段状の凹凸がある。口縁部 外反。	内・外面とも 灰緑釉種(淡灰緑色に発色) 外面の高台縁以下 蹄状 蹄状部 淡赤褐色に発色。	在地産(明石)。
198	C区 2・Nベルト (6, 7, 9層)	施釉陶器	鉢	高台は比較的高い。体部は大きく内彎。口縁部は内彎。口縁部外面に凹線2条。	内・外面に白濁釉施後の、鉄銹を飛青緑風に施釉。飛青緑状に染む。外面の底部下半以下 露胎。	19C前半以降。
199	C区 1ベルト (7, 10層)	施釉陶器	椀鉢	高台は幅が広く低い胎付高台。体部は直立。口縁部は水平に折り曲げ上面を水平に成形。底部中央部 穿孔。	外面の口縁部一体部下半まで 灰緑釉種(淡黄緑色に発色) 体部下半以下露胎。	体部下半に鉄分附着。瀬戸・美濃系。19C前半。
200	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	無釉陶器	椀鉢	平底。縁刃部を3ヶ所折る。体部は直線的に斜め上方に広がる。口縁部は外方に折り曲げ、口縁部上面を水平に成形。	体部内面 ロタロ目跡。体部外面 ヘラ型り痕。外面 外面 白濁をイッタン掛けで山水様陶文施文。底面外面にも施文。	
201	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	施釉陶器	罐徳利	平底。体部は大きく内彎。口縁部 茶巾状に成形。器壁は非常に薄い。	口縁部内面～外面 灰緑釉種。淡黄灰色に発色。外面の体部下半以下 露胎。外面の体部上面に10条以上の沈線。外面の体部下半以下 露胎。裏面部 残存。外面肩部に把手の貼付痕2ヶ所。	19C前半以降。
202	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	施釉陶器	壺	急状容器的落し蓋。上面中央にひねった網状のつまみ貼付。	外面 灰緑釉種。淡黄灰色に発色。内面 露胎。糸切り痕残る。	
203	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	施釉陶器	壺	薄い円盤に細く低い受け部を貼り付けた形。落し蓋。	上面 灰緑釉種(淡灰緑色に発色) 器面に細かい貫入。灰緑はガラス質で浮況がある。	
204	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	施釉陶器	壺	傾が広く比較的低い高台。体部は緩やかに外上方へ広がる。口縁部は丸味をもつて収める。体部外面の上面 沈線8条施文。	内・外面とも 透明釉種(淡黄緑色に発色) 口縁部部の軸カキ取り。	
205	C区 1ベルト (7, 10層)	施釉陶器	壺	中央部に罎平なつまみ貼付。上面はほぼ内彎状。受け部は直立。	文様 外面 灰緑釉種の後、白濁のイッタン掛けで雲形文と横目文を施文。内面 露胎。	在地産(明石産)。19C前半以降。
206	C区 2ベルト (7, 10層)	施釉陶器	壺	壺の蓋? 円盤状に成形。上部に罎平なつまみ貼付。側面は斜め方向に切る。	上面 鉄銹施後の、黒色銅格子文を菱形状に施文。縦け込みが大きい。	
207	C区 1ベルト (7, 10層)	白磁	紅皿	高台は比較的低く小さい。型押し成形で、外面に凸帯を48条施文。口縁部上面は水平に切る。	内・外面 透明釉種(乳白色に発色)	肥前系。
208	C区 1ベルト (7, 10層)	青磁	小皿	型造り成形。高台 口縁部とも 基本的には八角形に成形。口縁部 花弁状に成形。	文様 内面 雁と文を交互に施文。底面内面 牡丹文施文(型押しによる) 種類 濃い暗緑色に発色。	高台型付(露胎部) 僅かに赤味を帯びる。三田青磁。19C前半。
209	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	染付青磁	碗	比較的幅が広く高い高台。体部は内彎。高台は「フ」の字状にひらく。	文様 外面 青磁釉施(暗灰緑色に発色) 内面 銅格子文 界線2条 草花文。底面外面(高台表) 銅格子文施文。	肥前系。
210	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	染付磁器	小碗	高台は比較的高く高い。底部の器壁は非常に厚い。口縁部は尖り丸味。	文様 外面 比較的淡い加ずんだ具類で二重銅目文施文(刺筆掻き) 内面 無文 輪カキ形。	肥前系。18C後半。

No	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
211	C区 表採	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部は内彎。口縁部 外反。	文様 比較的濃い酸化コバルトで 外面 オランダ文 軋掛垂。内面 太い界線 七宝雲文? 界線1・2条。底部内面 草花文 (五弁花文に類似)	南石段? 近代以降。
212	C区 1ベルト (7, 9, 10層)	染付磁器	碗	細く高い高台。体部は直線的に斜め上方へ延びる。口縁部は丸味をもつ。	釉面 青味を帯びた灰白色。文様 外面 漆華で草花文 縦文 界線1条。内面 界線2・1条。靑瓦で焼酎化された「舟」字文。	肥前系広東碗。19C前半。
213	C区 2-Nベルト (6, 7, 9層)	染付磁器	碗	高台は高く細く外方にひろく。体部は僅かに内彎。口縁部 僅かに外反。	文様 外面 界線1条 胡唐草文 蓮弁文 界線2条。内面 菱形文 界線1条。底部内面 松・竹・梅文。	肥前系。18C代。
214	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	染付磁器	角皿	盤造り成形。内面 壓押しで菊花状に整形。	釉面 白濁輪に似る。文様 外面 簡略化された胡唐草文。内面 (底部) 山水樓閣文。	肥前系。
215	C区 2-Nベルト (6, 7, 9層)	染付磁器	皿	水椀さロクロ花形の像。口縁部を壓押しにより輪花状に整形。	文様 外面 無文。内面 鳥獸文?	近代以降?
216	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	染付磁器	皿	幅が広く低い高台。口縁に対して高台径の比率は低い。底部の彫刻は非常に深い。体部は緩やかに上方へ延びる。口縁部は丸味をもつ。	色調 青味を帯びた灰色。肌調の発色や丸味をよびる。文様 内面 鈔格子 (草花文の鳩?) 界線2条。底部内面 蛇ノ月状輪や千砂彫垂。	肥前系くわらんか手。18C後半。
217	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	染付磁器	皿	蛇ノ目形高台。体部は内彎。口縁部は丸味をもつ。	外面 唐草文 界線1・2条 内面 界線1条 亀甲文 梅花文 鶴文? 界線2・1条 軋掛垂に似る文。	肥前系は中央部のみ施釉。肥前系。19C前半。
218	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	染付磁器	皿	蛇ノ目形高台。体部は内彎。口縁部は丸味をもつ。	文様 外面 唐草文 界線1条。内面 梅花文 菱形文 界線2条。底部内面 菊花文。	肥前系。19C前半。底部外面は中央部のみ施釉。
219	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	色絵磁器	皿	幅が比較的広く低い高台。高台径は比較的大い。口縁部は輪花状に成形。	文様 内面 紅雲 草花文 (唐草文)。底部内面 龍鱗文。口縁部 紅雲の一部金襴手。外面 細かい草花文。	唐草文は限定的技法で施文。高級品。金襴手。
220	C区 1ベルト (7, 10層)	染付磁器	鉢	高台径は大きい。高台は比較的幅が広く低い。蛇ノ目形高台。体部 内彎。口縁部 外反。肩部 玉縁状に成形。	文様 外面 源氏香 界線3条。内面 草花文 界線2条。底部内面 草花文 高台裏の縁中央部を残してオキ取る。	
221	C区 2ベルト (6, 7, 9層)	軒丸瓦	巴文瓦	珠文。巴の尾は長い。横し瓦。		近代以降
222	C区 2ベルト (6, 7, 9層)	石製品	砥石	凝灰岩製?		四圍全てを研磨面として使用。
223	C区 1ベルト (13層)	土製品	灯籠形	ミニチュアの灯籠の台座部分。壓押し成形。	外面 型押しの際の布目痕が顕著。内面 型押しの際の指オキ痕が見られる。	型造り成形
224	C区 1ベルト (13層)	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は直線的に斜め上方へ立ち上がる。口縁部は尖り気味。底部内面に凸帯1条。凸帯に1ヶ所、志を強く決りを入れたる。	内面 透明釉施釉 (淡青灰色に発色) 滑かない貫入。外面 露胎。1ヶ所、鉄釉施釉か? 底部内面 糸切り痕。	
225	C区 表採	施釉陶器	ひょうそく	幅が広く低い高台。体部直立。上半で内彎。口縁部上面 水平に帯り。軸方を取り。注口状の志受けと把手貼り付け。志受けに透し孔穿孔。	内・外面とも 白高釉施釉。口縁部上面と外面の肩台部以下 露胎。	京・信楽系。19C前半以降。
226	C区 表採	土製品	虎籠壺蓋	円盤状に成形。盤造り成形。	下面に布目圧痕。	
227	C区 攪乱 (黄色砂)	施釉陶器	密判	体部 内彎。肩部 直立。口縁部 玉縁状に成形。体部と肩部の界に粘土粒の接合痕。	体部内面 ココロ目彫 磨輪。外面 鉄釉施釉 (暗茶褐色に発色) 内面 露胎。口縁部内・外面 一部灰被り。	丹波系。
228	C区 攪乱 新瀬内	施釉陶器	蓋	頂部は平坦に。個縁部は斜め方向に切る形で成形。	外面 全面に灰釉施釉。淡青緑色に発色。内面 露胎。淡赤褐色に発色。	小蓋の蓋か? 明石産のものに類似。近代以降の可能性大。
229	C区 攪乱	施釉陶器	蓋	頂部は平坦に。個縁部は斜め方向に切る形で成形。	外面 全面に透明釉施釉。白褐色に発色。内面 露胎。灰白色に発色。一部淡赤褐色に発色 (朱あるいは酸化鉄) が附着。	化粧道具としての合子の蓋。近世後半~近代。
230	C区 攪乱	施釉陶器	蓋	上面中央部 紐状のつまみ貼付。体部は内彎。口縁部は漸直に切る。	上面 黒釉施釉の後、さらに黒釉で格子状施文。下面 露胎。仕上りは粗雑。	粘土中砂粒を多く含む。近代以降の丹波産。
231	C区 攪乱 個塚内	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。高台径は比較的大い。底部外面 (高台裏) は蛇ノ目形高台に成形。体部は直線的に斜め上方へ延びる。口縁部 外反。底部内面は広く平坦。	文様 外面 ラマ式蓮華状に外面を区画し、その中に牡丹文と草花文を交互に施文する。以下界線2条。内面 界線2条。底部内面 界線1条 牡丹文。	肥前系広東碗。19C前半以降。広東系クイアの碗の中での比較的新しい。底部外面に焼台? 附着痕有り。
232	C区 攪乱	土製品	型物置物	磨獅子小豹足の脚部か? 形造り成形。内部は中空。	外面 刷毛目調整で体毛の質感を表わす。	施釉は全て脱落。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
233	C区 2-N (遺物包含層)	土製品	人形	前面と背面を別々に形造り成形し、中央部で貼り合わせる。両型成形。	外面の絵付けは全て剥落。	虚無僧
234	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	土製品	動物形	型造り成形。2枚の型でつくったものを中央部で貼り合わせる。両型成形。	全面に赤彩。	鯨馬
235	C区 2-S (遺物包含層)	土製品	動物形	左右に2分割して型造り成形した後、左右を貼り合わせる。耳は後から貼り付け、口に玉を含む。両型成形。	外面は絵付けされていたと考えられるが、現状は全面的に剥落。	狐形。神懸に使用か。
236	C区 2-N (遺物包含層)	土製品	器物形	桶間に水車。片面のみ。背面は扁平。型造り成形。片型。	彩色は剥落、一部鉄分が附着。	
237	C区 2-N (遺物包含層)	土製品	器物形	型造り成形。1/2ずつ型造り成形した後、中央部で貼り合わせる。両型成形。	外面に型押しで文様施文。	外面の着色は全部剥落。吊鐘形。
238	C区 1-N (遺物包含層)	土製品	器物形	型造り成形。片側部分のみ。裏面は扁平。片型。	絵付けは全て剥落。	茶室。
239	C区 1ベルト (5, 6, 7層)	土製品	器物形	宝珠形。2枚の型で成形した後、中央部で貼り合わせ、つなぎ目をナゲ消す。両型成形。	外面 板ナゲ調整。内面 指ナゲ調整。	宝珠形。
240	C区 表様	土製品	面子	「柏戸」銘の円形面子。型造り成形。柏戸の文字が深く刻まれる。	一部周縁部が欠損。	
241	C区 2ベルト (6, 7, 9層)	土製品	面子	「柏戸」銘の円形面子。型造り成形。底の内影が深い。	裏面 「下久」の銘あり。	
242	C区 1-N (遺物包含層)	土製品	面子	「桶」銘の円形面子。型造り成形。	表面 裏面ともかなり摩滅する。	
243	C区 1-N (遺物包含層)	土製品	面子	「小□」銘の円形面子。型造り成形。約1/3欠損。底の内影が深い。		
244	C区 2ベルト (6, 7, 9層)	土製品	面子	今銅形もしくは「小」銘の円形面子。前面は三角形状を呈する。	裏面にも同型の浅い凹部をもつ。	裏面に磨跡
245	C区 2-N (遺物包含層)	土製品	器物形	筆形。片面のみ。裏面 指オサエの痕。	刷毛目で筆を表わす。	
246	C区 1-N (遺物包含層)	土製品	器物形	筆形。片面のみ。	刷毛目が筆先を沈線で筆の根本のしぼりを表わす。	
247	C区 1ベルト (5層)	土製品	器物形	太鼓形。片面のみ。竹管文で、革留めの線を、備後文で太鼓の文様を表わす。形造り成形。		
248	C区 1ベルト (遺物包含層) 4層	土製品	人形	人面形か？ 両側に耳をもつ。耳部黒色に彩色。形造り成形。	片面のみ。	
249	C区 2-N (遺物包含層)	土製品	動物形	鱈形。形造り成形。片面のみ。		
250	C区 1-N (遺物包含層)	磁器	草履形	草履のミニチュア	全面 灰釉 施釉。何らかの器物の付属品が剥離したものか。	
251	C区 1-N (遺物包含層)	土製品	器物形	葫瓜形。片面のみ。形造り成形。表面のアップまで表現。		
252	C区 2-N (遺物包含層)	土製品	人形	人面形。四天王か？ 形造り成形。片面のみ。	表面 摩滅が著しい。	
253	C区 2-N (遺物包含層)	土製品	人形	人面形。浮装の鬘子を戴った外国の貴婦人か？ 型造り成形。片面のみ。	鼻が比較的高い。	
254	C区 2ベルト (7, 9, 10層)	土製品	人形	人面形。胡人か？ 形造り成形。片面のみ。		
255	D区 石垣A 表込め	土師器	小皿	高倉登に口徑に対して、比較的大きい。体部は内唇気味に斜め上方に立ち上がる。口縁部は尖り気味。	外面 唐草文 界線2条。内面 胡唐草文 界線2条。底部内面 松竹梅文。	
256	D区 3ベルト (遺物包含層)	土師器	皿	ややあげ底気味の平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は尖り気味。	内面 透明釉施釉(明黄褐色に染色)。外面 黒胎。底面外面 赤調整、赤切り裏。口縁部外面 黒胎着。	いわゆる柿輪の灯明皿。
257	D区 3ベルト (遺物包含層)	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は尖り気味に収める。	内面 透明釉施釉(明赤褐色に染色)。外面 黒胎。底面外面 赤調整、赤切り裏。口縁部外向に黒胎着。	いわゆる柿輪の灯明皿。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
258	D区 4-N (遺物包含層)	土師器	燒灰壺	粘土板を筒状にして、蓋版を貼り付ける。蓋の受け部は彫刻化している。	口縁端部 ハケ目調整。外面 指頭匠痕が部分的に残る。扉方向に粘土のつなぎ目痕が残る。	
259	D区 4-6 (遺物包含層)	土製品	火消釜	平底。体部 内彎。口縁部 内傾。口縁端部 丸味をもつ。	内・外面とも 丁寧なナデ仕上げ。内面 漆用痕。	蓋をもつ。
260	D区 4-6 (遺物包含層)	無釉陶器	深鉢	平底。体部は外反して直上へ延びる。口縁部 蓋の受け部をもつ。	内・外面とも ロクロナデ調整。底部外面 灰被り。ロクロは左廻り。底部斜面 ケズり痕。	丹波系。
261	D区 4, 5 (遺物包含層)	土師器	燗台	平底。胴部は円柱状で直立。底部内面に灰ひ凸帯が1条走る。	底部内面 透明釉施装(明赤褐色に発色)以下露胎。	いわゆる特殊の燗台。
262	D区 3ベルト (遺物包含層)	土師器	燗台	上部(皿部)のみ残存。内面に凸帯1条。	内面 透明釉施装。	いわゆる特殊の燗台。
263	D区 3ベルト (遺物包含層)	土師器	火消釜	蓋のつまみ部のみ残存。つまみ中央部は大きく凹む。		内面に黒書有。
264	D区 3ベルト (遺物包含層)	無釉陶器	深鉢	口縁部 上下に拡張。縁帯を形成。口縁部外面 凹線2条。内面 凹線2条。	底部内面 9条1単位の襷目施文。内・外面とも 鉄泥塗布。	備前系。
265	D区 5-6 (遺物包含層)	無釉陶器	深鉢	平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。	内面 底部一体部にかけて連続して12条1単位の襷目を逆時計回りに施文。内面の底部と体部の界、不明確。	胎土中に砂粒を多く含む。色調 赤褐色。
266	D区 4ベルト (遺物包含層)	無釉陶器	深鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張し縁帯を形成する。口縁部外面 沈線2条。内面 凹線2条。	体部内面 11条1単位の襷目。底部内面 10条1単位の襷目施文。内面の底部と体部の厚は明確。内・外面 鉄泥塗布。	堺・明石産深鉢。
267	D区 4-5 (遺物包含層)	無釉陶器	積木鉢	平底。瓠形の脚を貼り付け、底部中央1ヶ所穿孔。体部 直立。口縁部外方に折り曲げ。上面 水平に整形。	内・外面とも ロクロ目 明確。外面 若干干城り。	色調 淡赤褐色。
268	D区 3 (遺物包含層) セク ジョンベルト	無釉陶器	積木鉢	平底。体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は水平に折り曲げる形。	口縁部と体部の界に強い回転ナデ。外面 ヘタ折り。底部外面 中央部穿孔。底部外面に乾塗白の遺痕あり。	色調 暗赤褐色。
269	D区 5-6 (遺物包含層)	無釉陶器	花瓶	中国産の青磁写しの瓶 平底の板立。体部 臍管玉状に成形。胴部 直立。口縁部大きく外反。皿状に成形。	頸部の下部に型造りの獅子頭?貼付。口縁部内面一体部外面 鉄泥塗布(朱泥)。	釉面焼。朱泥の花彫。
270	D区 3-N (遺物包含層)	無釉陶器	壺	平底。体部 内彎。口縁部 外反。	体部外面の上半部に沈線1条。内・外面とも 鉄泥塗布。	備前産朱泥小皿。底部内面に鉄分附着(お歯黒塗?)。
271	D区 3-N (遺物包含層)	施釉陶器	壺	体部は内彎。口縁部は水平方向に拡張。口縁部上面に浅い凹線1条。	内面 全面に灰釉施装。外面 鉄泥塗(赤土部)を塗布した後、灰釉を給状に施装。	丹波系。18C後半以降。
272	D区 (遺物包含層)	施釉陶器	壺	平底。体部 内彎。胴部 直立。口縁部 内傾に玉縁状に肥厚。体部と胴部の界、凹線1条。	内・外面とも 鉄釉施装の後、白釉を施し掛け、赤味を帯びた淡灰色に発色。	肥前系(津波製)。
273	D区 3ベルト (遺物包含層)	施釉陶器	香炉	平底を張り込んだ内反り高台。体部 直立。口縁端部は丸味をもつ。底部に粘土の塊 3ヶ所貼付(脚部)。	外面と内面の口縁部のみ鉄釉施装。底部外面、内面は露胎。	丹波系。香がある。鉄線青立。19C前半以降。
274	D区 4-5 (遺物包含層)	施釉陶器	碗	比較的低い傾き高台。高台の貼付部はへつりにより踵面をもつ。体部は僅かに内彎。口縁端部は尖り気味。	内・外面とも 透明釉施装。細かい貫入。青味を帯びた淡灰色に発色。高台縁以下 露胎。	肥前系京焼陶器。
275	D区 3-S (遺物包含層)	施釉陶器	碗	高台は幅が広く比較的低い。体部は内彎して立ち上がり、体部中位で屈曲。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも 黒釉(天目焼)施装。体部外面下半(高台縁)以下 露胎。底部の隅り(高台表)は低い。	丹波系。香がある。鉄線青立。19C前半以降。
276	D区 4-5 (遺物包含層)	施釉陶器	水鉢	高台は幅が広く低い。体部は直立。口縁部は内側に引き出し、受け口状に成形。	外面にへら状工具で草花文 点文を施文。内・外面とも 全面に灰釉施装の後、草花文部分に鉄釉又は鉄釉を一部施装(鏡び青磁風)。高台部は露胎。高台裏に墨書あり。	底部内面に胎土目録7ヶ所。瀬戸・美濃系水鉢。18C後半以降。
277	D区 3ベルト (遺物包含層)	施釉陶器	碗	高台は比較的細く高い。	外面 灰釉施装。内面 白濁釉施装の後、鉄釉で多指を施文。	在胎窯(明石産)。19C前半以降。上縁部部に類例あり。
278	D区 3-S (遺物包含層)	無釉陶器	小皿	非常に薄手に成形。平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。体部と底部の界、不明確。	内面に草花文 型押し施文。内・外面とも 鉄泥塗布。	備前産朱泥小皿。
279	D区 3-S (遺物包含層)	施釉陶器	鍋	施釉陶器調の底部。底部外面 粒状粘土塊貼り付け。	内面 灰釉施装。外面 体部上向まで同じく灰釉施装(淡黄灰色に発色)。底部の高胎部に黒書。	

No	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
280	D区 3-S (遺物包含層)	施釉陶器	火舎	丸底気味の平底。不正形の脚部を3ヶ所貼り付け。体部 直立。口縁部 若干肥厚。	口縁部上面一部外周のみ施釉。灰釉(淡緑色に発色) 煎餅後、一部鉄釉、緑釉をたらし掛け。	瀬戸・美濃系。19C前半以降。
281	D区 4-6 (遺物包含層)	施釉陶器	蓋台	浅く低い高台を削り出す。体部は直立。口縁部は幅の広い筒状につくり出す。	文様 口縁部上面 先の丸い楕円蓋台文を象徴し、白泥を塗り込める。体部下半は同じく波状文を象徴し、白泥を塗り込めた後、淡茶褐色釉を全面施釉。底部外面は露胎。	
282	D区 4-5 (遺物包含層)	施釉陶器	水漬	型造り成形。上面を型で菊花状に施文した後、型造りの松葉を貼り付け。中央上部と側縁部に空気孔と注目を2ヶ所穿孔。	外面 全面に黄釉施釉の後、松葉部分に緑釉施釉。内面は露胎。寿目と指頭縁あり。	
283	D区 4-6 (遺物包含層)	施釉陶器	ミニチュア壺	平底。体部は内勢。体部上半へ口縁部欠落。	外面 灰釉施釉(淡緑灰色に発色) 内面及び外面の体部下干以下 露胎。	
284	D区 4-5 (遺物包含層)	施釉陶器	蓋	上面は扁平。下面は逆台形状に成形。	無釉。暗赤褐色に発色。	備前焼の壺の蓋。
285	D区 4-5 (遺物包含層)	施釉陶器	蓋	中央部に絞状のつまみ貼り付け。体部は円盤状。受け部は直立。	上面 泥泥色を塗布。	
286	D区 4-5 (遺物包含層)	施釉陶器	蓋	上面中央部に宝珠つまみを貼り。上面はほぼ平。受け部は細く高い。	上面 絞状の輪状緑色釉を施釉(鉄製品を模倣か?) 下面は露胎。受け部は貼り付け。	
287	D区 3(遺物包含層1)	白磁	蓋	中央部に宝珠つまみ貼付。体部は若干凹弧を打ち出し口縁部は水平。	外向 透明釉施釉(灰白色に発色) 内面 露胎。	水注あるいは急須の蓋か?
288	D区 4-6 (遺物包含層)	施釉陶器	蓋	型造り成形の後、削りによって調整。	内・外面とも 透明釉(黄灰色に発色) 施釉の後、部分的に緑釉を施文。	ミニチュアの壺の蓋。
289	D区 3-裏ベルト (遺物包含層)	施釉陶器	壺	外面中央部に球形つまみ貼付。体部はほぼ円筒状。受け部は直立。	外面 灰釉施釉の後、白泥のイッチン削りで施文 内面 黄土塗布。	在地産(明石産)。19C前半以降。
290	D区 4-5 (遺物包含層)	施釉陶器	壺	蓋し蓋。平底。照縁部は斜め上方に立ち上がる。体部 直立。口縁部は外方に折り曲げる形。	中央部に球状つまみ貼付。外面 灰釉施釉 暗緑褐色に発色。内面 露胎。	在地産(明石産)。19C前半以降。
291	D区 5-6 (遺物包含層)	青磁	碗	高台は幅が広く比較的高い。体部は直線的に高めの上方へ立ち上がる。口縁部僅かに外反。	内・外面とも 青磁施釉(暗緑灰色に発色) 高台盤付の縁はキキ取り。	三田青磁。19C前半。
292	D区 4-5 (遺物包含層)	青磁	鉢	水挽きロウロ成形の後、口縁部を歪押し技法によりゆがみに整形。髷ノ目内形高台。体部は直線的に外上方へ伸びる。口縁部 外反。	内・外面とも 青磁施釉 髷ノ目高台の中央部のみ施釉。	肥前系。19C前半以降。
293	D区 衣採	青磁	角鉢	型物の角鉢。高台は八角形。恐らく体部も八角形か? 外面 型押しで施文。	外面 型押しで草花文? 施文。内・外面とも 青磁施釉(暗緑灰色に発色) 高台盤付の縁はキキ取り。露胎部 淡赤褐色に発色。	三田青磁。19C前半。
294	D区 4ベルト (遺物包含層)	青磁	角鉢	型造り成形。体部は恐らく方形に成形。口縁部は波状(花弁状)に成形。	外面 型押しで草花文施文(牡丹文?) 内外面とも 青磁施釉(暗緑灰色に発色)。	三田青磁。19C前半。
295	D区 4(遺物包含層)	青磁	角鉢	型造り成形。三角形状の台形鉢。高台も三角形。	内・外面とも 青磁施釉 高台盤付の縁はキキ取り。露胎部 淡赤褐色に発色。	三田青磁。19C前半。
296	D区 3-S (遺物包含層)	青磁	花瓶	高台は幅が広く低い。体部は内勢。頸部は直立。口縁部は大きく外反。露胎は上方につつまみ上げる。	頸部 下部に1対の貼付浮文(草花文?) 口縁部内面-外面 青磁施釉(淡青褐色に発色) 高台盤付の縁はキキ取り。盤付に筆架痕あり。	徳島型の彫形花瓶。肥前系。
297	D区 3ベルト (遺物包含層)	染付磁器	壺	高台は細く低く外方に膨らむ。口縁部は僅かに外反。	文様 外面 体部下周 簡略化した蓮文? 内面 界線1条 ××文 界線1条。底部内面 桜葉文。	近代-現代。
298	D区 4-5 (遺物包含層)	染付磁器	小瓶	高台は低い。底部の器壁は非常に厚い。口縁部は尖り気味。	文様 外面 草花文(雲染) 施文。	肥前系くわらんか手。18C前半。
299	D区 4-6 (遺物包含層)	色絵磁器	碗	高台は細く高い。体部は外上方へ延びる。口縁部は尖り気味に収める。	文様 赤絵で梅花文等 界線1条 凹凸文 界線2条。内面 赤絵で 界線2条 施文。	全体に薄手に成形。
300	D区 3ベルト (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は細く高い。体部はほぼ直線的に外上方へ延びる。口縁部は尖り気味。	文様 外面 界線1条 上りけ文 界線1・2・1条。内面 界線1・2条。底部内面 図案化された「寿」字文。	瀬戸・美濃系。19C前半。
301	D区 4(遺物包含層)	色絵磁器(金耀子)	碗	高台は比較的細く高い。体部は僅かに内勢。口縁部は尖り気味に収める。	文様 外面 赤埃 白抜きで「祝壽」文 縦界線2条 緑色絵 草花文。体部下干(高台部) 呉須でクマ式蓮弁 界線2条。底部外面(高台部) 大明口口縁。内面 呉須で染文。	色絵部分は上給付けの為、一部剥落。寿字の一部金彩。
302	D区 3-N (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は細く高く、径は大きい。体部は僅かに内勢。斜め上方へ延びる。口縁部は尖り気味に収める。	文様 やや濃い濃赤で雷輪 草花文施文。内面 界線2・1条。底部内面(見込み) 鳥獣?	見取線が肥前系ではない。

No	出土遺構	類別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備 考
303	D区 3-S (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は細く高い。高台部は比較的小さい。体部は幅かに内脣、斜め上方に延びる。口縁部は尖り気味に収める。	色調 やや青味を帯びる灰白色。文様 淡い呉須で蓮華を用いた草花文 文様界線1条。内面 界線1条。底部内面 草花文。	器面に虫喰いが目立つ。肥前系広東碗、19C前半。
304	D区 3-S (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は細く高い。高台径は大きい。体部は幅かに内脣、斜め上方へ延びる。口縁部は尖り気味に収める。	色調 白色。文様 外面 竹葉 草花文 界線1条。内面 界線2・1条 草花文。	広東碗。肥前系ではない。
305	D区 4-5 (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は細く高い。体部はほぼ直線的に外上方へ延びる。口縁部は尖り気味。	文様 外面 松雲文 丸に田文。内面 界線2・1条。底部内面 草花文。	肥前系広東碗。19C前半。
306	D区 3ベルト (遺物包含層)	染付磁器	蕎麦瓶口	高台は幅が狭く低い。平底。体部 直立。口縁部は丸味をもつ。	文様 外面 淡い呉須で雲龍に蓮華文。底部内面 草花文。内面 界線2条。非常にくずれた五弁草花文(コンニャク印判)	肥前系。19C前半。
307	D区 3-S (遺物包含層)	染付磁器	蕎麦瓶口	高台は細く比較的低い。体部は直立。口縁部は丸味を帯びる。	器面に汚れが著しい。文様 外面 界線1条 草花文 界線1条 簡略化した草花文 界線2条。内面 新格子文 界線1条 くずれた五弁草花文(コンニャク印判)	肥前系。19C前半。
308	D区 3-N (遺物包含層)	染付磁器	蕎麦瓶口	幅が広く比較的高い高台。体部は直立。口縁部は丸味を帯びる。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 外面 笹雲 雲龍 界線1条 簡略化した雲龍文か?内面 界線2・1条。底部内面 くずれた五弁草花文か? (コンニャク印判)	呉須の発色はにじんだ感じ。瀬戸・美濃系。
309	D区 4-6 (遺物包含層)	赤絵磁器	蕎麦瓶口	高台は比較的低く低い。高台径は小さい。体部は直立。口縁部は尖り気味に収める。	文様 外面 赤絵で紅葉 呉須で界線1・2条。内面 呉須 界線1条 五つ蓮文。	肥前系。
310	D区 3-S (遺物包含層)	染付磁器	蕎麦瓶口	高台は比較的大く低い。体部 直立。口縁部は丸味をもつ。	文様 外面 不明文 文様 界線1条。内面 界線2・1条。底部内面 草花文?	肥前系。
311	D区 3ベルト (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は比較的低く高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は幅かに内脣、口縁部は丸味をもつ。	文様 外面 界線1条 丸文 界線1・2条。底部内面 界線1条 不明文。内面 界線2・1条 くずれた五弁草花文(コンニャク印判)	肥前系くらわんか手。18C後半。
312	D区 3ベルト (遺物包含層)	色絵磁器	碗	高台は細く高い。体部は内脣。口縁部は外反。	文様 外面 細線で唐文文を描いた後、丸窓に手絵で唐文を描き、緑色釉を施す。高台には呉須印判。	口縁部には鉄絵を施す。
313	D区 5-6 (遺物包含層)	染付磁器	鉢	高台は比較的低く高く、外方に大きくひらく。体部はほぼ直線的に外上方へ緩やかにひらく。口縁部は丸味をもつ。	文様 内面 葛藤文。外面 無文。	近代-現代。
314	D区 4 (遺物包含層)	染付磁器	皿	水洗きロク口成形の後、型押し整形。高台は比較的低い。高台径は大きい。口縁部は弧で輪花状に成形。	口縁部 鉄輪飾 (L1区) 文様 鳳凰と菊文の縁を呉須で施文。	明治以降か?
315	D区 4 (遺物包含層)	染付磁器	皿	水洗きロク口成形の後、型押し整形で口縁部を輪花状にする。高台径は大きい。体部は内脣。口縁部は丸味をもつ。	文様 内面 細い草花文 界線2条 草花文 松竹梅文。外面 古い朝雲草文 界線2条。底部内面 不明文。	肥前系。19C前半。
316	D区 3ベルト (遺物包含層)	染付磁器	角鉢	水洗きロク口成形の後、型押し技法により方形に成形。高台は比較的低く高い。高台は凹形。	文様 外面 不明文。内面 草花文。底部内面 方形の界線1条 菊花文。	肥前系。
317	D区 4-5 (遺物包含層)	染付磁器	皿	高台は幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は尖り気味。底部の器壁は非常に厚い。	文様 内面 界線1条 簡略化した唐文 界線2条。底部内面 五弁草花文(コンニャク印判)	肥前系くらわんか手。18C後半。
318	D区 3ベルト (遺物包含層)	白磁	皿	蛇ノ目形高台。体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は尖り気味。	水洗きロク口成形の後、型押し技法により内面に菊文を施文。口縁部は蛇状に成形。内・外面とも 透明輪飾。	底部外面は中央部以外露筋。口縁部は鉄輪飾 (L1区) 肥前系。19C前半以降。
319	D区 4-5 (遺物包含層)	染付磁器	壺	高台は比較的低く高い。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は尖り気味。	文様 外面 草花文か?内面 墨黒い技法で丸に雲形文。底部内面 山雲文。	産地不明。19C前半以降。
320	D区 4-5 (遺物包含層)	染付磁器	壺	高台は比較的大きく高い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は尖り気味。	文様 外面 細い草花文 (型紙描か?) 内面 界線2・1条。底部内面 新格子文。	近代以降。
321	D区 4 (遺物包含層)	染付磁器	鉢	体部は内脣。口縁部は丸味をもつ。底部の器壁は非常に厚い。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 外面 濃墨を用いた唐草文 界線1・3条。内面 草花文 界線2条。	肥前系くらわんか手。18C後半。
322	D区 3-N (遺物包含層)	染付磁器	鉢	高台は比較的大く低い。高台径は非常に大きい。体部 内脣。口縁部 水平に折り曲げ。外面の体部中に内脣1条。	文様 外面 環状飾 (藍色) 内脣部に鉄輪飾。内面 界線2条 海・鳥と樓閣・帆船を呉須で施文。高台の縁は広くカキ取る。	呉須の発色から近代以降の製品か?

No	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備 考
346	D区 表層	炊煮陶器	ミニチュア型	型造り成形。	外面 型により逆弁文施文。外面 透明釉施す。高台部以下は露胎。内面 透明釉 白灰 緑色釉の3輪掛け分け。	伊丹輝町に類例あり。
347	D区 3-N (遺物包含層2)	施釉陶器	灯明皿	平底。底径は非常に小さい。体部は緩やかに斜めに斜め上方に立ち上がる。	内面 斜格子状沈澱施文 1ヶ所同形浮文付付。内面 白濁釉施釉 細かい貫入。外面 露胎 へちま形か? 火摩状に施す。	口縁部外面 若干露胎着。京・御栗系。
348	D区 4 (遺物包含層2) セクションベルト	無釉陶器	徳利	平底。体部は僅かに内彎。体部上半は内彎。脚部は短く、口縁部は外反。底部は玉縁状に肥厚。	外面 鉄泥塗施す。一部区被り。底部外面は基本的には露胎。器面ガラス状の光沢が著しい。	胎前系。器面の光沢が強いのは器以外の燃料を用いたためか。
349	D区 3 (遺物包含層2)	白磁	紅皿	型造り成形。高台は低く小さい。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は水平に切る。	体部外面は磨練し、乳白色に発色。内面 透明釉施す。乳白色に発色。外面は露胎。	胎前系。
350	D区 3-1 (遺物包含層2)	染付磁器	碗	高台は外方に踏んばる。体部 内彎。口縁部 外反。	文様 全体にボカシあり。外面 赤絵施文に「春」「夏」の吉祥句施文。内面 底部外縁に「菊」字文。	瀬戸・美濃系。19C前半以降。
351	D区 3 (遺物包含層2)	染付磁器	碗	高台は細く高い。高台径は大きい。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁部は丸味をもって収める。	色調 乳白色。文様 外面 やや濃い赤須で界線1条。草花文。界線2条。底部外面「大明工」銘。内面 界線2条。底部内面 界線2条。草花文。	胎前系広東系。19C前半~中葉。
352	D区 3-1 (遺物包含層)	染付磁器	碗	高台は細く高い。体部は内彎。口縁部 外反。	文様 外面 草に草花文 界線1条。内面 界線2・1条。底部内面 露文。	漆で焼き焼き。肥前系広東系。19C前半。
353	D区 3 (遺物包含層2)	染付磁器	皿	高台は比較的細く高い。体部は内彎。口縁部は玉縁状に肥厚。底部の器壁は厚い。	色調 香味を帯びた灰白色。文様 外面 赤草文 界線3条。内面 界線1条。露文(火を受けて露文)。	胎前系。
354	D区 4 (遺物包含層2)	瓦	軒丸瓦	珠文16 巴の尾は長い。上面に釘穴あり。漣し瓦。		
355	D区 3-N (遺物包含層2)	瓦	軒丸瓦	菊文軒丸瓦 花卉の数は16弁。漣し瓦。		
356	D区 10-S (遺物包含層3)	土製品	ミニチュア(灯明皿)	型造り成形の使割り仕上。平底で体部は直線的に斜め上方へ立ち上がる。体部内面に灯台志を施付。	内面に施釉の跡があるが、現状は露胎。外面は露胎。	実用品ではなくミニチュア。
357	D区 10-S (遺物包含層3) 灰色粗砂	施釉陶器	鉢	高台は細く異常に高い。体部は内彎し、口縁部は僅かに外反する。	内・外面とも 暗黒灰色釉施釉の後、内面に白濁釉を一部施す。朝鮮書津流。底部内面 蛇ノ目状輪ハギ(例りは強い) 外面 露胎。	高台部は茶葉褐色に発色。胎前系 現川流に類例。
358	D区 10-S (遺物包含層3) 灰色粗砂	染付磁器	仏教具	平底。底部外面 中央を内形に浅く削る。脚部は直立。底部の底部は非常に厚い。	色調 やや香味を帯びた灰白色。体部外面 浅い赤須で界線1条。器面書津流。界線1・1条。底部外面 中央の器壁を残して輪カキ取り 一部砂附着。	胎前系くろわんか手。18C後半。
359	D区 11-S (遺物包含層4)	土師器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は尖り丸味に収める。	内面の底部と体部の界に低い凸帯を巡らせる。内面 透明釉施す 明色褐色に発色。口縁部部に露胎着。	いわゆる特製の灯明皿。
360	D区 11-ベルト (遺物包含層4)	土師器	焙烙	型造り成形。平底。体部と底部の界はほぼ垂直。体部 直立。口縁部は丸味をもつ。	口縁部外側面に扁平な把手付付。上面に孔の穿孔があるが貫通せず。底部外面 露胎着。	近世後半。
361	D区 11-S (遺物包含層4)	土師器	甕	幅が広く高い脚部。脚部の接合面に浅い切りを入れる。体部は内彎。	外面に化粧土を塗布(明赤褐色に発色) 底部外面・内面には塗らさず。内面には露胎着。	伊丹町野道部に類例あり。
362	D区 11-S (遺物包含層4)	無釉陶器	鉢鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁部上回 水平に成形。口縁部外面 沈線2条。内面 凹線及び凹部2条。	底部外面に難れ砂着。体部内面 11条1単位の指目。底部内面 11条1単位の指目を放射状に施文。	明石差漆鉢。19C前半。
363	D区 11-S (遺物包含層4)	無釉陶器	火入れ	平底。体部は直立。口縁部は丸味をもつ。	内・外面とも 鉄泥塗施す。底部外面露胎着。体部外面に藤竹の竹文。	上質の備前流。
364	D区 11-ベルト (遺物包含層4)	無釉陶器	鉢	平底。体部は直立。口縁部は丸味を帯びる。	内・外面とも 鉄泥塗施す。外面 墨書 へら掻きの塗印。外面 灰被り。	丹波産。
365	D区 11-S (遺物包含層4)	施釉陶器	碗	高台は比較的細く高い。体部は内彎。口縁部 外反。	外面 磨練し成形?で草花文施文の後、白濁釉施す。外面 全体は灰褐色釉施す。内面 透明釉施す。灰白色に発色。	
366	D区 11-ベルト (遺物包含層4)	施釉陶器	碗	高台は比較的高い。体部は内彎。口縁部 外反。	文様 外面 白濁釉 緑線 洗滌で高麗模 松 雲等を施文。内面 白濁釉施す。細かい貫入。	
367	D区 11-N (遺物包含層4)	施釉陶器	皿	比較的幅が広く高い削り出し高台。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部 僅かに外反。	内・外面とも 鉄泥塗施す 黒褐色に発色。外面の高台部以下 露胎。内面上面 白濁釉で成状に施文。底部内面 蛇ノ目状輪ハギ。	胎前系(刷毛目書津)。17C後半~18C前半。

No	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・顔金技法の特徴	備考
368	D区 11-S (遺物包含層4)	施釉陶器	水鉢	体部 僅かに内彎。口縁部 玉縁状に肥厚。	内・外面とも 灰釉施釉。淡黄色に発色。外面 灰釉の上に緑釉施釉。	内・外面とも 細かい貫入。燕戸・美濃系。19C前半以降。
369	D区 11ベル ト(遺物包含 層4)	施釉陶器	蓋	上面 中央部に窪つたまま貼付。体部はほぼ円盤状。受け部直立。	外面 黒緑部に比類1条。灰釉施釉。明黒褐色に発色。内面 露胎。	丹波産。
370	D区 11-S (遺物包含層4)	施釉陶器	蓋	平底。周縁部は斜め上方に延びる。体部 直立。口縁部は外方に折り曲げ、上面中央部につまみ貼付。	外面 灰釉施釉。暗灰緑色に発色。細かい貫入。内面 露胎。	在地産(明石産)。19C前半以降。
371	D区 11-S (遺物包含層4)	施釉陶器	蓋	平底。周縁部は斜め上方に延びる。体部 直立。口縁部は外方に折り曲げ、上面中央部につまみ貼付。	外面 灰釉施釉。暗灰緑色に発色。細かい貫入。内面 露胎。	在地産(明石産)。19C前半以降。
372	D区 11-S (遺物包含層4)	白磁	皿	縁が広く比較的低い高台。体部は縁やかに斜め上方に立ち上がる。口縁端部 尖り気味に収める。底部内面は広く扁平。	内・外面とも 透明釉施釉。やや青味を帯びた灰白色に発色。一部扁平押し掛けの跡。釉のノリが悪い。	肥前系。18C後半以降。紅磁の退化形態か？
373	D区 11-S (遺物包含層4)	染付磁器	碗	比較的幅が広く低い高台。体部は内彎。口縁端部は丸く収める。	外面 呉須で「大坂」「新町」「口」「[口]」施文。二重線 青味を帯びた灰白色。	肥前系くらわんか手。18C後半。高台臺付に砂附着。
374	D区 11-S (遺物包含層4)	染付磁器	杯	細く比較的低い高台。体部は内彎。口縁端部は尖り気味に収める。	外面 淡い呉須で二重線日文 露胎。内面 淡い呉須で菊文。	肥前系。
375	D区 11-N (遺物包含層4)	染付磁器	碗	細く低い高台。底部と体部の界は大きく傾斜。体部 直立。口縁端部は尖り気味に収める。	外面 呉須 界線1条 草文文 界線3条。内面 界線1条 界線1条。底部内面 露胎4所。	肥前系。18C前半。
376	D区 11-S (遺物包含層4)	染付磁器	碗	高台は比較的細く低い。体部は内彎。口縁端部は尖り気味に収める。	文様 外面 呉須 コンニャク印で界線1条 不明文 界線2条 施文。内面 界線1条 界線1条。底部内面 草文。	肥前系。18C前半。
377	D区 11-S (遺物包含層4)	染付磁器	碗	比較的細く低い高台。底部の器壁は非常に厚い。体部 内彎。口縁端部は尖り気味に収める。	外面 比較的濃い藍色で界線1条 草文 界線1・2条。内面 界線1・1・1条。底部内面 草文。	肥前系くらわんか手。18C前半。
378	D区 11-S (遺物包含層4)	染付磁器	唐麦指口	高台は比較的細く低い。底部と体部の界はほぼ垂直に屈曲。体部 直立。口縁部 丸味をもつて収める。	外面 やや黒ずんだ呉須で界線1条 松文 界線1条 唐草文 界線2条。内面 界線2・1条。底部内面 不明文施文。	肥前系くらわんか手。19C前半。
379	D区 11-S (遺物包含層4)	染付磁器	碗	高台は比較的細く低く「ハ」の字状に外方に開く。体部は直線的に斜め上方にひろく。口縁端部は丸味をもつて収める。	文様 外面 淡い呉須で海浜風景(島松 海老など)を施文。口縁部内面に広く帯状の四條1条。底部内面 不明文施文。	瀬戸・美濃系。19C前半以降。
380	D区 11-S (遺物包含層4)	染付磁器	碗	高台は細く高い。体部は僅かに内彎。口縁端部は尖り気味に収める。	文様 外面 界線1条 大きめの扇形草文 界線1条 界線2・1条 東部内面 露胎文?	肥前系広東産。19C前半。
381	D区 11-S (遺物包含層4)	染付磁器	碗	高台は細く高い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	文様 外面 草文施文(芙蓉手風) 界線1条。内面 界線2・1条。底部内面 露胎文?	焼き継ぎ直有。底部外面 焼き継ぎ直有。肥前系広東産。19C前半。
382	D区 11ベル ト(遺物包含 層4)	染付磁器	碗	高台は高く細い。体部は僅かに内彎。口縁端部は丸味をもつ。	文様 外面 露胎文と草文文 界線1条。内面 界線2・1条。底部内面 草文。	瀬戸・美濃系。19C前半以降。
383	D区 11-S (遺物包含層4)	染付磁器	皿	高台は比較的細く低い。高台は縁やかに斜め上方に立ち上がる。水挽きロケ口成形の跡、彫押しにより八角形に成形。	文様 内面 呉須で山水植物園施文。口縁端部 鉄灰施釉(口紅)	焼き継ぎ直。焼き継ぎ直あり。
384	D区 11-S (遺物包含層4)	染付磁器	皿	縁が広く比較的低い高台。体部は内彎。高台に斜め上方に立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。底部の器壁は非常に厚い。	文様 外面 淡い呉須で唐草文。界線1条。底部内面(高台側) 露胎文。内面 草文文 界線2条。底部内面 コンニャク印で五弁文。	高台臺付砂附着。肥前系くらわんか手。18C後半。
385	D区 11-S (遺物包含層4)	染付磁器	鉢	高台は比較的細く高い。体部はほぼ直立。	文様 外面 雲龍文 斜格了文 露胎文。内面 露胎文。	焼き継ぎ直。焼き継ぎ直あり。中国風の文様の高級品。
386	D区 11ベル ト(遺物包含 層4)	赤絵(色絵)磁器	蓋	高台は比較的細く高い。体部は縁やかに斜め上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収める。	外面 赤絵 赤絵で草文施文。内面 赤絵(朱華) 文字?施文。	
387	D区 11ベル ト(遺物包含 層4)	染付磁器	徳利	平底。高台で周縁部を残して内面を浅く削り出す。体部は大きく内彎 半球状形を呈する。頸部 直立。口縁部 外反。	顔繪 外 やや青みを帯びた灰白色。文様 外面 淡い呉須で唐草文施文。	肥前系。
388	D区 11ベル ト(遺物包含 層4)	染付磁器	鉢	高台は比較的幅が広く高い。体部は中位で「く」の字状に屈曲。口縁端部は丸味を帯びる。	文様 外面 唐草文施文。内面 露胎文等?施文。水挽きロケ口成形の跡、彫押し整形により整形。	焼き継ぎ直あり。肥前系。
389	D区 11-S (遺物包含層4)	石製品	硯	砂岩製 使用頻度は著しい。磨部は一部欠損。		

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備 考
390	D区 11-S (遺物包含層4)	石製品	砥石	砥石の一部 欠損してからその一部を再利用した砥磨面をもつ。		
391	D区 11-S (遺物包含層4)	石製品	砥石	砥石の一部。 砥磨面は平滑。		
392	D区 11-S (遺物包含層4)	石製品	砥石	砥石の一部。 砥磨面は平滑。		
393	D区 セクシ ョンベルト4- 6 (黒灰色土)	土師器	大消し皿	平底。体部は内壁して立ち上がり、体部上半は内傾。口縁部は丸味をもつ。	体部の内・外面とも 回転ナデ調整。体部下面 ヘラズリ調整。底部外面未調整で突起した痕跡あり。	
394	D区 4-6 (黒灰色土)	土師器	灯明皿	平底で底径は非常に小さい。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は丸味をもつ。	体部内面に浅く4条単位のクシ状文様。内面 白濁釉施装→暗灰白色に発色。器面に細かい貫入 また筋土目筋3ヶ所。	京・伊集系。
395	D区 4-6 (黒灰色土)	素焼土器	榎木鉢	平底。体部 直立。口縁部は水平に折り曲げる。底部 中央1ヶ所穿孔孔(乾燥の抜き孔か?)	体部内・外面とも 回転ナデ調整。底部外面 未調整。赤切り痕あり。	未施釉で素焼状態。
396	D区 4-6 (黒灰色土)	施釉陶器	ひょうそく	平底。体部 直立。口縁部 水平方向に直上。底部外面 中央に釘穴穿孔孔。底部内面 中央に打芯凸貼付。	内面→口縁部外面 鉄釉施装→暗灰藍色に発色。外面 露胎あるいは鉄泥塗施装。	
397	D区 6-Sセ クシオンベ ルト (黒灰色土)	施釉陶器	蓋	中央部に扁平なつまみ貼付。体部は中央部に向かって突出。受け部は直立。	外面 灰釉施装の後、刷毛で巴文状に白泥を施装。上面にハリ支え筋3ヶ所。	在胎産(舞子産)。19C前半以降。
398	D区 6-S (黒灰色土)	青磁	碗	型造り成形。裏台は六角形を呈す。体部外面下半は広形逆舟型に成形。口縁部は水平に外方に折り曲げる。	内・外面とも 青磁施釉施装→淡青緑色に発色。高台笠付は露胎。淡赤褐色に発色。	三田青磁。
399	D区 石匠A 石組溝 黒灰 色粘質土	施釉陶器	鉢	高台は幅が低い。平底。体部は斜め上方に立ち上がる。口縁部は水平方向に直上。	内・外面とも 黄褐色施釉施装(浪平風の色調)。高台笠付も施装。	
400	D区 4-6-5	施釉陶器	油壺	高台は浅く傾り出す 内反り高台。体部大きく内彎 半球形状。口縁部は破損したためを再調整して使用。	外面 鉄泥塗を塗布した後の、灰釉施装白濁で露点状に施文。外面の高台幅以下露胎。	肥前系(唐津)。
401	D区 4-6-S (黒色土上層)	染付磁器	皿	比較的細く低い高台。体部は下半部で直上。外反りに立ち上がり。口縁部は外反。口縁部は突り気味に収める。	文様 鶴 瓦磁文を模した上に外縁で黄色する。底部外面(高台裏) 沈瀬1条。	近代以降。
402	D区 7ベルト (23-25層)	施釉陶器	楕鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に直上。縁帯を形成する。口縁部外面 凹線1条。内面 凹線1条。	体部内面 11条1単位の楕目をクシ状工具で施文。底部内面 11条1単位の楕目施文。体部外面ヘラ削り。	唐・明石室楕鉢。18C後半以降。
403	D区 襷丸 (側溝内)	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は丸味をもつ。	内面 透明施釉施装。明赤褐色に発色。外面 露胎。底部外面 未調整。赤切り痕。口縁部は足跡あり。	いわゆる施釉の灯明皿。18C後半以降。
404	D区 襷丸 (側溝内)	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は丸味をもつ。	内面 透明施釉施装。明赤褐色に発色。外面 露胎。底部外面 未調整。赤切り痕。口縁部は足跡あり。	いわゆる施釉の灯明皿。18C後半以降。
405	D区 襷丸 (側溝内)	土師器	燗台	平底。側部 直立。底部内面中央に浅渾りの段をもつ。	内面 透明施釉施装。明赤褐色に発色。外面 露胎。底部外面 未調整。赤切り痕あり。	口縁部及び側部に保衛着。いわゆる施釉の燗台。18C後半以降。
406	D区 襷丸 (側溝内)	加釉陶器	小壺	平底。体部 内彎。口縁部 外反。	外面 ヘラ削り調整。外面 全面に鉄泥塗施装。(平滑かつ光沢をもつ)	備前赤朱泥小壺。
407	D区 襷丸 (石室内)	青磁	小碗	高台は傾が低く広い。底部の足跡は非常に深い。体部は内彎。口縁部は丸味をもつ。型造り成形。	体部外面 型押して華文1条 瓦文 雷文帯施文。内面 上面斜方向に凹む。高台裏付 露胎 淡赤褐色に発色。	煎茶碗?
408	D区 襷丸 (側溝内)	施釉陶器	碗	丸底。体部は直立。口縁部は外方に折り曲げる。上縁状に成形。	内面 軽いヘラ削り痕。内・外面とも灰釉施装。外面の底部以下露胎。	行平鉢。在胎産(明石) 19C前半以降。
409	D区 襷丸 (石室内)	施釉陶器	鉢	高台は傾が低く広い。体部は直立。口縁部は水平に内側につまみ出す。	内・外面とも 施釉(灰釉か?) 暗緑色に発色。外面の体部下半以下露胎。端赤褐色に発色。	口縁部に1ヶ所注口貼付。在地産(明石産)。19C前半以降。
410	D区 襷丸 (石室内)	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部 内彎。口縁部 僅かに外反。口縁部は突り気味。	文様 外面 界線1条 小野町大伴黒土 撥浪法 equal の如く(百人一首か?) 界線1・2・1条。内面 界線2条 雷文帯 界線2・1条。底部内面「文」字銘。	19C前半以降。
411	D区 襷丸 (側溝内)	染付磁器	碗	高台は傾く高い。体部はほぼ直線的に外上方へ延びる。口縁部は突り気味。	文様 外面 朝顔文。内面 界線1・1条。底部内面 松葉文 漆の施き痕さざり。	肥前系赤磁碗。19C前半。
412	D区 襷丸 (側溝内)	染付磁器	蓋	高台は比較的細い。形量は深い皿状。	文様 外面 波に山水模瓦文。内面 裏配文。	19C前半以降。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備 考
413	D区 雑瓦 (溝溝内)	染付磁器	鉢	高台が極く狭く低い。平底。底部と体部の厚は直角に起曲。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面 呉須 界線 寿字? 香港波非松文等 界線2・2条。口縁端部の輪カキ取り。	内面 虫喰い痕あり。肥前産。
414	D区 雑瓦 (溝溝内)	土製品	硯	型造り成形。海の部分欠失。	底部外面に「人」の文字刻印。	
415	D区 5-6 (遺物包含層)	土製品	人形	型造り成形で両型造り。前面と后面に分割し それぞれを型押しして成形した後 中央で貼り合わせで成形。	一部に鉄輪 緑輪を施した後、全面に白濁輪を施す(二彩風の施輪) 底部外面 穿孔1ヶ所。	像形像。
416	D区 11-S (遺物包含層4)	土製品	人形	型造り成形で両型造り。前面と后面に分割し、それぞれを型押しして成形した後、中央で貼り合わせて成形。	元来上給付があったが、現状は全部剥落。底部外面 穿孔1ヶ所。	顔に髷をのせる態比須像。
417	D区 セクションベルト3 (遺物包含層)	施胎陶器	水満	前後2つに分けて型造り成形した後、中央部で貼り合わせる。	胴部に注口 全面に灰緑施胎。器面に細かい貫入。	唐子形 水満。
418	D区 8-N (遺物包含層3)	土製品	人形	型造り成形で両型造り。前面と后面に分割し、それぞれを型押しして成形した後、中央で貼り合わせて成形。	元来 上給付があったが現状はほぼ全部剥落。	力士像?
419	D区 11-ベルト (遺物包含層4)	土製品	器物形	両型造り。	底部外面中央 穿孔1ヶ所。外面の文様の彫りは浅い。	胴部の欠失した三重塔。
420	D区 6-N (遺物包含層)	土製品	面子	型造り成形。平面形状は円形。断面は台形状を呈する。片型造り。	上面 「小塚」の土名土を型押しして施文。	
421	D区 11-S (遺物包含層4)	土製品	面子	型造り成形。平面形状は円形。断面は台形状を呈する。片型造り。	上面 小判形を型押しして施文。	他のものと違って白色系の面子。
422	D区 東平排 土中	土製品	面子	平面形状は円形。断面は台形状を呈する。型造り成形。片型造り。	上面に「玉」を型押しして施文。	群棋面子。
423	D区 5-N	土製品	面子	型造り成形。平面形状は円形。断面は台形状を呈する。片型造り。	上面 型押しで、青海波文施文	4文銭の寛永通宝の裏面を模倣か。
424	D区 4 (遺物包含層)	土製品	面子	型造り成形。平面形状は円形。断面は台形。底部外面 強く押搾さへ。大きく穿孔。片型造り。	上面 型押しで「い」字。施文。	「い」字の面子。
425	D区 東平排 土中	土製品	面子	型造り成形。平面形状は円形。断面は台形状を呈する。片型造り。	上面 型押しで、ややくづれた構文施文。	他の面子と違って焼成色黄が異なる。一般的な面子は明色褐色に着色。焼成はや軟。この面は淡暗黒色で焼成は堅緻。
426	D区 11-S (遺物包含層4)	土製品	器物形	型造り成形。平面形状は円形。断面は台形状を呈する。やや形が崩れる。片型造り。	上面 型押しで、松茸あるいは椎茸を施文。	椎茸形。
427	D区 3-N (遺物包含層)	土製品	器物形	型造り成形。平面形状は長方形。断面は長方形を呈する。	上面 型押しで、2基の龜を施文。	龜形。
428	D区 4 (遺物包含層)	土製品	ミニチュア (豆)	型造り成形。平面形状は三ヶ月形。断面 半円形を呈する。	型造りで豆(エンドウ豆か)状に成形。	「豆」のミニチュア。
429	D区 11-ベルト (遺物包含層4)	土製品	人形	型造り成形。片面型。	片面のみ。型造り成形で別人あるいは前面を施文。	
430	D区 3 (遺物包含層)	土製品	人形	型造り成形。片面型。片面はくり抜く。	片面の型造り成形で、重形あるいは骨形の面を施文。着色部は殆ど剥離。一部に緑輪が残存。	
431	D区 3S (遺物包含層)	土製品	人形	型造り成形。片面型。片面はくり抜く。	片面の型造り成形で 笠を被った體の面を施文か? 笠部に一部褐色の彩色が残る。	
432	D区 3S (遺物包含層)	土製品	人形	型造り成形。片面型。	片面の型造り成形で、金太郎? 面を施文。裏面 指頭状及び書書が残る。	
433	D区 雑瓦 (石面内)	土製品	面子	型造り成形。片面型。	片面の型造り成形で、上面を施文するが、内容は不明。或いは器目を表すか?	
434	D区 3 (遺物包含層)	土製品	人形	人面形。	型からの剥離を容易にする為のキラムキのある粉が内面に塗布されている。	
435	D区 表排	土製品		型造り成形の後、貼り合わせる。	胴面に貼り合わせのくし目あり。底部外面「三河国 海部 同業組合 ~」印あり。	用途不明。
436	E区 井戸跡、 2A	土師器	五徳	コンロと竈・釜の中間において使用する。体部は直線的に斜め上方にのびる。口縁部は外反。体部内面に3ヶ所縦長のすべり止めを貼付。	内面に黒層着。内・外面ともナガ調整。	土製の五徳。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
437	F区 井戸跡 2A	施釉陶器	鉢	平底。高台は総ノ目状凹型高台風に成形。体部は直線的に斜め上方にのびる。口縁部は外反させ、肩部は下方につまみ出す。	内面～口縁部外面まで、白濁地に施釉。3ヶ所に緑地に施釉。外面 鉄輪を斜め通す。外面の高台部以下露出。内面9ヶ所目跡。	手水鉢。近世後半～近代。瀬戸・美濃系。
438	F区 井戸跡3	染付磁器	碗	比較的幅が広く低い高台。底部の器壁は非常に厚い。体部は薄かに内彎。口縁部は丸味を帯びる。	色調 やや青味を帯びた灰白色。文様 淡い呉須で写輪文・界線1条。 底部外面 (高台部) 草花文。	肥前系くらわんか手。18C後半。
439	E区 SX1	染付磁器	盃	体部 内彎。体部の接触部は斜め方向。接触部の横かき取り。上面に縦長のつまみ貼付。	文様 外面 界線1条・丸に山水文・界線1条。内面 無文。	焼盛ぎ飯。焼盛ぎ銘「甘一」。
440	E区 井戸跡 2A	瓦質	磚	井戸用磚。近世以降。	外面 ヘラで磨きで山形文様施文。	近世後半～近代 井戸用瓦。
441	E区 15-N (45層下)	土師器	皿	平底。体部は縁や斜めに斜め上方に立ち上がる。口縁部は丸味をもつ。	内面 透明釉施釉。淡褐色に染色。外面 露胎。底部外面 未調整。赤切り痕。	口縁部に煤着。いわゆる棒線の灯明皿。
442	E区 15-N (45層下)	無釉陶器	深鉢	平底。底部の器壁は非常に厚く口縁部は丸味をもつ。体部は直線的に斜め上方にのびる。	内面 8条1單位の目目を放射状に施文。内面 炭泥染 塗布。外面 灰被り、光沢をもつ。	備前系。
443	E区 15-N (45層下)	染付青磁	黄麦摺口	高台は比較的細く高い。体部は直立。口縁部は丸味を帯びる。	外面 青磁施釉。淡青緑色に染色。内面 染付・斜格文・界線2条。底部内面 コンニャク印で五弁花文施文。	肥前系染付青磁。18C後半～19C前半。
444	E区 15-N (45層下)	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部は薄かに内彎気味に立ち上がる。口縁部は丸味をもつ。	文様 外面 轡輪に梅文・界線2条。底部外面 草花文。	肥前系くらわんか手。18C後半。
445	E区 12-N (覆瓦)	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。底部の器壁は非常に厚い。口縁部は丸味に収める。	口径に対して器高が低い。色調 青味を帯びた灰白色。文様 割罫で2重目文・界線2条。	肥前系くらわんか手。18C前半。
446	E区 12-N (覆瓦)	染付磁器	仏飯具	平底。肩辺部を細0.5。唇状して、狭く開く。短い直立する部をもち。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は丸味に収める。	文様 淡い呉須で四階文。界線1・2条。灰被りのため一部、灰白色に染色。底部外面 露胎。	肥前系。19C前半以降。
447	E区 12-N (覆瓦)	染付磁器	仏飯具	平底。中央部を狭く開いて総ノ目凹型高台風に成形。断面は台形状の形い脚部をもつ。肩部の体部は内彎して深く、底部の器壁は非常に厚い。口縁部は丸味に収める。	文様 外面 界線1条 灰白斜格文。界線1・1・1条。	施掛けはラフ。19C前半。
448	F区 井戸跡4 (土坑)	土師器	焙塔	壘造りの成形。口縁部玉縁状に肥厚。	内面～口縁部外面は横ナ調整。	粘土中に雲母片を多量に含む。
449	F区 SK1 (土坑) 下層	土師器	羽釜	体部 直立。体部上位に断面方形の脚貼付。	内・外面とも 横ナ調整。体部外面に粘土の継ぎ目が残る。	比較的小形の羽釜。
450	F区 SK1 (土坑)	土師器	燈炉	断面台形状の脚部を3ヶ所貼付。体部下に楕円形の透しを入れる。体部外面に製作地あるいは、窯名の小写形の刷印を施文。	内面 回転ナ外。外面 ヘラ磨り調整。	
451	F区 SK2 (土坑2)	施釉陶器	壺	壺の底部。平底。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。	内・外面とも 鉄輪施釉。底部外面 胎土目跡。	近世後半～近代の丹波系陶器。
452	F区 SK1 (土坑) 下層	施釉陶器	花瓶	平底。体部は直立 僅かに内彎気味。頸部直立 僅かに外彎。肩部外面に縦貼付。	外面 鉄輪施釉。黒褐色に染色。底部外面 露胎。目跡4ヶ所。	近世後半～近代の丹波系陶器。
453	F区 SK1 (土坑) 下層	施釉陶器	徳利	体部 内彎。頸部 直立。口縁部 玉縁状に肥厚。	外面 鉄輪施釉。火ブクレあり。白泥をイッチン磨きで施文。内面露胎。	陶質はガラス質で光沢をもつ。近代以降の丹波系陶器。
454	F区 SK1 (土坑) 下層	施釉陶器	盃	壺の壺とし蓋。上面中央に円形のつまみをもつ。	外面 鉄輪施釉。暗黒褐色に染色。内面は露胎。回転ナ調整。	在産産 (明石産)。19C前半以降。
455	F区 SK1 (土坑) 下層	染付磁器	碗	高台は細く低く、外方にひらく。体部は内彎して直立。口縁部は丸味に収める。全体に厚手に成形。京焼風のプロポジション。	外面 やや濃い呉須で界線1条・二重格子文・界線3条。底部内面 格子状文。	
456	F区 SK1 (土坑) 下層	染付磁器	花瓶	高台は幅が広く比較的低い。体部は大きく内彎 半球形状を呈する。頸部直立。	色調 青味を帯びた灰白色。淡い呉須で草花文。界線2条。底部外面 「一」字状に穿孔。	肥前系。18C後半。
457	F区 SK3 (土坑3)	瓦	面子	横瓦を打ち欠いて作った瓦型面子。平面形状は不正梯形を呈する。		
458	F区 SX2 (池?)	施釉陶器	向付		外面に鉄輪で草花文施文。文様部分以外は露胎。	向付の一部。
459	F区 18-ベル 1-S (遺物包含層5)	施釉陶器	植木鉢	体部 直立。口縁部は丸味をもち、内側に僅かにつまみ出す。	内・外面とも コロロ目 磨盤。内・外面とも 露胎。外面の一部が施文。	丹波系。

No.	出土遺構	類別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
460	F区 16、 17-N (遺物 包含層5)	施釉陶器	蓋	環状のつまみをもつ。口縁部は水平に外方に折り曲げる。	外周 中央部と頸縁部を環状に鉄線で施文。鉄線と鉄線の間をトビガンナ施文、さらに白濁線・緑線を施文。内面透明釉施釉、暗赤褐色に発色。	口縁部は露胎。在池原(明石産)。19C前半以降。
461	F区 20ベル トS (遺物包 含層5)	染付磁器	小碗	高台は細く低い。体部は内彎気味に緩やかに斜め上方に延びる。口縁部部は尖り気味に収める。	文様 外面 「大坂 新町 おLII」と呉須で書く。	肥前系。18C代。
462	F区 19ベル トS (遺物包 含層5)	染付磁器	碗	高台は細く比較的高い。体部は僅かに外反。口縁部は大きく外反。口縁部部は尖り気味に収める。	文様 外面 やや濃い呉須で「大坂新町」の施文。	肥前・美濃系。19C前半以降。
463	F区 20ベル トS (遺物包 含層5)	染付磁器	碗	高台は細く高い。体部は僅かに内彎。口縁部部は尖り気味に収める。	文様 外面 淡い呉須で草花文(梅文)界線3条。内面 界線1条。底部内面コンニャク印判で五弁花文施文。	肥前系小形の広東碗。18C後半。
464	F区 20ベル トS (遺物包 含層5)	染付磁器	皿	高台は幅が広く低い。体部は短くほぼ直立。口縁部部は尖り気味に収める。底部の器壁は非常に厚い。	色調 やや青味を帯びた灰白色。文様 外面 唐草文 界線3条。底部外面 界線1条 洒落文。内面 界線1条 松竹梅文 界線2条 コンニャク印判で五弁花文施文。	肥前系くらわんか手。18C後半代。露胎部赤褐色。
465	F区 20ベル トS (遺物包 含層5)	白磁あるいは色絵磁器	皿	高台は比較的細く短直。		焼き難き灰・焼き難き器あり。
466	F区 20ベル トS (遺物包 含層5)	染付磁器	仏飯具	平底で中央部をあげ底気味に削り出す。側部は直立。体部は僅かに内彎。口縁部部は尖り気味に収める。	文様 淡い呉須で、外面 半段七弁菊花文 界線1・2条。底部外面は露胎。	肥前系18C前半。
467	F区 19ベル トS (S3層)	施釉陶器	溜鉢	平底で周縁部に凹線を施し、浅い高台状に成形。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁部は直立。口縁部外面 凹線2条。	口縁部に1ヶ所 片口を造り出す。内・外面に灰緑施釉。底部外面の周縁部は露胎。底部外面中央部 輪状に砂刻着。内面・底部内面 10条1単位の項目を鉄瓦工法で施文。	肥前系。近代以降。
468	F区 20ベル トS (S3層)	染付磁器	碗	平底。高台は幅が広く比較的低い。体部 直立。口縁部部は尖り気味をもつ。	外面 淡い呉須で不明文 界線1・2条。内面 斜格子文 界線1条 コンニャク印判で千代文五弁花文施文。	肥前系。19C前半以降。
469	F区 18～ 20-N	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部は僅かに内彎して斜め上方へ伸びる。口縁部部は尖り気味に収める。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 外面 呉須 草花文(桔梗)。界線1条。内面 界線2・1条。底部内面 「舟」字文。	肥前系。18C後半。
470	F区 18～ 20-N	緑釉磁器	鉢	高台は比較的細く高い。鉢あるいは皿。	底面外面(高台裏)のみ 染付施文。他は緑地施釉の後、底部内面に黄緑・鉄紅で施文。	緑釉染付とでもいうべきもの。
471	F区 18～ 20-N	赤絵磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部は僅かに内彎。口縁部部は尖り気味に収める。	文様 外向 赤絵の上絵付で 界線2条・草花文。内面 界線1条・口字文・界線2条・「龍」字文。	
472	F区 櫻乱 20-22ベル トS	施釉陶器	面子	高台は幅が広く比較的低い。	高台墨付以外は全面に灰緑施釉。淡黄緑色に発色。	施釉陶器碗を転用した面子。
473	F区 18～ 20-N	土製品	人形	型造り成形。両型造り。前面と后面をそれぞれ型造りし、中央で繋ぎ合わせる。底部外面に釘穴穿孔。	タシ状工具で依、手などを調整。俵に乗るの大黒像。	器面には釉は殆んど残らず。僅かに俵に緑釉が附着。
474	F区 20ベル トS (遺物包 含層5)	土製品	面子	元末は内形の面子であるが、表面は著しく磨滅。	上面に江戸後期の刀土名「小柳」を施文。	
475	F区 18～ 20-N	土製品	動物形	型造り成形。片型。背内は指オサエで穿孔。	片面は澄で 鼠面を造り出す。	上絵付けは全て剥離。
476	F区 18～ 20-N	土製品	器物形	扁形土製品ではあるが、かなり歪む。型造り成形。内腔は中空。	外面に比喩 4～5条。	
477	D区 4～6 (黒灰色土)	土製品	土鍾	手づくね成形。	外面に彫刻正裏。	焼成は堅緻。暗赤褐色に発色。
478	D区 11-S (遺物包含層4)	土製品	土鍾	手づくね成形。	器面はローリングを受け平滑。	焼成は堅緻。淡赤褐色に発色。
479	D区 11-S (遺物包含層4)	土製品	土鍾	手づくね成形。両端とも欠損。		焼成は堅緻。焼成時の色ムラはあるが赤褐色と暗赤褐色に発色。
480	D区 11-S (遺物包含層4)	土製品	土鍾	手づくね成形。器面 一部欠損。		焼成は堅緻。暗赤褐色に発色。
481	D区 11ベル ト (遺物包含 層4)	土製品	土鍾	手づくね成形。	器面はローリングを受け平滑。	焼成は堅緻。焼成ムラはあり。淡黄褐色及び淡赤褐色に発色。
482	D区 11ベル ト (遺物包含 層4)	土製品	土鍾	手づくね成形。片端の一部欠損。	器面はローリングを受け平滑。	焼成は堅緻。焼成ムラあり。淡赤褐色と暗赤褐色に発色。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
483	D区 11ベル ト(遺物包含 層4)	土製品	土鉢	手づくね成形。	器面はローリングを受け平滑。	焼成 堅緻。全体に 淡赤褐色に発色。
484	D区 11ベル ト(遺物包含 層4)	土製品	土鉢	手づくね成形。	器面はローリングを受け平滑。	焼成 堅緻。焼成ム ラあり。 淡黒灰色に発色。
485	D区 11ベル ト(遺物包含 層4)	土製品	土鉢	手づくね成形。両端とも一部欠損。	器面はローリングを受け平滑。	焼成ムラあり。暗赤 褐色及び淡赤褐色に 発色。
486	D区 11ベル ト(遺物包含 層4)	土製品	土鉢	手づくね成形。	粘土のひわりムラあり。器面はローリ ングを受け平滑。	焼成ムラあり。暗赤 褐色及び赤褐色に発 色。
487	D区 11ベル ト(遺物包含 層4)	土製品	土鉢	手づくね成形。両端とも欠損。器面に 拮据匠痕が僅かに残る。		淡赤褐色に発色。
488	D区 11ベル ト(遺物包含 層4)	土製品	土鉢	手づくね成形。片端は完全に欠損。	器面はローリングを受け平滑。	焼成ムラが著しく。 淡赤褐色、暗赤褐 色、明赤褐色に発色。
489	D区 11ベル ト(遺物包含 層4)	土製品	土鉢	手づくね成形。両端とも完全に欠損。		淡赤褐色に発色。
490	D区 11ベル ト(遺物包含 層4)	土製品	土鉢	手づくね成形。両端とも一部欠損。	器面はローリングを受け平滑。	焼成ムラあり。全体 に淡赤褐色。一部 暗赤褐色に発色。
491	D区 19ベル ト(遺物包含 層5)	土製品	土鉢	比較的大型の土鉢。一部欠損。	器面はローリングを受け。器底は荒れ る。	焼成はやや軟質。淡 黄褐色に発色。
492	C区 1-N (遺物包含層)	土製品	罐の羽口	円柱状。先端に鉄滓附着。色調は先端 より 黒、灰黄褐色、橙、にぶい橙 色を呈する。		
493	C区 1-S (黄色砂2)	土製品	罐の羽口	円柱状。先端に鉄滓附着。色調は先端 より 灰赤、赤灰、橙、にぶい橙 色を呈する。		
494	C区 1ベル ト(5層)	土製品	罐の羽口	円柱状。先端に鉄滓附着。色調は先端 より 黒、にぶい黄橙、橙を呈する。		
495	C区 1ベル ト(7、10層)	土製品	罐の羽口	円柱状。先端に鉄滓附着。色調は先 端より 緑黒、灰、褐色、橙を呈す る。		比較的大型
496	C区 1-S (黒褐色砂)	土製品	罐の羽口	円柱状。先端に鉄滓附着。色調は先端 より暗赤褐色、灰白、暗灰、浅黄橙、橙 色を呈する。		比較的大型
497	C区 2ベル ト(遺物包含層4)	土製品	罐の羽口	円柱状。先端に鉄滓附着。色調は先端 より 黒、灰オリブ、にぶい橙、橙 色を呈する。		比較的大型
498	C区 2-S (遺物包含層2)	土製品	罐の羽口	円柱状。先端に鉄滓附着。色調は先端 より 灰黒、にぶい赤褐色、黒、赤黒、 暗赤、暗暗赤褐色、浅黄橙、橙を呈す る。		比較的大型
499	D区 4-5 (遺物包含層)	土製品	罐の羽口	円柱状。先端に鉄滓附着。色調は青黒、 暗赤灰、黄灰、暗灰、青灰、黒、赤黒、 暗赤、暗暗赤褐色、浅黄橙、橙を呈す る。		
500	D区 3-N (遺物包含層)	土製品	罐の羽口	円柱状。先端に鉄滓附着。色調は黒、 暗赤灰、赤黒、橙を呈する		
501	D区 11-N (遺物包含層4)	土製品	罐の羽口	円柱状。先端に鉄滓附着。色調は黒、 にぶい赤褐色、灰、黄、橙を呈する。		
502	D区 3-N (遺物包含層)	土製品	罐の羽口	円柱状。先端に鉄滓附着。色調 青黒、 暗赤灰、黄灰、暗灰、青灰、浅い黄橙、 淡い橙を呈する。	一部欠損。	
503	D区 3-N (遺物包含層)	土製品	罐の羽口	円柱状。先端に鉄滓附着。色調は赤、 橙、赤黒、暗赤、橙、明褐色を呈する。	先端一部欠損。	
504	D区 3-東ベ ルト(遺物包 含層)	土製品	罐の羽口	円柱状。先端に鉄滓附着。色調は暗赤 褐色、黒、褐色、暗赤褐色を呈する。	下縁部欠損。	

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備 考
505	D区 4-S (遺物包含層)	土製品	楕の羽口	円柱状。先端に鉄片接着。色調は暗赤褐色、黒、にぶい赤褐、浅黄橙、にぶい橙色を呈する。		大型
506	F区 SK1 (土坑1) 下層	土製品	楕の羽口	円柱状。先端に鉄片接着。色調は黒褐、灰灰、にぶい赤褐、にぶい黄橙色を呈する。		小型
507	F区 SK1 (土坑1) 下層	土製品	楕の羽口	円柱状。先端に鉄片接着。色調は黒、赤灰、にぶい赤褐、にぶい黄橙色を呈する。		小型
508	F区 20-22 ベルトS 機孔 (2層)	土製品	楕の羽口	円柱状。先端に鉄片接着。色調は暗赤褐、黒、暗赤灰、明赤褐、橙色を呈する。		
509	F区 SK1 (土坑1) 下層	土製品	楕の羽口	円柱状。先端に鉄片接着。色調は暗赤褐、赤黒、黒、灰白、赤褐、にぶい橙色を呈する。	先端部一部欠損。	
510	11E 木樋検出時	白磁	小碗	高台は比較的幅が広く低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は僅かに内傾。口縁部は丸味をもつ。	内・外面とも透明釉施釉。高台置台の継カキ取り。	肥前系。
511	11E 木樋検出時	色絵 (赤絵)	小碗	高台は細く低く、「ハ」の字状に外方に開く。全体に薄手に成形。体部は僅かに内傾。口縁部は僅かに外反。	外面 赤絵で施文。飛、李等の七つの文字がかすかに見える。	焼き継ぎ痕、焼き継ぎ路あり。
512	11E 木樋検出時	染付磁器	小碗	高台は細く低く、「ハ」の字状に外方に開く。全体に薄手に成形。特に底部の器壁は厚い。体部 僅かに内傾。口縁部 僅かに外反。	外面 やや濃い呉須で草花文、内面薄障り文施文。	焼き継ぎ痕あり。近世後半～近代
513	11E 木樋検出時	染付磁器	面子	底部の器壁は非常に厚い。	色調 青灰を帯びた灰色。外面 淡い呉須で施文。	肥前系くらわんか手。18C後半。
514	2E下層 枕列 検出時	施釉陶器	楕	高台は比較的細く低い。高台の形は端正。	外面に鉄片で松葉文を施文の後、内・外面とも 透明釉施釉。淡黄褐色に発色。	
515	11E	無釉陶器	楕木鉢	平底。体部は直線的に外上方へ延びる。口縁部は水平方向に折り曲げる。	粘土中に粗砂を少量含む。	
516	2E 中層 (洪水層) 褐色砂	土師器	皿	回転台を使用して成形。底部の器壁は非常に厚い。体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は丸味をもつ。	内・外面とも横ナテ調整。	
517	2E 中層 (洪水層) -15~35cm	土師器	皿	薄手に成形。口縁部に煤が多量に附着。	小破片の為 調整の詳細は不明。	
518	2I区 IIIa・IIIb 足跡 土壌層、洪水層	土師器	焙烙	口縁部 僅かに内傾。	内・外面とも煤附着。小破片の為、調整の詳細は不明	
519	2I区 IIIa (土壌層)、IIIb (洪水層) 足跡 (OP+ 40~--30cm)	土師器	焙烙	体部僅かに内傾。口縁部端外気味。	体部外面 僅かに斜方向の印き目が見える。小破片の為、詳細は不明。	16C後半~17C前半。
520	2I区 中層 (洪水層) -15~35cm	土師器	楕	凸帯状の帯をもつ。羽葉形縁。	帯は上下を狭くナゲることにより成形。小破片の為 調整の詳細は不明。	16C代。
521	2I区 中層 (洪水層) 褐色砂 (-15cm)	須恵器	皿	平底。体部は直線的に斜め上方にのびる。口縁部は丸味をもつ。	器面の摩耗が著しい。	東播系。12C後半~13C前半。
522	2I区 中層 (洪水層) 褐色砂 (-15cm)	無釉陶器	楕鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部 縦面三角状に僅かに肥厚。口縁部外面 凹線2条。	内面 口縁部下に凹部をもつ。内面7.5cm単位の横目をクシ状工具で施文。内面 灰泥漿を塗布。	丹波系。17C前半。
523	2I区 IIIa (土壌層)、IIIb (洪水層)	無釉陶器	鉢	口縁部 内側に僅かに肥厚。	外面 灰泥漿を塗布。内・外面とも灰被り。内・外面 指頭圧痕が残る。	丹波系。
524	2I区 中層 (洪水層) 褐色砂 (-15cm)	無釉陶器	楕鉢	平底。体部は直線的に斜め上方へ延びる。	体部内面 5条1単位の横目施文。底部内面 同心円状の横目施文。	焼成は非常に堅緻。丹波系。18C代以降。
525	2I区 東半部土壌層	施釉陶器	鉢	口縁部 外反。口縁部端は上方につきまみ上げる。	外面 灰釉施釉 淡青綠色に発色。内面 灰釉施釉の後、刷毛状工具で白濁施釉。	肥前系(刷毛目磨津)。18C前半。

No	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
526	21区 中層洪水砂層 褐色砂	施釉陶器	皿	底部と体部の界 僅かに屈曲。口縁部内面に浅い凹部を持つ	内・外面とも 灰緑施釉。淡褐色に染色。	肥前系(清津溝段皿)。17C前半。
527	21区 中央北下層 褐色砂層	青磁	瓶	高台は幅が広く、比較的低い。	体部外面 青磁施釉。淡褐色に染色。内面 底部外面 露胎 淡灰色に染色。	酸化炎の強い焼成不良の青磁。
528	21区 III a・III b (土壌層、洪水層) 足跡	白磁	皿	口縁部は尖り気味に収める。	内・外面とも 透明施釉。乳白色に染色。内・外面とも 虫喰いが認められる。	12C後半～13C前半の華南産白磁。
529	21区 東平部土壌層	青磁	皿	内面の口縁部と体部の界に浅い段を有する。口縁端部は尖り気味に収める。	内・外面とも 青磁施釉。淡青灰色に染色。底部内面 蛇ノ目状跡ハギ。	形造・輪調からみて肥前系。
530	21区 III a・III b (土壌層、洪水層) 足跡	青花磁器	碗	体部 僅かに内傾。口縁部 外反。	色調 やや青味を帯びた白色。文様外面 界線2条 草花文。内面 界線2条。	明青花 16C後半。
531	21区 III b層 (洪水砂)	染付磁器	皿	口縁部 外反。口縁端部は壓押し技法で菊花状に成形。	文様 外面 節略化された唐草文。内面 界線1条 草花文。	
532	21区 中層 (洪水層) 褐色砂 (-15cm)	染付磁器	皿	薄手に成形。口縁端部は尖り気味に収める。	文様 暗灰色。内面 界線1条。	肥前系初期伊万里。17C前半。
533	21区 III b層 (洪水砂)	染付磁器	皿	高台は比較的幅が広く、低い。高台登付きに砂附着。	文様 淡くやや風干り状で 内面に界線1条 草花文 施文。	肥前系初期伊万里。17C前半。
534	21区 中央北下層 褐色砂層	白磁	菓子	高台は断面方形で幅が広く、低い。	高台隆まで施釉。乳白色に染色。高台裏付以下 露胎。淡灰色に染色。	13C前期の華南産白磁を転用した菓子。
535	21区 III b層 (洪水砂)	瓦	九瓦	鋪瓦。		瓦趾。
536	21区 III b層 (洪水砂)	瓦	平瓦	平瓦片。		
537	21区 III b層 (洪水砂)	石器	礫石	花崗岩製。表面は平滑。		
538	3IK S D01-S 第6層	土師器	皿	回転台を使用。平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味。	色調 明赤褐色。口縁端部 黒附着。底部外面 未調整。糸切り痕。	
539	3IK S D01 第9層下層	土師器	皿	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁端部 黒附着。色調 淡赤褐色。	
540	3IK S D01-S 第5層 (貝層)	土師器	焙烙	平底。底部と体部の界 大きく屈曲。体部 やや内傾。	色調 暗赤褐色に染色。胎土中、砂粒を多く含む。	型造り成形。
541	3IK S D01-N 第4層 (火災層)	土師器	焙烙	平底。体部と底部の界はほぼ垂直。体部 やや内傾。口縁部は丸味をもつ。	内・外面とも ナガ調整。器面は平滑。口縁部上面 穿孔1ヶ所。	型造り成形。
542	3IK S D01 第4層 (火災層 (F))	土師器	焙烙	平底。体部と底部の界はほぼ垂直。体部 やや内傾。口縁部は丸味をもつ。	内・外面とも 横ナガ調整。底部外面未調整。	型造り成形。
543	3IK 第4層 (火災層)	土師器	火鉢	板状粘土を貼り合わせて成形。四隅に浅い凹部をもつ。	器面の摩耗が著しく、潤飾が著しい。内面 黒附着。	
544	3IK S D01-N 第4層 (火災層)	土師器	焙烙	粘土紐巻き上げ成形。平底。体部は斜め上方へ立ち上がる。	体部内面 指頭圧痕。体部外面の潤飾が著しい。	
545	3IK S D01-S 第5層 (貝層)	土師器	蓋	型造り成形。口縁部は花弁状に成形。	上面に梅花文及び菊花文を壓押しして施文。元來は施釉されていたが、現在は釉は全て剥離。つまみは穿孔。底部外面に凹部。	ミニチュア茶室の蓋
546	3IK S D01-1 第1層 (黄褐色中砂)	無釉陶器	椀鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	口縁部外面 凹線2条。口縁部内面 白線1条。体部内面 9条1単位位の横H施文。	堺・明石産鉢鉢。18C以降。
547	3IK S D01-S 第5層 (貝層)	施釉陶器	碗	口縁部 外反。口縁端部は丸味を帯びる。	口縁部内面-外面 灰緑施釉。暗赤褐色に染色 (いわゆる煎餅)	丹波系。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
548	3Ⅰ区 S D01畦 第4層 (火災層)	施釉陶器	甕	体部は内脣。頸部は短く直立。口縁部上面は水平に成形。	内面 灰釉施釉。淡緑色に発色。外面 鉄釉施釉か? 口縁部上面に磨きによる凹線。	丹波系。
549	3Ⅰ区 S D01畦 第4層 (火災層)	施釉陶器	花器	平底。体部は直立。口縁部は短く直立。	口縁部横2ヶ所 把手の附け付け痕あり。体部上面に1ヶ所 注口の貼り付け痕跡あり。外面の体部上面まで鉄釉施釉。体部下半以下 露胎。	底部外面 未調整、余切り痕。水匙形の花器? 丹波系
550	3Ⅰ区 S D01-S 第6層	無釉陶器	罍鉢	平底。体部は直立。口縁部は水平に切る。	体部外面 鉄泥塗布。胡麻状の灰吹き。底部外面には鉄泥塗を施せず。	丹波系。
551	3Ⅰ区 S D01畦 第7層	施釉陶器	蓋	蓋し垂状に成形。中央部に球を押しつぶした形のままをもつ。	外面 自然釉がかかる。内面 露胎。	
552	3Ⅰ区 S D01-N 第5層 (貝層)	施釉陶器	蓋	薄い円盤状に成形。内側に凸帯を1条廻らせる。	外面に重ね焼き痕あり。	丹波系。
553	3Ⅰ区 S D01-S 褐色中砂	施釉陶器	碗	体部は内脣。口縁部は尖り気味に取める。	内・外面とも白濁で波状文風の文様を施文したのち、灰釉施釉。	刷毛目唐津と似るが差相は不明。
554	3Ⅰ区 S D01畦 第5層 (貝層)	施釉陶器	皿	高台は幅が広く 比較的低い。又三ヶ月高台風に開け出す。底部の器壁は非常に厚い。体部は内脣。	内・外面とも 灰釉施釉。淡緑緑色に発色。高台部以下露胎。底部内面 蛇ノ目状輪ハギ。	肥前系 (唐津)。17C後半。
555	3Ⅰ区 S D01-S 第5層 (貝層)	施釉陶器	皿	高台は幅が広く 比較的低い。体部は内脣気味に斜め上方に立ち上がる。口縁部 外反。波状に成形。	内・外面とも 鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。高台部以下露胎。底部内面 蛇ノ目状輪ハギ。	肥前系 (唐津)。17C後半。
556	3Ⅰ区 S D01畦 第8層 (貝層)	施釉陶器	皿	高台は比較的細く高い。	内・外面とも 透明釉施釉。内面 釉裏下に鉄釉施釉。内面 ハリ支え痕	
557	3Ⅰ区 S D01-N 第1層 (貝層)	白磁	紅皿	高台は低く小さい。型造り成形。外面に放射線状の花弁を入れる。	内面一口縁部外面まで透明釉施釉。外面の体部下半以下露胎。	肥前系。
558	3Ⅰ区 S D01畦 第4-5層	白磁	紅皿	高台は低く小さい。型造り成形。外面に放射線状の花弁を入れる。	内面一口縁部外面まで透明釉施釉。外面の体部以下 露胎。胎線部は557に比べやや灰味を帯びる。	肥前系。
559	3Ⅰ区 S D01-S 第5層 (貝層)	白磁	小碗	高台は比較的幅が広く 低い。器口は水平に切る。体部は内脣。口縁部は尖り気味に取める。	内・外面とも 透明釉を施釉。やや青味を帯びた乳白色に発色。高台器口の縁はカキ取る。	
560	3Ⅰ区 S D01畦 第5層 (黄褐色土)	白磁	小碗	体部は内脣。口縁部は僅かに外反。全体に薄手に成形。	内・外面とも 透明釉施釉 輪のノリは不良。	
561	3Ⅰ区 S D01-S 第4層 (火災層)	染付青磁	鉢	高台は浅い斜ノ目型高台。体部は直立。口縁部上面は水平に切る。	外面の口縁部～高台まで 青磁釉施釉。高台部は透明釉施釉の後 蛇ノ目状輪ハギ。	肥前系
562	3Ⅰ区 S D01畦 第4層 (火災層)	染付磁器	碗	体部は内脣。口縁部は尖り気味に取める。	外面 青花文・斜格子文。内面 青花文・斜格子文。	焼成は軟質。肥前系。
563	3Ⅰ区 S D01-S 第5層 (貝層)	染付磁器	碗	高台は僅かに外方に踏らばる。体部内脣。口縁部 尖り気味に取める。	色調 やや青味をおびた灰色。外面やや深い青味で面取り文、界線2条 (界線は途中で途切れる)。	肥前系。
564	3Ⅰ区 S D01-S 第5層 (貝層)	染付磁器	碗	口縁部は尖り気味に取める。	色調 やや青味を帯びた灰色。文様 外面 浅い貝須で二重割目文。内面 深い貝須で一重割目文。	口縁部は突変して黒色化する。肥前系。
565	3Ⅰ区 S D01-S 第5層 (貝層)	染付磁器	碗	高台は細く低い。底部の器壁は非常に厚い。体部の器壁は薄く、口縁部は尖り気味に取める。	文様 外面 門に青花文、界線2条。内・外面とも灰吹き。	肥前系。
566	3Ⅰ区 S D01畦 第9層 (黒下層砂)	染付磁器	碗	高台は細く比較的高い。体部は僅かに内脣。口縁部は尖り気味に取める。底部の器壁は非常に厚い。	色調 青味を帯びた灰色。文様 外周 草花文 (梅花文) 界線2条。底部外面 (高台部) 界線1条 不明文。	肥前系くらわんか手。18C後半。
567	3Ⅰ区 S D01-N 第4層 (火災層)	染付磁器	碗	体部 内脣。口縁部は尖り気味に取める。	色調 青味を帯びた灰色。文様 外面 コニヤク印で青花文施文。貝須の発色は淡い。	肥前系くらわんか手。18C前半。
568	3Ⅰ区 S D01-S 第5層 (貝層)	染付磁器	碗	高台は細く比較的高い。体部は内脣。口縁部は尖り気味に取める。	文様 外面 松、竹、梅文施文。松のミニコニヤク印 界線2条。貝須の発色は淡い。	肥前系くらわんか手。18C後半。

No	出土遺構	類別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備 考
569	3IK S D01 - S 第6層	染付磁器	碗	高台は細く高い。体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。底部の器壁は非常に厚い。	釉のノリが重く、虫喰いが目立つ。文様 外面 草花文(梅花文) 界線2条。	肥前系くらわんか手。18C後半。
570	3IK S D01畦 第5層(黄褐色土)	染付磁器	碗	薄手に成形。口縁端部は尖り気味に収める。	文様 外面 細い草花文。内面 菱彩文。	清刺青花の写しか?
571	3IK S D01 - N 下層(黄褐色中砂)	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部は内彎。口縁端部は尖り気味に収める。	文様 外面 草花文(松葉文)。内面 界線2条。底部内面 界線1条・草花文。	焼成があまりく、陶器質。酸化共焼成が強い。
572	3IK S D01 - N 第4層(火災層)	染付磁器	碗	体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	文様 外面 松竹梅文 蓮弁文 界線1条。内面 菱彩文。底部内面 界線2条 松竹梅文。	惣惣品。瀬戸・美濃系。
573	3IK S D01 - N 第4層(火災層)	染付磁器	碗	高台は比較的細い。体部は内彎。口縁端部は尖り気味に収める。全体に薄手に成形。	文様 外面 菊化文? 龍巻状文・界線2条。内面 菱彩文。底部内面 界線2条。	
574	3IK S D01 - S 第4層	染付磁器	杯	高台は比較的細く低い。平底。体部は直線的に外上方へ延びる。口縁部 僅かに外反。	色調 青味を帯びた灰白色。呉須の発色は淡い。文様 外面 草花文 界線3条。	高台兼付に砂附着。瀬戸・美濃系。
575	3IK S D01畦 第5層	染付磁器	蕎麦置口	高台は細く低い(形が形骸化し僅かな突起状)。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	文様 外面 草花文・界線2条。	焼き跡が顕著あり。
576	3IK S D01畦 第3層(黄褐色中砂)	染付磁器	碗	体部 直立。口縁部上面は水平に切る。	文様 外面 草花文。内面 菱彩文。	
577	3IK S D01 - S 1・2層(下) (褐色中砂)	染付磁器	皿	高台は幅が広く低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。底部の器壁は非常に厚い。	文様 内面 淡い呉須で2重線の新橋子文。界線2条。底部内面 龍ノ目状輪ハギ。	肥前系粗製磁器。18C前半。
578	3IK S D01 - S 第4層	染付磁器	皿	高台は幅が広く低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	文様 内面 淡い呉須で、草花文・界線2条。底部内面 龍ノ目状輪ハギ。	肥前系粗製磁器。18C前半。
579	3IK S D01 - N 最下層	染付磁器	皿	高台は幅が広く低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 内面 退化した草花文。	肥前系粗製磁器。18C前半。577、578に比べて更に粗製。
580	3IK S D01 - S 第4層	染付磁器	皿	高台は幅が広く比較的低い。体部は内彎。口縁端部は尖り気味に収める。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 外面 唐草文 界線3条。内面 草花文。	肥前系くらわんか手。18C後半。
581	3IK S D01畦 第4層(火災層)	染付磁器	皿	高台は幅が広く低い。底部の器壁は厚い。	底部内面に唐津風の文様を配する。	焼成温度が低く、生焼け状態。肥前系。
582	3IK S D01 - S 1・2層(下) (褐色中砂)	染付磁器	仏飯具	ややあけ底気味の平底。短い脚部は直立。体部は内彎。口縁端部は尖り気味に収める。	色調 灰白色。文様 外面 草花文。	脚部の整形が粗い粗製品。肥前系。
583	3IK S D01 - N 第4層(火災層)	染付磁器	瓶	高台は幅が広く比較的低い。体部は大きく内彎。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 外面 松葉文。内面 露筋。	肥前系。
584	3IK S D01 - N 第4層(火災層)	瓦	軒丸瓦	巴文軒丸瓦。巴の尾は非常に長い。	焼瓦	
585	3IK S D01畦 第5層	瓦	軒丸瓦	巴文軒丸瓦。巴の尾は非常に長い。	焼瓦	
586	3IK P1 茶褐色砂質土	瓦	軒平瓦	唐草文軒平瓦。		焼成が酸化共焼成で、茶赤褐色に発色。
587	4IK S E01 第5層	土師器	焙烙	型造り成形。平底。体部 直立。体部と底部の界はほぼ直立。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも 横ナメ調整。	全面に紫附着。
588	4IK S E01 堀り方	土師器	火舎	平底。形骸化した隅ノ全脚部を貼り付け。体部は直立。口縁部上面はほぼ水平に切る。	内・外面とも 縦板ナメ調整。	
589	4IK S E01 堀り方	無釉陶器	鉢鉢	口縁部は上下に拡張して縁帯を形成。口縁部外面に沈線2条、内面 凹線1条。	内面に9条1単位の間隔施文。	焼成はやや軟質。珪・卵石産物。

No	出土遺構	類別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
590	4I区 S E 01 掘り方	施胎陶器	鉢	口縁部 外方に水平に折り曲げ。	内・外面とも 鉄釉施釉の後 刷毛で白泥を施釉。	肥前系(刷毛目唐津)。17C後半～18C前半
591	4I区 S E 01 0～50cm	染付磁器	碗	高台は細く比較的高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎。口縁部は丸味をもつ。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 外面 草花文 界線3条。	肥前系くらわんか手。18C後半。
592	4I区 S E 01 0～50cm	染付磁器	蕎麦麦口	体部 直立。口縁部は丸味を帯びる。	文様 濃緑で 外面 界線1条・胡唐草文・界線1条。内面 菱形文。	肥前系。18C代。
593	4I区 S F 01 掘り方	瓦	丸瓦	上面に瓦釘穴穿孔。	溝瓦。	
594	4I区 S K 17 黄褐色磁砂	無胎陶器	播体	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成。口縁部外面 凹線2条。内面 凹線2条。	体部内面に12条1単位の節目。内・外面とも鉄泥線を塗布。	溝・明石系播体。18C後半以降。
595	4I区 S K 03	施胎陶器	葉	平底。体部は内彎。頸部は短く直立。口縁部は肥厚。	外面 鉄釉施釉の後、胡麻状に灰張り。内面・底部外面は基本的に塗釉。	形造は唐津系葉と類似する。
596	4I区 S K 03	無胎陶器	急須	平底。体部は大きく内彎。口縁部は短く直立。全体に薄手に成形。	体部上面に中空の円筒状の把手を貼付。把手に彫りあり。	煎茶器。
597	4I区 S K 03 灰層	施胎陶器	花瓶	平底。体部は大きく内彎。頸部は直立。口縁部は大きく外反。口縁部は外方につまみ出す。	頸部下面に縦管を貼付け。青銅器の彫りに成形。口縁部内面～体部外面の上半まで、鉄釉施釉。肩部は灰釉施釉。外面の体部下半以下 塗釉。	底部外面に唐草あり。丹波系。
598	4I区 S K 13 N-セクション	施胎陶器	徳利	体部 内彎。頸部 直立。口縁部は玉縁状に肥厚。	外面 鉄釉施釉。一部 灰張り、銀化する。	丹波系。近代以降。
599	4I区 S K 02 南半	施胎陶器	碗	高台は細く低い。体部は内彎。口縁部外反。	内・外面とも 灰釉施釉。暗緑色に染色。高台部のみ彫釉。一部 白泥施文。	近代以降。
600	4I区 S K 03	施胎陶器	碗	体部 内彎。口縁部僅かに外反。	内・外面とも 灰釉施釉。淡黄緑色に染色。外面の高台部以下 彫釉。	
601	4トレンチ 東殿治土坑 (S K 1) 下層	施胎陶器	碗	幅が広く比較的端正な高台。体部は僅かに内彎。口縁部は丸味をもつ。	外面 鉄釉で施文の後、内・外面とも透明珪酸塩釉 刷灰色に染色。外面の高台部以下 彫釉。	高城風。
602	4I区 S K 03	施胎陶器	皿	型造り成形。高台は細く低く、径も小さい。体部は緩やかに外上方へ延び、口縁部は水平方向に折り返す。	口縁部は型押し成形により、波状に成形。内・外面とも 灰釉施釉。淡黄緑色に染色。器面に細かい貫入。	瀬戸・美濃系のひだ皿。19C前半以降。
603	4I区 S K 17 黄褐色磁砂	赤絵磁器	角皿	型造り成形。口縁部 水平に外方に折り返す。	体部内面に赤絵で草花文施文。	
604	4I区 S K 03	瓦質土器	羽釜	体部は大きく内彎(半鐘形状)。体部中央に断面長方形の脚を貼付。口縁部直立。口縁部上面シャープに面取り。	外面 ヘラミガキにより平滑に仕上げる。	脚物の基部を写し。
605	4I区 S K 06 セクション	染付磁器	小碗	高台は比較的細く高い。体部は内彎。口縁部は僅かに外反。	文様 外面 馬ノ目文・界線2条・不明文。内面 界線2条・不明文。	瀬戸・美濃系。19C前半以降。
606	4I区 S K 02 南半 掘り方	染付磁器	小碗	高台は細く高い。体部は僅かに内彎。口縁部は外反。	文様 外面 太い界線1条 草花文(芭蕉文?) 界線1条。内面 太い界線・界線1・2条。底部内面 草花文。底部外面 角印。角印の染色は濃い藍色。	瀬戸・美濃系。19C前半以降。
607	4トレンチ 東殿治土坑 (S K 1) 下層	染付磁器	碗	体部はほぼ直線的に外上方へ延びる。口縁部は丸味をもつ。	文様 外面 界線1条・一直線目文を輪飾化した斜格子文・界線2条。内面 環線に用文・界線1条。	肥前系。19C前半以降。
608	4I区 S K 03	染付磁器	碗	高台は細く高い。体部はほぼ直線的に外上方へ延びる。口縁部は僅かに外反。口縁部は尖り丸味に収める。底部の器壁は非常に厚い。	文様 外面 界線1条 一直線目文を輪飾化した斜格子文・界線4条。内面 輪くずれた青海波状文・界線1条。底部内面 不明文。	肥前系。19C前半以降。
609	4I区 S K 03	染付磁器	碗	高台は細く高く 外方に開く。外側は内彎。口縁部は丸味をもつ。全体に薄手に成形。	文様 外面 細かい草花文 牡丹文 蓮弁文 界線4条。内面 菱形文 界線2条。底部内面 松竹文。	金塗で焼き締ぎ度あり。プロポーションは京焼風。高級品。肥前系。
610	4I区 S K 02 南半 掘り方	染付磁器	皿	高台は幅が広く低い。絶ノ目凹形高台。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は型押し成形により波状に成形。	高台裏面に絶ノ目状横ハギ。文様 外面 銅版手により唐草文・界線2条。内面 銅版手による 蓮かい草花文・松竹梅文等を施文。呉染の染色は濃い藍色。	近代以降。

No	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
611	4I区 S K 08 下層	染付磁器	蓋	上面のつまみは欠落。身との接合部の釉はつきり。	文様 外面 胡荽草文・界線2条。呉須の発色は黒味をおびた濃い藍色。	焼き過ぎ痕あり。内面に「井ノ」の焼き過ぎ痕あり。
612	4I区 S K 03	染付磁器	香炉	高台は平底高台。さらに脚を3ヶ所附付。体部は大きく内彎。頸部は狭かく、口縁部は水平方向に折り曲げる。	外面 呉須で不明文施文。内面及び高台裏は露胎。	
613	4I区 S K 02 南半 漆味層	瓦	軒丸瓦	巴文。	襷瓦。	
614	4I区 (西区) S K 01より西第1面検出時	土師器	埴輪	型造り成形。体部は直立。腰部と体部の界はほぼ直角。	体部外面 横ナテ調整。	
615	4I区 (西地区) S K 01より西第1面検出時	染付磁器	皿	高台は幅が広く低い。体部は僅かに内彎して、外上方へ延びる。口縁端部は尖り丸味に収める。	文様 外面 不明文。内面 コンニヤク印押で草花文施文。	肥前系。18C前半。
616	4I区 (西地区) S K 01より西第2面検出時	染付磁器	皿	高台は幅が広く低い。体部は僅やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味を帯びる。底部の器壁は非常に厚い。	文様 内面 草花文? 底部内面 蛇ノ目状様八平。	肥前系粗製磁器。18C前半。
617	4I区 (西地区) S K 01より西第1面検出時	染付磁器	碗	高台は幅が広く比較的高い。体部は僅かに内彎。口縁端部は丸味を帯びる。底部の器壁は非常に厚い。	色調 青味を帯びた灰色。文様 外面 草花文・界線3条。底部外面 (高台裏) 界線1条・漢字文。内面 界線2条。底部内面 コンニヤク印押で五弁花文。焼き過ぎ痕あり。	肥前系くらわんか手。18C後半。
618	4I区 S K 01内 S X 01 粗土	無釉陶器	様木鉢	平底。体部は直線的に外上方へ延びる。口縁部 外方へ水平に折り曲げる。	底部中央 1ヶ所穿孔。外面 圓転ナテ調整。外面 消線状に灰被り。	丹波産。
619	4I区 S X 02瓦列	瓦	平瓦		内・外面とも 板ナテ調整。襷瓦。	
620	4I区 S X 02瓦列	瓦	平瓦		内・外面とも 板ナテ調整。襷瓦。	
621	4I区 東半部 砂層 第2面機械掘削	無釉陶器	甗鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。内面の口縁部と体部の界に低い段をもつ。口縁端部 斜め方向に切る。	体部 外面に指頭圧痕あり。内面 鉄泥塗布。10cm1單位の裡目施文。	丹波系。
622	4I区 東半部土層	青磁	鉢	平底。外面は蛇ノ目凹形高台風に成形。体部は波形的に斜め上方に延びる。口縁部は外反。型押しにより波状に成形。	内・外面とも 青磁釉施林。淡青緑色に染色。底部外面 (高台裏) は 蛇ノ目状様八平。	肥前系。18C後半以降。
623	4I区 西セクション	染付磁器	皿	高台は幅が広く低い。体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。全体に器壁は厚い。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 外面 唐草文・界線3条。底部外面 界線1条。内面 草花文・雲流に虫文・界線2条。	肥前系くらわんか手。18C後半。
624	4I区 精査	染付磁器	小碗	高台は幅が広く低い。前面は長方形で兼付の幅が広い。体部は僅かに内彎。口縁部は外反。底部の器壁は厚い。	文様 外面 幾何学文・界線2条。内面 不明文・界線2条。底部内面「太化年製」施。	瀬戸・美濃系。19C前半。
625	4I区 第3面 緩下層 砂層	瓦	面子	瓦片を打ち欠いて周縁を調整して作った面子。一部周縁を残す。		
626	4I区 精査精査	瓦質土器	面子	火鉢あるいは香炉片を再利用して作った面子。表面に型押しした刷文が残る。		
627	4トレンチ 中 尖下層砂	瓦	軒丸瓦	巴文軒丸瓦。珠文13。巴の尾は長い。	襷瓦。	
628	5トレンチ 中 尖下層砂	瓦	軒丸瓦	巴文軒丸瓦。珠文15。巴の尾は非常に長い。	襷瓦。	
629	4I区 S D 01	無釉陶器	土管	型作り成形。内面に布目匠痕。	外面 ヨコ方向のナテ調整。一部タテ方向のナテ。接合部の内面 丁寧な圓転ナテ調整。漆喰の痕跡が残る。色調 灰表 明赤褐色。火痕 暗赤褐色。	
630	4I区 S D 01	無釉陶器	土管	型作り成形。内面に布目匠痕。	外面 不定方向のナテ調整。内面 布目・縦柱痕あり。接合部の内面 圓転ナテ調整。漆喰の痕跡が残る。色調 黒褐色。	
631	表探	無釉陶器	土管	型作り成形。内面に布目匠痕。	外面 ヨコ方向のナテ後。タテ方向のナテ。接合部の内面 圓転ナテ調整。漆喰の痕跡が残る。色調 暗赤褐色。	内面の布目匠痕顕著。火痕は生焼け

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
632	51区 S D01	無胎陶器	土管	型作り成形。内面に布目圧痕。	外面 ヨコ方向のナデ、一部ナデ方向のナデ。絞線部の内面 回転ナデ調整。漆味の痕跡が残る。色調 緑な黒褐色。	
633	41区 S D01	無胎陶器	土管	型作り成形。内面に布目圧痕。	絞線部の内面 丁寧な回転ナデ調整、一部 灰被り 光沢を帯びる。	
634	51区 S K01 埴	土師器	焙烙	型作り成形。平底。体部は直立。底部と体部の界はほぼ直角。	内・外面とも 回転ナデ調整。口縁部上面～体部上位にかけて斜め方向に穿孔。	
635	51区 S K01 茶色粗砂混土	施釉陶器	埴	高台は増正な輪高台。	内・外面とも 施釉。淡黄色に発色。高台部以下磨治。	底部内面に火ぶくれあり。肥前系京焼風陶器。
636	51区 S K03	施釉陶器	鉢	平底高台。体部は内彎。口縁部は水平に外方に折り曲げる。	内面 全面 灰釉? 施釉。暗黒褐色に発色。外面 火變状に灰被り 施釉。	備前系。
637	51区 S K01 (検出時) 茶色砂土	白磁	碗	高台は比較的高い。底部と体部の界は大きく垂直。体部 直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	内・外面とも 透明釉を施釉。灰白色に発色。	瀬戸・美濃系の段付日目に形態が類似。
638	51区 S D01-N 積茶(底)	土師器	皿	平底。体部は緩やかに外方へ延びる。回転台使用か? 糸切り痕不明瞭。器壁は全体に非常に厚い。	口縁部内・外向 回転ナデ調整。	外面 焦附着。
639	51区 S D02-S 茶色土	土師器	皿	回転台使用。平底。体部は緩やかに外方へ延びる。口縁端部は丸味を帯びる。器壁は全体に非常に厚い。	内・外面とも 回転ナデ調整。	外面 全体に焦附着。底部外面 未調整。糸切り痕。
640	51区 S D01-N 積茶(底)	土師器	皿	回転台使用。平底。体部は緩やかに外方へ延びる。口縁端部は丸味を帯びる。器壁は全体に非常に厚い。	内・外面とも 回転ナデ調整。	口縁部に僅かに焦附着。底部外面 未調整。糸切り痕。
641	51区 S D01-N 積茶(底)	土師器	焙烙	口縁部は僅かに肥厚。口縁端部は丸味を帯びる。	内・外面とも 洗高装を施すか? 口縁部上面に滑解状に灰附着。	
642	51区 S D01-N 茶色土	土師器	焙烙	浅い丸底。体部は直立。口縁部は外方に肥厚。玉粒状に成形。器壁は全体に厚い。	口縁部外面に2箇所 外耳をつける為、粘土を盛り付け、耳の部分のみ取り。口縁部上面 穿孔。	底部外面に焦附着。
643	51区 S D01-S 茶色土	土師器	焙烙	丸底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部 直立。口縁端部は丸味を帯びる。	口縁部内・外向に強いナデ調整。外面の底部と体部の界 ヨコ方向のへう割り調整。	底部内面及び外面全面に焦附着。
644	51区 S D01-N	土師器	焙烙	型作り成形。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。体部の器壁は厚い。	内・外面とも 回転ナデ調整。器面を平滑に仕上げる。	外面 焦附着。特に底部に多量に附着。
645	51区 S D01	土師器	焙烙	型作り成形。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直立。口縁端部は丸く収める。	内面～体部外面まで回転ナデ調整。底部外面 未調整。	外面 焦附着。
646	51区 S D01	土師器	焙烙	型作り成形。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面まで回転ナデ調整。底部外面 未調整。	外面 焦附着。
647	51区 S D02-N	土師器	皿あるいは碗	回転台使用。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	器面の筆線が著しく調整の跡は不明。	
648	51区 S D01	土師器	煎壺	平底。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。	内・外面とも 回転ナデ調整。体部外面に指頭圧痕。底部外面 未調整。糸切り痕。	
649	51区 S D01	無胎陶器	播鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張。縁帯を形成する。口縁部外面 凹線2条。口縁部内面 凹線1条。	体部内面に9条1単位の指目施文。外面 新泥塗塗布。	堺・明石産播鉢。18C前半以降。
650	51区 S D01	無胎陶器	播鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張。縁帯を形成する。口縁部外面 凹線2条。口縁部内面 凹線1条。	体部内面に13条1単位の指目施文。色調 暗赤褐色に発色。外面 刷灰状に灰被り。	焼成は非常に堅硬。備前系。
651	51区 S D01検出時	染付磁器	皿	高台は幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味を帯びる。	高台の割り出しは粗く、高台裏中央部がト巾状に残る。色調 やや青味を帯びる灰白色。文様 内面に陶繪化された草花文? 底部内面 鋭ノ目状輪八平。外面の高台部以下 磨治。	肥前系唐津製磁器。18C前半。
652	51区 S D01 埴	施釉陶器	皿	高台は幅が広く比較的低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	高台の割り出しは粗く、高台裏中央部がト巾状に残る。内面～外面の体部上半まで刷釉施釉。淡黄緑色に発色。外面の体部下半以下 磨治。底部内面 鋭ノ目状輪八平。	肥前系(唐津緑釉陶)。18C前半。

No	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
653	51区 S D01-S 茶色土	施釉陶器	鉢	高台は細く高い。体部は内壁気味に斜め上方に立ち上がる。口縁端部は玉縁状に肥厚する。	外面 鉄釉(暗茶褐色に染色)施釉の後、白目を刷毛塗りする。外面の高台以下 露胎。露胎部は暗赤褐色に発色。	厩前系(雨毛目唐津鉢)。18C前半。
654	51区 S D01-N 茶色土	染付青磁	碗	高台は幅が広く比較的高い。体部は内壁。口縁端部は尖り気味に収める。底部の器壁は非常に厚い。	外面 青磁施釉種。底部外面(高台兼)は染付、渦巻文を描く。内面は染付斜格子文・界線2条。底部内面 コンニャク印判で五弁花文施文。	厩前系。18C中頃～後半。
655	51区 S D01	染付青磁	碗	高台は比較的高い。体部は内壁。口縁端部は尖り気味に収める。底部の器壁は比較的厚い。	外面 青磁施釉種。淡い青色に染色。底部外面(高台兼)は染付 渦巻文を描く。内面は染付 斜格子文・界線2条。コンニャク印判で五弁花文施文。	654と器形・文様構成は同じ。青磁種の色調が相違する。厩前系。18C中頃～後半。
656	51区 S D01	染付磁器	杯	高台は低い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。口縁端部は尖り気味に収める。	文様 外面 松葉文。	
657	51区 S D01-N 茶色土	染付磁器	小碗	体部は内壁。口縁端部は丸味をもつ。	文様 外面 二重縦目文施文(劃筆)。内面 一重縦目文施文。	厩前系。
658	51区 S D02陸	染付磁器	碗	全体的に薄手に成形。体部は僅かに内壁。口縁端部は尖り気味に収める。	文様 外面 界線2条、草花文。	
659	51区 S D02-N	染付磁器	碗	体部は僅かに内壁。口縁端部は尖り気味に収める。	色調 やや青味を帯びた灰白色。文様 外面 竹に松葉文・界線1条。	厩前系くらわんか手。18C後半。
660	51区 S D01-N 茶色土	染付磁器	蕎麦猪口	体部 直立。口縁端部は丸味を帯びる。	色調 やや青味を帯びた灰白色。文様 外面 竹に松葉文・界線1条。	厩前系。19C前半。
661	51区 S D01-N 精査(底)	染付磁器	碗	高台は比較的細い。体部は内壁。口縁端部は丸味を帯びる。底部の器壁は比較的厚い。	色調 灰白色。底部内面 蛇ノ目状縁ハギ。文様 外面 草花文。典須の発色は非常に淡い。	厩前系くらわんか手。18C代。
662	51区 S D01陸	染付磁器	碗	高台は比較的細い。底部の器壁は非常に厚い。口縁端部は尖り気味に収める。	色調 青味を帯びた白色。文様 外面 透筆で梅花文・界線3条。底部内面 蛇ノ目状縁ハギ。	厩前系くらわんか手。18C後半。
663	51区 S D01横出時	白磁	皿	高台は低い。底部の器壁は非常に厚い。口縁端部は尖り気味に収める。口縁端部は丸味をもつ。	色調 灰色。外面の高台端以下 露胎。底部内面 蛇ノ目状縁ハギ。	厩前系粗製磁器。18C前半。
664	51区 S D01	染付磁器	皿	高台は幅が広く低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は僅かに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調 青味を帯びた灰色。文様 内面 斜格子文・界線1条。	高台畳付に鉄釉附着。厩前系粗製磁器。18C前半。
665	51区 S D02-S	染付磁器	皿	体部は内壁。口縁端部は尖り気味に収める。底部の器壁は厚い。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 外面 透筆、豆彩で唐草文・界線1条。内面 山水文。	厩前系。
666	51区 S D01	瓦	軒丸瓦	巴文軒丸瓦。珠文数 13。巴の尾は長い。	棟瓦。	
667	51区 S X02(下層) 木質層	土師器	皿	回転台使用。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。底部の器壁は非常に厚い。	内・外面とも 回転ナデ調整。底部外面 未調整、未切り肌。	底部外面に探附者。
668	51区 S X02(下層) 木質層	土師器	焙烙	平底。底部と体部の界は丸味をもつ。体部 直立。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも 横ナデ調整。	
669	51区 S X02 池・溝	土師器	焙烙	体部 内傾。口縁端部は尖り気味に収める。	内・外面とも 横ナデ調整。	
670	51区 S X02(下層) 木質層	瓦質土器	火舎	体部は内壁。口縁端部は水平に切る。	内・外面とも 回転ナデ調整。	
671	51区 S X02 池・溝	土師器	竈竈	体部はほぼ直立。口縁部は外反。水挽きロクロ成形。	内・外面とも 回転ナデ調整。色調 淡黄灰色。	
672	51区 S X02 池・溝	土師器	竈竈	水挽きロクロ成形。平底。体部はほぼ直立。	内・外面とも 回転ナデ調整。	
673	51区 S X02 池・溝	土師器	竈竈	水挽きロクロ成形。平底。体部はほぼ直立。	内・外面とも 回転ナデ調整。底部外面 未調整、未切り肌。	
674	51区 S X02(下層) 木質層	瓦質土器	火舎	口縁部外面に凹形の連続浮文・捺文を貼付。	内・外面とも 回転ナデ調整。	

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備 考
675	51区 S X 02 池・溝	施釉陶器	罎鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は内側に厚浮。	体部内面 クシ描きの罎目。内・外面とも 鉄粒施釉。口縁部に灰被り。	胎土中に砂粒を含む。瀬戸・美濃系。
676	51区 S X 02 (下層) 木質層	無釉陶器	罎鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	色調 赤赤褐色。体部内面に横方向の罎目。	焼成 堅緻。胎土精良。瀬戸焼 Y 期。16 C 代。
677	51区 S X 02 上層 (木質層 まで)	無釉陶器	罎鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は斜め方向に切る。	口縁部 内面に凹部をもつ。体部内面 3条1單位の罎目施文。内・外面とも 灰泥塗布。	胎土中に砂粒を含む。丹波系。
678	51区 S X 02 (埋砂1) 池・溝	無釉陶器	罎鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部 斜め方向に拡張し、断面 三角形状に成形。	内面の口縁部下に凹部をもつ。体部内面 6条1單位の罎目施文。胎土中に砂粒を含む。	内面 灰被り。丹波系。
679	51区 S X 02 池・溝	無釉陶器	罎鉢	平底。体部は外反。	底部の外側面 ヘラケズリ調整。内・外面とも 回転ナデ調整。外面 極かに灰被り。	丹波系。
680	51区 (下層) 木質層	施釉陶器	罎	平底。体部は僅かに内彎気味に直上に延びる。	底部の外側面 ヘラケズリ調整。内・外面とも 回転ナデ調整。外面の体部上面 灰濁施釉の後、白濁種施釉。	
681	51区 S X 02 池・溝	無釉陶器	罎	体部へ口縁部にかけて大きく屈曲。口縁部は内縮。口縁部は内側につまみ出す。	内面 回転ナデ。外面 灰被り。	丹波系。
682	51区 S X 02 (下層) 木質層	須恵器	罎	平底。体部は僅かに内彎気味に直上に立ち上がる。	胎土上の輪筋気味が明確に残る。内・外面とも 回転ナデ調整。	胎土中に砂粒を多く含む。
683	51区 S X 02 上層 (木質層 まで)	施釉陶器	碗	体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は尖り気味に収める。	色調 青味を帯びた灰黄褐色。文様 外周 深い矢羽で草花文施文の後、透明釉施釉。	器面に横かに貫入。京焼風の胎土染付。
684	51区 S X 02 池・溝	施釉陶器	碗	口縁部は丸味を帯びる。	内・外面とも 白濁種施釉。釉のノリが悪く、器面に気泡(虫喰い)が目立つ。	
685	51区 S X 02 池・溝	施釉陶器	碗	体部は中位で僅かに屈曲。口縁部は丸味をもつ。	内面に白濁種、口縁部内・外面 灰釉、体部外面 鉄粒の3層をそれぞれ分け分ける。	
686	51区 S X 02 池・溝	施釉陶器	碗	体部は僅かに内彎して直上に延びる。口縁部は尖り気味に収める。	内・外面とも 白濁種 (ナマコ種 釉層は厚い) を施釉。	白濁種は焼成があまり、酸化炭成の為、濁っている。
687	51区 S X 02 (下層) 木質層	無釉陶器	鉢	口縁部上面は水平に面取り。	口縁部内・外面に鉄黄塗を塗布。露出部は明赤褐色に発色。	胎土中に砂粒を多く含む。丹波系。
688	51区 S X 02 (下層) 木質層	施釉陶器	碗	高台は前面長方形の端正な高台。体部は僅かに内彎して外上方へ延びる。	内・外面とも施釉、淡黄褐色に発色。外面の高台部以下 露胎。	肥前系京焼風陶器。
689	51区 S X 02 池・溝	施釉陶器	碗	高台は比較的高く広い。体部は内彎して斜め上方に立ち上がる。底部の器壁は厚い。	内・外面とも 透明種施釉。淡黄褐色に発色。内面に横かに貫入。	京焼風陶器。
690	51区 S X 02 池・溝	施釉陶器	碗	高台は幅が広く内側を斜め方向に削る。体部は内彎して外上方へ延びる。	内・外面とも 透明種施釉、淡黄褐色に発色。内・外面に横かに貫入。	京焼風陶器。
691	51区 S X 02 池・溝	施釉陶器	碗	高台は比較的高い。体部は縦やかに外上方へ延びる。底部の器壁は非常に厚い。	底部外面 (高台裏) 中央をト巾状に削り残す。内・外面とも 施釉を施釉、暗黄緑色に発色。	肥前系 (唐津種施釉)。18 C 前半。
692	51区 S X 02 上層 (木質層 まで)	施釉陶器	皿	高台は非常に低い。	内面 白濁種施釉の後、灰濁施釉。内面に胎土目跡 1ヶ所。外面の高台部以下は露胎。	瀬戸・美濃系灰種粗。
693	51区 S X 02 池・溝	施釉陶器	皿	高台は狭く粗く削り出す。体部は縦やかに斜め上方に立ち上がる。底部外面 (高台裏) 中央をト巾状に削り残す。	内面 白濁種を濃く施釉、ネズミ色に発色。胎土の色調 暗赤褐色。外面は露胎。内面 砂目跡 1ヶ所。	肥前系 (唐津)。17 C 前半。
694	51区 S X 02 上層 (木質層 まで)	施釉陶器	皿	高台は狭く低く削り出す。底部の器壁は厚い。底部外面 (高台裏) 中央をト巾状に削り残す。	胎土の色調は赤褐色。内面に薄く灰釉を施釉、暗緑灰色に発色。外面の高台部以下 露胎。底部内面 砂目跡3ヶ所。	肥前系 (唐津)。17 C 前半。
695	51区 第1面検出時	施釉陶器	皿	高台は幅が広く比較的低い。体部は僅かに内彎して外上方へ延びる。口縁部は尖り気味に収める。	内・外面とも 透明種施釉、暗緑色に発色。外面の高台部以下露胎。底部内面 縦ノリ状痕ハナ。	肥前系 (唐津種施釉)。18 C 前半。
696	51区 S X 02 池・溝	施釉陶器	鉢	体部 僅かに内彎。口縁部は丸味をもつ。	胎土の色調 暗赤褐色。内面 白濁種を、下位は全面に、上位は液状に施釉の後、緑釉を施釉。外周上位は白濁種を液状に施釉、下位は鉄粒あるいは鉄黄塗を施釉。	肥前系 (刷毛目唐津)。18 C 前半。

No	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
697	51区 S X 02 木質層 (下層)	白磁	杯	高台は低く小さい。体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	内・外面とも 透明釉施釉、灰色に発色。	
698	51区 S X 02 (下層) 木質層	染付磁器	皿	体形は内厚。口縁部は尖り気味に収める。	文様 内面 草花文・界線2条。	肥前系(初期伊万里)。17C前半
699	51区 S X 02 池・溝	染付磁器	碗	高台は細く高い。体部は内厚気味に立ち上がる。底部の器壁は非常に厚い。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 外面 淡い呉須で一意目文・界線1条。	器内に虫喰い。肥前系くらわんか手。18C後半
700	51区 S X 02 池・溝	染付磁器	碗	高台は比較的高い。体部は内厚気味に外上方へ立ち上がる。底部の器壁は非常に厚い。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 外面 淡い呉須で界線1条。	器内に虫喰い。肥前系くらわんか手。18C後半
701	51区 S X 02 (下層) 木質層	染付磁器	杯	高台は細く低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。	色調 青味を帯びた灰色。文様 外面 やや黒ずんだ呉須で目文。	肥前系。
702	51区 第1面検出時	染付磁器	碗	高台は幅が広く比較的高い。体部は内厚気味に外上方へ立ち上がる。口縁部は尖り気味をもつ。器壁は厚く、特に底部が厚い。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 外面 丸文、底部外面 口に寿字文か? 内面 斜格子文・界線2条・コンニャク印利で五弁花文。	肥前系くらわんか手。18C後半。
703	51区 第1面検出時	染付磁器	碗	高台は幅が広く比較的高い。体部は内厚気味に外上方へ立ち上がる。口縁部は尖り気味に収める。器壁は底部が特に厚い。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 外面 淡い呉須で草花文・界線3条。底部内面 蛇ノ目状丸八丁。	肥前系くらわんか手。18C後半。
704	51区 S X 02 池・溝	染付磁器	碗	体部は内厚。口縁部 丸味を帯びる。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 淡い呉須で山水文。	
705	51区 第1面検出時 (E)	染付磁器	皿	高台は外側面を斜め方向に削り、細く低い。体部は幾やか外上方へ立ち上がる。口縁部は尖り気味に収める。	色調 灰白色。文様 外面 豆形で磨草文・界線3条。内面 豆形で竹葉文。	器面に貫入が目立つ。焼き筋きざりあり。肥前系
706	51区 S X 02 池・溝	染付磁器	皿	口縁部は尖り気味に収める。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 内面 淡い呉須で草花文。	肥前系くらわんか手。18C後半。
707	51区 S X 02 池・溝	染付磁器	皿	高台は細く低い。底部は平底。体部は幅やかに斜め上方に立ち上がり、体部中央で外方に傾曲。口の腹面に底形する。口縁部は尖り気味に収める。底部の器壁は比較的に厚い。	文様 外面 雲龍文? 界線2条。内面 草花文を矢野手風に描く。	底部外面にハリ支え痕1ヶ所。明代青花の美著手写し。18C後半以降。
708	51区 S X 02 池・溝	染付磁器	皿	高台は幅が広く低い。高台径は口縁径に比べて大きい。体部は幾やか斜め上方に立ち上がる。口縁部は尖り気味に収める。	色調 灰白色。文様 外面 底部外面(高台裏)に界線1条。内面 初期伊万里風の梅花文 施文。	肥前系(初期伊万里)。17C前半。
709	51区 S X 02 池・溝	染付磁器	皿	高台は細く低い。器付は尖り気味。体部は内厚気味に斜め上方に立ち上がる。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 外面 不明文・界線2条・不明文。	肥前系。
710	51区 第1面検出時 (E)	白磁	四耳壺	底部は中央部を浅く削り出し、幅の広い高台をつくり出す。体部は直線的に斜め方向に立ち上がる。	内・外面とも 透明釉施釉。青味を帯びた灰色に発色。底部外面は高拍。外面は丁寧なへり削り仕上げ。	13C代の善南白磁四耳壺の底部。
711	51区 S X 02 上層(木質層まで)	染付磁器	甌子	高台は細く高い。底部の器壁は厚い。	文様 外面 界線2条。器面に貫入。	染付磁器の底部を打ち欠いて作った甌子。
712	51区 S X 02 (下層) 木質層	施釉陶器	甌子	高台は幅が広く高い。	内・外面とも 透明釉施釉。淡黄褐色に発色。器面に細い貫入。	京焼鳳凰脚(肥前系)の底部を打ち欠いて作った甌子。
713	51区 S X 02 (下層) 木質層	瓦	丸瓦	丸瓦の破片。	外面に部印状のヘラ焼きあり。内面に布目正痕。	近世以戲か?
714	51区 第1面検出時	土師器	皿	回転台使用。平底。体部は幾やか外上方へ延びる。口縁部は丸味をもつ。全体に厚手に成形。	内・外面とも 横ナゲ調整。底部外面未調整、糸切り痕。色調は明赤褐色。	器面の割割が著しい。外周 蕉形着。
715	51区 第1面の下	土師器	皿	回転台使用。平底。体部は幾やか外上方へ延びる。口縁部は丸味をもつ。全体に厚手に成形。	内・外面とも 横ナゲ調整。底部外面未調整、糸切り痕。色調 灰褐色。	焼成は堅緻。内面に蕉形着。
716	51区 内半部 第3面 検出時	土師器	皿	回転台使用。平底。体部は幾やか外上方へ延びる。口縁部は尖り気味に収める。底部の器壁は非常に厚い。	内・外面とも 横ナゲ調整。底部外面未調整、糸切り痕。色調 淡赤褐色。	口縁部に蕉形着。
717	51区 第1面検出時	土師器	焙烙	平底。底部と体部の界は大きく皿曲。体部は僅かに内厚。口縁部は丸味を帯びる。	内・外面とも 横ナゲ調整。	内・外面とも 蕉形着。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
718	51区 東1直遺構	施釉陶器	壺	平底。体部は内彎。頸部は短く、直立する。口縁部は僅かに外反。口縁部上縁には凹線1条。	外面の体部上面に斐列しの帯花文貼付。内・外面とも 鉄泥塗。赤褐色に発色。底部外面 鉄釉を薄く刷毛塗。	底部外面に砂目跡 6ヶ所。へう 跡の甚あり。丹波系。
719	51区 西半部 砂層 (-30cm)	土師器	皿	回転台使用。平底。体部は緩やかに外上方へ延びる。口縁端部は丸味をもつ。全体に厚手に成形。	内・外面とも 回転ナデ調整。底部外面 未調整。糸切り痕。	外面に灰附着。
720	51区 西半部 砂層 (-30cm)	土師器	皿	回転台使用。平底。体部は緩やかに外上方へ延びる。口縁端部は丸味をもつ。全体に厚手に成形。	内・外面とも 回転ナデ調整。底部外面 未調整。糸切り痕。	内・外面とも 全面に灰附着。
721	51区 西半部 砂層 (-30cm)	土師器	皿	回転台使用。平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収める。底部の器壁は非常に厚い。	内・外面とも 回転ナデ調整。底部外面 未調整。糸切り痕。色調 淡赤褐色に発色。	内面に灰附着。
722	51区 西半部 砂層 (-30cm)	土師器	楕筒	体部 僅かに内彎。口縁端部は丸味を帯びる。	色調 暗赤褐色。内・外面とも 横ナデ調整。	外面及び底部内面 灰附着。
723	51区 東半部 砂層 E100cm	無釉陶器	楕筒	口縁部は肥厚し、断面三角形に成形。	内面に浅い指摺きの横目を施文。色調 灰白色。葉溝系片口口に類似。	
724	51区 西半部 砂層 (-30cm)	無釉陶器	楕筒	口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部外周 凹線2条。内面 凹線1条。器壁は全体に薄い。	内面 6+a条1単位の横目を施文。内・外面とも 鉄泥塗を塗布。暗赤褐色に発色。	胎土中に砂粒を含む。丹波系。
725	51区 西半部 砂層 (-30cm)	無釉陶器	楕筒	口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部外周 凹線2条。内面 凹線1条。器壁は全体に薄い。	内面 5条1単位の横目施文。内・外面とも 横ナデ調整。	胎土中に砂粒を含む。
726	51区 西半部 砂層 (-30cm)	無釉陶器	壺	体部は内彎。口縁部は玉縁状に肥厚。	内・外面とも ロクロ目が明確に認められる。外面 鉄泥塗(赤土部)塗布。口縁部上縁に灰粉附着。	丹波系。
727	51区 東半部 砂層 ~0.7m	無釉陶器	壺	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	内・外面とも 回転ナデ調整。底部外面は未調整。内・外面とも 鉄泥塗塗布。暗赤褐色に発色。内面 扇状に灰被り。	焼成は極めて遅。焼前E期。16C代。
728	51区 E~(砂層 ~-30cm)	白磁	碗	体部は内彎。口縁端部は尖り気味に収める。	内・外面とも 透明釉施釉。淡緑灰色に発色。酸化炭素成の 所々淡い紅色に発色。	
729	51区 東半部 砂層 (-50cm)	施釉陶器	皿	口縁部は外反、端部を内側に折り込む。	内・外面とも 透明釉施釉。灰色に発色。	折縁皿。
730	51区 西半部 砂層 (-30cm)	施釉陶器	鉢	高台は幅が広く高い。底部は平底。体部は直立。	胎土の色調は暗赤褐色。内・外面とも 鉄泥塗施釉の故、白化斑文。底部内面は蛇ノ目状跡あり。胎土中に腐毛で白泥を薄く散布する。	底部外面(高台裏)は扇状。高台裏付に磁器系(磁土目跡2ヶ所。肥前系 現川橋)。
731	51区 東セクション 砂層 (-50cm)	染付磁器	皿	高台は幅が広く低い。高台径は口径に比べて小さい。体部は緩やかに外上方へ延びる。口縁端部は尖り気味に収める。底部の器壁は厚い。	文様 外面 界線1条。内面 界線1条 帯花文 界線2条。底部内面 草花文? 施文。	器面に粗い貫入。高台裏付に磁器系。肥前系(知馬伊万里)。17C前半。
732	51区 西半部 砂層 (-30cm)	瓦	面子		焼瓦	瓦を打ち欠いて作った面子。
733	51区 東半部 砂層 (-30cm)	無釉陶器	面子		色調 暗茶褐色。外面 扇状に灰被り。	焼前焼垂を打ち欠いて作った面子。
734	51区 西半部 砂層 (-30cm)	瓦	軒丸瓦	唐草文軒平瓦。	色調 暗灰色。器面の磨滅が著しい。	焼成はあまい。
735	61区 SE02 廻り方 砂 白色	施釉陶器	急須	急須の底の一部。底部は薄く、赤け底風に成形する。	内面 鉄釉施釉。外面 露胎。	
736	61区 SE02 井筒内埋土	染付磁器	皿	高台は幅が広く低い。体部は緩やかに外上方へ立ち上がる。底部の器壁は厚い。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 外面 唐草文 界線3条。底部外面(高台裏) 界線1条 帯花文 界線2条。内面 草花文 界線2条。コンニャク印判で五弁花文。	肥前系くらわんかん手。18C後半。
737	61区 第1層 SK01	染付磁器	蕎麦箸口	体部 直立。口縁端部は尖り気味に収める。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 外面 斜格了文・平截帯花文。内面 界線2条。	肥前系。19C前半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
738	6トレンチ 下層溝 (S D 01) 茶褐色砂	施釉陶器	皿	体部は僅かに内彎して外上方へ延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 白濁釉を深く施す。高台脇以下露胎。内面 銅緑釉施す。暗緑色に発色。蛇ノ目状横ハギ。	肥前系(唐津緑線器)。18C後半。
739	6トレンチ 下層溝 (S D 01) 茶褐色砂	染付磁器	面子	高台は極が広い。体部は外上方へ延びる。底部の器壁は厚い。	色調 青味を帯びた白色。文様 外面 草花文・界線2条。	肥前系くらわんか手。18C後半。面子として再利用。
740	61区 S X01 堀り 方	施釉陶器	皿	内面の底部と体部の界に段をもつ。体部は着眼的に斜め上方に立ち上がる。口縁部は外側に折り上げ、内面に1条の凹線が通る。	内・外面とも 灰釉施す。乳白色に発色。	肥前系(唐津緑線器)。17C後半。
741	61区 水河田 洪水砂	無釉陶器	指鉢	体部は直線的に外上方へ延びる。口縁部は上下に拡張、尿管をつくる。	口縁部に1ヶ所 注口をつくる。内面7条1単位位の窪目を施文。色調 暗赤褐色に発色。	豊前徳島期。15C代。
742	61区 第2面検出時 砂層中	無釉陶器	指鉢	口縁部外面 強い横ナデにより凹部をもつ。口縁部上面 斜め方向に切る。	内・外面とも 回転ナデ調整。	
743	61区 第2面検出時 砂層中	施釉陶器	碗	体部は外上方に立ち上がり、体部中位で廻軸して直立する。口縁端部は外方に僅かに折り曲げる。	内・外面とも 灰釉施す。暗灰白色に発色。外面の体部下以下露胎。露胎部 洗赤褐色に発色。	肥前系(唐津釉)。17C前半。
744	61区 第2面検出時 砂層中	施釉陶器	皿	体部は直線的に外上方へ延びる。口縁端部は外方に折り曲げ、内面に1条の凹部をもつ。	内・外面とも 灰釉施す。暗灰白色に発色。外面の体部下以下露胎。	肥前系(唐津緑線器)。17C前半。
745	61区 第2面検出時 砂層中	染付磁器	碗	体部は内湾。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 外面 淡い呉須で一重網目施文。	肥前系。
746	61区 水田。 黄灰色中粗砂	施釉陶器	碗	高台は平底高台を浅く粗く削り出す。底面内面中央部に凹面をもつ。	内・外面とも 施す。淡暗灰緑色に発色。高台臺付に5ヶ所の砂目跡あり。	肥前系。
747	61区 第2面検出時 砂層中	無釉陶器	面子		内・外面とも 磨減により器面は平滑。	丹波系磁器目を打ち欠いて作った面子。
748	61区 1-F26	土製品	ミニチュア ユア壺	回転台使用?体部は大きく内湾。口縁部は外方にひらく。	外面 横ナデ調整。底面外面 未調整、赤切り直。	
749	71区 S E02 堀り 方 ~100cm	無釉陶器	皿	丸底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収める。全体に器壁は厚い。	口縁部内・外面に鉄泥装を施す。暗赤褐色に発色。	口縁端部に煤附着。灯明足として使用。肥前系。
750	71区 S E07 井筒内	土師器	蓋	上面 扁平。全体に器壁は厚い。	内・外面とも 横ナデ調整。	火消器の蓋。
751	71区 S E02 堀り 方 ~100cm	土師器	胡瓶	体部は直立。口縁部は僅かに外反。粘土紐巻き上げ成形。	内・外面とも 粘土紐の輪縁面が明確に観察されつる。内・外面とも 横ナデ調整。	
752	71区 S E02 堀り 方	無釉陶器	指鉢	口縁部は上下に拡張して尿管を形成。口縁部外面に凹線2条。内面の体部と口縁部の界に凹部あり。内面 7条1単位位の窪目あり。	内・外面とも 鉄泥塗布。全体に薄手に成形。	胎中に砂粒を多く含む。
753	71区 S E05 井筒内	施釉陶器	壺	体部は僅かに内彎して、ほぼ直上に延びる。頸部は短く直立。口縁部は左右に拡張して薄部は丸く納める。	内・外面とも 全面に鉄泥塗(赤土器)施す。口縁部内面~体部外面に鉄釉(鉛釉)施す。黒褐色に発色。	内面にロクロ目が見られる。丹波系。
754	71区 S E02 井筒内10cmまで	施釉陶器	皿	高台は低い。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収める。底部の器壁は厚い。	内・外面とも 灰釉施す。暗灰色に発色。底部内面 蛇ノ目状横ハギ。高台臺付~高台裏は露胎。器面に虫喰いが目立つ。	肥前系(唐津)。18C前半。粗製の塩部皿に形跡・技法が類似する。
755	71区 S E03 堀り 方	施釉陶器	皿	筒が広く低い高台を軽く削り出す。高台側面は竹筒状を呈す。体部は緩やかに外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。底部の器壁は厚い。	内面~外面の体部上半 銅緑釉施す。明青緑色に発色。外面の体部下以下露胎。底面内面 蛇ノ目状横ハギ。高台裏は土巾状に削り残す。	肥前系(唐津緑線器)。18C前半。
756	71区 S E01 堀り 方	染付磁器	碗	高台は比較的幅広い。体部は内彎気味に外上方へ延びる。口縁端部は尖り気味に収める。底部の器壁は非常に厚い。	色調 青味を帯びた灰白色。釉のノリは非常に悪い。文様 外面 淡い呉須で草花文 界線1条。	肥前系くらわんか手。18C後半。
757	71区 S E02-W	染付磁器	碗	体部は内彎気味に外上方へ延びる。口縁端部は尖り気味に収める。底面の器壁は非常に厚い。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 外面 淡い呉須で草花文 界線3条。高台裏 磨れた文字で「大明年製」施。	肥前系くらわんか手。18C後半。
758	71区 S E03 (~20cm)	白磁	碗	体部は内彎気味に外上方へ延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	内・外面とも 透明釉施す。灰白色に発色。	

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備考
759	71区 S X02 土砂混り層	施釉陶器	鉢	体部は内埴気味に外上方へ延びる。口縁部は大きく加蓋して外反する。	内面～体部外面上半まで 鉄種釉施の、白濁釉施。	肥前系(唐津鉢)。18C前半。
760	71区 S X01	土師器	灯明皿	平底。体部は直線的に外上方へ延びる。口縁端部は水平に切る。口縁部内面に1ヶ所把手状のものを貼り付け(破損)	内面に僅かに透明釉附着。明赤褐色に発色。	いわゆる特徴的灯明皿。
761	71区 S X02	染付磁器	徳利	体部は内埴。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 青海波文・一重罫目文。	肥前系。
762	71区 S X02 (S E 15の埋り方) 砂層	白磁	碗	高台は細く高い。底部の器壁は厚い。	内・外面とも 白色に発色。	白磁の高台を打ち欠いて作った面子。
763	71区 Eセクション 黄褐色粗砂層	土師器	皿	平底。体部は緩やかに外上方へ延びる。口縁端部は尖り気味に収める。器壁は全体に厚手に成形。	内・外面とも 横ナゲ調整。底部外面未調整。赤切り痕。	
764	71区 西2部 第2面 検出時 粗砂 タタキ 面	土師器	皿	平底。体部は緩やかに外上方へ延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	内・外面とも 横ナゲ調整。底部外面未調整。へう切り痕。(器面磨減のため詳細不明)	
765	71区 下層の砂	土師器	焙烙	口縁部 僅かに内埴。端部は丸味を帯びる。	内・外面とも 横ナゲ調整。体部外面下半には本末平打タタキか?	16C後半～17C前半。
766	71区 Nセクション (下層) E 砂層	土師器	鍋	体部は直立。外面の口縁部下に断面三角形の比較的しつかりとした筋を貼り付け。口縁部 僅かに内埴。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内・外面 濃いヨコナゲ調整。体部外面に斜め方向の平行タタキ目。	15C代の羽釜形鍋。
767	71区 第4面検出時 砂層	無釉陶器	壺	口縁部は肥厚し、上下に延びた形。	内・外面とも 横ナゲ調整。	備前焼初期。15C代。
768	71区 Eセクション 第2面土壌層検 出時 明黄褐色粗砂 層	施釉陶器	小碗	高台は幅が広く、低く細く張り出す。体部は内埴。口縁部は僅かに外反。	内・外面とも 化粧土塗布の後、白濁釉施。外面の高台部以下は白濁釉は掛からない。	内面に強い貫入。
769	71区 遺構面精査	施釉陶器	皿	高台は幅が広く高い。平底。体部は緩やかに外上方へ立ち上がり、中位で屋高し外方にひろく。口縁端部は尖り気味に収める。	口縁部は整押しにより輪花状に彫形。内・外面とも 長石釉施。乳白色に発色(志野釉の産き) 器面に貫入あり。	瀬戸・美濃系ひだ。19C前半。
770	71区 1・2面土壌層 Wセクション	施釉陶器	鉢	体部と口縁部の界は屈曲して、口縁部は外方にひろく。口縁端部は斜め上方に僅かにつまみ出す。	内・外面とも 灰釉施の後、内面に刷毛で白濁釉、緑釉を横方向に施施。	肥前系(刷毛目唐津)。18C前半。
771	71区 第3面までの砂 (西層) 重機掘り時	施釉陶器	鉢	高台は幅が広く低い。張り出しは比較的短し。体部は緩やかに外上方へ立ち上がる。	内面 灰種釉施の後、部分的に白濁釉、緑釉を施す。外面 露胎 器面に砂目施。	肥前系(明毛目唐津)。18C前半。
772	71区 第3面検出時 砂層	青磁	皿	体部は緩やかに外上方へ延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	内・外面とも 青磁釉施。藍青緑色に発色。 器壁は厚い。外面 若干灰被り。	肥前系。
773	71区 下層の砂	青磁	鉢	体部は僅かに内埴。口縁部は外反。	内・外面とも 青磁釉施。藍青緑色に発色 器壁は厚い。外面 若干灰被り。	龍泉系青磁。いわゆる天龍寺手で14C代の製品。
774	71区 Nセクション (上部) E 第2面土壌層 (下)	染付磁器	杯	高台は比較的細い。体部は直線的に外上方へ延びる。口縁部は外反。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 外面 舞鶴1条 草花文 界線2条。	高台受付に砂附着。肥前系。
775	71区 第2面検出時 粗砂 タタキ 面	白磁	皿	体部は内埴気味に外上方へ延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	内・外面とも 透明釉を厚く施す。釉のノリが悪く器面に粘り、虫喰いが観察される。底部内面 虎ノ目状灰ハズ。	華南産白磁。
776	71区 Nセクション (下層) E 砂層	染付磁器	皿	体部は直線的に外上方へ延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 内面 淡い只須で草花文施文。	津州産。17C初葉。
777	71区 Wセクション 第2面下 砂層	染付磁器	皿	幅が広く浅い高台を重く削り出す。底部の器壁は非常に厚い。	色調 青味を帯びた灰白色。文様 内面 淡い只須で草花文施文。	高台受付は赤褐色に発色。砂附着。器面に虫喰い。津州産。17C初葉。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備 考
778	71区 東2面検出時 砂層	鉛釉陶器	甕子	高台は浅い内側り高台。	内面 鉄褐色輪、暗赤褐色に発色。胎土の色調 淡黄褐色に発色。	瀬戸・美濃天目茶碗を打ち欠いて作った甕子。
779	71区 Eセクション 下砂層	無釉陶器	甕子		色調 暗赤褐色に発色。	備後地の裏腹を打ち欠いて作った甕子。
780	10トレンチ 火灰層中央	染付磁器	甕	高台は脚が広く低い。体部は内側りして外上方へ延びる。口縁部は丸味を帯びる。底部の器壁は非常に厚い。	色調 青味を帯びた灰色。文様 外面 深い共須で草花文 昇龍3条。底部内面 蛇ノ目状輪ハギ。	肥前系くらわんか手。18C後半。
781	水道場 A区	鉛釉陶器	土甕	ややあげ蒸気味の平底。体部は直線的に外上方へ立ち上がり下位で屈曲。内側り気味に直上へ延びる。口縁部は直立。	体部外面にカンナ刮り痕あり。内・外面とも 鉄粒磁釉。底部外面は露胎内磨き。体部上面にツル掛け2ヶ所注口1ヶ所を貼付。	鉄底写しの土甕。焼成は非常に堅緻。
782	31区 S D01-N 第4層 (火灰層)	土製品	人形	人形の前半部 後半部をそれぞれ型造りし、中央部で貼り付ける。底部外面に穿孔1ヶ所。同型造り。	台座は六角形 遺存 衣文等を細かく描写 表面の彩色は全て剥落。	菩薩像。
783	31区 S D01-S 第4層 (火灰層)	土製品	人形	手づくね成形。	外向 丁寧に着き、器向は平滑。彩色は全て剥落。	着物を着た女性の胸部か。
784	31区 S D-01畦 第5層	土製品	人形	型造り成形 片型。背面は平坦。	手は中央部で合掌する。彩色は全て剥落。	菩薩像。壓押し仏。
785	31区 西ゴイ穴	土製品	人形	型造り成形 両型。前半部と後半部をそれぞれ型造り成形し、中央で貼り合わせる。	底部外面 穿孔1ヶ所。裾をもち、襷をつけた人物。彩色を僅かに留める。底部外面に穿孔1ヶ所。	
786	41区 S K17 真砂層	土製品	動物形	型造り成形 両型造り。左半部と右半部をそれぞれ型で作る、中央部で貼り合わせる。	耳はさし込み。巻物は貼り付け後、嵌着。底部外面に穿孔1ヶ所。彩色は全て剥落。	巻物を嵌めた狐像
787	31区 S D01畦 第4～5層	土製品	人形	型造り成形 おそらく両型。内部は中空。薄手に成形。	目は瞳孔。カンナ状工具で毛髪を表現。彩色は全て剥落。	金太郎像。
788	41区 摩輪寺時地	土製品	人形	型造り成形 片型。	背面は指オキエ。彩色は全て剥落。	胡人あるいは思比寿像。
789	21区 東平部 土灰層	土製品	土鉢	端面一部欠落。	外面 ナメ調整。	挑造りの土鉢。
790	21区 3a層 (土灰層) 3b層 (洪水層) 足跡 (OP+40～30cm)	土製品	土鉢	端面一部欠落。手づくね成形。	色調 火灰 褐色発色 火灰 暗赤褐色。外面 ナメ調整。	
791	21区 中里層 (洪水層) (-15～35cm)	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡赤褐色。外面 ナメ調整。	
792	41区 S D01より東 第1面検出時	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡黄灰色。外面 ナメ調整。	
793	41区 東平部 検出時 砂層 第2面	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡黄灰色、一部煤附着。外面 ナメ調整 器面 平滑。	
794	41区 東平部 検出時 砂層 第2面	土製品	土鉢	手づくね成形。端面一部欠落。	色調 煤附着、黒灰色に発色。外面 ナメ調整 器面に指での整形痕が残る。	
795	41区 東平部 検出時 砂層 第2面	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡赤褐色。外面 ナメ調整。	
796	41区 S D01より西 第1面検出時	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 煤附着、黒灰色に発色。外面 ナメ調整。	
797	41区 第3面 兼下層 砂層	土製品	土鉢	手づくね成形。端面一部欠落。	色調 火灰 淡赤褐色 火灰 暗赤褐色。外面 ナメ調整。	焼成は堅緻。

No.	出土遺構	類別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備 考
798	4 I 区 東半部 検出時 砂層	第2面 土製品	土鉢	手づくね成形。端面一部欠落。	色調 明赤褐色に染色。外面 ナテ調整。	
799	4 I 区 S K13	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 煤が附着して暗灰色。外面 ナテ調整。	
800	4 I 区 第3面 最下層 砂層	土製品	土鉢	手づくね成形。両端とも端面は欠落。	色調 淡黄灰色。外面 ナテ調整。	胎土中に細砂を含む。
801	4 I 区 東半部 検出時 砂層	第2面 土製品	土鉢	手づくね成形。器底の一端が中程で折れたものを再加工して使用。	色調 淡赤褐色。外面 ナテ調整、やや平滑に仕上げる。	
802	5 I 区 西半部 検出時 砂層	第3面 土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡赤褐色。外面 ナテ調整、凹凸が著しい。	胎土中に細砂を含む。指造りの土鉢。
803	5 I 区 西半部 検出時 砂層	第3面 土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 火灰 淡赤褐色 火裏 茶褐色。外面 ナテ調整、凹凸が著しい。	指造りの土鉢。
804	5 I 区 S D01 (S) 赤色土	土製品	土鉢	手づくね成形。端面は一部欠落。	色調 淡黄褐色。外面 ナテ調整、平滑に仕上げるが凹凸が認められる。	指造りの土鉢。
805	5 I 区 西半部 精査時	第2面 土製品	土鉢	手づくね成形。中央で欠損。	色調 淡黄褐色。外面 ナテ調整、器面は平滑に仕上げる。	
806	5 I 区 西半部 精査時	西端 土製品	土鉢	手づくね成形。中央で欠損。	色調 淡黄褐色。一部に煤附着。外面 ナテ調整。	
807	6 I 区 第2面検出時 砂層	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡赤褐色。外面 ナテ調整、器面は平滑に仕上げる。	
808	6 I 区 第2面検出時 砂層	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 暗赤褐色。外面 ナテ調整、器面は平滑に仕上げる。	焼成は堅緻。
809	6 I 区 S X01 張り方	土製品	土鉢	手づくね成形。側面一部欠損。	色調 淡黄褐色。一部煤附着。外面 ナテ調整。	焼成は堅緻。
810	6 I 区 水田1・2間 黄灰色中粗砂	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡赤褐色。外面 ナテ調整、平滑に仕上げる。	焼成は非常に堅緻。
811	6 I 区 第2面検出時 砂層	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡黄灰色。外面 ナテ調整、器面は平滑に仕上げる。	焼成は堅緻。
812	7 I 区 第3面検出時	土製品	土鉢	手づくね成形。端面の一端は一部欠損。	色調 淡赤褐色。外面 ナテ調整、器面は平滑に仕上げる。	
813	7 I 区 東セクション 第2面土壌層	土製品	土鉢	手づくね成形。端面は両端が一部欠損。	色調 淡赤褐色。一部煤附着。外面 ナテ調整、器面は平滑に仕上げる。	
814	7 I 区 第2面土壌層検出時 明黄褐色粗砂層	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡赤褐色～暗赤褐色まで火掻状に染色。外面 ナテ調整、器面は平滑に仕上げる。	焼成は非常に堅緻。
815	7 I 区 第2面下の砂検出時	土製品	土鉢	手づくね成形。端面の一端は欠損。	色調 淡赤褐色。外面 ナテ調整、器面に凹凸あり。	
816	7 I 区 第2面下の砂検出時	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡赤褐色。外面 ナテ調整、器面に凹凸あり。	指造りの土鉢。
817	7 I 区 第3面検出時	土製品	土鉢	手づくね成形。器面は両端とも一部欠落。	色調 淡赤褐色。外面 ナテ調整、器面に凹凸あり。	指造りの土鉢。
818	7 I 区 第3面検出時	土製品	土鉢	手づくね成形。器面は両端とも大きく欠損。	色調 赤褐色。外面 ナテ調整、器面に凹凸あり。	焼成は非常に堅緻。指造りの土鉢。

No	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備 考
819	71区 西平部 粗砂 タタキ 煎	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡赤褐色。外面 ナデ調整、器面に凹凸あり。	焼成は堅緻。指造りの土鉢。
820	71区 遺構南縁差時	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡黄灰色。外面 ナデ調整、器面に凹凸あり。	焼成は非常に堅緻。指造りの土鉢。
821	71区 S X02精査時	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡黄灰色。外面 ナデ調整。	焼成はややあまい。
822	71区 S X02	土製品	土鉢	手づくね成形。中央部で折損。	色調 淡黄灰色。外面 ナデ調整、比較的平滑に仕上げる。	焼成は比較的堅緻。
823	71区 第2面下の砂検 出時	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡黄褐色。外面 ナデ調整、一部に凹凸あり。	焼成はややあまい。
824	21区 3a層(土壌層) 3b層(洪水層) 瓦跡(O P+40~30 cm)	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 火表 明赤褐色。火裏 暗赤褐色。	器面の摩滅が著しい。
825	21区 中央北 下層 褐色砂 層	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 暗黄灰色。外面 ナデ調整。	胎土中に砂粒を多く 混える。
826	21区 中層(洪水 砂) (-15~35cm)	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡黄灰色。器面の磨滅が著しい。	
827	21区 中層(洪水 砂) (-15~35cm)	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡赤褐色。外面 ナデ調整、器面は比較的平滑に仕上げる。	焼成は堅緻。
828	31区 第1面検出～砂 層	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 火表 淡赤褐色 火裏 暗赤褐色。器面は凹凸が目立つ。	焼成は比較的あまい。
829	31区 S D01階 第3層 黄褐色 中砂	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡黄褐色。器面の摩滅、剥落が著しい。	
830	31区 S D01階 第3層 黄褐色 中砂	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡赤褐色。器面の摩滅が著しい。	胎土は細かい良質の 粘土。焼成は比較的 堅緻。
831	41区 東平部 第2面 検出時	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡黄灰色。外面 ナデ調整、比較的平滑に仕上げる。	焼成は比較的堅緻。
832	41区 西下層セクシ ョン6層 白色細砂層	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 暗赤褐色。器面の摩滅が著しい。	焼成はあまい。胎土 中に砂粒を多く含む。
833	41区 東平部 第2面 検出時 砂層	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡赤褐色。器面に凹凸あり。	指造りの土鉢。
834	51区 S X02 池・ 溝	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 灰白色。外面 ナデ調整、器面の摩滅が著しい。	胎土中に砂粒を含む。
835	51区 S X02 池・ 溝	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 暗黄灰色。器面の摩滅が著しい。	胎土中に砂粒を多く 含む。
836	51区 S X02 上層(木炭層 まで)	土製品	土鉢	手づくね成形。器面的一端一部欠損。	色調 淡黄褐色。器面の摩滅が著しい。	胎土中に砂粒を含む。
837	61区 第2面検出時 砂層	土製品	土鉢	手づくね成形。端面の一端 欠損。	色調 淡赤褐色。器面の摩滅が著しい。	胎土中に砂粒を含む。
838	61区 第2面検出時 砂層	土製品	土鉢	手づくね成形。	色調 淡赤褐色。器面の摩滅が著しい。	胎土中に砂粒を多く 含む。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調査技法の特徴	備 考
839	7I区 P1	土製品	土鍾	手づくね成形。	色調 淡黄灰色。器面の摩滅が著しい。	焼成はややあまい。一部灰附著。胎土中に砂粒を多く含む。
840	7IK SE01 罎り 方	土製品	土鍾	手づくね成形。	色調 赤褐色。器面の摩滅が著しい。	焼成はあまい。胎土中に砂粒を多く含む。
841	7I区 シエクシオン 所沢褐色粗砂 層	土製品	土鍾	手づくね成形。	色調 赤褐色。器面の摩滅が著しい。	焼成はあまい。胎土中に砂粒を多く含む。
842	7I区 第4面検出時 砂層	土製品	土鍾	手づくね成形。	色調 赤褐色。器面の摩滅が著しい。	焼成は比較的堅硬。胎土中に砂粒を多く含む。
843	7IK 第4面検出時 砂層	土製品	土鍾	手づくね成形。	色調 明赤褐色。器面の摩滅が著しい。	焼成は比較的堅硬。
844	3IK SD01-N 第4層(火災層)	土製品	鑊の羽口 円柱状。		器面は平滑に仕上げる。色調は先端より黒灰色 褐色 灰黄色の順に変化する。	
845	3IK SD01-N 第4層(火災層)	土製品	鑊の羽口 円柱状。		器面は平滑に仕上げる。色調は先端より黒色 にぶい黄橙 にぶい黄褐色 浅黄橙の順に変化する。	
846	3IK SD01-N 第5層(貝層)	土製品	鑊の羽口		器面は平滑に仕上げる。色調は先端より黒 にぶい橙 灰白の順に変化する。	溶融部分は高温の為、ガラス化。
847	4I区 SD01E ス ラック列(F) 砂層	土製品	鑊の羽口 円柱状。		器面は平滑に仕上げる。色調は先端より黒 褐灰 橙 にぶい褐色の順に変化する。	
848	5I区 第1面検出時 (N)	土製品	鑊の羽口 円柱状。		器面は平滑に仕上げる。色調は先端から順に黒褐色 赤褐色 橙の順に変化する。	
849	5I区 第1面検出時 (W)	土製品	鑊の羽口 円柱状。		器面は平滑に仕上げる。色調は先端から順に青黒 赤灰 褐灰 黄橙 橙の順に変化する。	
850	5I区 西手形 第3面検出時	土製品	鑊の羽口		色調は褐灰 橙の順に変化する。	
851	7I区 重機掘削時 SE05 井筒 内	土製品	鑊の羽口 円柱状。		器面は平滑に仕上げる。色調は先端から順に黒灰 灰 にぶい黄橙 橙の順に変化する。	
852	7I区 SE05 井筒 内	土製品	鑊の羽口 円柱状。		器面は平滑に仕上げる。色調は先端から順に黒褐 褐灰 橙の順に変化する。	
853	7I区 SE05 井筒 内	土製品	鑊の羽口 羽口の溶融部。		色調は先端から極端赤褐 橙の順に変化する。	

2. 金属器 (図版92~98 写真図版101~109)

兵庫津遺跡出土の金属器については、C~G区及びI区、またそれぞれの地区に確認調査での成果を加えた資料を各器種別に分類した。以下、C~G区及びI区の順で各遺構毎に記述するが、レイアウトの関係上、遺物の報告番号が前後する、あるいは全国版にばらつくことをご容赦されたい。

・2-N (確認調査)

包含層 (M103,M104,M110,M121,M145)

M103,M104,M110,M121 は鉄製の釘である。M145は鉄製の剃刀であろう。

・9-N (確認調査)

落ち込み (M108,M114,M139,M162) M108,M114,M139は鉄製の釘である。M162は銅製の円板で、用途は不明である。

包含層 (M118,M122,M123,M147)

M118,M122,M123は鉄製の釘である。M147は鉄製の包丁である。

・10-N, 11-N (確認調査)

包含層 (M112,M113,M115,M149)

M112,M113,M115は鉄製の釘である。M149は鉄製で環状をなすものだが、用途不明である。

・12-N (確認調査)

包含層 (M144)

M144は銅製の煙管の吸い口部分である。

・C区

包含層 (M105,M107,M109,M111,M120,M125,M127,M129,M132,M134,M140,M142,M143,M146,M148,M151)

(M153,M154,M155,M156,M158,M159,M160,M163,M164)

M105,M107,M109,M111,M120,M125,M127,M129,M132,M140,M142,M143は鉄製の釘である。M134は鉄製の槌である。M146は鉄製の包丁である。M148は鉄製の槌であろうか。M151は鉄製で、用途は不明である。M153・M154は銅製の釘である。M155は銅製のクランク状に屈曲したもののだが、用途は不明である。M156は銅製の細い棒状のものだが、用途は不明である。M158~M160は銅製の薄板である。M163は銅製の小判である半分が欠損しており、「一両」の文字が見える。M164は銅製の薄板を輪状に加工した飾り金具である。

攪乱 (M150)

M150は筒状を呈し、鉄製と考えられる。用途不明である。

・D区

石垣 (M106,M138)

M106,M138 は鉄製の釘である。包含層 (M124,M128,M130,M135,M138,M141,M152,M165,M166)

M124,M128,M130,M138,M141は鉄製の釘である。M135は鉄製の槌である。M152は銅製の火箸である。

M165,M166 は銅製の薄板を加工した飾り金具である。

・E区

包含層 (M133)

M133は鉄製の槌である。

・F区

SK01 (M116,M117,M119,M126,M131)

M116,M117,M119,M126,M131は鉄製の釘である。

SK02 (M136,M161)

M136は鉄製の釘である。M161は銅製の薄板を筒状に加工した金具である。

包含層 (M137)

M137は鉄製の釘である。

・ A区 (関西電力部分の確認調査)

機械掘削 (M101)

M101は銅製の飾り金具の一部であろうが、用途は不明である。

・ 6 T

洪水砂層 (M7,M15,M77)

M7,M15は鉄製の釘である。M77は銅製の釘である。

・ 1-1区

木樋 (M52,M53,M54,M55,M56,M57)

M52,M53,M54,M55,M56,M57は鉄製の樋である。

・ 1-3区

SD01 (M24,M40,M58 ~M60,M63,M66,M70,M71,M78 ~M89,M96,M99,M100)

M24,M40は鉄製の釘である。M58 ~M60,M80 ~M89は銅線である。M63は銅製煙管の吹口、M66は銅製煙管の火口で、出土時には鉄製の箱に包まれた状態であった。M70は銅製の火箸であろうか。M70は銅製の薄板を折り曲げた金具である。M78,M79は銅製の釘である。M96は銅製の薄板片である。M99は銅製の加工品で、髪飾り等の金具であろうか。M100は銅製の薄板である。の包含層を確認した。黄灰色粗砂の堆積土中からは、比較的多くの瓦・陶磁器類が出土した。

包含層 (M69)

M69は銅製の薄板を加工した金具である。

現代掘削 (M68)

M68は銅製の銅燭たてである。

・ 1-4区

SD01 (M2)

M2は鉄製の釘である。

SD02 (M75)

M75は銅製の釘である。

SE01 (M17,M64)

M17は鉄製の釘である。M64は銅製煙管の火口である。

SE02 (M49)

M49は鉄製の釘である。

SK02 (M12,M61)

M12は鉄製の釘である。M61は銅製煙管の火口である。

SK03 (M37)

- M37 は鉄製の釘である。
- SK06 (M5,M29,M36,M94)
M5,M29,M36は鉄製の釘である。M94 は鉄製品で、柄付の両刃の状況から鋸と考えられる。
- SK06-SK08 (M22,M34,M36)
M22,M34,M36 は鉄製の釘である。SK11 (M65)
M65 は銅製煙管の火口である。
- SK13 (M38)
M38 は鉄製の釘である。
- SK14 (M19)
M19 は鉄製の釘である。
- SK15 (M33)
M33 は鉄製の釘である。
- SK16 (M16)
M16 は鉄製の釘である。
- SK17 (M31)
M31 は鉄製の釘である。
- SX02 (M23)
M23 は鉄製の釘である。
- 包含層 (M102)
M102は銅製で滑車状の金具である。
- ・ I - 5 区
- SD01 (M1,M13,M27,M41,M62,M73,M74,M93,M95,M97,M98)
M1,M13,M27,M41は鉄製の釘である。M62 は銅製煙管の吹口とそれに付設する棒である。M73,M74 は銅製の釘である。M93 は鉄製であるが用途は不明である。M95,M97,M98 は銅製の薄板片で、飾り金具の一部と考えられる。
- SD02 (M8,M20,M45)
M8,M20,M45は鉄製の釘である。
- SK01 (M35)
M35 は鉄製の釘である。
- SK05 (M26)
M26 は鉄製の釘である。
- SX02 (M44)
M44 は鉄製の釘である。
- 包含層 (M32,M35,M42,M72)
M32,M35,M42 は鉄製の釘である。M72 は銅製の釘である。
- ・ I - 6 区
- SE02 (M92)
M92 は鉄製の板である。

SK01 (M47,M91)

M47は鉄製の釘である。M91は鉄製で輪状を呈し、家具等に付設する紐掛け金具と考えられる。

SK02 (M18)

M18は鉄製の釘である。

P23 (M4,M21)

M4,M21は鉄製の釘である。

包含層 (M11)

M11は鉄製の釘である。

・ I - 7 区

SE02 (M39)

M39は鉄製の釘である。

SE02 (M28,M30,M43,M51,M67)

M28,M30,M43,M51は鉄製の釘である。M67は銅製の火箸である。

SX01 (M76)

M76は銅製の釘である。

包含層 (M3,M46,M6,M9,M10,M48,M14,M90,M50)

M3は土壌層出土のもので、鉄製の釘である。

M46は第1面包含層出土のもので、鉄製の釘である。

M6,M9,M10,M48は第2面包含層出土のもので、鉄製の釘である。

M14,M90は第3面包含層出土のもので、鉄製の釘である。

M14は第3～4面包含層出土のもので、鉄製の釘である。

3. 古銭 (写真図版110・111)

・ C～G 区 (M193～M199)

M193は「天保」との銘のある小判である。M194～M199は銅銭である。

・ I 地区 (M186～M192)

M186～M192は銅銭である。

4. 鉄滓 (写真図版112)

・ C, D 区 (M209～M211)

M209～M211はC・D両区の包含層から出土したスラッグである。

5. 木器・木製品 (図版99～106 写真図版113～123)

兵庫津遺跡出土の木器・木製品については、全てⅠ-5区出土のものを図化している。

・SX02

W1は木筒である。表裏に墨書が残るが、銘文は不明である。現存長10.3cm、幅3.1cm、厚さ0.9cmである。

W2は跗である。材質はツゲと考えられる。長さ8.8cm、幅4.5cm、厚さ0.9cmである。

W3は漆器の杯である。内外面は共に赤漆であり、金色の絵付を施す。底部径約47.5cmである。

W4は丸箸である。長さ24.1cm、直径0.7cmである。

W5は丸箸である。現存長13.8cm、直径0.6cmである。

W6は丸箸である。現存長13.0cm、直径0.6cmである。

W7は折敷等の一部と考えられる。長さ31.8cm、現存幅3.1cm 厚さ0.6cmである。

W8は折敷の底板の一部と考えられ、外内面には黒色漆を施す。現存長14.4cm、現存幅4.1cm、厚さ0.6cmである。

W9は折敷の底板の一部と考えられ、外内面には黒色漆を施す。現存長10.7cm、現存幅4.0cm、厚さ0.6cmである。

W10は折敷の側板の一部と考えられ、内面には黒色漆を施す。長さ28.9cm、現存幅6.9cm、厚さ0.6cmである。

W11は折敷の一部と考えられ、一方には黒色漆を施す。現存長12.4cm、現存幅3.0cm、厚さ0.6cmである。

W12は折敷の一部と考えられ、外内面には黒色漆を施す。現存長7.0cm、現存幅3.0cm、厚さ0.5cmである。

W13は折敷の側板の一部と考えられ、外面には黒色漆、内面には赤色漆を施す。現存長14.6cm、現存幅5.0cm、厚さ0.6cmである。

W14は折敷の底板の一部と考えられ、外面には黒色漆、内面には赤色漆を施す。長さ23.2cm、現存幅3.2cm、厚さ0.7cmである。

W15は折敷あるいは三宝台の一部と考えられ、外面には生漆、内面には黒色漆を施す。現存長20.7cm、現存幅3.0cm、厚さ0.5cmである。

W16は折敷の一部と考えられ、一方には黒色漆を施す。現存長8.9cm、幅1.9cm、厚さ0.4cmである。

W17は折敷の底板の一部と考えられ、外内面には黒色漆を施す。長さ16.0cm、現存幅4.6cm、厚さ0.4cmである。

W18は折敷等組物の縁に付く脚の一部と考えられ、一部には生漆が残る。長さ23.9cm、幅2.9cm、厚さ0.7cmである。

W19は折敷等組物の縁に付く脚の一部と考えられ、外内面には黒色漆を施す。長さ21.4cm、幅1.9cm、厚さ0.5cmである。

W20は折敷等組物の縁に付く脚の一部と考えられ、外面には黒色と赤色漆、内面には赤色漆を施す。現存長19.2cm、幅1.6cm、厚さ0.6cmである。

W21は折敷等組物の縁に付く脚の一部と考えられ、外内面には黒色漆を施す。現存長13.5cm、幅1.7cm、厚さ0.7cmである。

- W22は組物の一部と考えられるが不明である。現存長17.0cm、現存幅24cm、厚さ0.9cmである。
- W23は折敷の一部と考えられ、外内面には黒色漆を施す。現存長17.0cm、現存幅4.1cm、厚さ0.6cmである。
- W24は折敷の一部と考えられ、外内面には黒色漆を施す。現存長21.2cm、現存幅3.0cm、厚さ0.6cmである。
- W25は下駄である。後側の歯が欠損する。台木の前には鼻緒をすげる穴が1箇所あり、後側2箇所に穴の痕跡が残る。現存長15.8cm、幅8.0cm、高さ5.7cm、厚さ1.3cmである。
- W26は下駄である。両歯とも遺存し、台木中央部が欠損する。台木の前には鼻緒をすげる穴が1箇所あり、後側2箇所に穴の痕跡が残る。復元長18.5cm、幅9.8cm、高さ2.0cm、厚さ0.8cmである。
- W27は下駄である。前側1/4ほど残存する。台木には鼻緒をすげる穴が1箇所残り、前側の歯が僅かに残る。現存長7.6cm、現存幅6.0cm、高さ1.6cm、厚さ0.6cmである。
- W28は下駄である。後側のみ残存する。台木には後側の歯が僅かに残る。現存長9.5cm、現存幅9.6cm、厚さ1.2cmである。
- W29は下駄である。台木はほぼ完形で断面三角形を呈し、前後の歯は欠損する。台木の前後には鼻緒をすげる穴が計3箇所ある。長さ20.8cm、幅6.6cm、厚さ2.2cmである。
- W30は下駄である。後側が欠損する。台木の前には鼻緒をすげる穴が1箇所あり、後側2箇所に穴の痕跡が残る。前側の歯はやや台形を呈する。現存長8.7cm、幅4.7cm、高さ4.0cm、厚さ1.7cmである。
- W31は下駄の歯である。台形を呈し、台木には幅の狭い脷が付く。現存幅7.9cm、高さ6.2cm、厚さ1.5cmである。
- W32は下駄の歯である。台形を呈し、台木には幅の狭い脷が付く。幅12.0cm、高さ9.2cm、厚さ1.8cmである。
- W33は下駄の歯である。台形を呈し、台木には幅の狭い脷が付く。幅12.4cm、高さ8.0cm、厚さ1.6cmである。
- W34は下駄である。台木はほぼ完形で断面三角形を呈し、前側の歯は欠損する。後側の歯は台形を呈すが、一部欠損する。台木の前後には鼻緒をすげる穴が計3箇所ある。長さ21.5cm、幅8.6cm、高さ9.5cm、厚さ2.8cmである。
- W35は長方形の下駄である。台木は後側が欠損し、断面三角形を呈する。前側の歯は台形を呈すが、一部欠損する。台木の前側には鼻緒をすげる穴が1箇所あり、後側には歯を付ける齧穴が残る。現存長14.8cm、幅7.7cm、高さ4.7cm、厚さ2.9cmである。
- W36は楕円形状の下駄である。台木は後側が欠損し、断面台形を呈する。台木の前側には鼻緒をすげる穴が1箇所ある。現存長12.6cm、幅6.6cm、厚さ2.4cmである。
- W37は楕円形状の下駄である。台木は完形で、断面台形を呈する。歯は台形を呈する。台木の前後には鼻緒をすげる穴が3箇所ある。長さ20.9cm、幅7.1cm、高さ4.8cm、厚さ2.2cmである。
- W38は楕円形状の下駄である。台木は後側のみで、断面三角形を呈する。台木には鼻緒をすげる穴の痕跡が2箇所ある。現存長8.1cm、現存幅6.1cm、厚さ2.4cmである。
- W39は漆器碗である。底部は高台を持ち、口縁部は欠損する。底部径5.0cm、現存高7.0cm。
- W40は漆器碗である。底部はほぼ中実の高台であり、底部のみの残存である。外内面には漆地が残る。底部径約5.3cm、現存高2.6cm。

- W41は漆器碗である。底部は高台を持ち、口縁部は欠損する。底部径約5.2cm、現存高5.7cm。
- W42は漆器碗である。底部は高台を持つようだが、欠損しており不明である。内面に漆が残る。底部現存径5.6cm、現存高1.4cm。
- W43は漆器碗である。体部の一部だが、破片で詳細は不明である。
- W44は漆器碗である。体部の一部だが、破片で詳細は不明である。内面に漆が残る。
- W45は漆器碗である。浅い碗の体部の一部と考えられるが、破片で詳細は不明である。
- W46は漆器碗である。底部は高台を持ち、底部のみの残存である。外面には黒色漆、内面には赤色漆が残る。底部径約6.3cm、現存高1.9cm。
- W47は漆器碗である。浅い碗で、復元完形となる。底部は小振りの高台を持つ。外内面には黒色漆が残る。口径約9.3cm、底部径約4.1cm、高さ約2.3cm。
- W48は漆器碗である。やや浅めの碗で、口縁部が欠損する。底部は僅かに高台を持つ。外内面には黒色漆が残る。底部径約5.4cm、現存高3.9cm。
- W49は漆器碗である。底部は高台を持ち、口縁部が欠損する。部は僅かに高台を持つ。底部径約5.7cm、現存高5.1cm。
- W50は漆器皿である。底部は高台を持たない平底だが、詳細は不明である。内面には黒色漆が残る。底部復元径約10.6cm、現存高1.1cm。
- W51は漆器皿である。底部は高台を持たない平底で、短く立ち上がる口縁部を持つ。内面には黒色漆が残る。復元口径約11.6cm、底部復元径約10.0cm、復元高約1.1cm。
- W52は漆器碗である。浅い碗で、底部は低い高台を持ち、口縁部は欠損する。外面には黒色漆が残る。底部径6.0cm、現存高2.3cm。
- W53は漆器碗である。やや浅い碗で、底部は低い高台を持つようだが、痕跡が残るのみで詳細は不明である。口縁部は欠損する。外内面には黒色漆が残る。現存底部径4.2cm、現存高2.9cm。
- W54は漆器碗である。浅い碗で、底部は低い高台を持つようだが、痕跡が残るのみで詳細は不明である。口縁部は欠損する。外面には黒色漆、内面には赤色漆が残る。現存口径10.8cm、現存底部径4.6cm、現存高2.4cm。
- W55は漆器碗である。浅い碗で、底部は高台を持つようだが、痕跡が残るのみで詳細は不明である。口縁部は欠損する。外内面には黒色漆が残り、朱の絵付を施す。現存底部径5.3cm、現存高1.9cm。
- W56は漆器碗である。体部のみの残存で詳細は不明である。外内面には黒色漆が残る。
- W57は漆器碗である。浅い碗で、底部は高台を持つようだが、痕跡が残るのみで詳細は不明である。外内面には黒色漆が残る。
- W58は漆器碗である。底部は高台を持つが、端部が欠損する。体部以上は欠損する。口縁部は欠損する。内面には黒色漆が残る。現存底部径6.0cm、現存高2.7cm。
- W59は桶の側板である。表面には加工痕が顕著に残り、横断面は内側へ湾曲する。長さ20.0cm、現存幅6.3cm、厚さ0.8cm。
- W60は桶の側板である。表面には加工痕が顕著に残り、横断面は内側へ僅かに湾曲する。長さ16.5cm、現存幅6.5cm、厚さ0.9cm。
- W61は桶の側板である。表面には加工痕が顕著に残り、横断面は内側へ僅かに湾曲する。長さ14.5cm、現存幅6.4cm、厚さ0.9cm。

W62は桶の側板の一部と考えられる。板材の端部には他の材を組み合わせたと思われる痕跡が残る。横断面はほぼ平らである。現存長129cm、幅7.0cm、厚さ0.9cm。

W63は桶の側板である。板材の端部には他の材を組み合わせたと思われる痕跡が残る。横断面は内側へ僅かに湾曲する。長さ15.2cm、現存幅5.4cm、厚さ0.9cm。

W64は桶の側板と考えられる。横断面は僅かに湾曲する。長さ17.5cm、幅5.8cm、厚さ1.0cm。

W65は桶の側板である。板材の端部には他の材を組み合わせたと思われる痕跡が残る。横断面は内側へ僅かに湾曲する。長さ14.0cm、現存幅4.5cm、厚さ0.7cm。

W66は比較的大型の桶の側板と考えられる。表面は加工痕が顕著に残り、板材の上部側面には他の材を組み合わせる為と思われる釘穴のような痕跡が残る。横断面は内側へ僅かに湾曲する。現存長25.6cm、現存幅5.4cm、厚さ1.2cm。

W67は桶の側板である。板材の端部には他の材を組み合わせたと思われる痕跡が残り、一部に漆が付着する。横断面は内側へ僅かに湾曲する。長さ18.5cm、幅4.5cm、厚さ1.1cm。

W68は桶の側板である。表面には加工痕が残り、板材の端部には他の材を組み合わせたと思われる痕跡が残る。横断面は内側へ僅かに湾曲する。長さ16.4cm、現存幅4.2cm、厚さ0.9cm。

W69は曲物の底板である。内面には側板を取り付ける為の穴が2箇所、側面には底板を組む為の穴が2箇所残る。現存長17.4cm、現存幅6.5cm、厚さ1.5cm。

W70は曲物の底板である。内面には仕切り板を取り付ける為と思われる穴が3箇所、側面には底板を組む為の穴が5箇所残る。現存長21.4cm、現存幅5.1cm、厚さ1.1cm。

W71は曲物の底板である。側板を取り付ける為の穴が2箇所残る。一方の面には加工痕が残る。現存長18.4cm、現存幅6.6cm、厚さ0.9cm。

W72は曲物の底板である。側板を取り付ける為の穴が1箇所残る。一方の面には漆が残る。現存長19.2cm、現存幅9.4cm、厚さ0.7cm。

W73は曲物の底板である。側板を取り付ける為の穴が一方に1箇所、もう一方に3箇所残る。一方の面には加工痕が残る。現存長19.6cm、現存幅5.4cm、厚さ0.5cm。

W74は曲物の底板である。側面には底板を組む為の穴が4箇所残る。現存長18.1cm、現存幅7.9cm、厚さ1.6cm。

W75は曲物の底板である。復元径10.8cm、厚さ0.8cm。

W76は曲物の底板である。復元径10.8cm、厚さ0.8cm。

W77は曲物の底板である。内面に黒色漆を施す。復元径7.4cm、厚さ0.6cm。

W78は曲物の底板である。内面には一部焦げが残る。復元径8.0cm、厚さ1.2cm。

W79は曲物の底板である。現存長18.0cm、現存幅6.1cm、厚さ1.2cm。

W80は曲物の底板である。楕円形状を呈す。現存長20.6cm、現存幅5.4cm、厚さ0.6cm。

W81は曲物の底板である。側面には底板を組む為の穴が2箇所残る。現存長18.8cm、現存幅4.8cm、厚さ1.4cm。

W82は曲物の底板である。楕円形状を呈す。組穴が1箇所残る。現存長16.2cm、現存幅3.5cm、厚さ0.5cm。

W83は曲物の底板である。組穴が1箇所残る。現存長14.0cm、現存幅4.5cm、厚さ0.7cm。

W84は曲物の底板であろう。現存長15.8cm、現存幅4.9cm、厚さ0.7cm。

- W85は曲物の底板であろう。現存長10.9cm、現存幅5.2cm、厚さ0.5cm。
- W86は曲物の底板であろう。現存長11.5cm、現存幅6.2cm、厚さ0.7cm。
- W87は曲物の底板であろう。楕円形を呈す。組穴が1箇所残る。現存長7.7cm、現存幅3.4cm、厚さ0.7cm。
- W88は曲物の舞板の一部であろう。両端部には他の材を取り付けた痕跡が残る。横断面はほぼ平らである。現存長13.9cm、現存幅4.7cm、厚さ0.3cm。
- W89は曲物の部材であろう。方形の穴の痕跡が残る。現存長6.8cm、現存幅3.3cm、厚さ1.1cm。
- W90は曲物の部材であろう。一端に凹みを持つ。現存長9.2cm、現存幅3.6cm、厚さ0.4cm。
- W91は曲物の部材であろう。現存長9.0cm、現存幅3.1cm、厚さ0.5cm。
- W92は舟材の転用板材の一部であろう。小孔を1箇所穿つ。長さ7.5cm、幅5.7cm、厚さ2.4cm。
- W93は舟材の転用板材の一部であろう。小孔を4箇所穿つ。現存長14.5cm、現存幅6.8cm、厚さ1.1cm。
- W94は舟の転用板材の一部であろう。現存長42.5cm、現存幅10.8cm、厚さ2.5cm。
- W95は舟の転用板材の一部であろう。方形の孔を2箇所穿つ。現存長32.6cm、現存幅7.6cm、厚さ2.4cm。
- W96は舟の転用板材の一部であろう。方形の小孔を1箇所穿つ。現存長33.4cm、現存幅6.3cm、厚さ1.9cm。
- W97は縄である。現存長18.8cm、厚さ0.9cm。

第5章 まとめ

今回報告した調査地点が所在する神戸市兵庫区西出町一帯は、17世紀後半の兵庫津の状況を克明に描いた『元禄兵庫津絵図』では兵庫津の北端にある方形の入江（内海）のさらに北側に位置している。また、町の内外を区画する湊川の惣門から見ると、北東の郊外にあたり、17世紀後半段階では兵庫津の町の外にあっていたことが分かる。

調査の結果、最も北側のC地区では厚さ100～110cmの遺物包含層が検出されD区へと続いている。この包含層の性格は江戸時代後期の造成土であり、造成時期は出土した遺物から見て、19世紀前半以降と考えられる。また、包含層を除去した状態で、江戸時代後期の湊川右岸の土手の痕と考えられる斜面が検出されている。

続くD区では江戸時代後期に築造されたと考えられる石垣が3基（石垣1～3）、台座1基、江戸時代後期の井戸1基などの遺構が検出されていて、江戸時代後半以降、造成に伴い、何らかの建物が存在していたことが分かる。

E区では石垣が1基（石垣4）、水溜が1基、井戸が2基検出されており、この内、石垣3と石垣4は文久絵図に現れる町割りの道路側溝と対応するものと考えられる。

F区では複数の遺構面が検出され、最上層では井戸、石組遺構、石垣、方形土坑が、中層では畑に伴う畝状遺構が、また、最下層では掘立柱建物を思わせる規則性のある小ピット群、水溜あるいは井戸と考えられる木枠で囲まれる方形土坑が検出されており、いずれも江戸時代後期のものと考えられる。

最も南側に位置するI区では2～4面の遺構面を検出し、耕作に伴う溝、掘立柱建物、竈状遺構、池状遺構、井戸、土坑などが検出されている。所属時期は出土遺物から見て、ほとんどが18世紀後半～19世紀代と考えられるが、I-1区で検出された溝SD01からは17世紀前半代にまで遡る唐津、初期伊万里などの肥前系陶磁器、丹波焼などが出土している。

このような結果から、この付近一帯では17世紀後半代までは兵庫津の町の域外にあったが、18世紀後半以降、町が郊外に拡大するに伴って、この辺りにまで町屋が進出してくる様子が窺われる。

次に、造成土を中心に出土した遺物の中から、町の拡大した時期を決定する上で必要となる土器・陶磁器類及び、遺跡の性格を考える上で、重要と考えられる土製品について、その出土傾向について、若干ふれてみたい。

出土した土器・陶磁器類には、土師器、瓦質土器、無釉陶器、施釉陶器、磁器などが含まれる。

土師器は灯明皿として使用された皿が、内面に透明釉を施すいわゆる柿釉の灯明皿が大部分を占め、I区で出土したものを除き、素焼きのものは少ない。このことは、柿釉の灯明皿が普及する時期、すなわち18世紀後半～19世紀前半代にこの遺跡が営まれたことを示している。

無釉陶器では丹波産、備前産、堺・明石産のものが含まれる。備前産の製品は量的には少なく、布袋徳利、朱泥壺の他、播鉢が僅かに含まれる程度である。丹波産の製品は播鉢は少なく、甕、鉢などの出土が目立つ。播鉢の多くを占めるのは、堺・明石産の製品である。このことから、播鉢を例にとると、この遺跡の所属時期が播鉢が丹波産から堺・明石産に移行して行く、18世紀代以降にあることが分かる。施釉陶器は肥前、丹波、京・信楽、瀬戸・美濃の他、在地産の舞子・明石産のものが目につく。

肥前産の製品には、17世紀後半から18世紀前半代に遡る刷毛目唐津、三鳥手の唐津の鉢が少量含まれている。しかし、他の産地の製品は、19世紀前半に陶器生産を本格的に再開する瀬戸・美濃の本業焼の

製品、18世紀後半～19世紀前代に生産が本格化する舞子・明石産の日常雑器など、18世紀後半～19世紀前半代のもものが主体をしめる。

土器・陶器類の中で最も出土量の多い磁器には肥前産、瀬戸・美濃産、在地の三田産の製品の他、産地不明のものも多く含まれる。産地の同定出来るものでは肥前産の染付磁器が最も多い。肥前産の染付では18世紀後半代に比定される粗製のくらわんか手の碗・皿類の出土が顕著である。またこの他、肥前産の染付には18世紀後半～19世紀前半代の広東碗、19世紀前半以降に時期比定ができる端反碗などが含まれ、18世紀代以前に遡るものは、17世紀前半代の初期伊万里の皿などが少量散見されるのみで、主体はくらわんか手以降、すなわち18世紀後半代以降の製品が占める。肥前産以外の製品も、19世紀前半以降に磁器生産を開始する瀬戸・美濃、三田などの製品がその多くを占める。

以上、土器・陶磁器類の出土傾向から、この遺跡の所属時期は18世紀後半～19世紀前半以降と判断される。

土製品には型造りの人形・動物形・器物形、面子、土錘、礮の羽口などがある。この内、面子には江戸時代の力士名柏戸を刻印するものがあり、これは19世紀前半の文化・文政年間に活躍した四代柏戸利助と考えられ、出土した土器・陶磁器類の年代観と一致する。

また、C・D区で見られた大量の礮の羽口の出土は、町の拡大に伴って、火災を引きおこしやすい鍛冶屋が郊外に移転させられた状況を示すものとして注目される。

以上、遺構、遺物の検討を通じて以下のことが明らかになっている。

第2章で述べたように、元禄絵図に見られる近世の兵庫津は16世紀後半の天正8年(1580)の兵庫城の築城とそれに伴う城下町の整備を契機にその原形が形作られ、大幅な改変を経ることなく、近世を通じて存続し、幕末の開港を迎えることになる。

しかし、第2表(13)の調査結果に見られる船入江の拡張など、細部にわたっては、改変、拡張が行われてきたことも事実であり、その様子は17世紀後半の元禄絵図と、19世紀中葉の文久絵図との比較からも窺える。今回の調査地点は元禄年間には兵庫津の北東の郊外で、本来の兵庫津の町の中ではない。しかし、その後、町場が北東に拡張し、文久年間には町場の中に組み入れられたと考えられる。D区で検出された石垣1は造成の際の北東端の区画で、文久絵図に描かれた町の端と合致するものと考えられる。

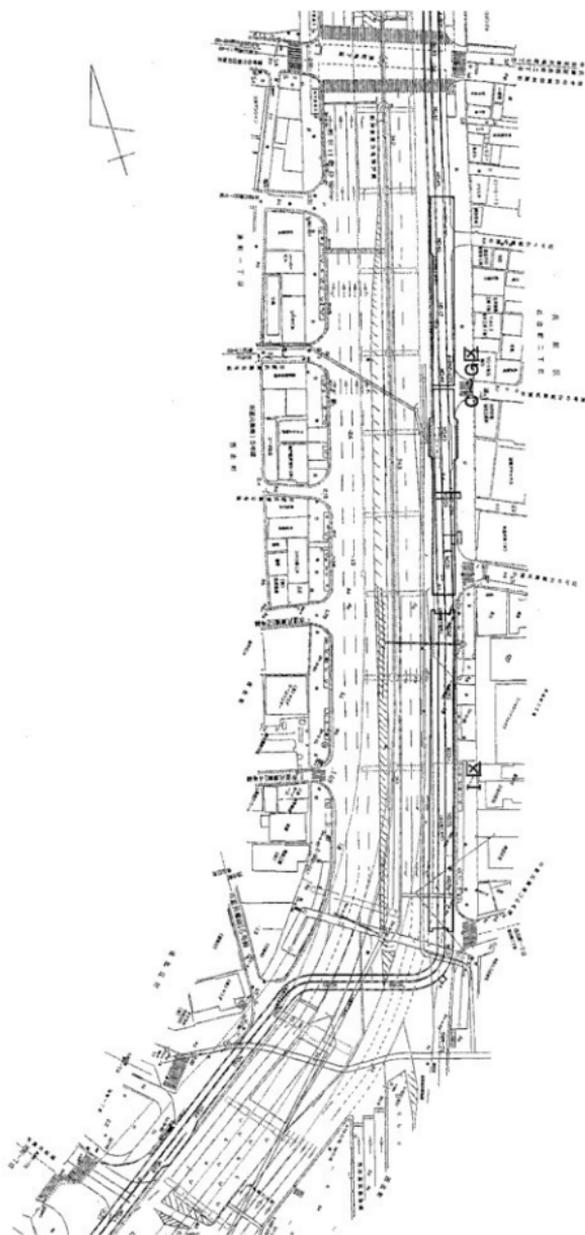
このような町の拡張について、調査を担当した兼康保明氏は明和6年、兵庫津が天領になって以後、調査地の西南に近接する左比江に新地が作られ、花街化して以後、急速に発展したととらえている。さらに、兼康氏は、高田屋嘉兵衛に代表される北方貿易の拡大など、海上輸送の発展が見られるのは18世紀以後のことであり、18世紀中葉以降のこのような町の活況が人口増を促し、さらに町が拡大する相乗効果を生み出していったのであろうとされている。

今回の調査では、18世紀後半以降の兵庫津の町の拡大を示す資料が提示され、近世後半から近代に至る港町の状況を考える上で貴重な資料を提供していると言えよう。

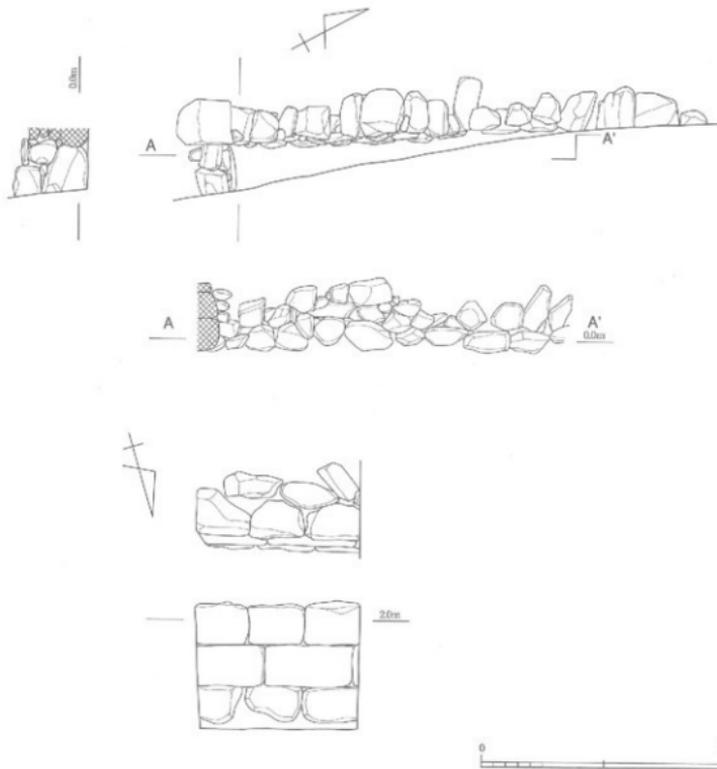
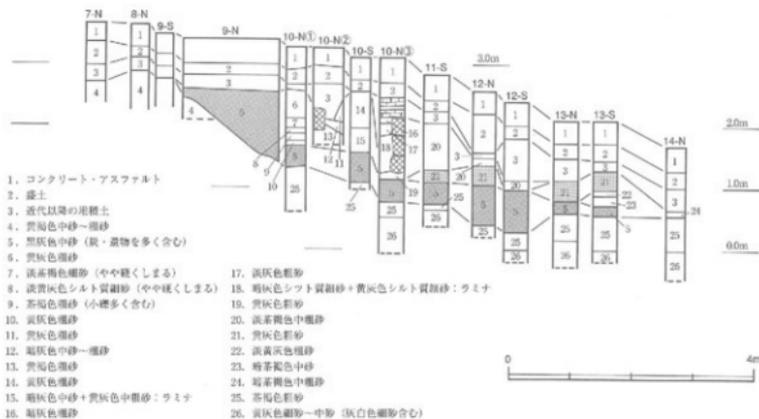
報告書抄録

ふりがな	ひょうごついでせき いち (にしでちくのちょうよさ)							
書名	兵庫津遺跡 I (西出地区の調査)							
副書名	一般国道2号共同溝整備事業に伴う埋蔵文化調査報告書							
巻次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第243冊							
編著者名	岡崎正雄・岡田章一・深江英憲							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011							
発行年月日	西暦2002(平成14)年3月31日							
所収 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
兵庫津遺跡	兵庫県神戸市 兵庫区西出町 2丁目他	28105	本分第1 章参照	34度 40分 14秒	135度 10分 48秒	本分第1章参照		一般国道 2号共同 溝整備事 業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
兵庫津遺跡 (西出地区) C~G区	集落跡	江戸時代	石垣・井戸・ 土坑・溝・柱 穴	陶磁器・土製 品・鉄製品・ 銅製品				
I区	集落跡	江戸時代	井戸・土坑・ 溝・柱穴・水 田・島	陶磁器・土製 品・鉄製品・ 銅製品・木製 品	和船材の転用による 渡岸 多量の銅細工片			

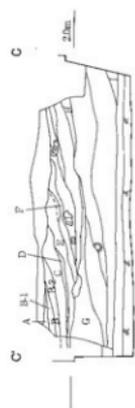
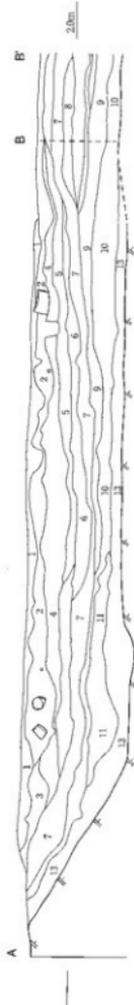
圖版



兵庫津遺跡（西出地区）調査区位置図



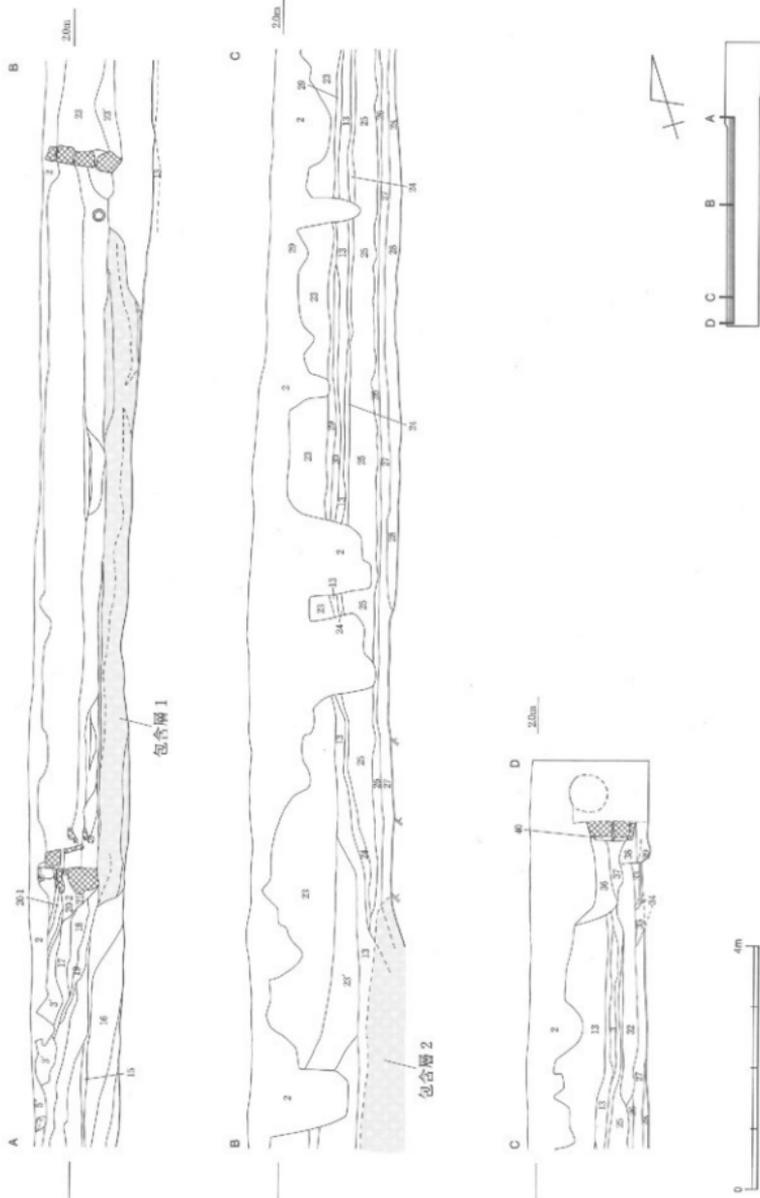
C～G区確認調査断面柱状図及び13-S区石垣検出状況



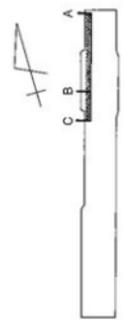
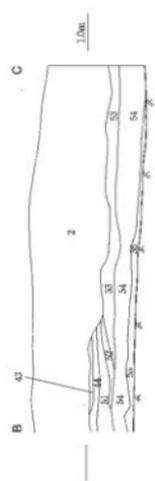
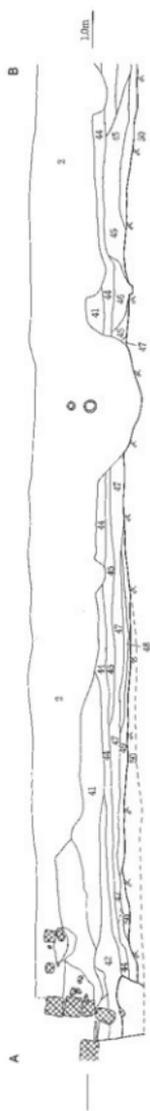
C区土層断面図

- A. 灰白色粗砂 (B層と同じ)
- B. 黒灰色砂質土
- B-1. 灰を多く含む
- B-2. 灰色の濃い土層 B-1に比し粘性がない (B層の硬層を含む)
- C. 明黄色粗砂 明黄色粘土質を含む
- D. 暗灰色粗砂
- E. 暗灰色砂質土 灰白層を多く含む セクションヘルト部分質、灰多し
- F. 暗灰色砂質土 灰を少し含む
- G. 明黄色粗砂 灰を少し含む (B層と同じ)
- H. 暗灰色砂質土 灰を少し含む (E層と同じ)
- I. 暗灰色砂質土 粗砂 上層は灰を多く含む (B層と同じ)
- J. 赤褐色砂質土 細かい (D色) を含む 粗砂 (B層)

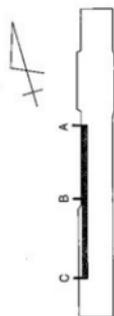
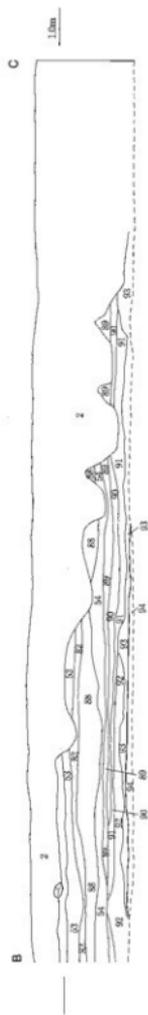
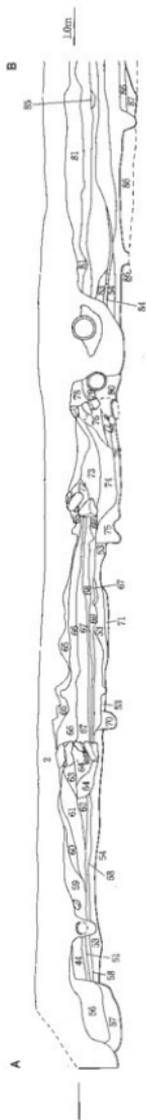




D区土层断面图



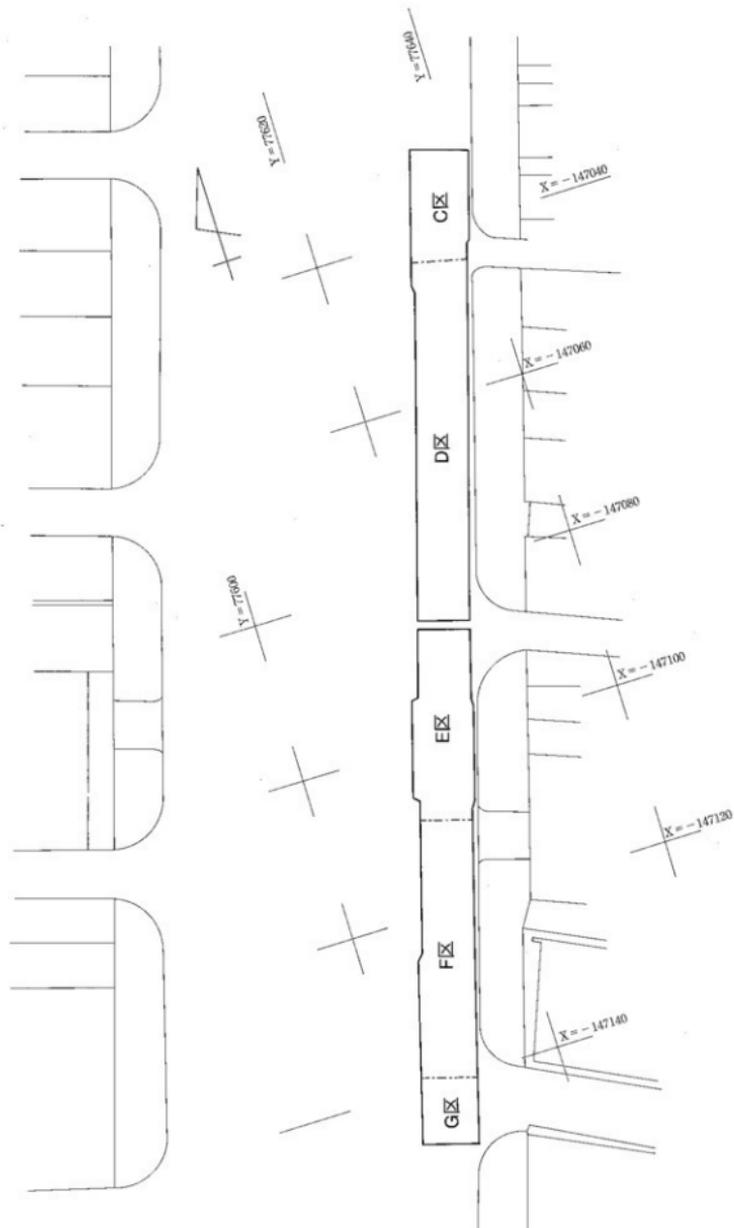
E区土层断面图



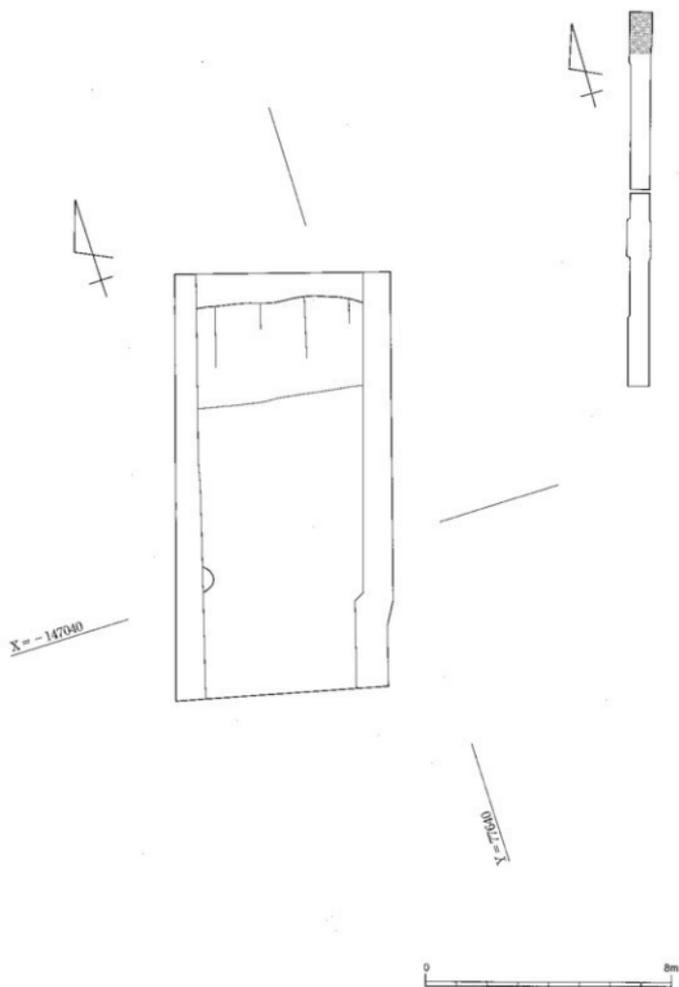
F区土层断面图

1. T. 5YR 2/1 黄褐色粗砂 現代の産土
2. 5YR 6/2 灰褐色粗砂 現代の産土(シंगा 産物を含む)
3. T. 5Y 6/6 明黄褐色粗砂 鉄さい・土質片を少量混入する(洪水等? 北西~南東方向)
3. 10YR 5/6 黄褐色粗砂 角礫を多量、遺物は混入しない
4. 10YR 2/2 黒褐色粗砂 炭化物粗粒・砂粒を大量
5. T. 5YR 3/3 暗褐色粗砂 貝殻を主体とし、平瓦・しっくい・炭化物粒を多量
6. T. 5YR 3/3 暗褐色粗砂 鉄さい・骨口を大量、炭化物粒・しっくい・平瓦を多量
6. T. 5YR 3/1 黄褐色粗砂 炭化物粒を大量、しっくい・平瓦を多量
6. T. 5YR 3/3 暗褐色粗砂 しっくい・平瓦を大量、炭化物粒を多量
7. T. 5YR 4/3 褐色粗砂 鉄さい・骨口・炭化物粒を大量、瓦片を少量(遺物は主に $\leq 10\mu$ の域に見られる)
9. 10YR 5/6 黄褐色粗砂 炭化物粒を多量、しっくい・瓦片・貝を少量
9. T. 5YR 3/3 暗褐色粗砂 炭化物粗粒・平瓦・しっくい・黄褐色粘土ブロックを多量
10. 10YR 2/1 黒褐色粗砂 上層に炭化層、しっくい・平瓦・炭化物粒を大量、最下層には土質ブロックが少量
11. T. 5Y 7/6 明黄褐色粗砂 明黄褐色粗砂を主体とし、鉄さい・骨口・土層片を少量(河川源が伏す?)
12. T. 5YR 3/3 暗褐色粗砂
13. T. 5YR 4/6 褐色粗砂 茶褐色粗粒(上層)、黄褐色粗粒(下層)から成る(遺物)粗砂
14. 5YR 6/2 灰褐色粗砂 炭化物粒・鉄さい・骨口・しっくい・平瓦を多量
15. T. 5Y 5/6 明黄褐色粗砂 遺物を少量、含有物は見られない
16. T. 5YR 3/1 暗褐色粗砂 炭化物粒を大量、しっくい・平瓦を少量、貝を少量
17. T. 5YR 3/1 暗褐色粗砂 炭化物粒を多量、貝・しっくい片を少量
18. T. 5YR 4/3 褐色粗砂 炭化物粒・しっくいを少量、貝を少量
19. T. 5Y 7/6 明黄褐色粗砂 炭化物粒・炭丹塵を多量
- 20-1. T. 5Y 4/1 灰褐色粗砂 黄褐色粘土や黄褐色砂層が互層で堆積
- 20-2. T. 5Y 4/1 灰褐色粗砂
21. N 3/1 灰褐色粗砂 近江陶器を含む
22. 10YR 3/1 灰褐色粗砂 陶器・角礫を少量
23. 10YR 5/6 黄褐色粗砂 陶器を大量、花崗岩の割片を多量(ベルト中央部分に石灰あり)
23. T. 5YR 7/4 灰褐色粗砂 陶器を大量、黄褐色粘土ブロックを少量
24. T. 5YR 3/4 暗褐色粗砂 陶器を大量
25. T. 5Y 7/6 明黄褐色粗砂 最下層に鉄分の沈着があり(3層)に比べ(1層)は鉄が少ない
26. 5B6 4/1 暗青色粗砂 炭化物粒を少量、近江陶磁器片を少量(遺物を含む?)シト・質粗砂
27. T. 5YR 4/2 灰褐色粗砂 陶器を少量、遺物は含まない
28. T. 5YR 3/2 暗褐色粗砂 全体的に鉄分の沈着が著しく、円礫を多量、灰色粘土ブロックを少量
29. T. 5YR 2/1 黒褐色粗砂 炭化物粒を多量、黒褐色土ブロックを少量
30. T. 5Y 7/6 明黄褐色粗砂 円礫を多量
31. 10YR 5/6 黄褐色粗砂 円礫を多量
32. 5B6 3/1 暗青色粗砂 近江陶磁器片を大量、鉄分、炭化物粒を多量(遺物を含む?)
33. T. 5YR 5/2 灰褐色粗砂 炭化物粒・海綿鉄片を少量、円礫も1割と比べ少量
34. 灰白色粗砂 円礫を多量
35. 暗灰色粗砂 円礫を多量、炭化物粒
36. 5YR 4/1 灰褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒・黄褐色粘土・平瓦・しっくい片を少量
37. T. 5YR 4/4 褐色粗砂 炭化物粒を少量、円礫は3割と比べ少量
38. T. 5YR 4/2 灰褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒を少量
39. 5YR 6/2 灰褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒を少量(最上層は深く腐食している)
40. N 2/1 黒色砂粘土 円礫を多量、黄褐色粘土を少量(石垣敷物を防ぐための裏込め土)もあり
41. T. 5YR 4/3 褐色粗砂 円礫・黄褐色粘土ブロックを多量、炭化物粒を微量
42. 10YR 5/6 黄褐色粗砂 円礫を多量、黒色土ブロックを少量
43. T. 5Y 7/6 明黄褐色粗砂 円礫を多量
44. T. 5YR 3/1 暗褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒・遺物(近江陶磁器)を少量
45. 5YR 5/2 灰褐色粗砂 円礫を多量、灰色粘土ブロックを少量
46. N 4/1 灰褐色粗砂 円礫を多量、灰色粘土ブロック・黄褐色粘土・炭化物粒を少量
47. T. 5YR 4/3 褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒を微量
48. T. 5Y 3/3 黄褐色粗砂 円礫を多量
49. T. 5YR 5/2 灰褐色粗砂 円礫を多量
50. T. 5YR 3/3 明黄褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒を少量、鉄分の沈着が著しい(遺物混在)
51. T. 5YR 4/3 褐色粗砂 円礫を多量、灰色粘土ブロックを少量
52. 10YR 5/6 黄褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒を少量
53. T. 5YR 6/2 灰褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒・黄褐色粘土ブロックを少量
54. T. 5YR 6/2 灰褐色粗砂 S4層中の鉄分を多量に含んだ層
54. T. 5YR 6/2 灰褐色粗砂 炭化物粒・黄褐色粘土ブロックを多量
56. T. 5Y 3/3 黄褐色粗砂 円礫を大量
57. T. 5Y 2/1 黒色粗砂 炭化物粗粒、瓦片・近江陶磁器片を多量、黄褐色粘土ブロックを少量
58. 5Y 3/3 黄褐色粗砂 灰色土層褐色粗砂の互層、円礫を多量、炭化物粒を少量(土質層の厚さを含む)
60. T. 5YR 3/4 暗褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒・黄褐色粘土ブロックを少量
61. 10YR 5/6 黄褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒・黄褐色粘土ブロックを少量、最下層に灰白色シルトが堆積
62. T. 5Y 3/4 黄褐色粗砂 円礫を多量、黄褐色粘土ブロックを少量
63. T. 5YR 4/3 褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒を微量
64. T. 5Y 2/1 黒色粗砂 円礫を多量、炭化物粒を少量 S33層込め
64. T. 5YR 2/4 暗褐色粗砂 円礫・灰色粘土ブロックを多量、炭化物粒を少量
65. 10YR 5/6 黄褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒を少量
66. T. 5Y 5/1 灰褐色粗砂 円礫・鉄分・炭化物粒を少量
67. 10YR 5/6 黄褐色粗砂 円礫を少量
68. T. 5YR 6/1 暗褐色粗砂 円礫・炭化物粒を少量
69. T. 5YR 2/4 暗褐色粗砂 円礫・炭化物粒を多量、灰色粘土ブロックを少量
70. T. 5YR 2/3 暗褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒を少量(石は?)
71. T. 5YR 2/1 暗褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒を少量
72. T. 5YR 4/3 褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒を少量
73. T. 5YR 6/2 灰褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒を少量
74. T. 5YR 4/2 灰褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒を少量
75. 5YR 4/3 灰褐色粗砂 円礫を少量、炭化物粒を少量
76. N 4/1 灰褐色粗砂 円礫・黒色シルト・質粗砂を多量、炭化物粒を少量(石灰混入)
77. N 8/1 灰白色粗砂 円礫を大量、炭化物粒を少量、しまり悪(石層3層込め)
78. T. 5Y 6/4 灰褐色粗砂 円礫を大量 カク瓦(石道)に対峙する石道
79. T. 5YR 3/3 暗褐色粗砂 円礫を大量 列があったが土管・ヒューム管
80. T. 5Y 2/1 黒色粗砂 円礫・炭化物粒を少量 埋没により堆積する
81. 10YR 5/6 黄褐色粗砂 円礫・瓦片・しっくい・近江陶磁器片・炭化物粒を多量(遺物を含む?)
82. T. 5YR 4/4 褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒を微量
83. T. 5YR 6/2 灰褐色粗砂 円礫を多量
84. N 4/1 灰褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒を少量
85. 10YR 3/2 暗褐色粗砂 円礫・炭化物粒を少量(埋没し落ち込み、混雑として認定せず)
86. 5Y 6/2 灰褐色粗砂 円礫を多量、鉄分を少量
87. 5YR 6/2 灰褐色粗砂 鉄分を大量、円礫を少量
88. T. 5YR 4/3 褐色粗砂 円礫を多量、炭化物粒を微量
89. T. 5YR 4/4 褐色粗砂 円礫を多量
90. 2YR 6/2 灰褐色粗砂 鉄分を大量、円礫を多量
91. X 5/1 灰色粗砂 鉄分を大量(砂層)
92. T. 5YR 5/1 灰褐色粗砂 鉄分・砂を多量
94. 5YR 3/2 黄褐色粗砂 鉄分を多量

(注) ・細砂・砂粒部0.1mm以下
 ・粗砂・砂粒部0.1mm以上
 ・包含層1~4=4層
 ・包含層2~カー12層(15層の上で2=2)
 ・3層~4層は石垣3層の裏込め層作り、全体に遺物を少量含む

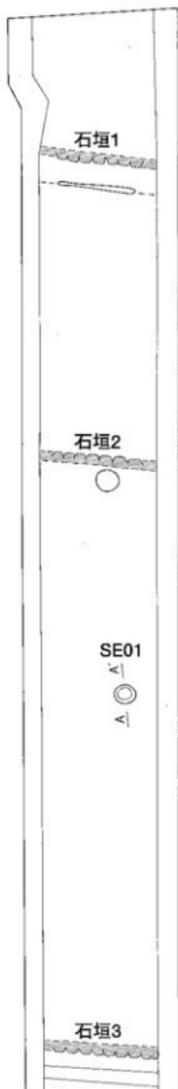


C区～G区調査区割り図



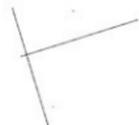
C区遺構配置図

X = -147040

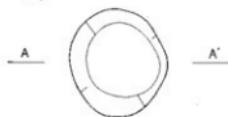


Y = 77680

X = -147060

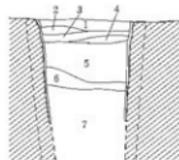


Y = 77620



4.0m

X = -147080

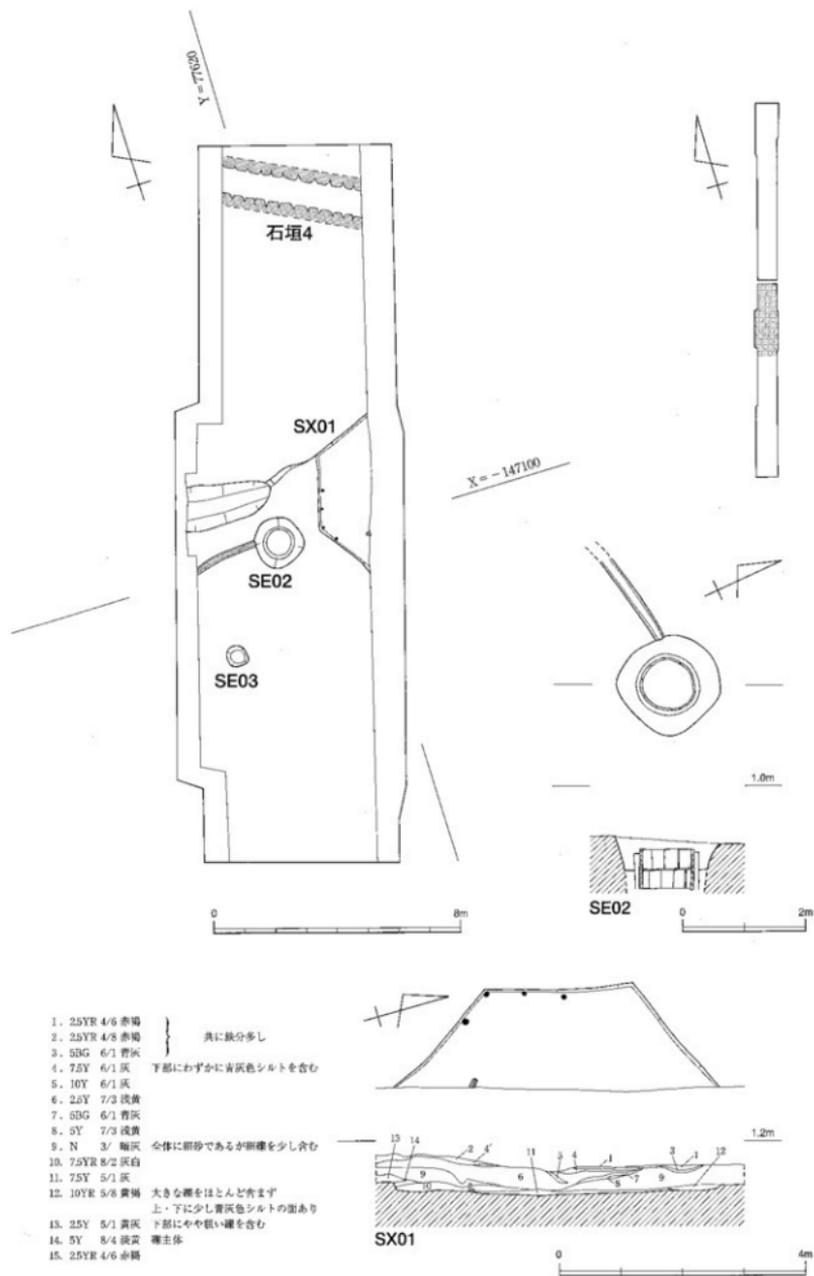


SE01

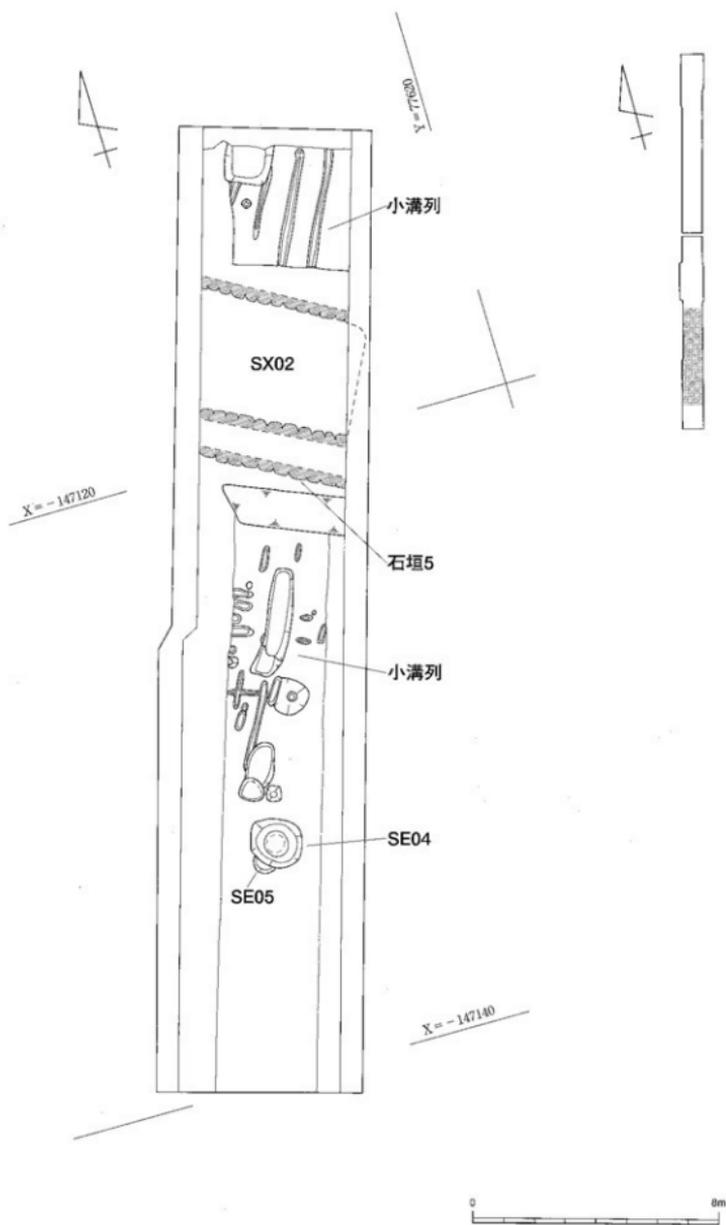


- 1. 7.5YR 5/2 灰褐 炭化物粒を少量
- 2. 7.5YR 3/1 黒褐 炭化物粒を少量
- 3. 7.5YR 4/2 灰褐 炭化物粒を少量
- 4. 10YR 2/2 黒褐 炭化物粒を少量
- 5. 7.5YR 4/2 灰褐 炭化物粒を少量
- 6. 10YR 2/3 黒褐 炭化物粒を少量
- 7. 7.5YR 4/2 灰褐

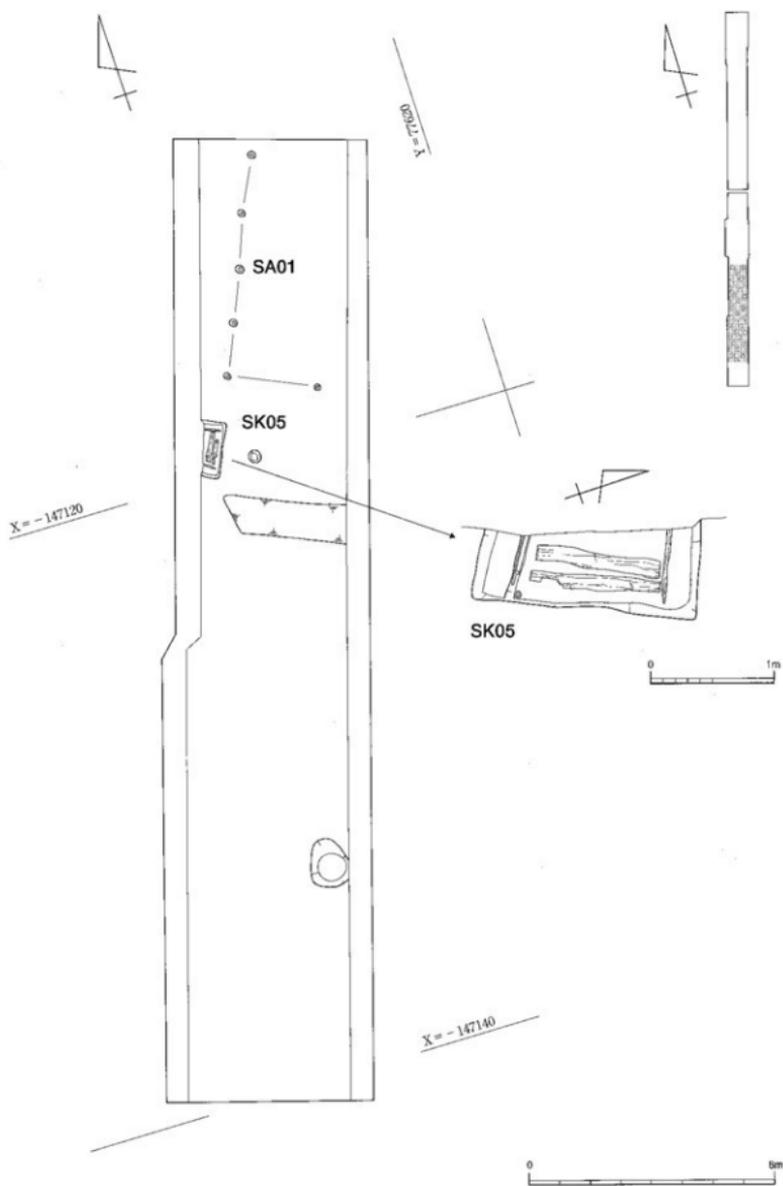
D区遺構配置図と主要遺構



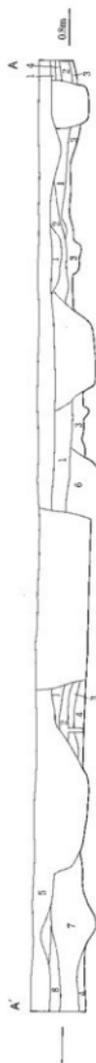
E区遺構配置図と主要遺構



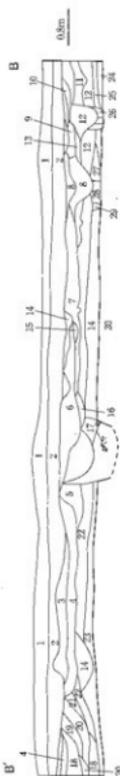
F区上層遺構配置図と主要遺構



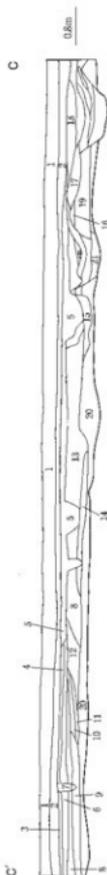
F区下層遺構配置図と主要遺構



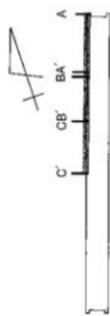
1. 礫層状凝灰土
2. 黒色砂層
3. 黒色粘板層
4. 赤土層
5. ハラス層
6. 礫瓦
7. 河川堆積物 (礫砂層)
8. 黄褐色や紫色粘板 (プロック状に砂が混じる)



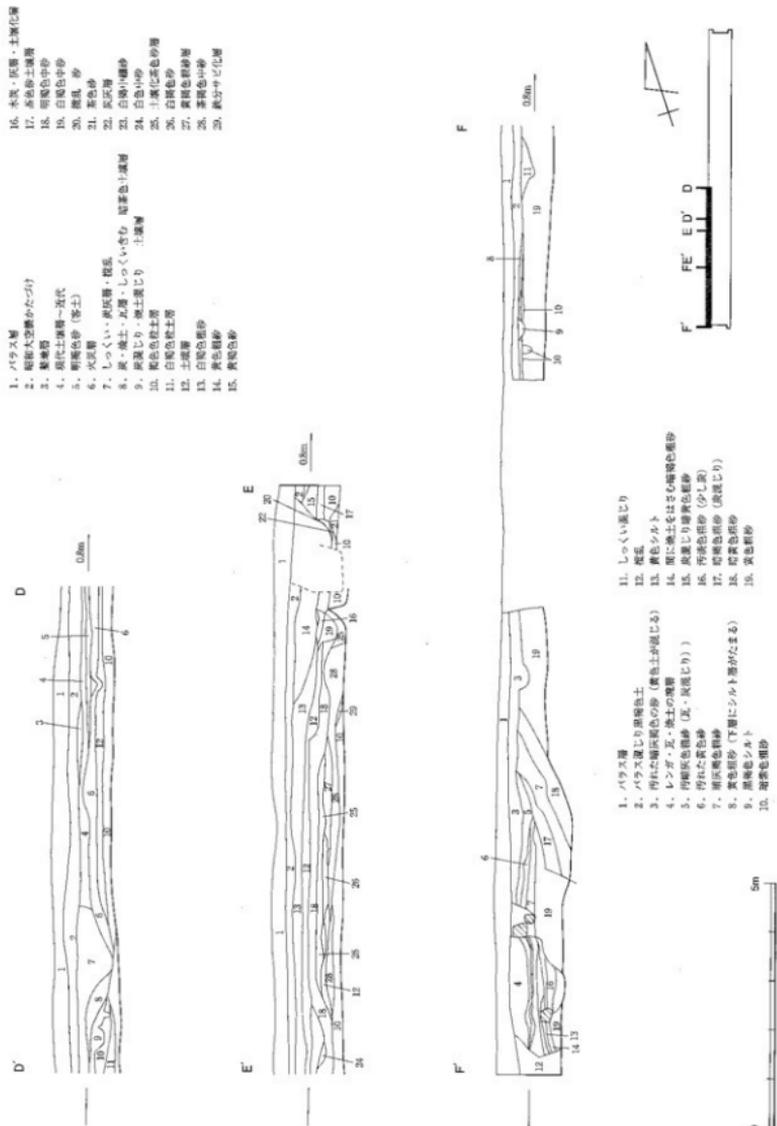
1. 礫石ハラス
2. 粘土層 (礫石層が大空隙のたつ付層)
3. 砂層 (白砂)
4. 赤土層 (赤粘板)
5. 砂層
6. 互、しつこい、土質粘板
7. 水成層、土質粘板
8. 赤粘板
9. 白砂
10. 赤粘板
11. 赤土層
12. 黒色砂、水成砂層
13. 白砂
14. 礫石層
15. 粘土
16. 礫瓦
17. しつこい、土質粘板
18. 水成層、赤粘板
19. 互層、赤土、砂層
20. スラック層、水成層
21. 白砂
22. 土質粘板
23. 黒色砂
24. 粘土層
25. やや細かい砂
26. 黒色粘板
27. 赤土層
28. 赤土層
29. 土質粘板
30. 白砂



1. ハラス層
2. (ハラス層より白濁した土)
3. 赤土層 (礫石層より砂層)
4. 赤土層 (礫石層より砂層)
5. 礫石層 (礫石層より砂層)
6. 礫石層 (礫石層より砂層)
7. 礫石層 (礫石層より砂層)
8. 礫石層 (礫石層より砂層)
9. 礫石層 (礫石層より砂層)
10. 礫石層 (礫石層より砂層)
11. 礫石層 (礫石層より砂層)
12. 礫石層 (礫石層より砂層)
13. 礫石層 (礫石層より砂層)
14. 礫石層 (礫石層より砂層)
15. 礫石層 (礫石層より砂層)
16. 礫石層 (礫石層より砂層)
17. 礫石層 (礫石層より砂層)
18. 礫石層 (礫石層より砂層)
19. 礫石層 (礫石層より砂層)
20. 礫石層 (礫石層より砂層)
21. 礫石層 (礫石層より砂層)

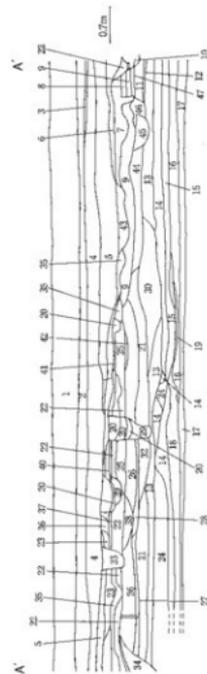


I区確認調査断面図①



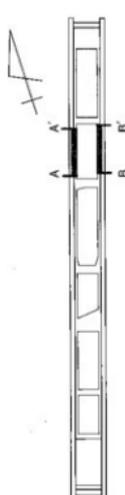
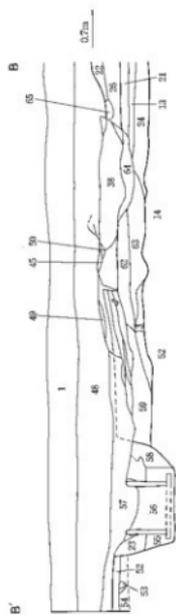
I区確認調査断面図②

1. ガイドウォール(コンクリート)壁

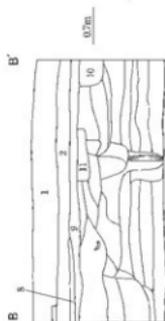
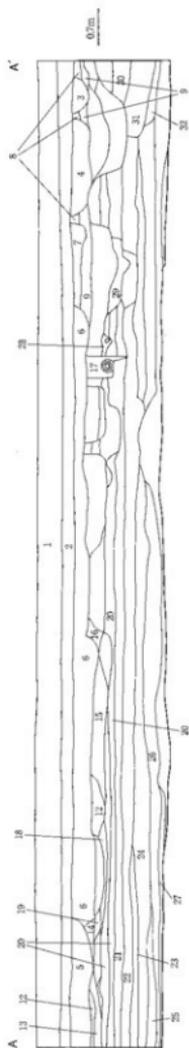


- 35. 黒茶色土壌層
- 36. 灰褐色シルト
- 37. 茶褐色シルト
- 38. 中砂質シルト
- 39. 土壌層
- 40. 土壌層
- 41. 茶土の暗褐色中砂
- 42. 暗土質の中砂
- 43. 暗茶褐色(孤立灰土)の土壌砂
- 44. やや暗褐色灰土壌層
- 45. 暗茶褐色土壌層
- 46. 茶褐色土壌層
- 47. 土壌中砂層
- 48. ガイドウォールが断層時の露出
- 49. 土壌層と粗砂の混成
- 50. 土壌層と粗砂の混成
- 51. 灰黒茶褐色土壌層
- 52. 茶褐色土壌層
- 53. 灰色中砂層
- 54. 灰色中砂層
- 55. (砂)・土壌層込みの砂層
- 56. 大気かたづけ層 露出のみ
- 57. 露出層(覆代)
- 58. 茶色土
- 59. 白褐色細砂層(中砂層)
- 60. 大気層
- 61. 茶灰色砂(灰層含む)
- 62. 30に広がる
- 63. 灰色中砂-粗砂(白に転色)
- 64. 褐色灰色シルト
- 65. 褐色灰色シルト

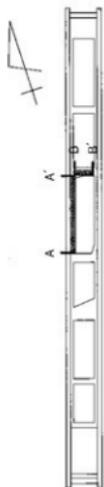
- 2. 掘削部
- 3. 砂(粘土)
- 4. 掘削部(茶褐色土)
- 5. 掘削部(灰土・灰)・土壌層(砂)
- 6. 掘削部(茶褐色土壌層-粗砂層)
- 7. 掘削部(茶褐色土壌層-粗砂層)
- 8. やや暗褐色土壌層-粗砂層
- 9. 暗褐色細砂層
- 10. 茶褐色シルト
- 11. 暗茶褐色(土壌層)底砂層
- 12. 茶褐色(土壌プロック風)粗砂層
- 13. 茶(灰)塊状粗砂層
- 14. (灰)灰褐色灰土シルトプロック
- 15. (灰)灰褐色灰土シルトプロック
- 16. 白色中砂層
- 17. 明茶褐色細砂層
- 18. 青灰色シルト(灰田目)
- 19. 灰色シルト
- 20. 暗褐色シルト(タチ岩層)
- 21. 暗砂層(土層)・灰分分布でこげ茶色
- 22. 土壌層茶色(砂)
- 23. 黄褐色細砂
- 24. 内灰色細砂
- 25. 茶色砂(泥)
- 26. 茶褐色細砂層
- 27. 灰色・深褐色中砂層(a)層
- 28. 暗灰色・黄褐色中砂層(a)層
- 29. 青灰色シルト下置層
- 30. 黄灰色中砂-ベークスの茶褐色細砂プロック層
上層の灰み込みあり
- 31. 明褐色中砂
- 32. やや暗褐色の中砂層
- 33. 茶褐色灰質土



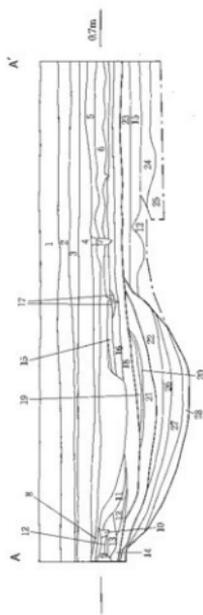
I-6区断面図



1. コンクリート
 2. 砂利
 3. 5CY 6.1 オリープ灰 (厚径6cm前後の塊を多く含む)
 4. 25Y 6.2 灰膏 (厚径6cm前後の塊を多く含む)
 5. 3Y 3.2 オリープ灰 (厚径6cm前後の塊を多く含む)
 6. 3Y 6.3 オリープ灰 (厚径6cm前後の塊を多く含む)
 7. 25Y 4.4 オリープ灰 (厚径6cm前後の塊を多く含む)
 8. 25Y 3.3 灰+オリープ塊 (厚径5cm以下の塊を含む)
 9. 5Y 3.2 オリープ灰
 10. 25Y 3.2 灰+オリープ塊 (厚径6cm前後の塊と顆粒を含む)
 11. 10YR 3.4 砂質 (細砂混じり)
 12. 細砂層
 13. 灰土層
 14. 濁土砂層
 15. 茶褐色硬質中砂
 16. 褐色硬質 中砂-粗砂層
 17. 褐色硬質砂土
 18. 灰質アロファ
 19. 灰褐色土
 20. a層
 21. 茶褐色砂層
 22. a層 茶色
 23. a層心 白褐色中砂層
 24. 白濁中砂層
 25. 灰色中砂層-粗砂
 26. 褐色中砂層 (濁土) ~粗砂
 27. 灰色シルト
 28. 白濁砂層
 29. 茶色土
 30. 粗砂層
 31. 土質アロファ中砂層
 32. 腐灰色a層



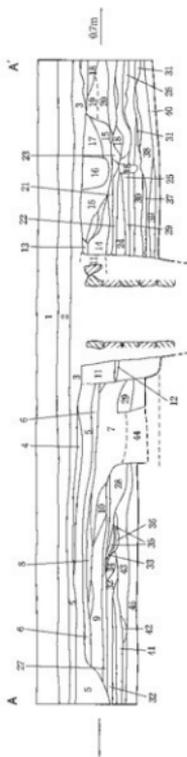
I-4区断面図



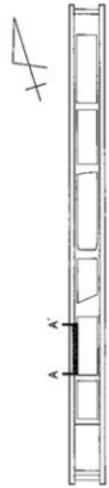
- | | |
|-----------------------------|------------------------|
| 1. コンクリート | 15. 土壌層 |
| 2. ガイドウォール特の層石層 | 16. 土壌+褐色砂 |
| 3. 砂層 | 17. 白色砂 |
| 4. 礫石層 | 18. 黄褐色中砂層 |
| 5. 礫地上 (瓦式) 浮床層 | 19. フロック 茶色土 (砂) 土層 |
| 6. 火災層 (100mm-150mm) 水浸スラグ層 | 20. 白砂層 |
| 7. 灰色砂 | 21. 白褐色ラミナ状硬質泥炭 |
| 8. タタラ層 | 22. 黄砂層 (1層) 土層 |
| 9. 其フロックを中心層 | 23. 今や濃い茶色土砂 黄泥じり |
| 10. 白色土層 | 24. フロック層土質の硬質砂 |
| 11. 黄色土層 | 25. 青灰色 (砂) 粘土 (砂層) 水田 |
| 12. 褐色中砂層 | 26. 硬質砂 |
| 13. 山砂の黄褐色砂土層 | 27. 粘質泥炭 |
| 14. 褐色土層 | 28. 本質層 |



I-5区断面図



- 1. コンクリート
- 2. 硬質腐植土層
- 3. 腐植土層
- 4. 粘質腐植土層
- 5. 灰白・粘土・白褐色細砂
- 6. 10YR 5/3 腐植土層
- 7. 7/5 腐植層 赤ベース 粘れ土層アロック
- 8. 白褐色細砂
- 9. 5/5 腐植 シルト層土層含む土層層 褐色砂アロック
- 10. 白褐色アロック
- 11. 土層・灰・石層込み
- 12. 腐植色粘土
- 13. 砂アロック
- 14. 灰・土層と砂アロック
- 15. シルト層基(褐色土) 粘土・灰
- 16. スラック 黒褐色土層アロック
- 17. 粘土アロック 灰含む褐色赤ベース
- 18. 白色細砂
- 19. 土層層
- 20. 砂層アロック (中砂)
- 21. 赤や褐色の土層層アロック
- 22. 土層アロック
- 23. 砂
- 24. 赤や褐色土層
- 25. 褐色砂
- 26. 砂アロック 土層化 (一部)
- 27. 赤や褐色の土層層
- 28. 粘れ土層層
- 29. 土層層 赤褐色
- 30. 灰褐色砂 腐植土層
- 31. マンガン浸透層
- 32. 10YR 5/4 腐植 土層が厚れている
- 33. 黒褐色土
- 34. 白色砂と土層の互層
- 35. 白色砂
- 36. 10YR 5/6 腐植 中砂
- 37. 灰色砂 灰石化
- 38. 粘土 赤褐色
- 39. 赤褐色(灰) 砂
- 40. 白灰色砂
- 41. 10YR 5/6 深褐色砂
- 42. 10YR 2/3 腐植 (土層化)
- 43. 10YR 4/6 腐
- 44. 赤褐色砂
- 45. 10YR にかい質泥

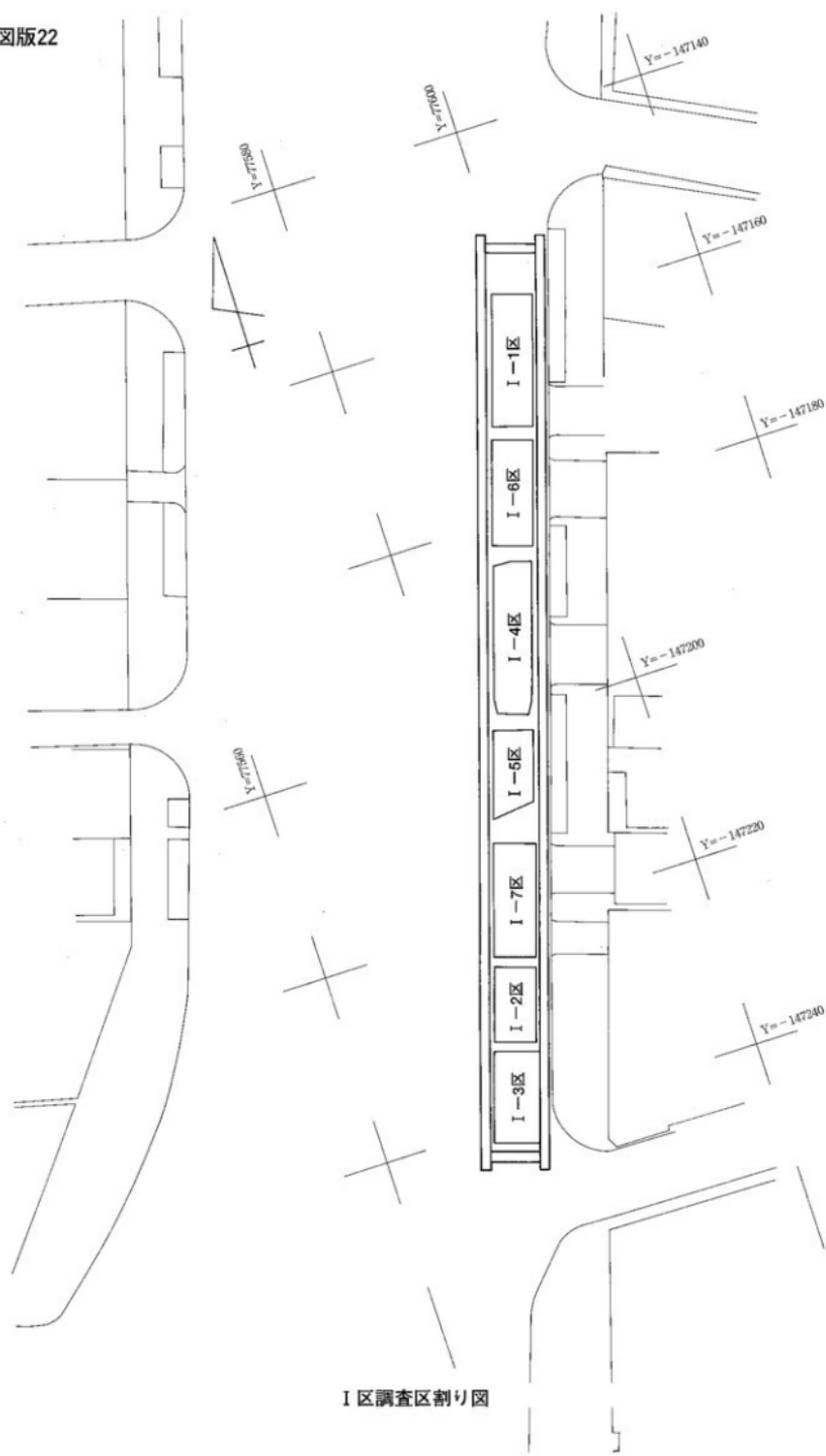


I-7区断面図

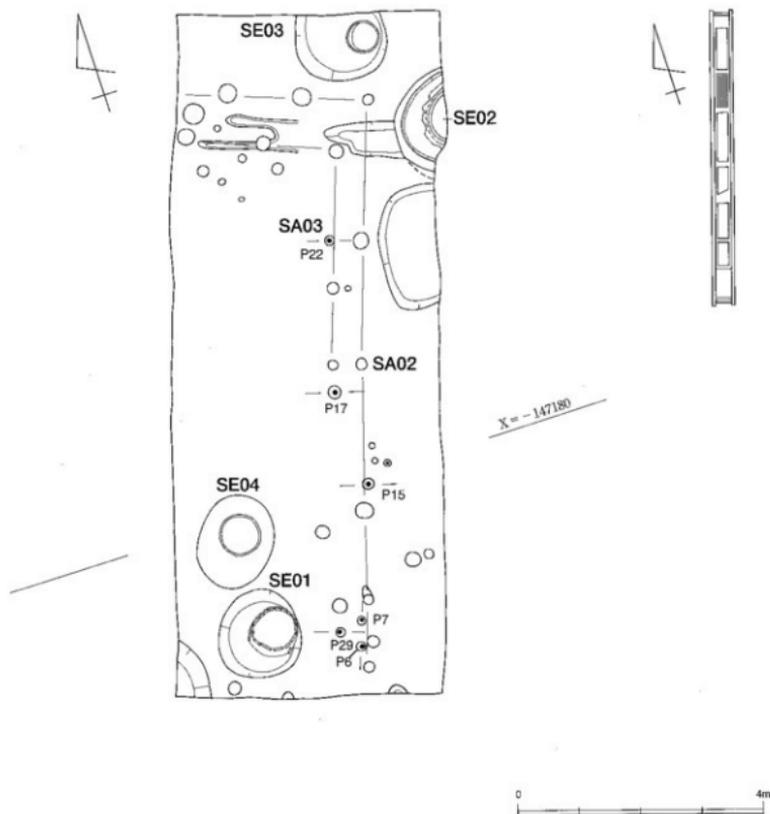
1. コンクリート
 2. 細石
 3. 現代の生活層
 4. 現代の瓦葺層
 5. 5Y 8/2 灰白色砂 (客土)
 6. 10YR 3/3 埋埋瓦葺土
 7. 5Y 8/2 灰白色砂
 8. 10YR 4/4 灰色埋砂
 9. 2.5Y 5/4 黄褐色埋砂-中砂
 10. 5Y 8/2 灰白色砂
 11. 2.5Y 5/3 黄褐色埋砂
 12. 10YR 3/4 黄褐色埋砂
 13. 10YR 5/6 黄褐色埋砂
 14. 10YR 3/2 黄褐色埋砂
 15. 10YR 4/6 灰色埋砂
 16. 10YR 6/4 に近い黄褐色埋砂 (大埋砂心)
 17. 2.5Y 5/2 黄褐色埋砂
 18. 10YR 6/6 黄褐色埋砂
 19. 7.5YR 5/6 黄褐色埋砂
 20. 10YR 7/3 に近い黄褐色埋砂



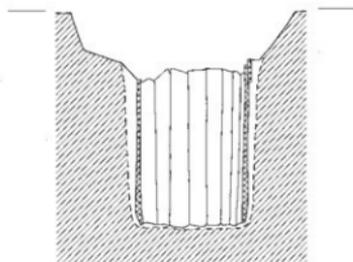
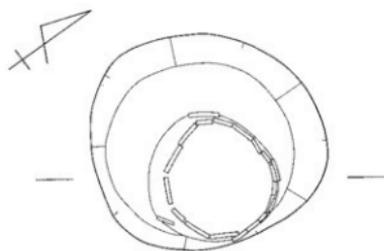
I-2区断面図



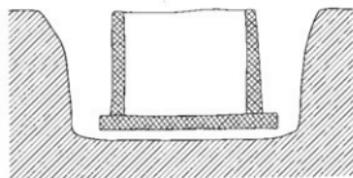
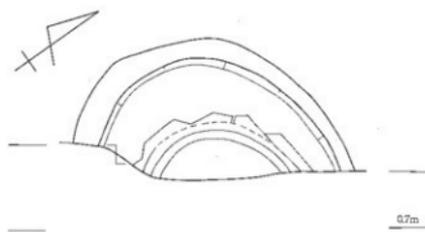
I区調査区劃図



I-6区上層遺構配置図

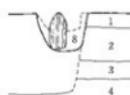


SE01



SE02

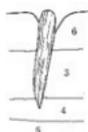




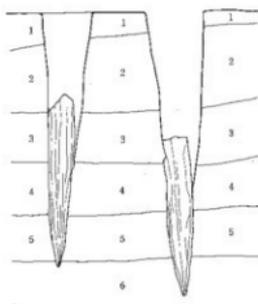
P22



P17

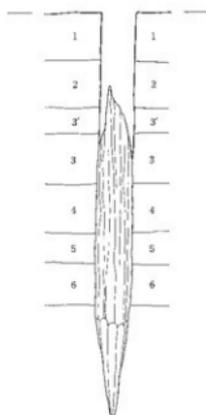


P15



P6

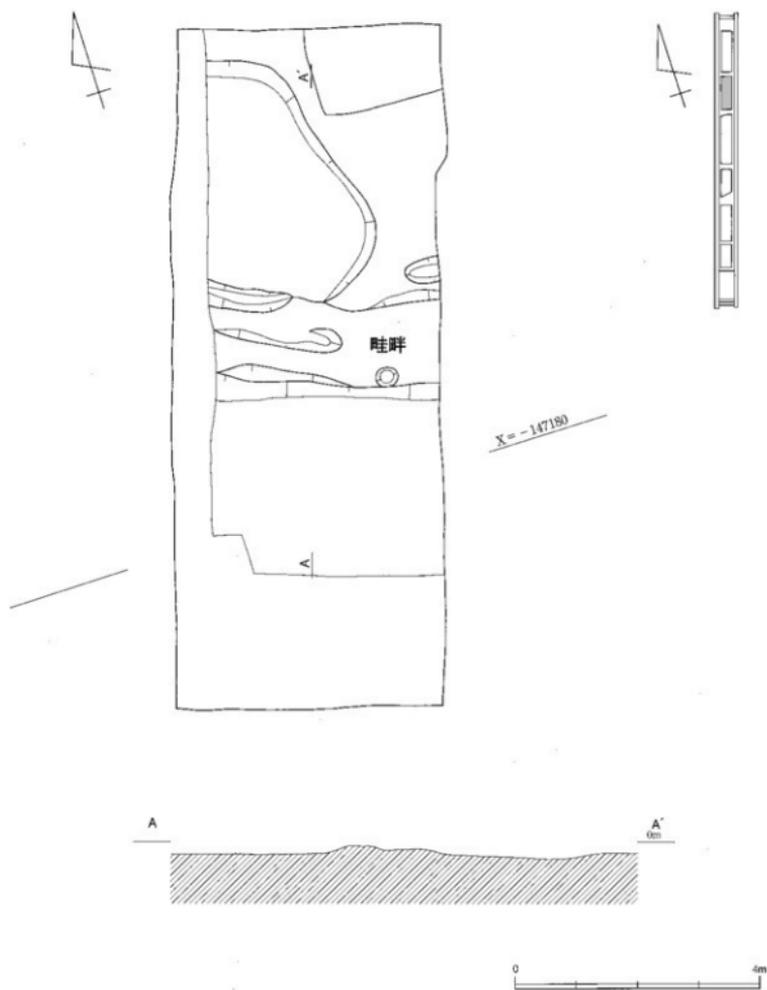
P7



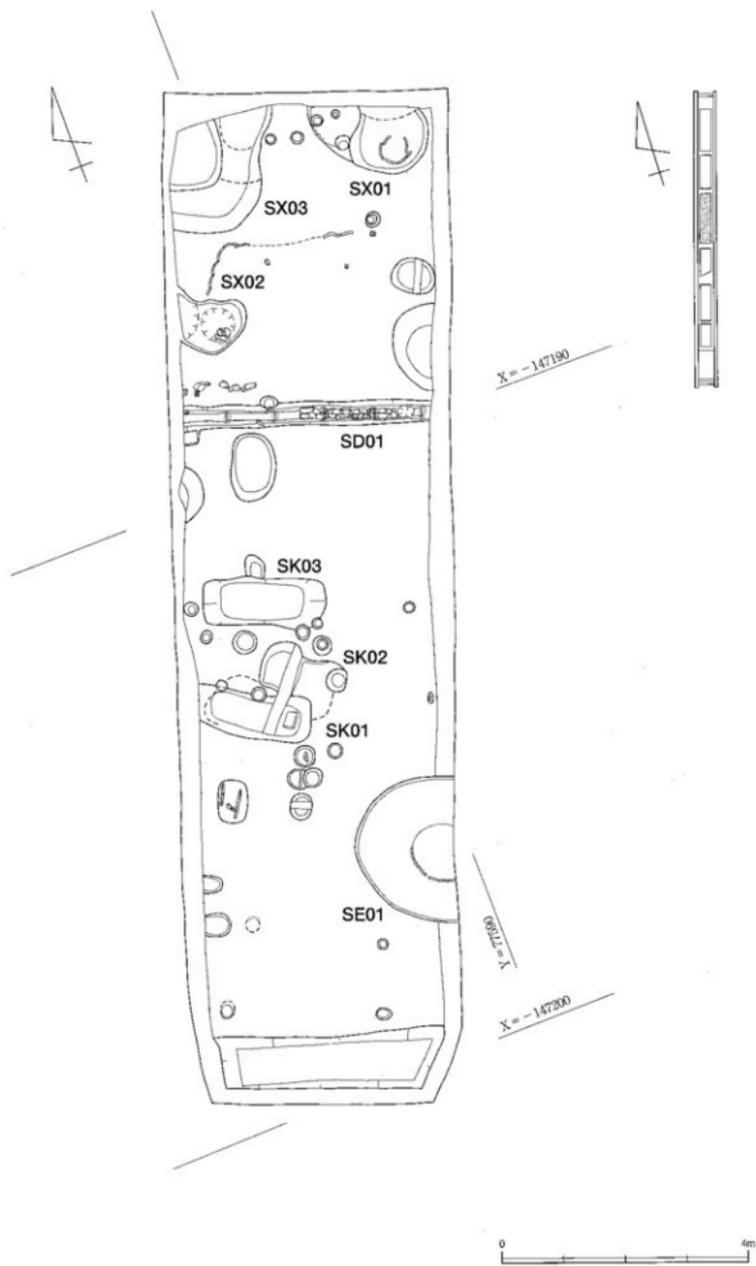
P29

1. 茶褐色中砂
2. 茶褐色シルト混中砂 (灰穴む) 土壌層
3. 黄褐色粗砂～中砂
- 3'. 黄白色中砂
4. 灰褐色シルト混中砂
5. 灰褐色中砂
6. 黄褐色粗砂
7. 赤褐色シルト質中砂 (灰穴む)
8. 黒褐色中砂
9. 黄白色粗砂～中砂

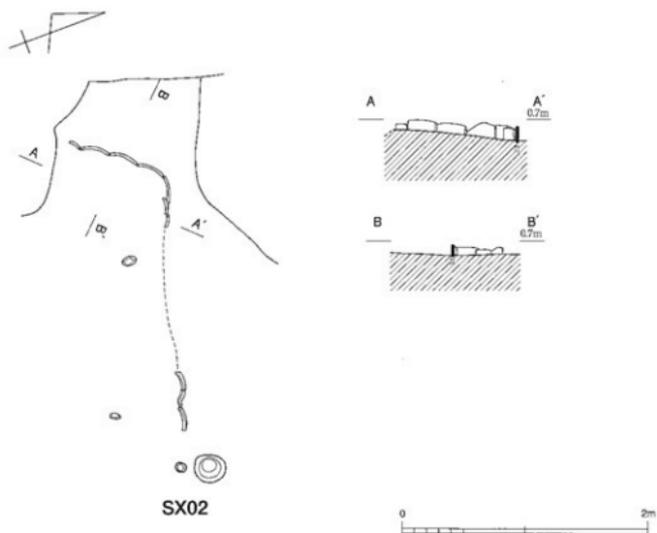




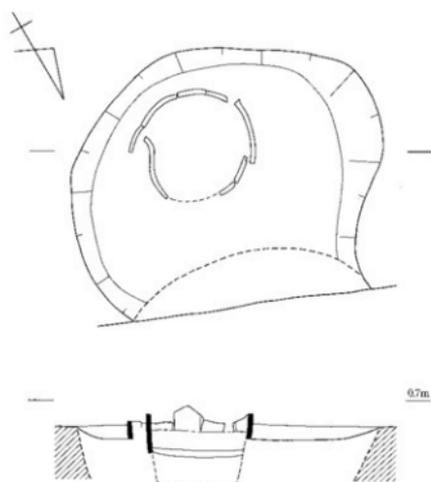
I-6区下層遺構(水田)



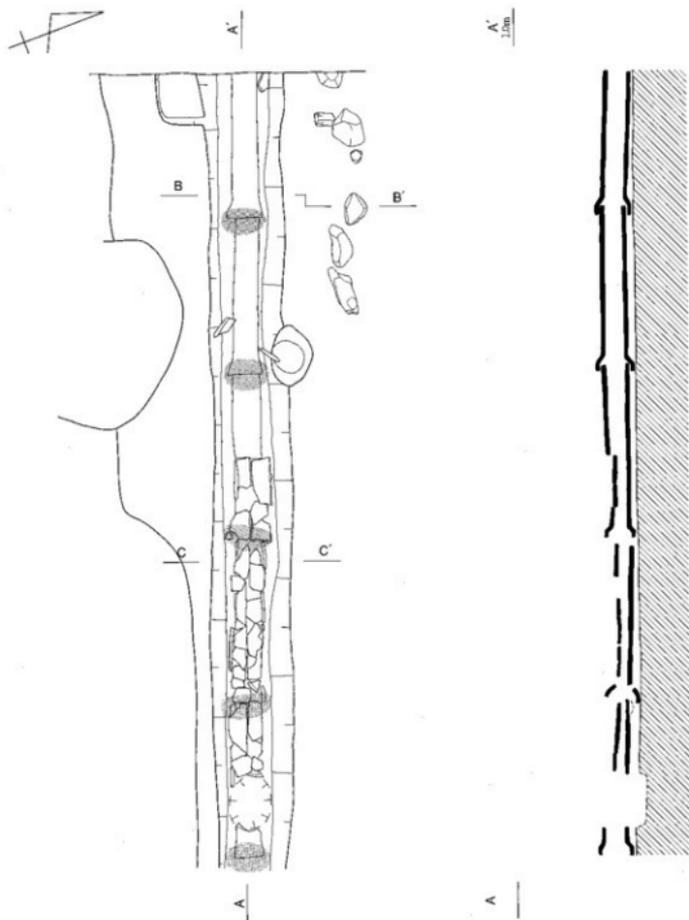
I-4区上層遺構配置図



SX02



SX01



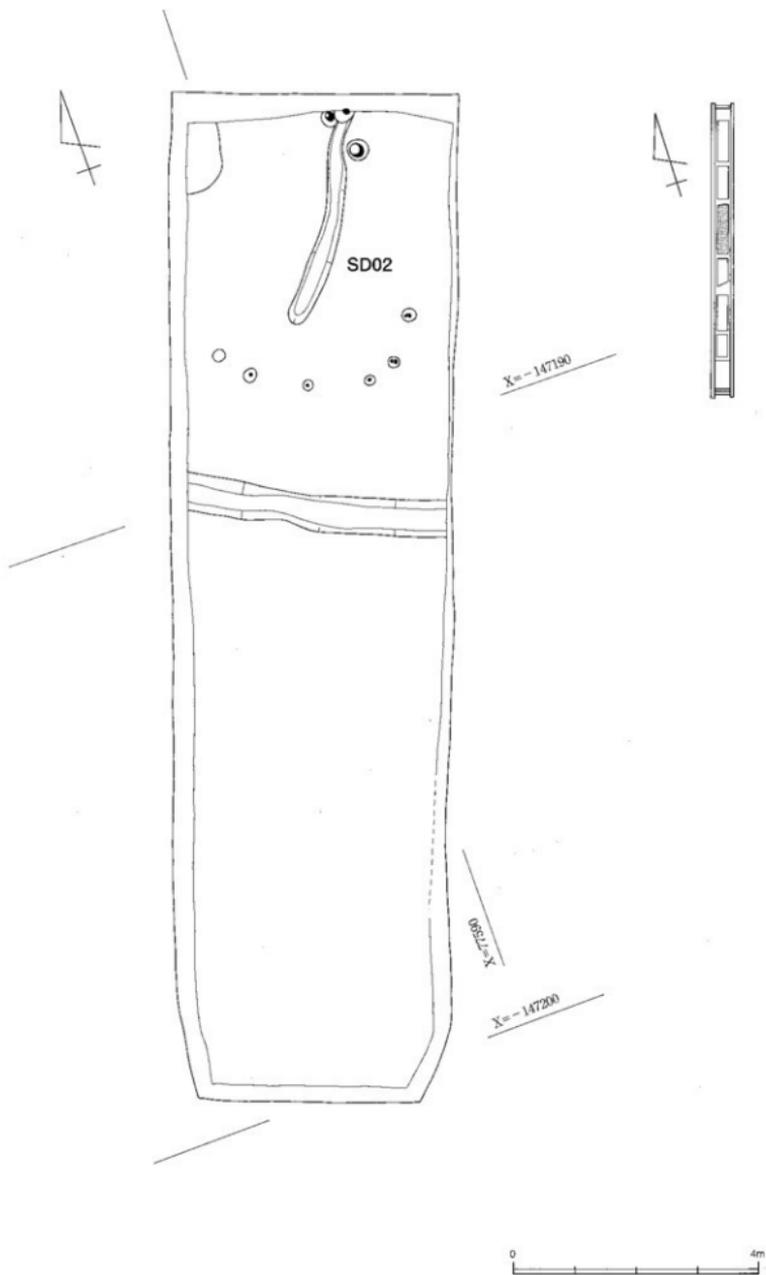
B B' C C'



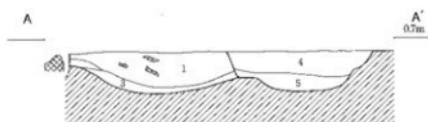
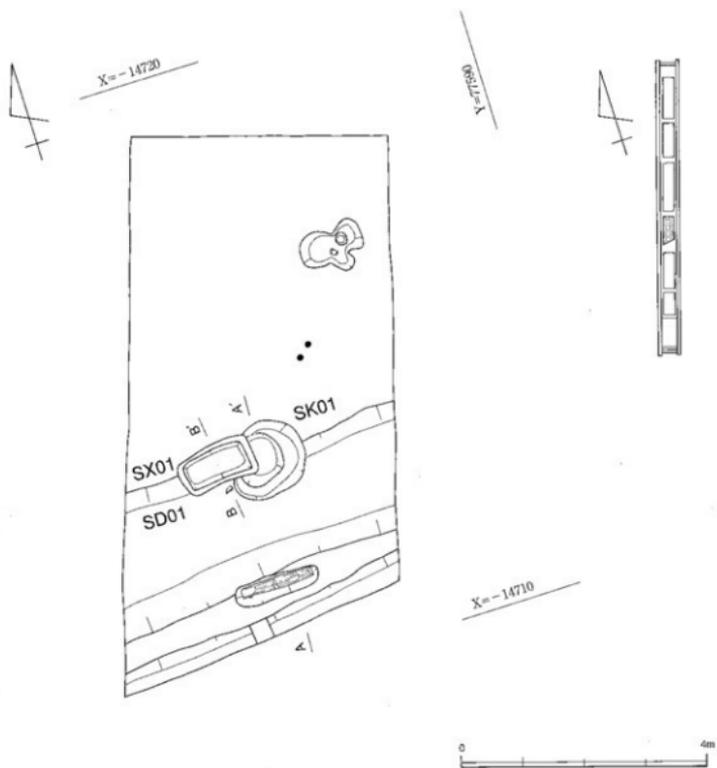
SD01



I-4区上層遺構② (SD01)

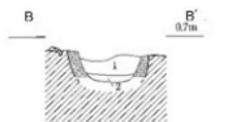


I-4区下層遺構配置図



SD01 SK01

1. 木炭含む茶黑色土
2. 木炭含む茶褐色土混濁色砂層
3. 炭屑含む褐色中砂層
4. 茶色砂混土
5. 砂

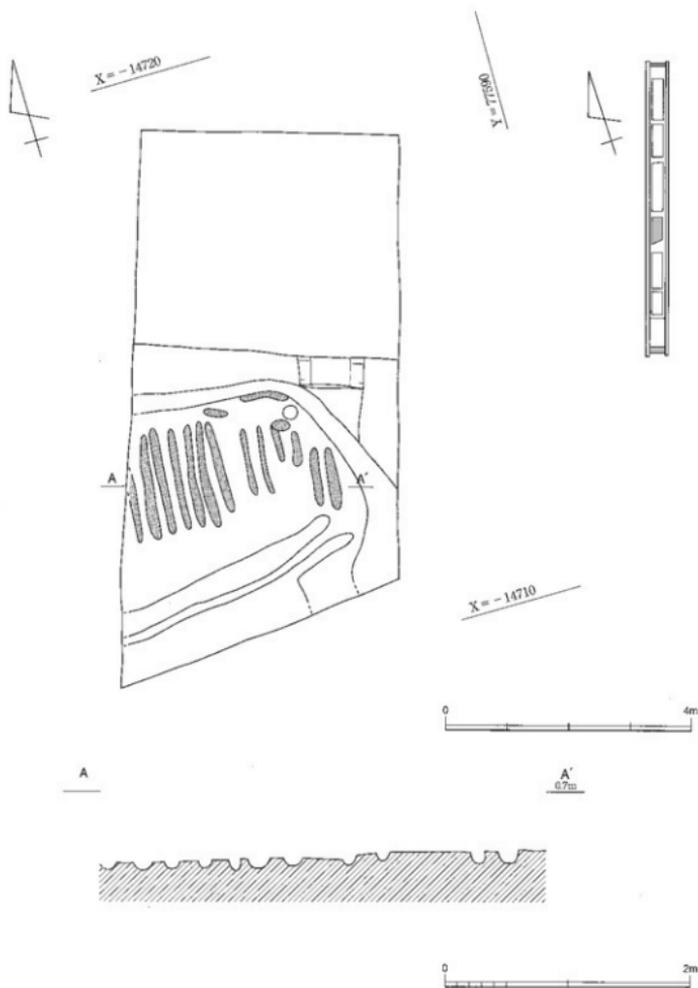


SX01

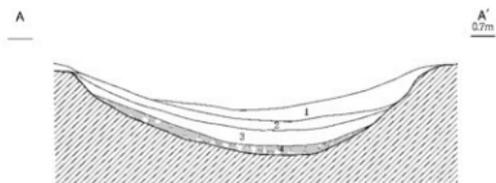
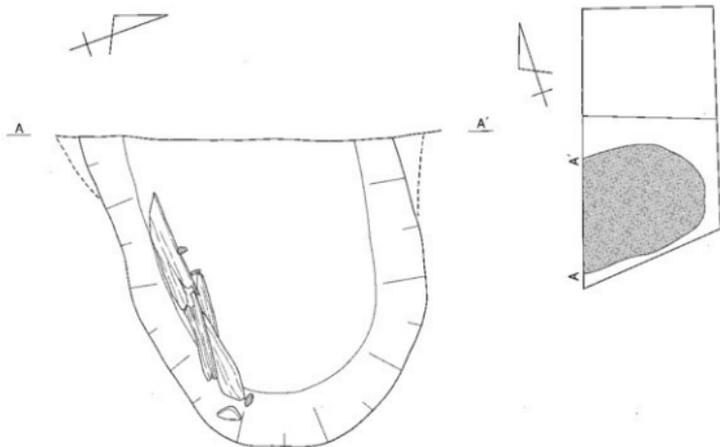
1. 粘土ブロック木炭・灰層
2. 木炭層



I-5区上層遺構配置図



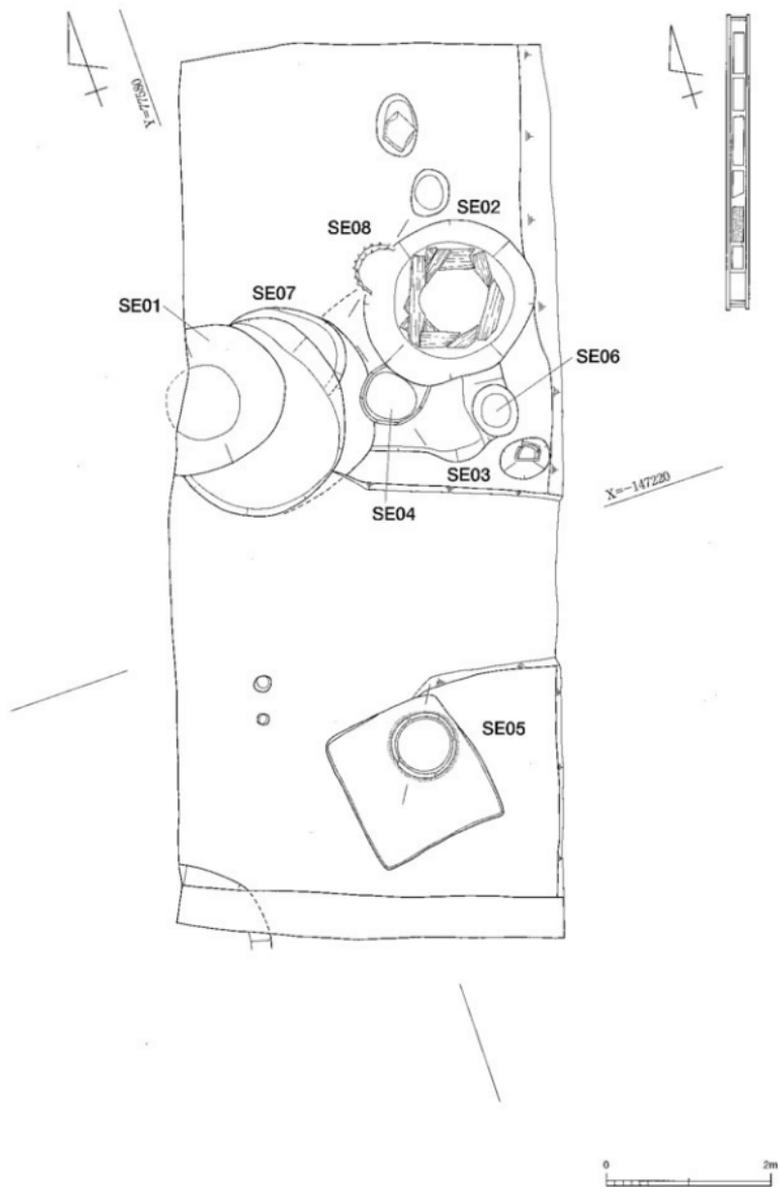
I-5区下層遺構 (畠・鋤溝)



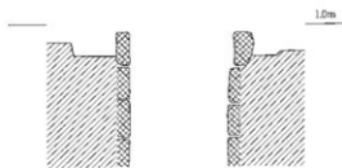
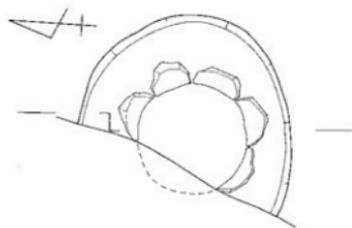
池状遺構 (SX02)

1. 茶色砂 (1層) 土層
2. 白褐色砂
3. 木質泥砂
4. 木質層

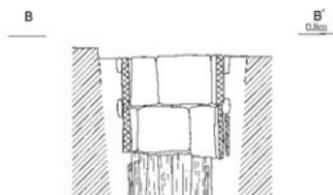
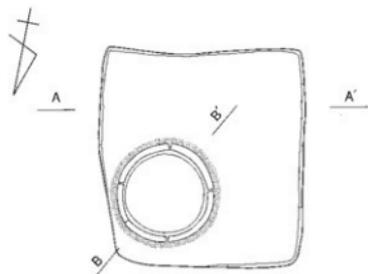




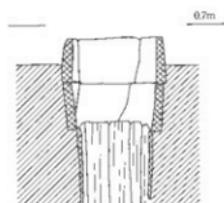
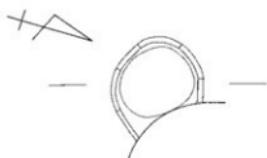
I-7区遺構配置図



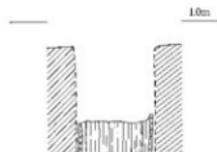
SE01



SE05

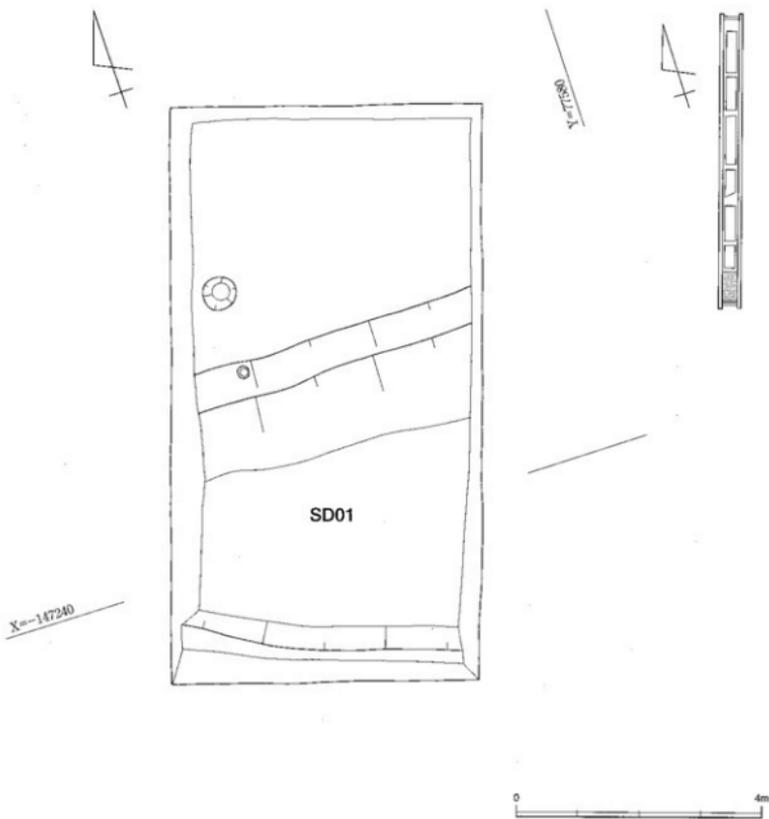


SE04

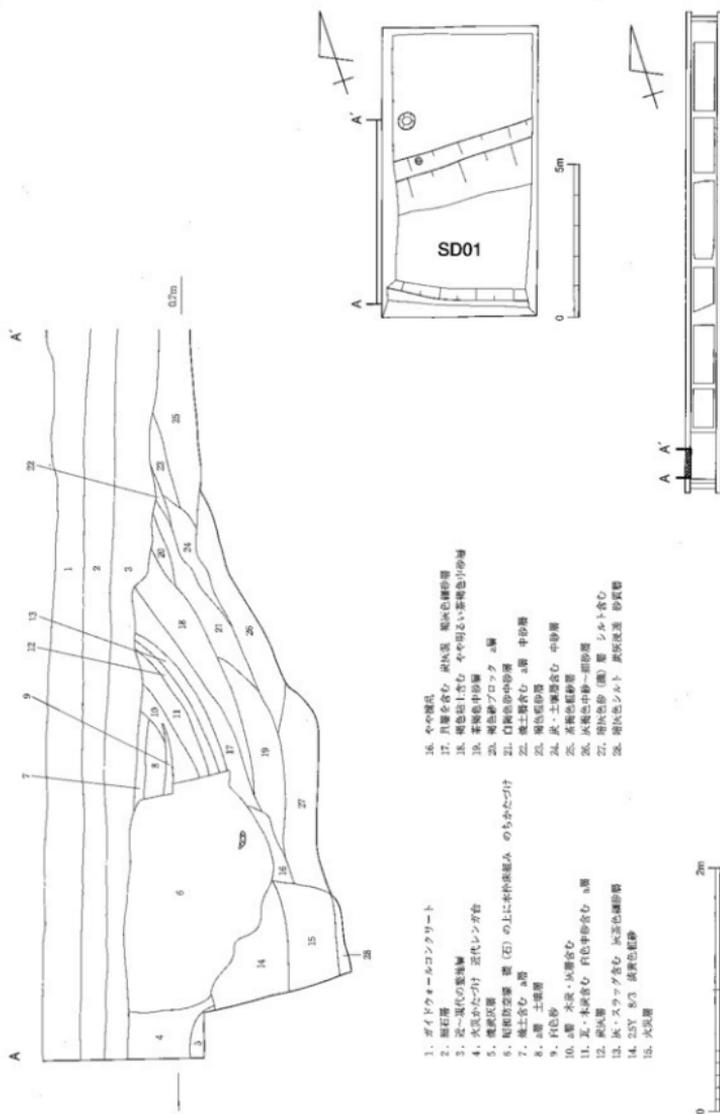


SE08





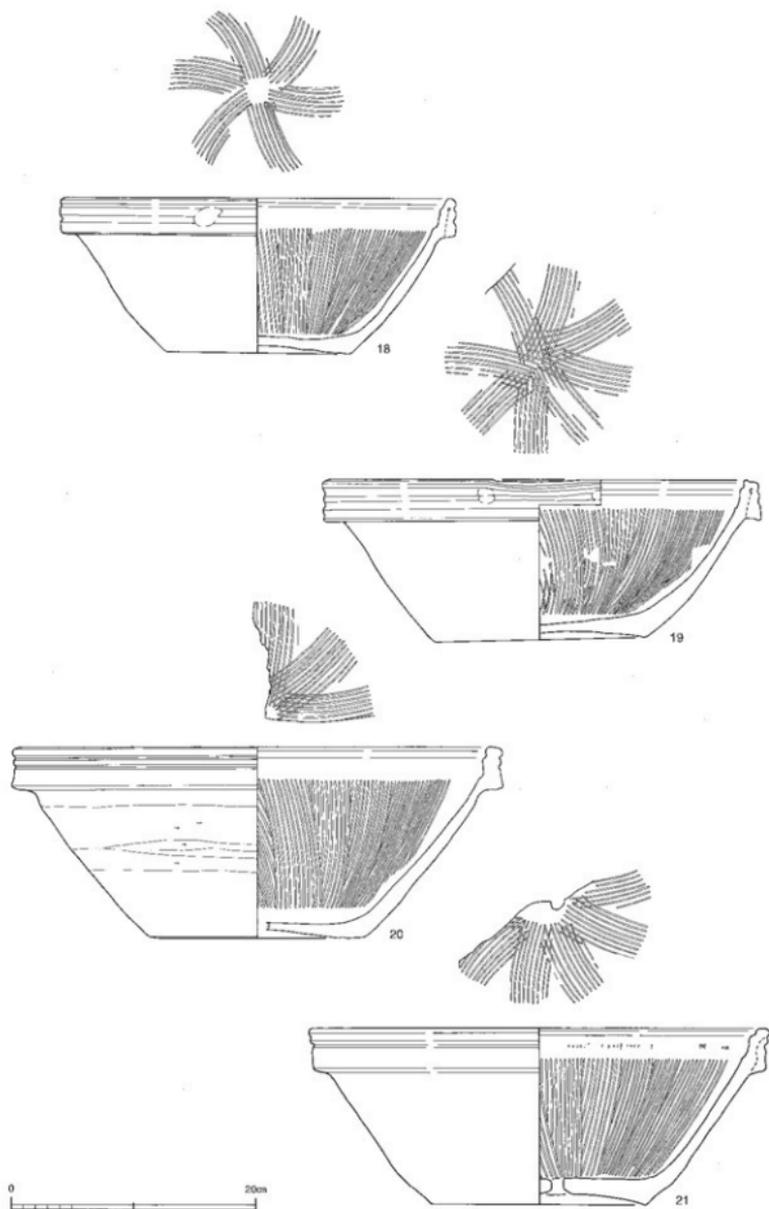
I-3区遺構配置図



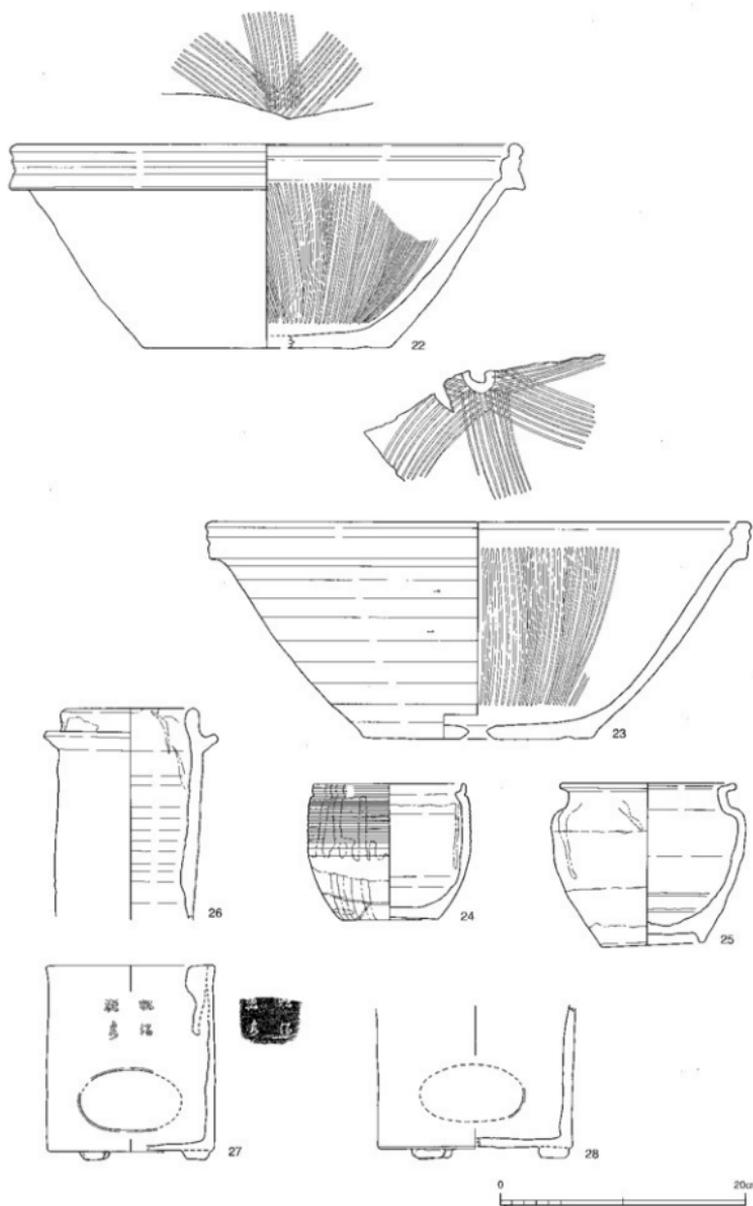
I-3区SD01土層断面図



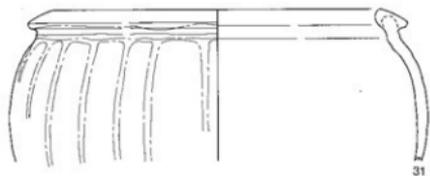
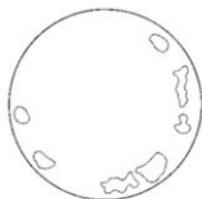
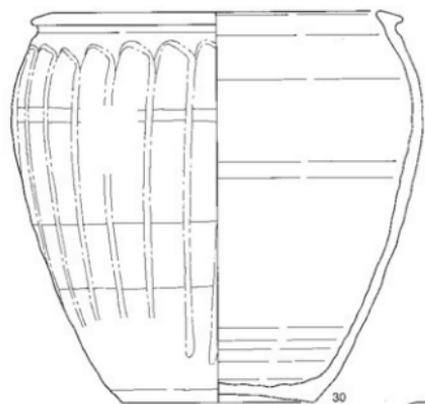
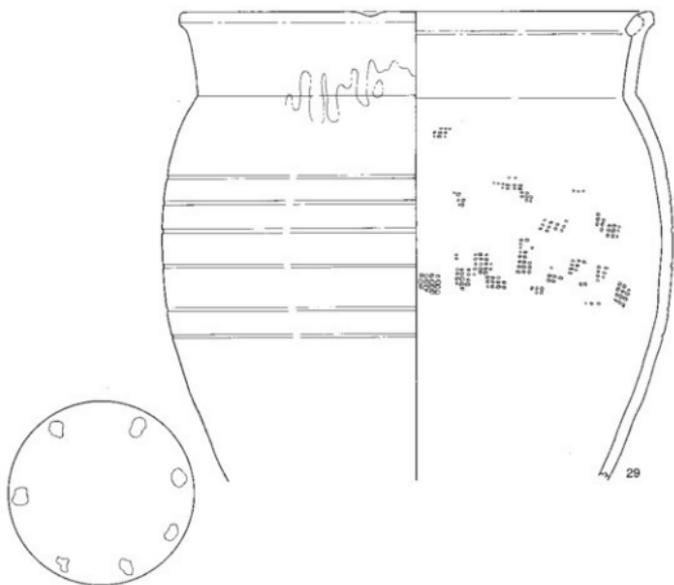
C区出土土器①



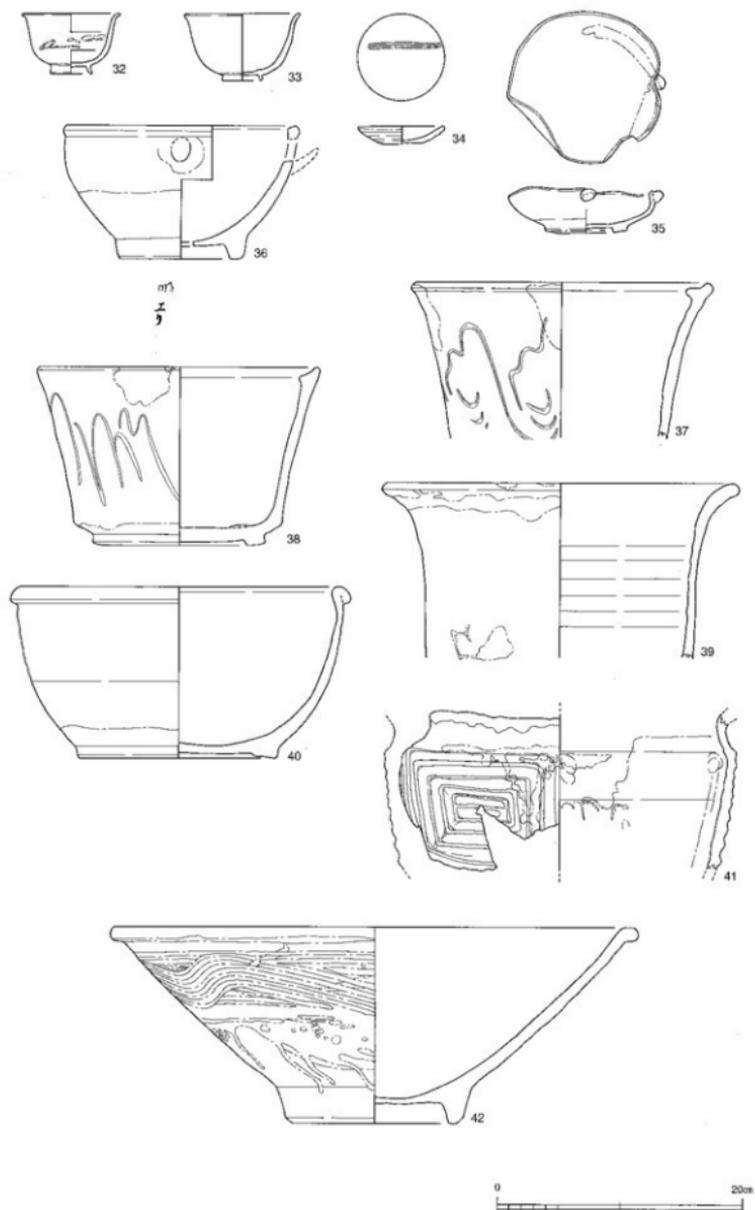
C区出土土器②

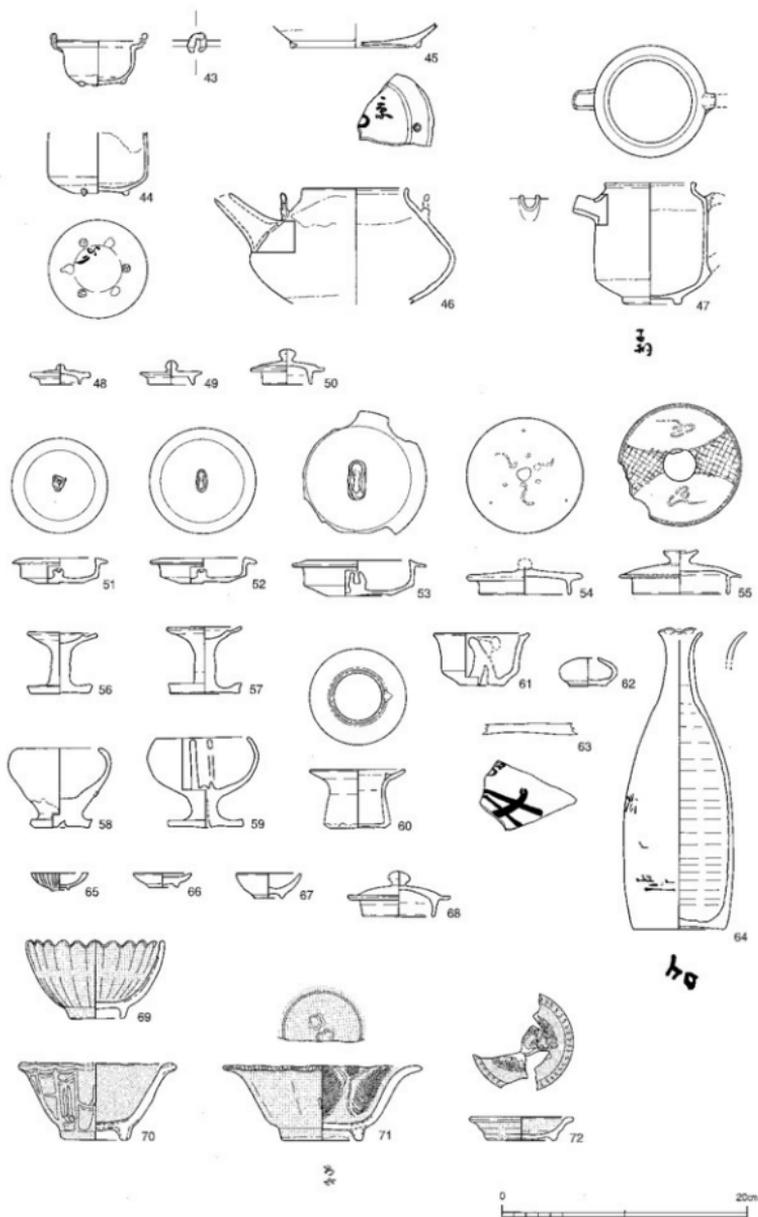


C区出土土器③

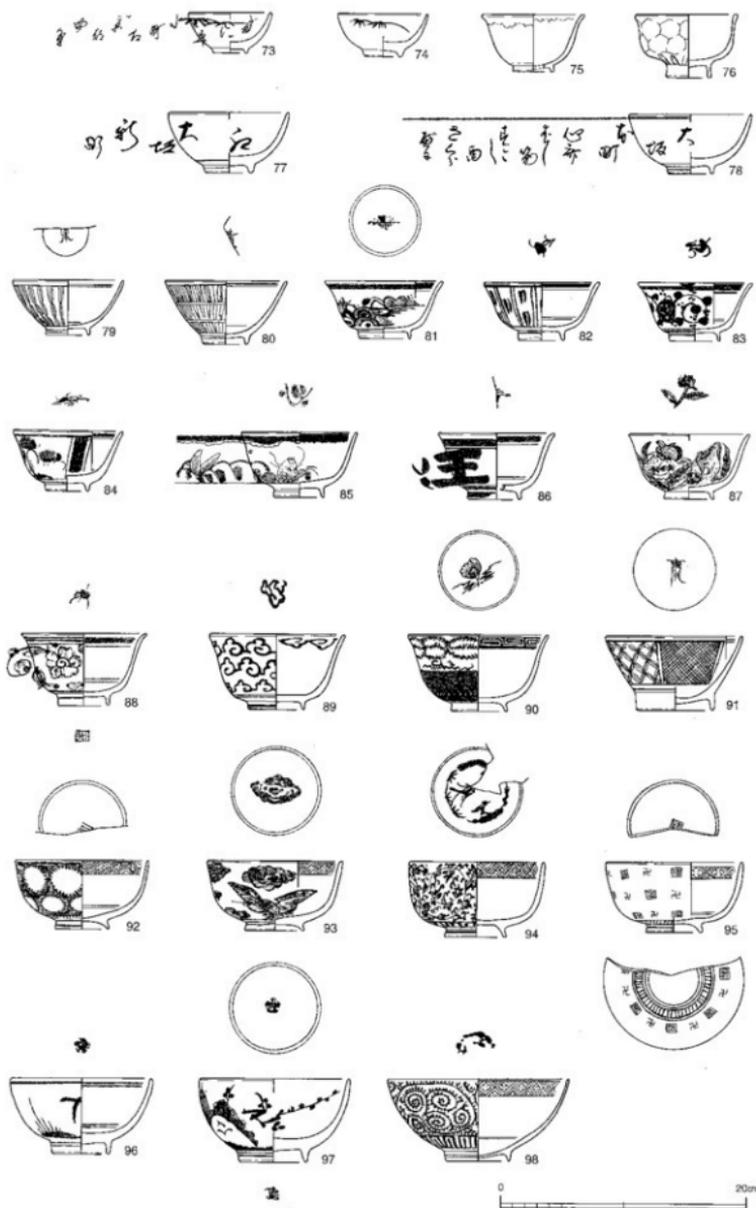


C区出土土器④

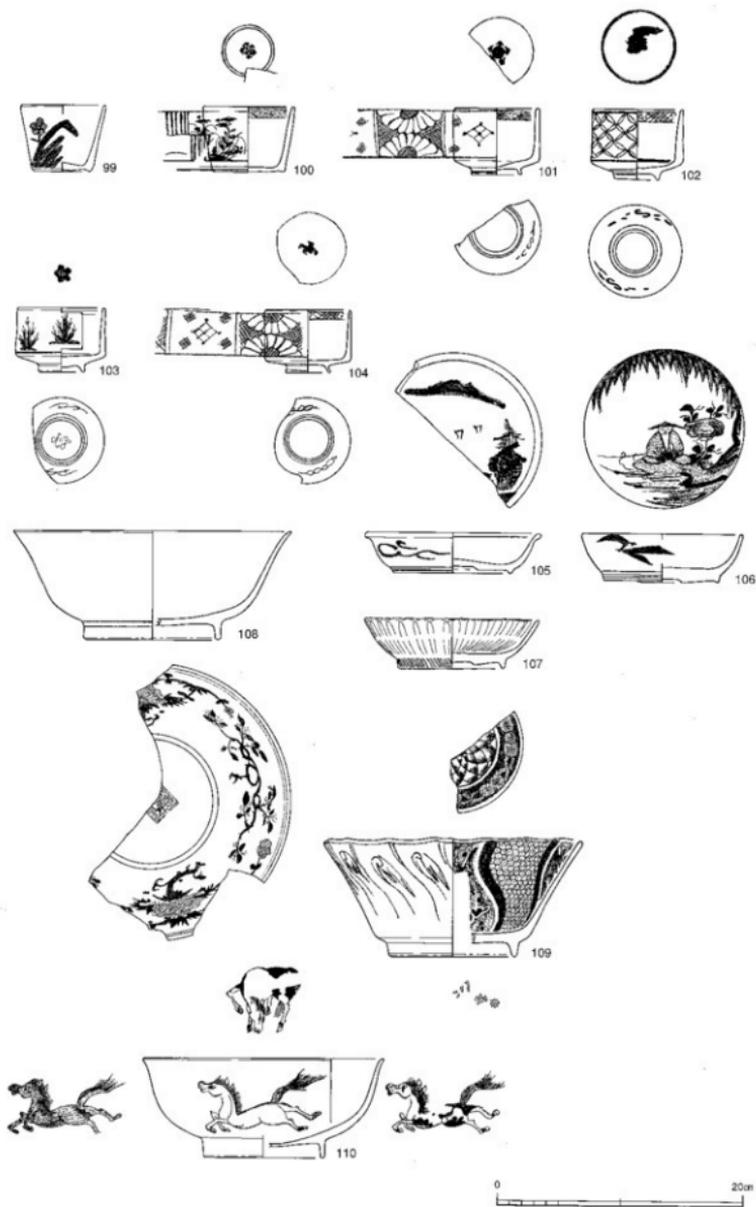




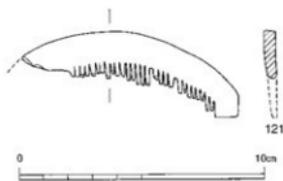
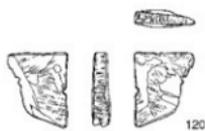
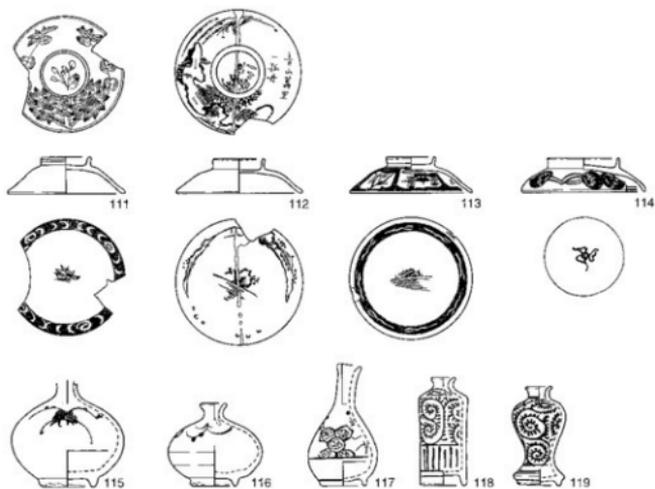
C区出土土器⑥

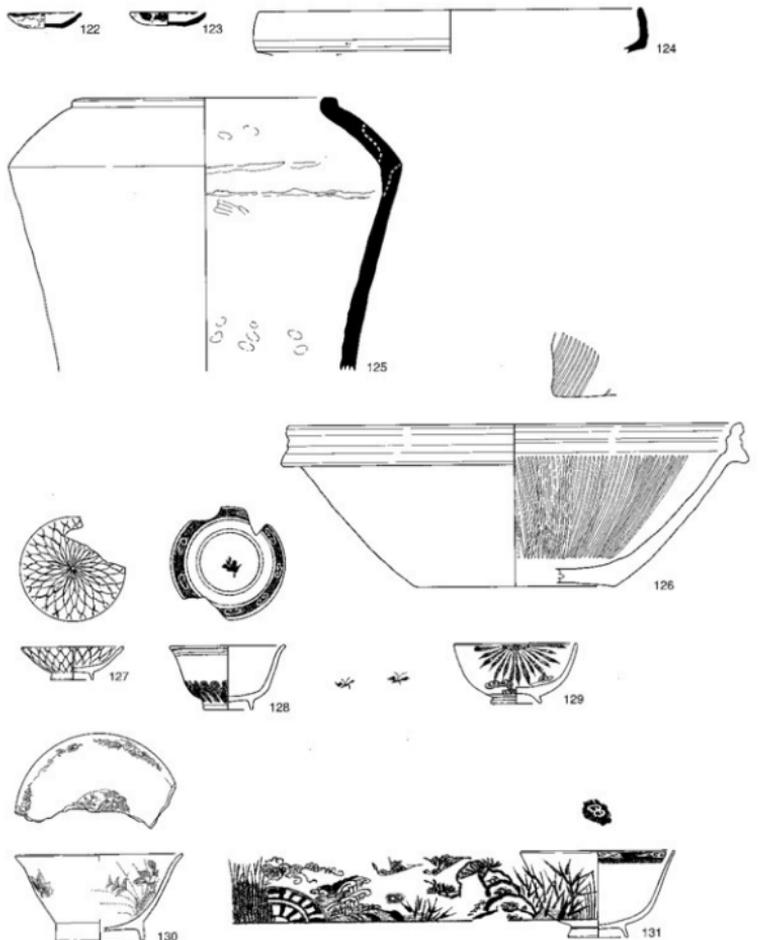


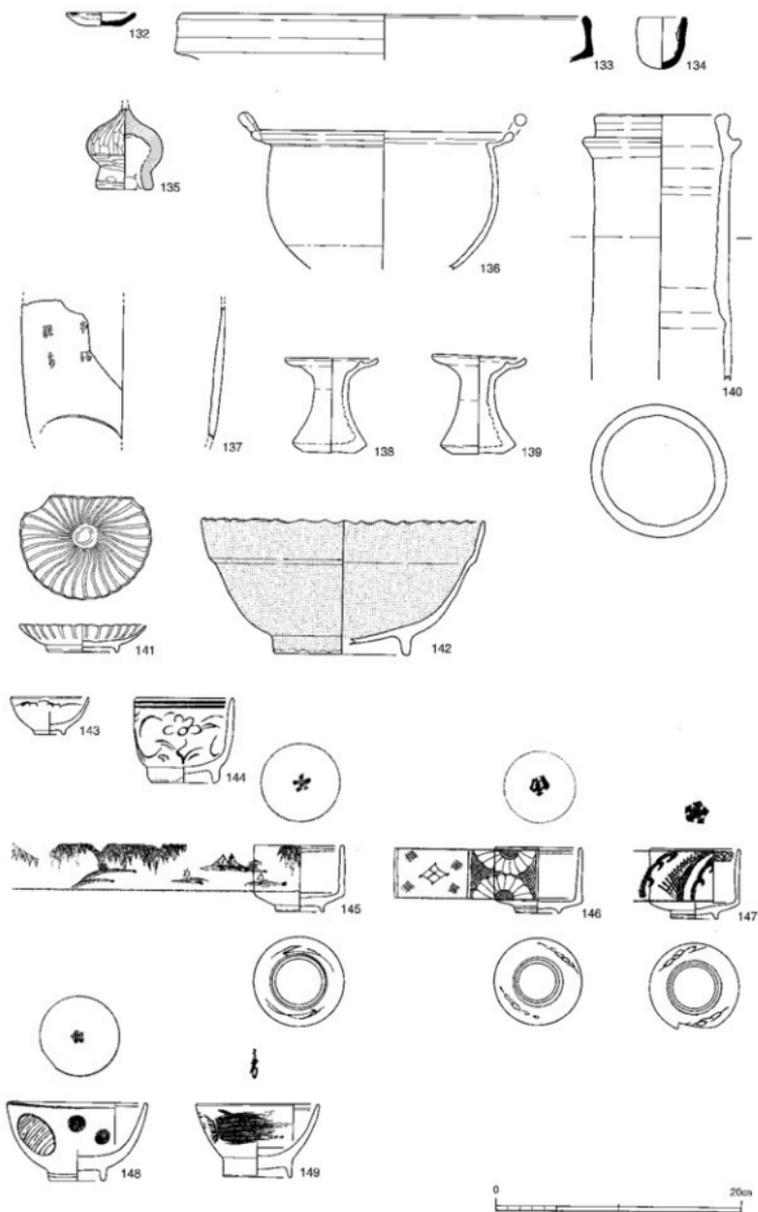
C区出土土器⑦



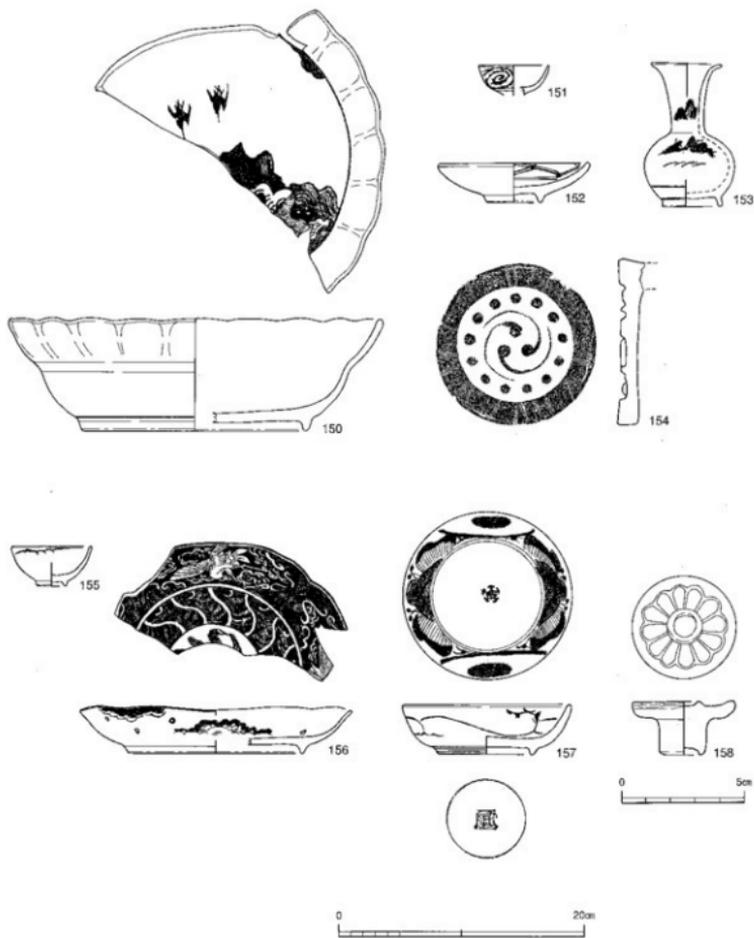
C区出土土器⑧

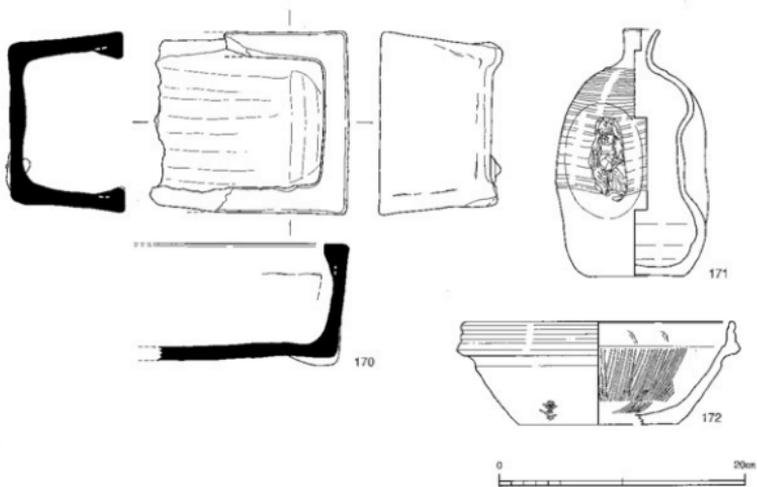
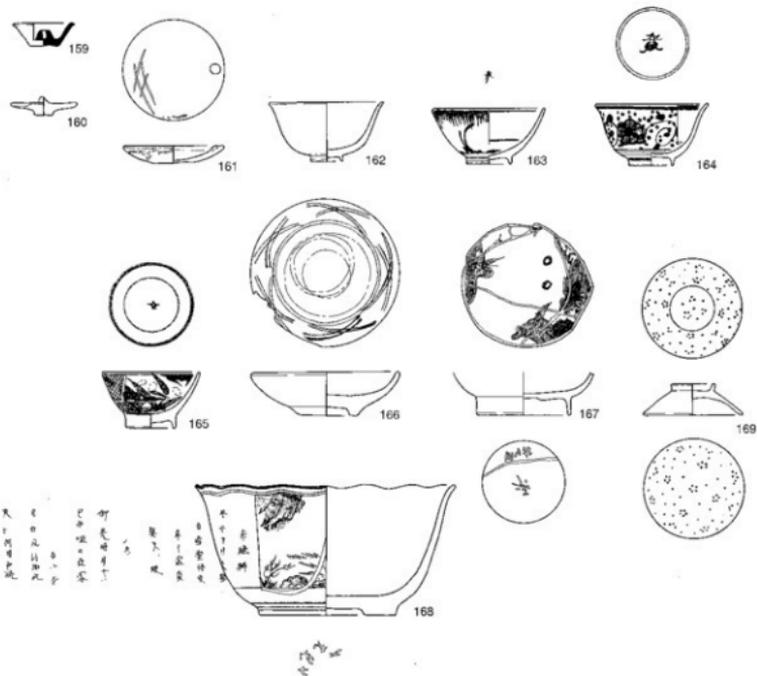


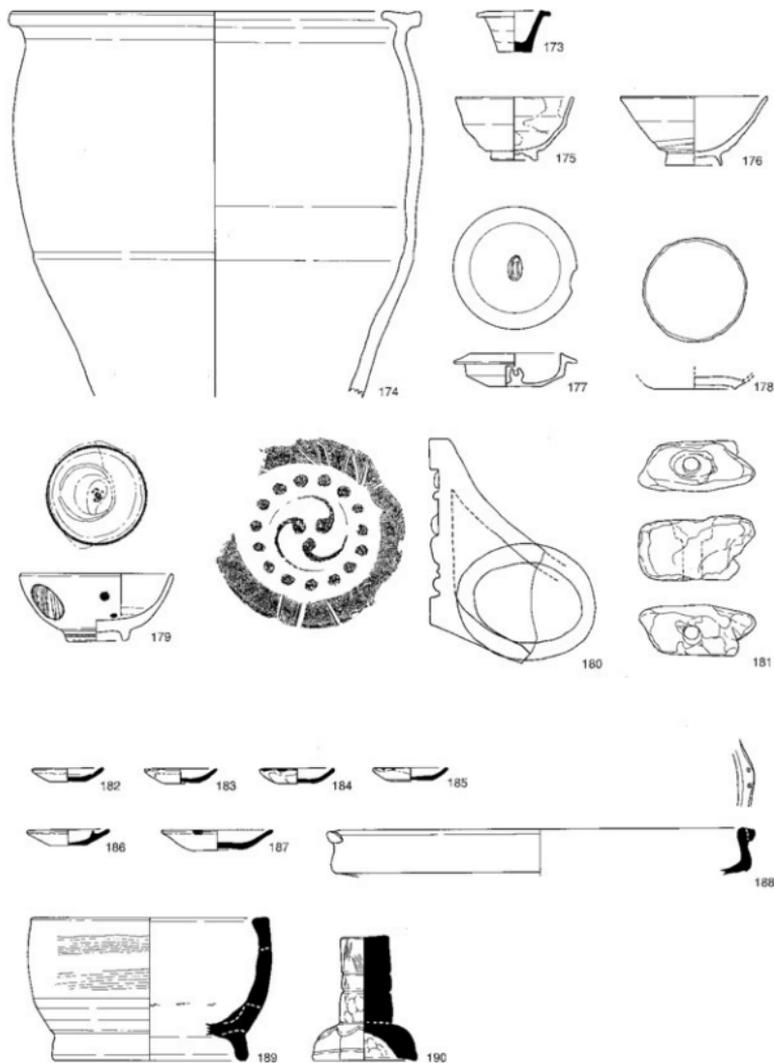


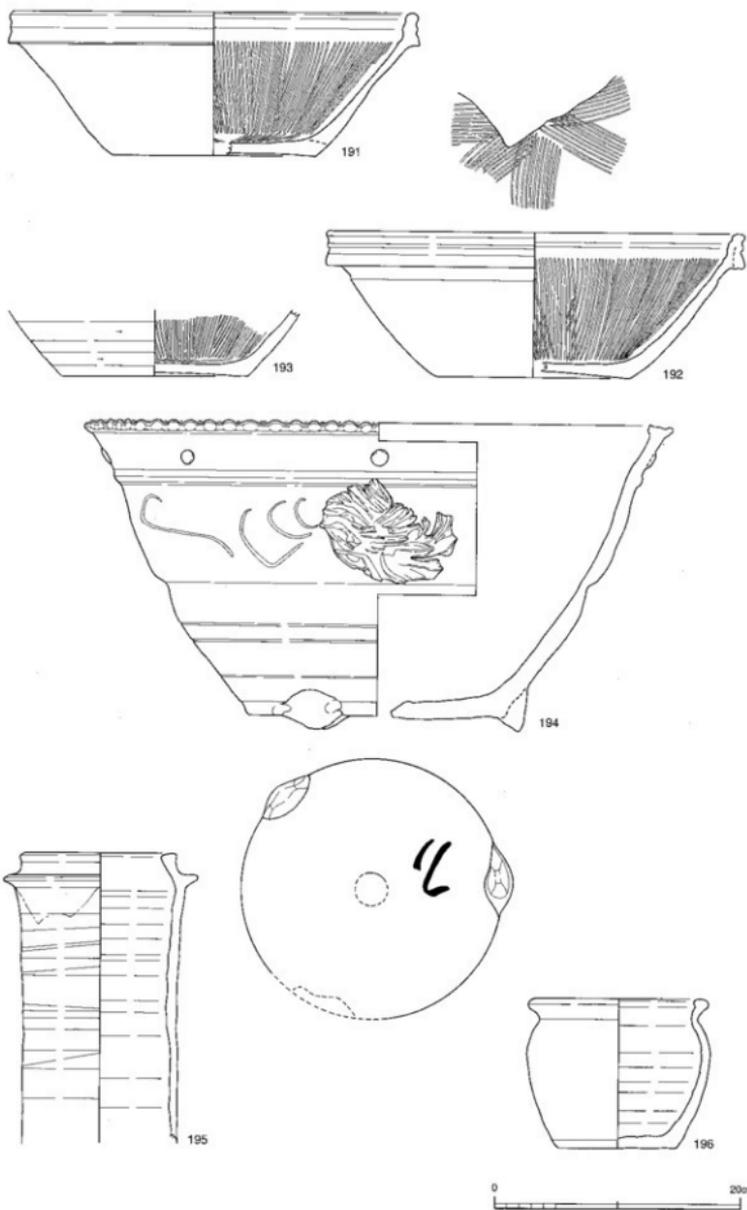


C区出土土器①

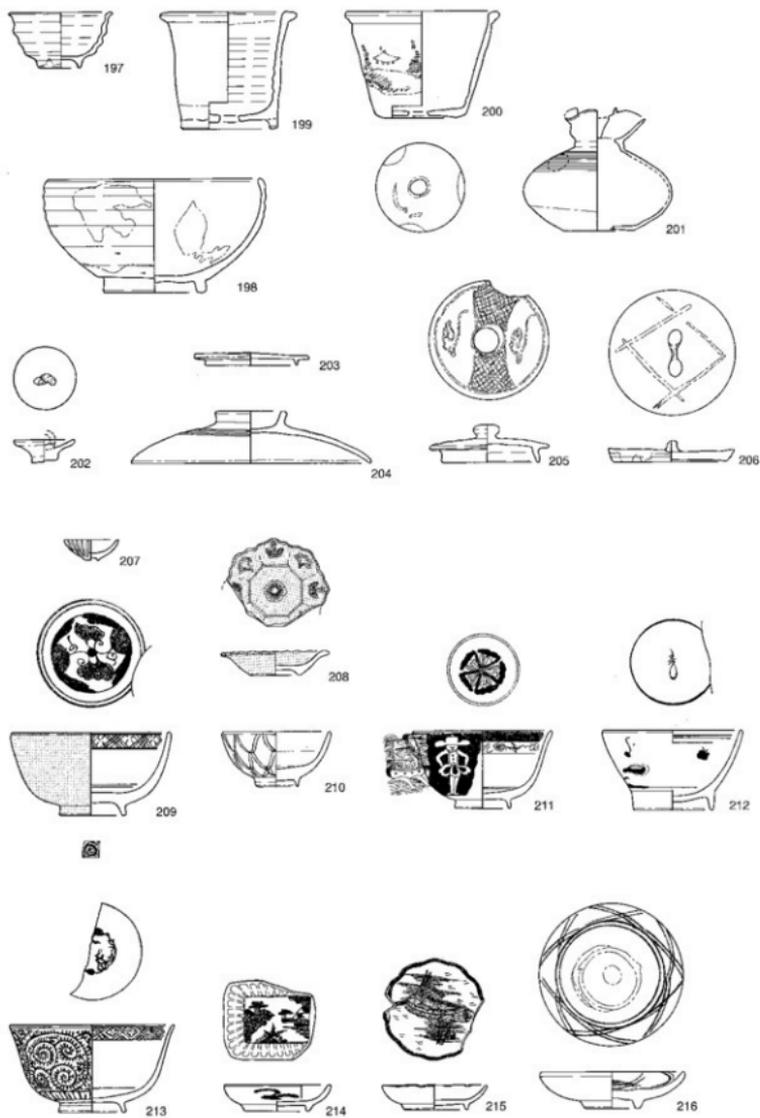


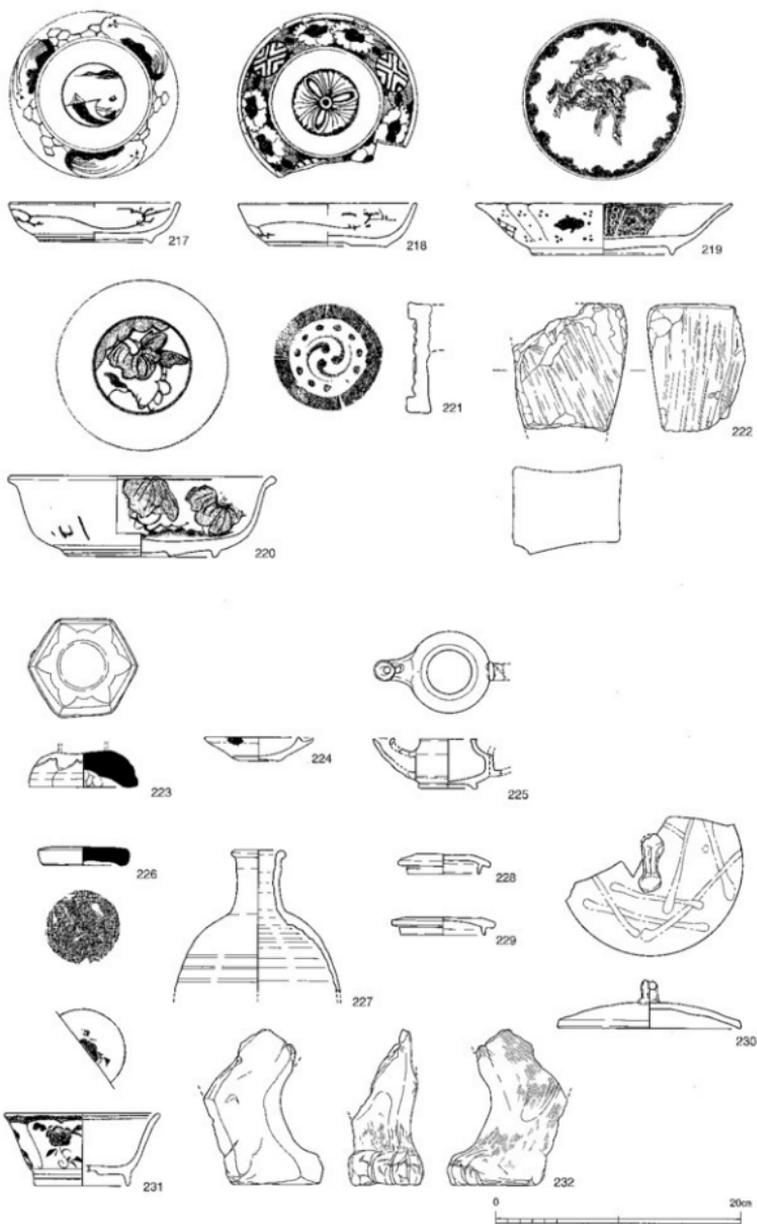


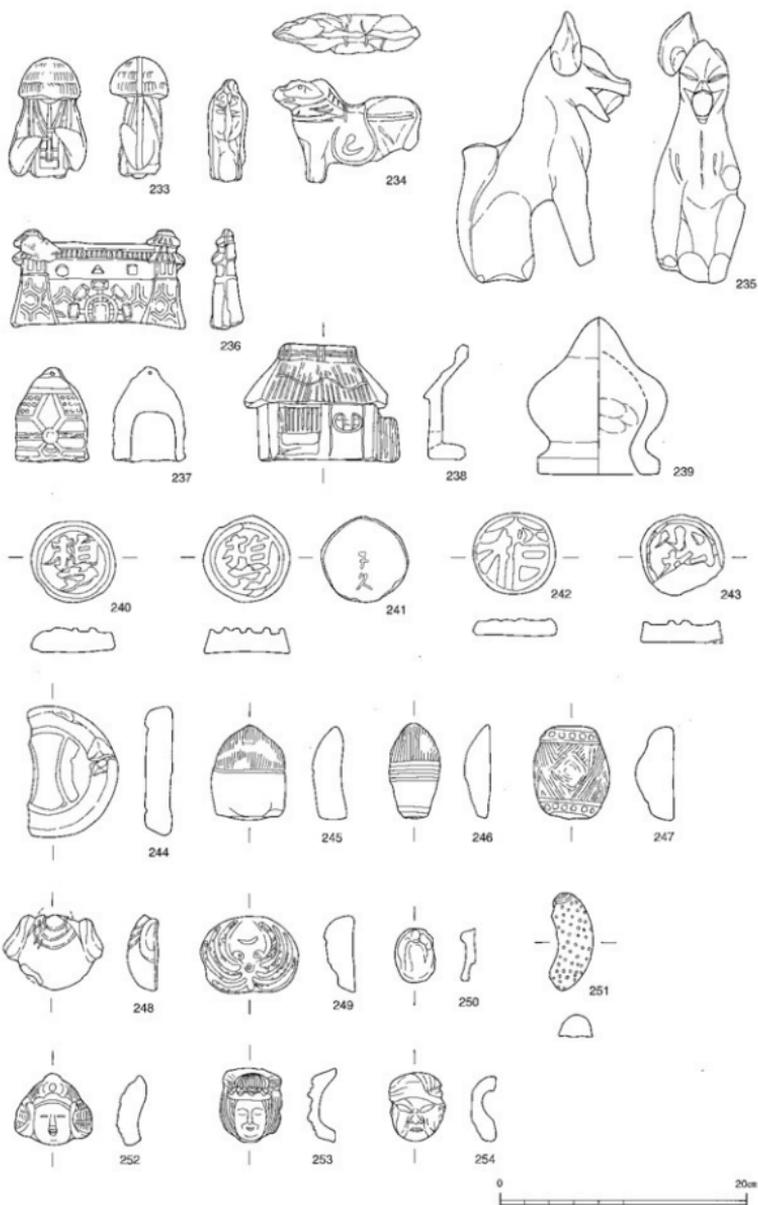




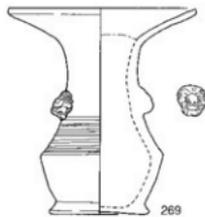
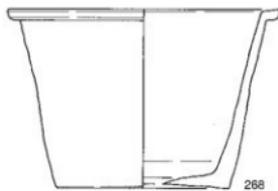
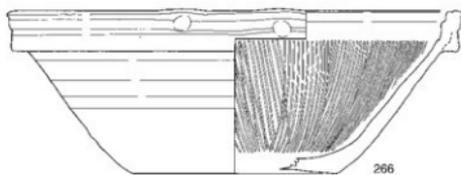
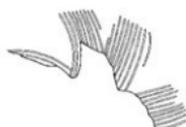
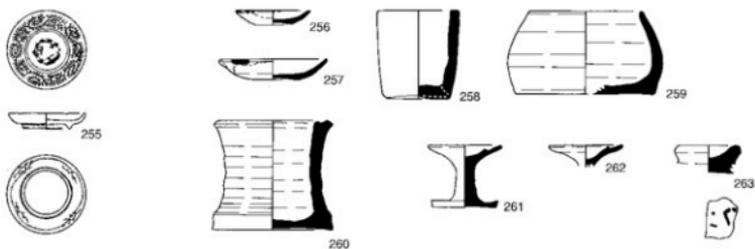
C区出土土器⑮

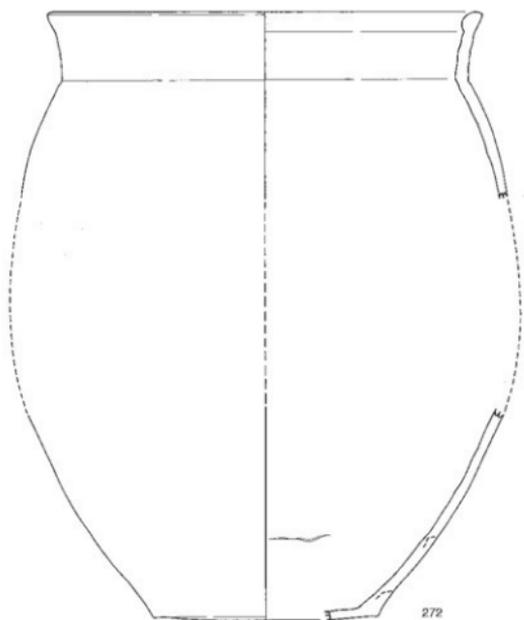
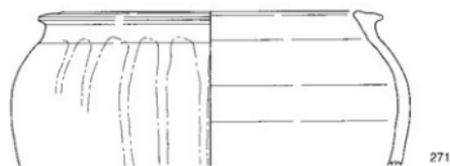


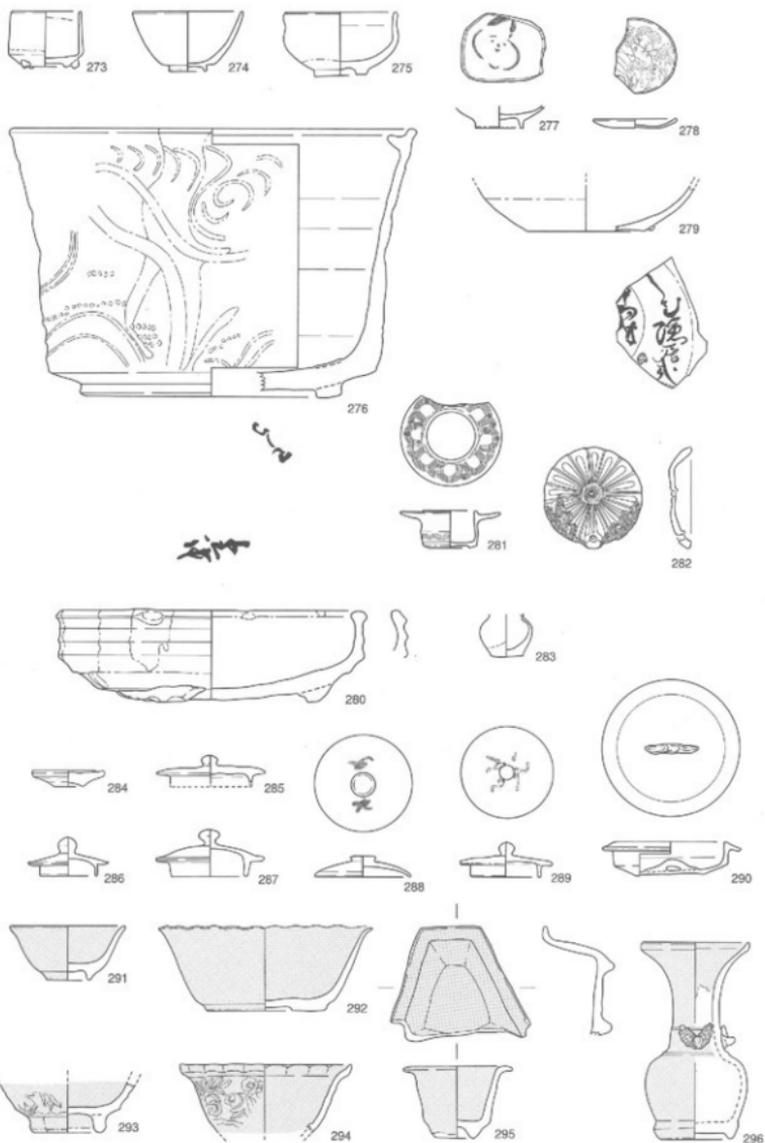




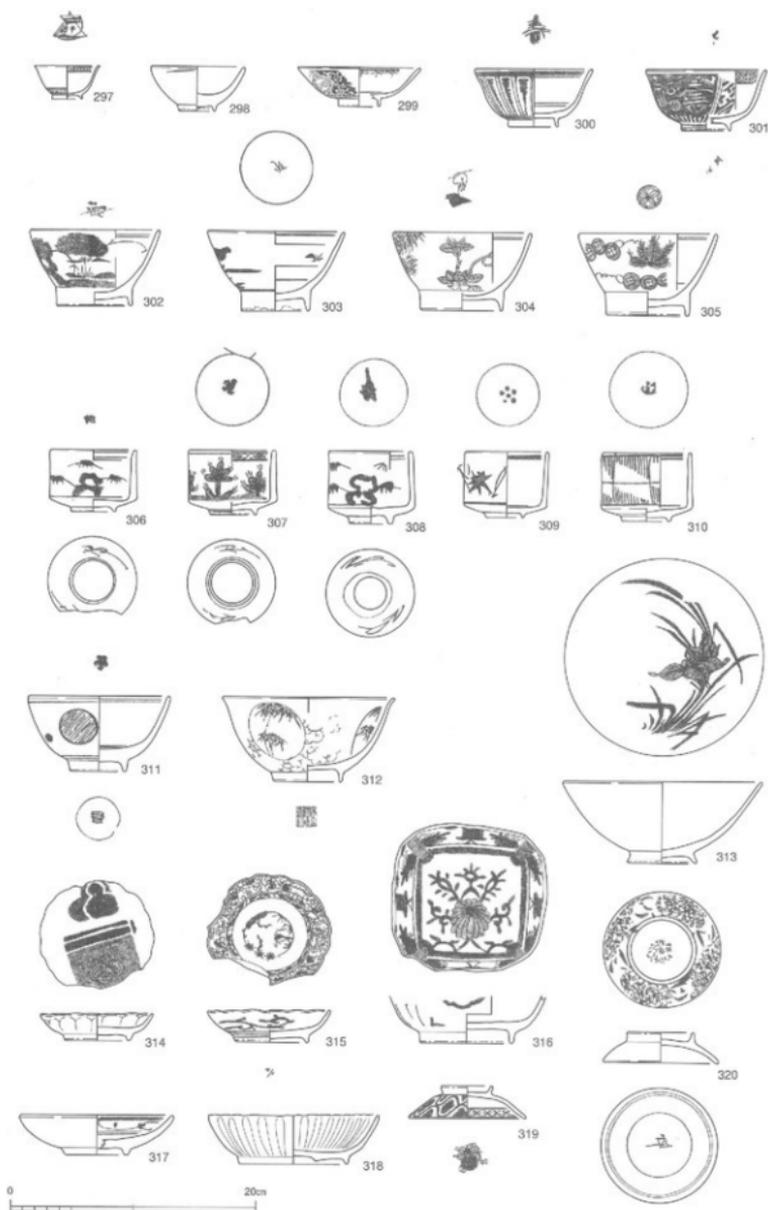
C区出土土製品

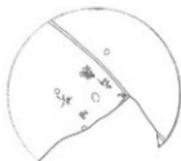
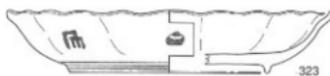
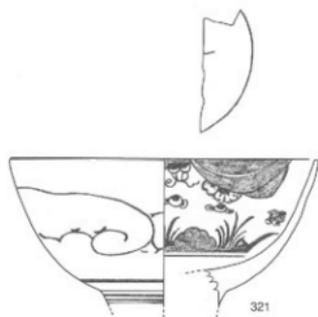


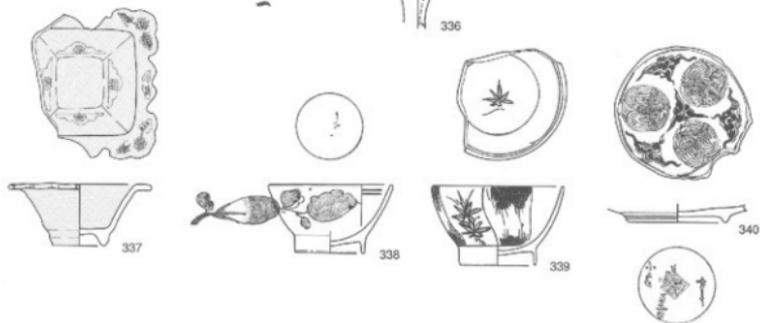
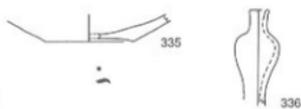
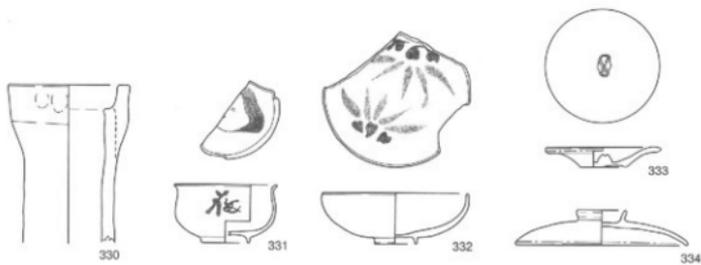
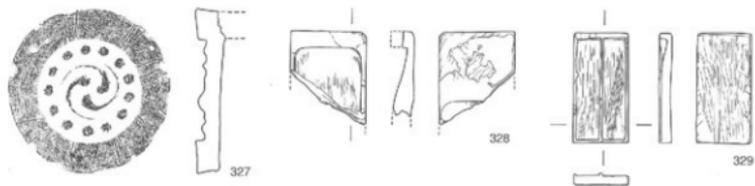


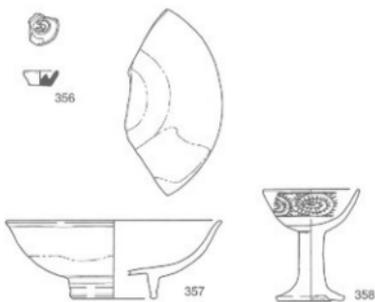
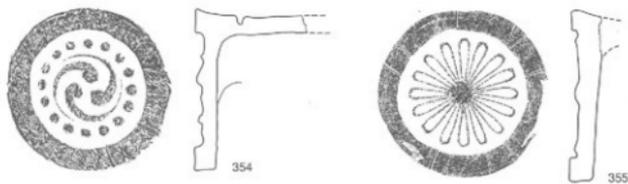
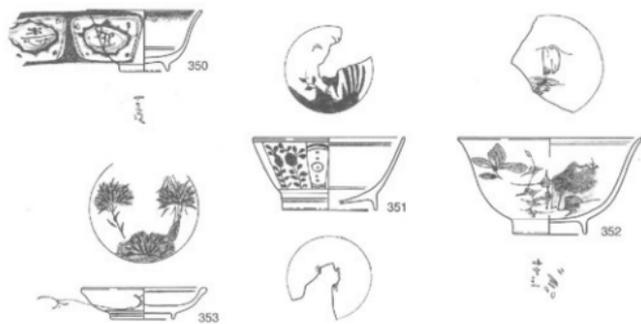
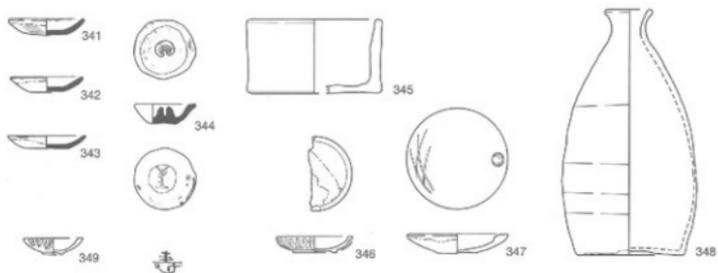


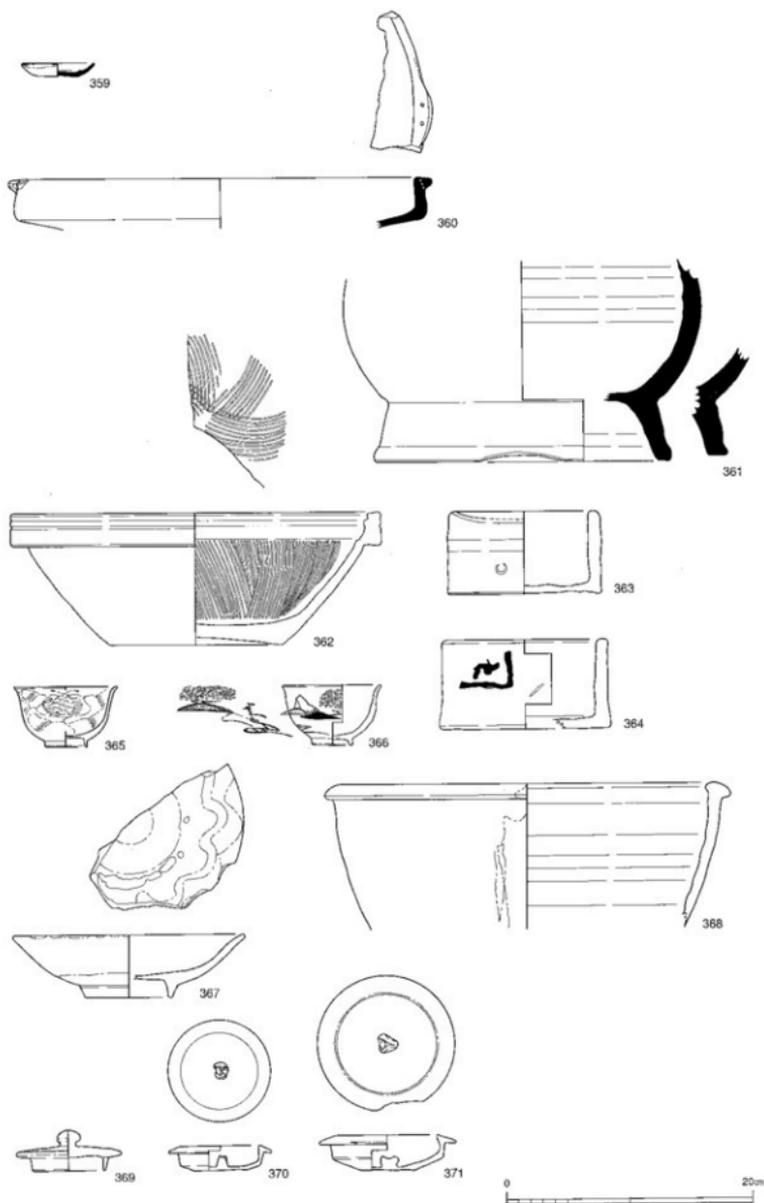
D区出土土器③





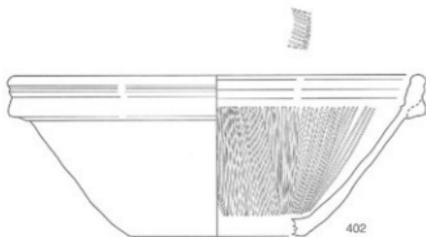
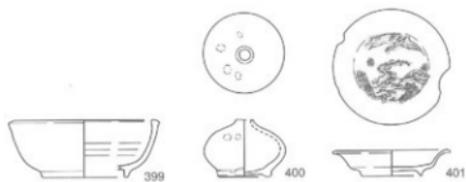
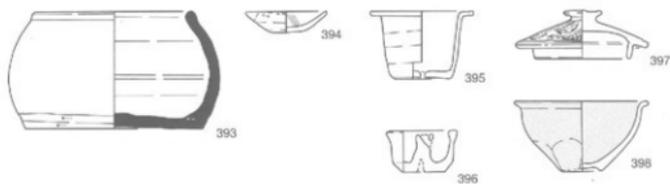
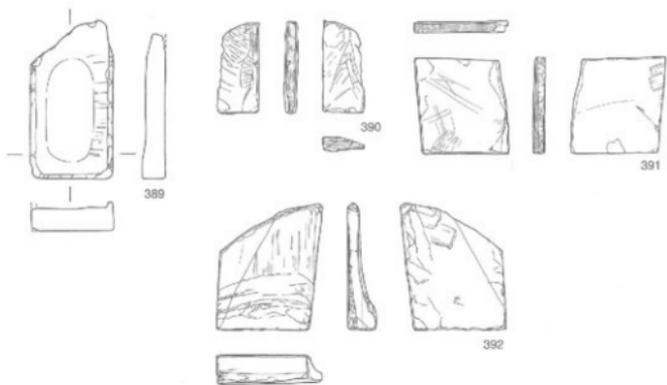


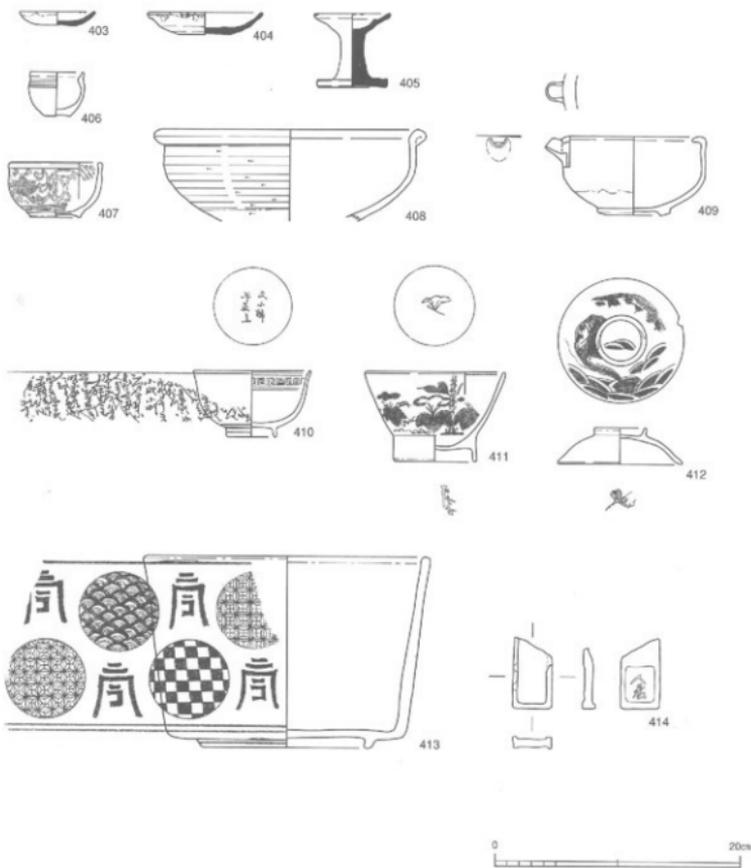




D区出土土器⑧



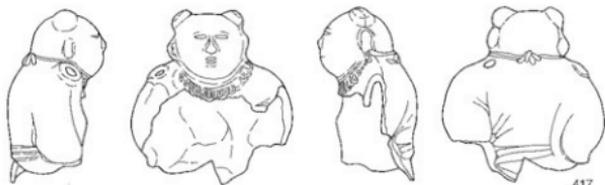




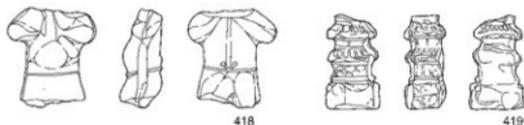


415

416

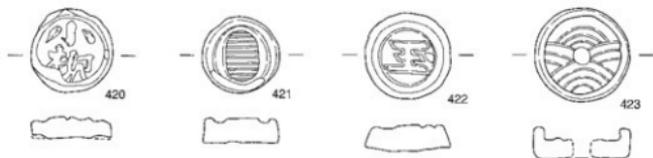


417



418

419



420

421

422

423



424

425

426

427

418

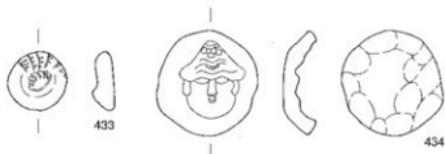


429

430

431

432

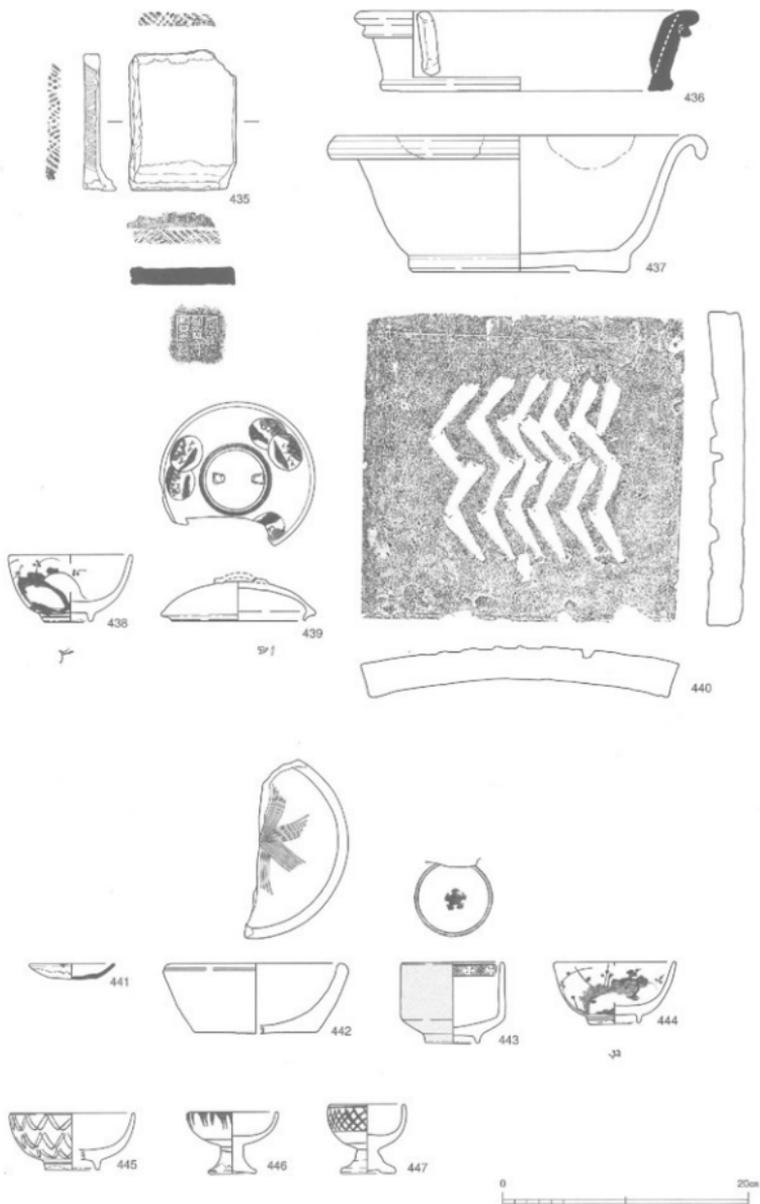


433

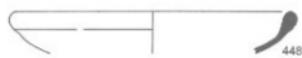
434



D区出土土製品



D·E区出土土器



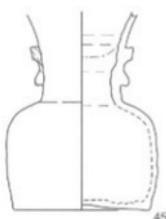
448



449



450



452



453



451



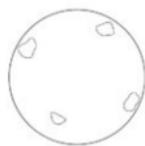
454



456



457



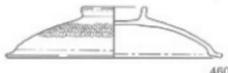
455



458



459



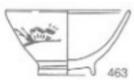
460



461



462



463



464

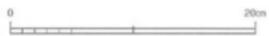


465

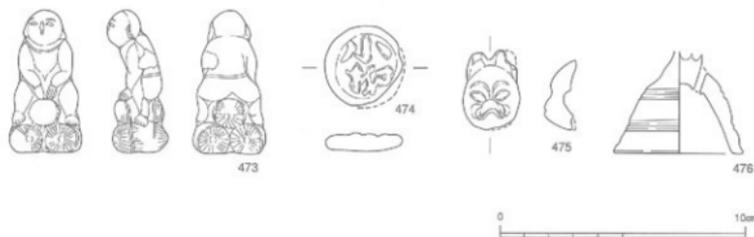
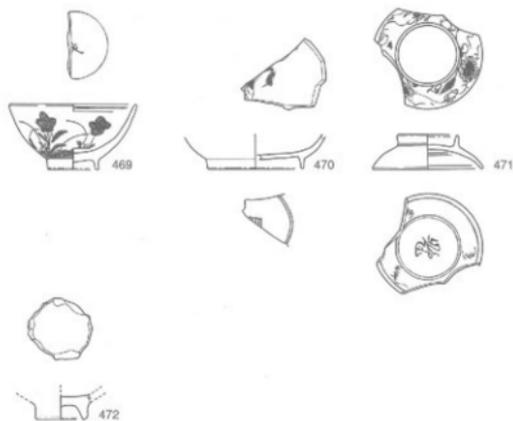
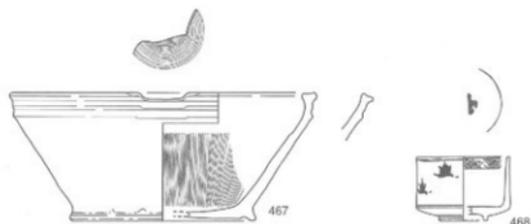
465

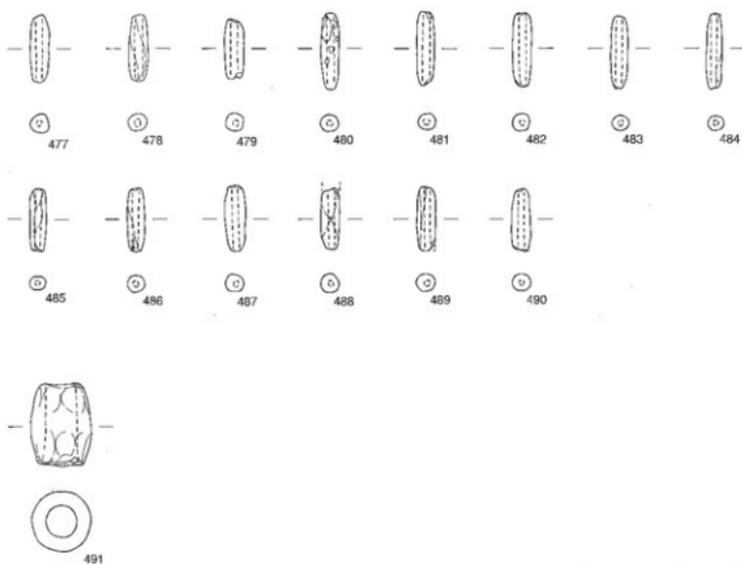


466

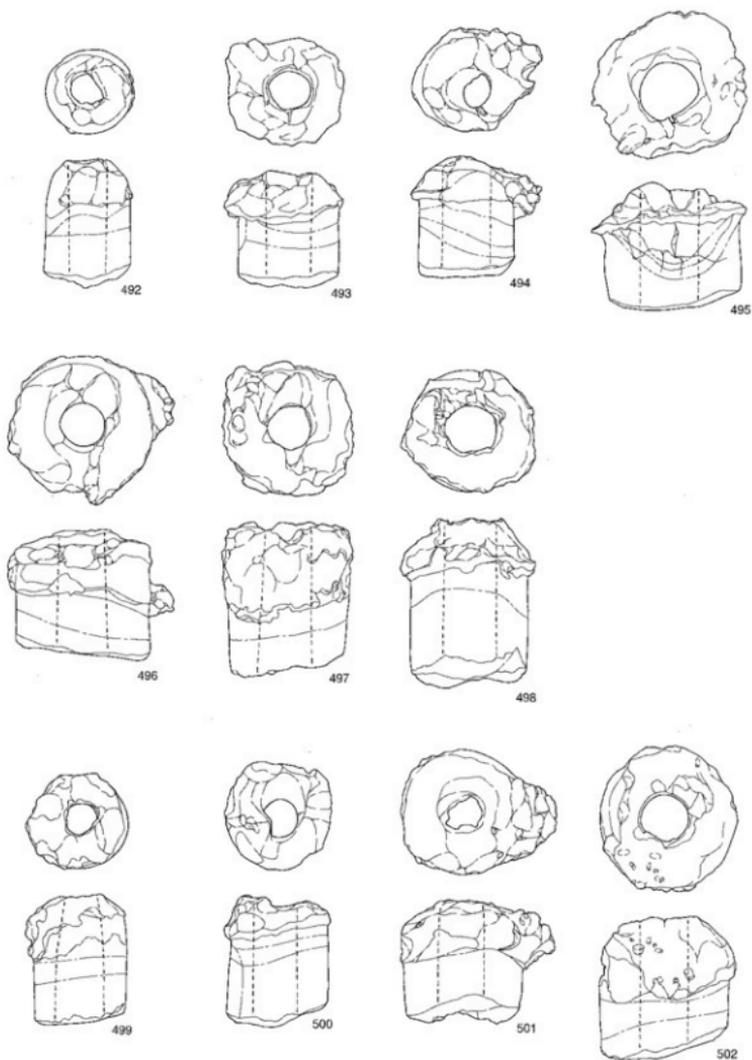


F区出土土器①

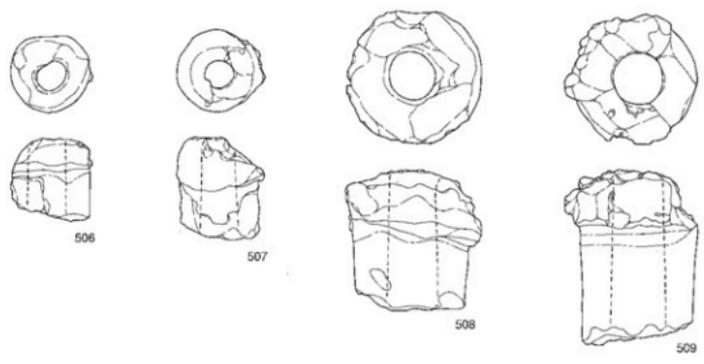
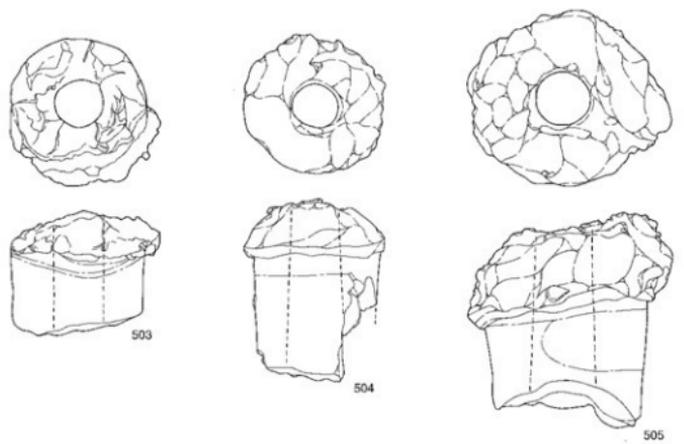




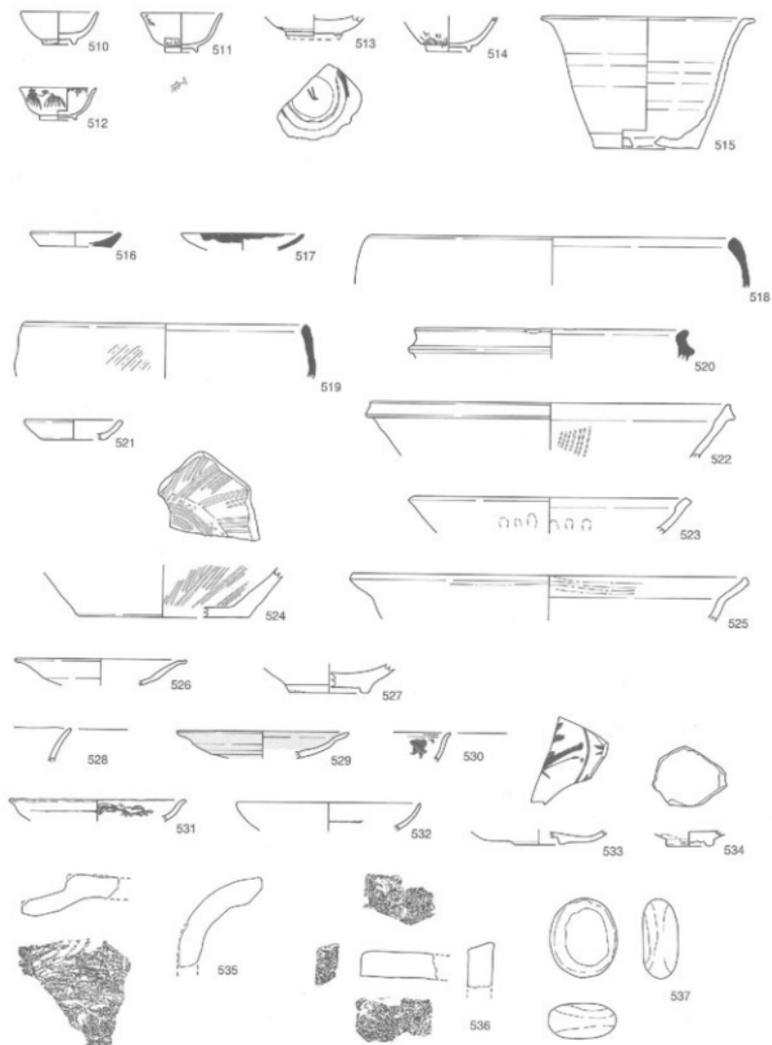
D·F区出土土器(土錘)

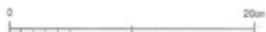
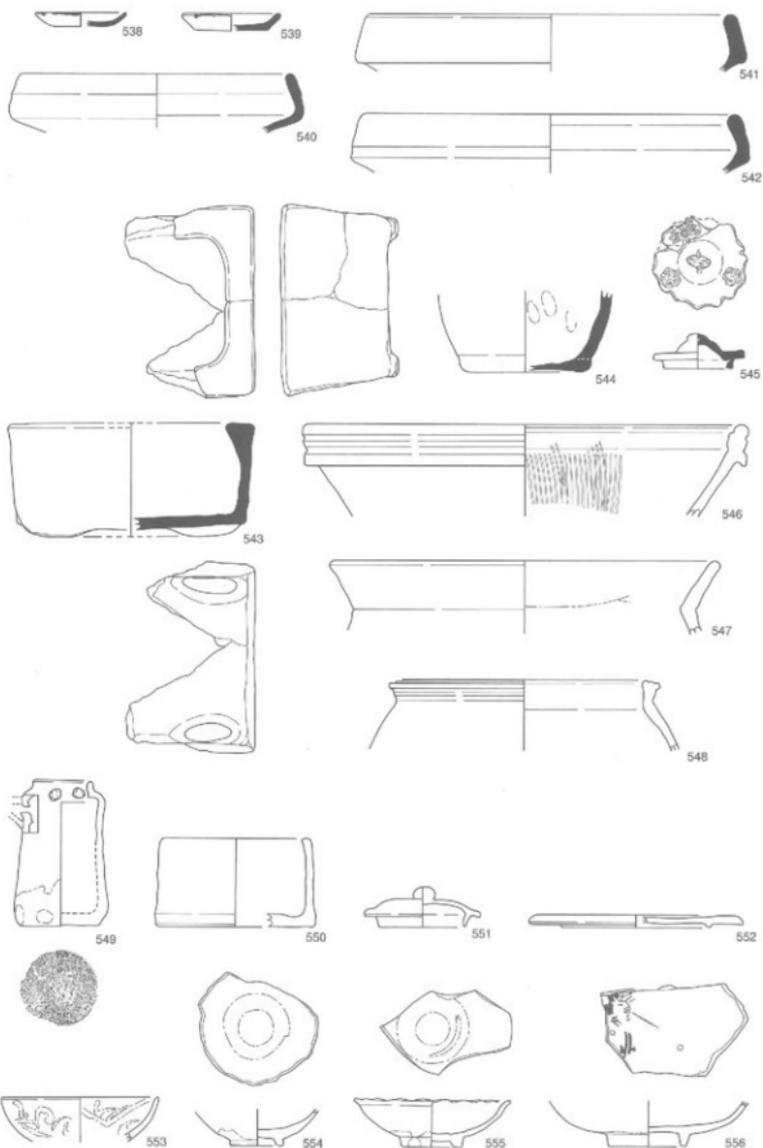


C·D区出土土器 (羽口)



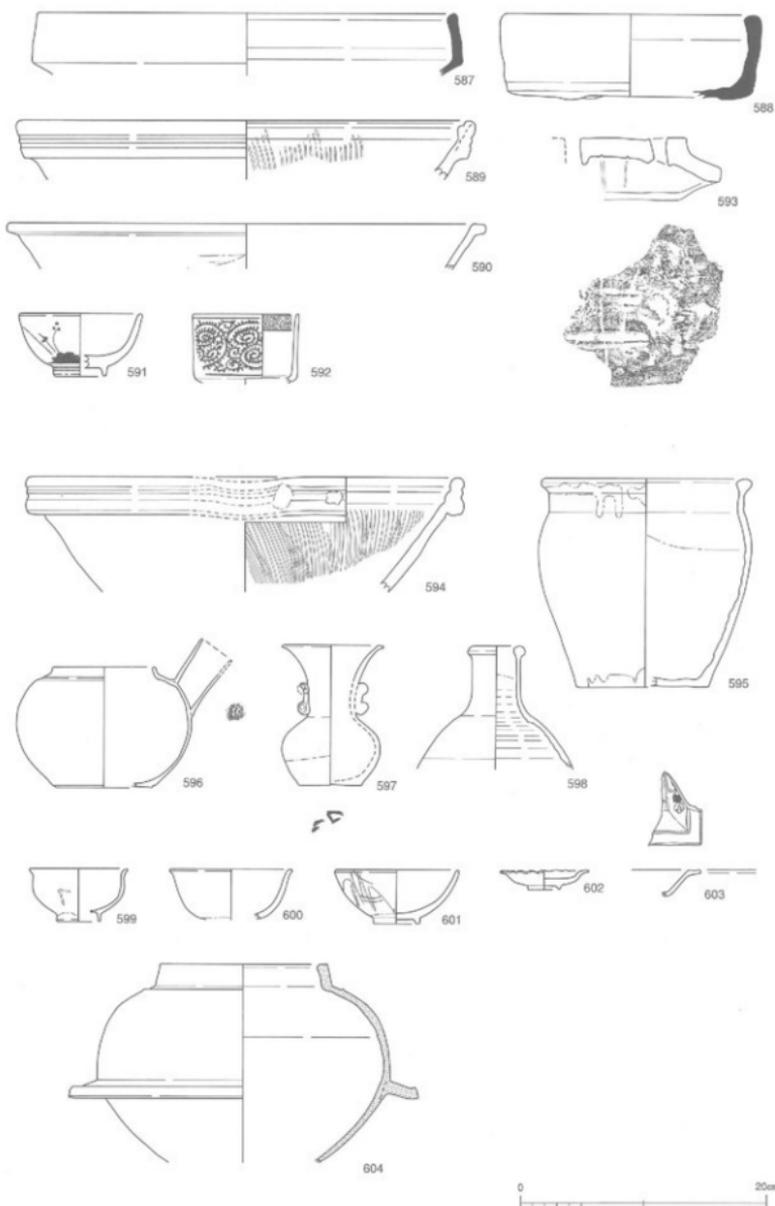
D·F区出土土器（羽口）



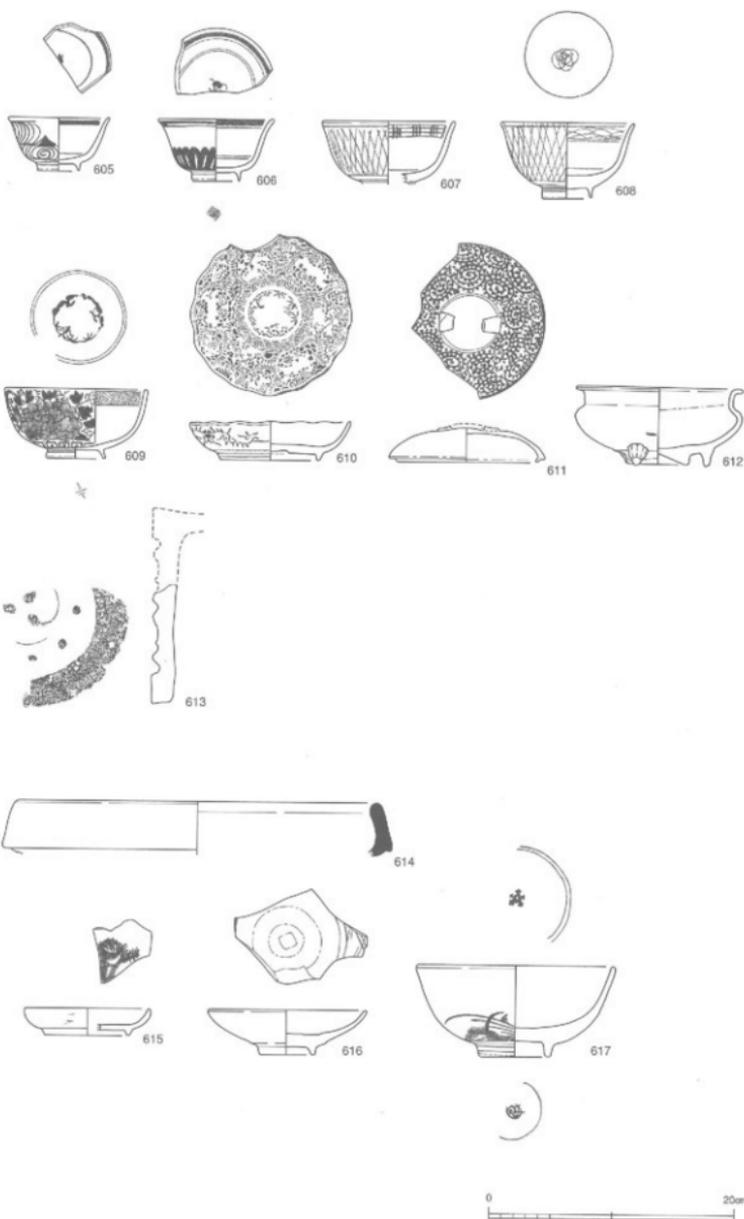


I-3区出土土器①

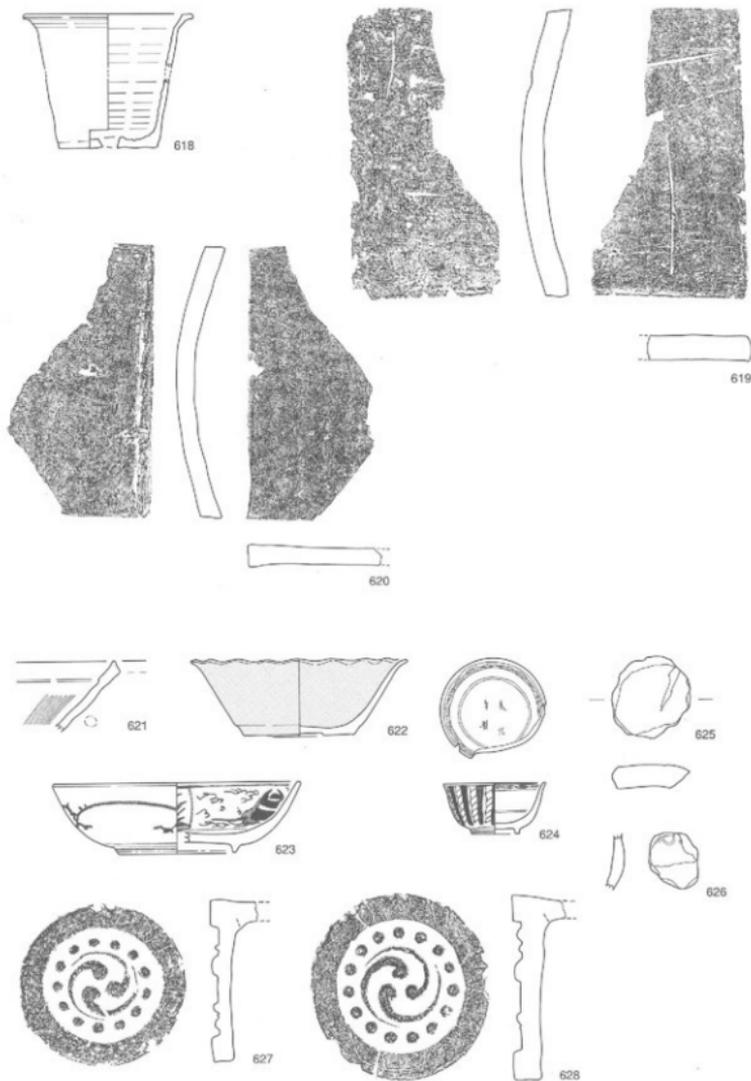




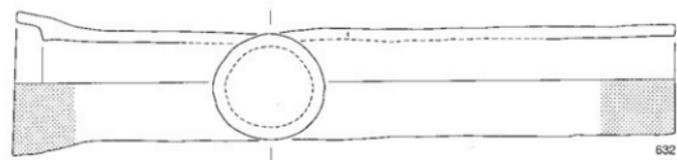
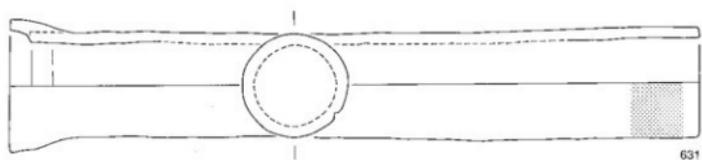
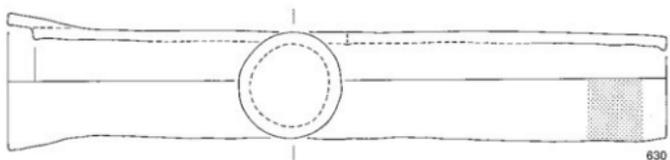
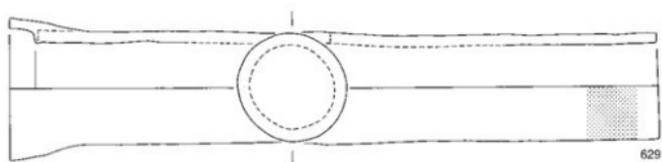
I—4区出土土器①

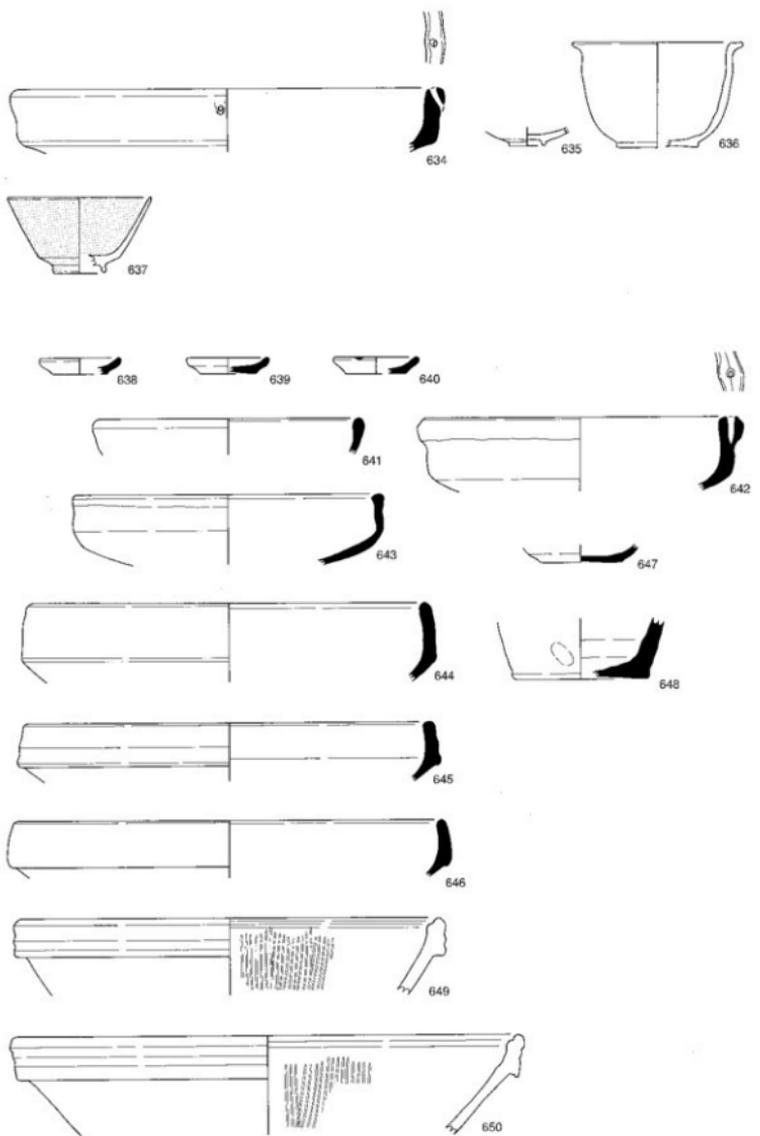


I-4区出土土器②

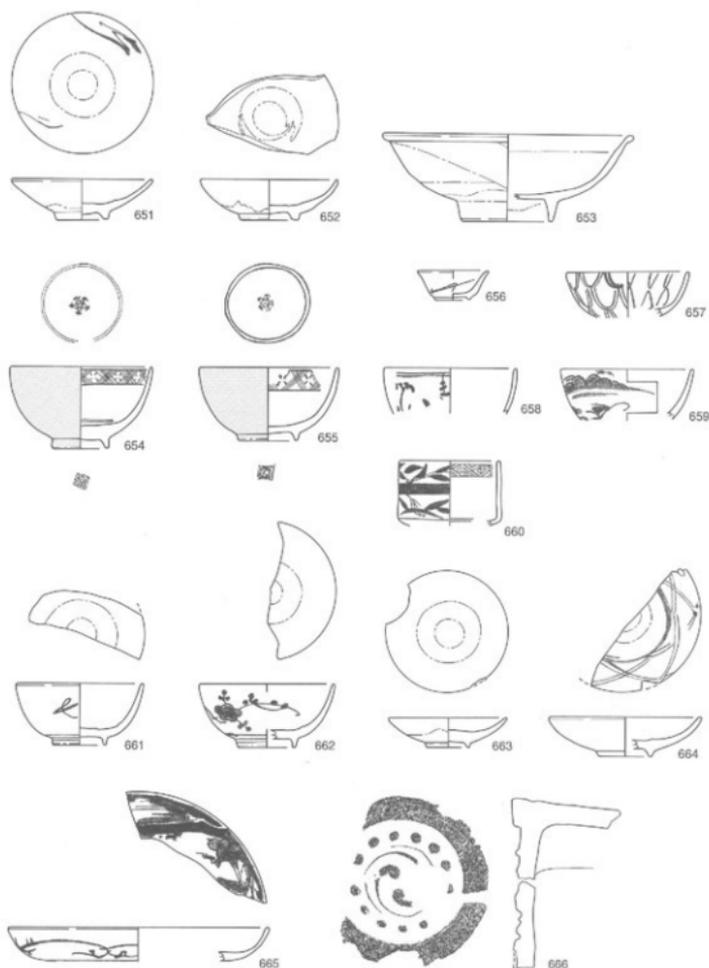


I-4区出土土器③

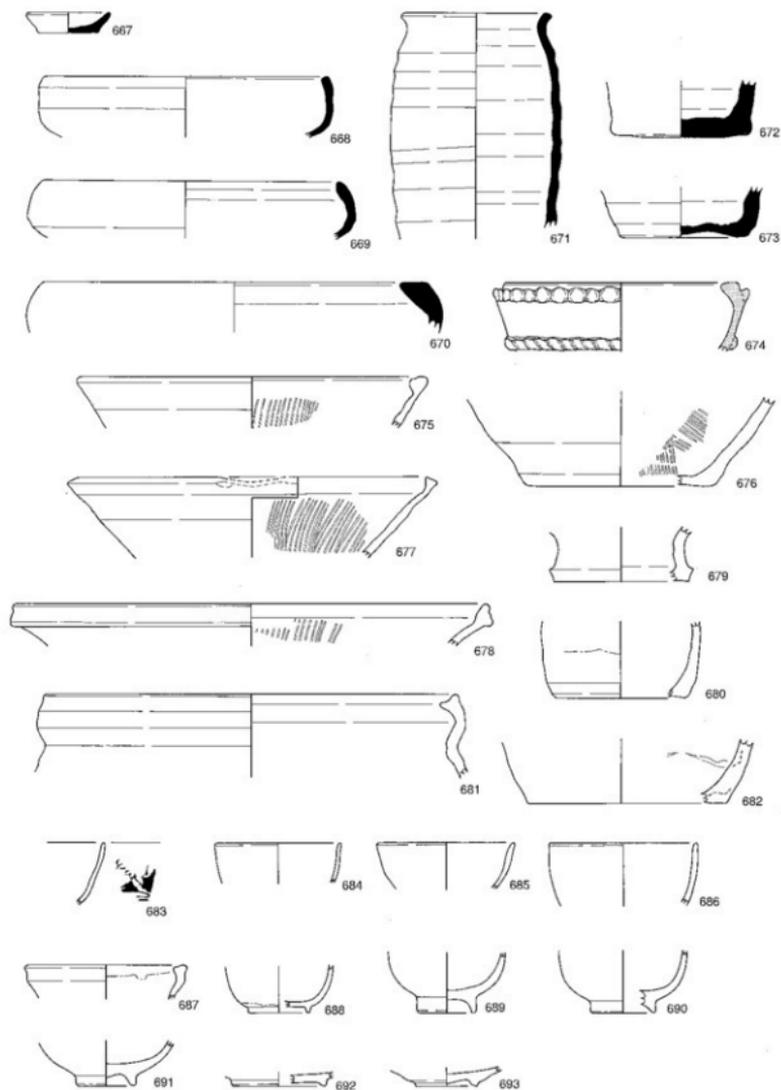




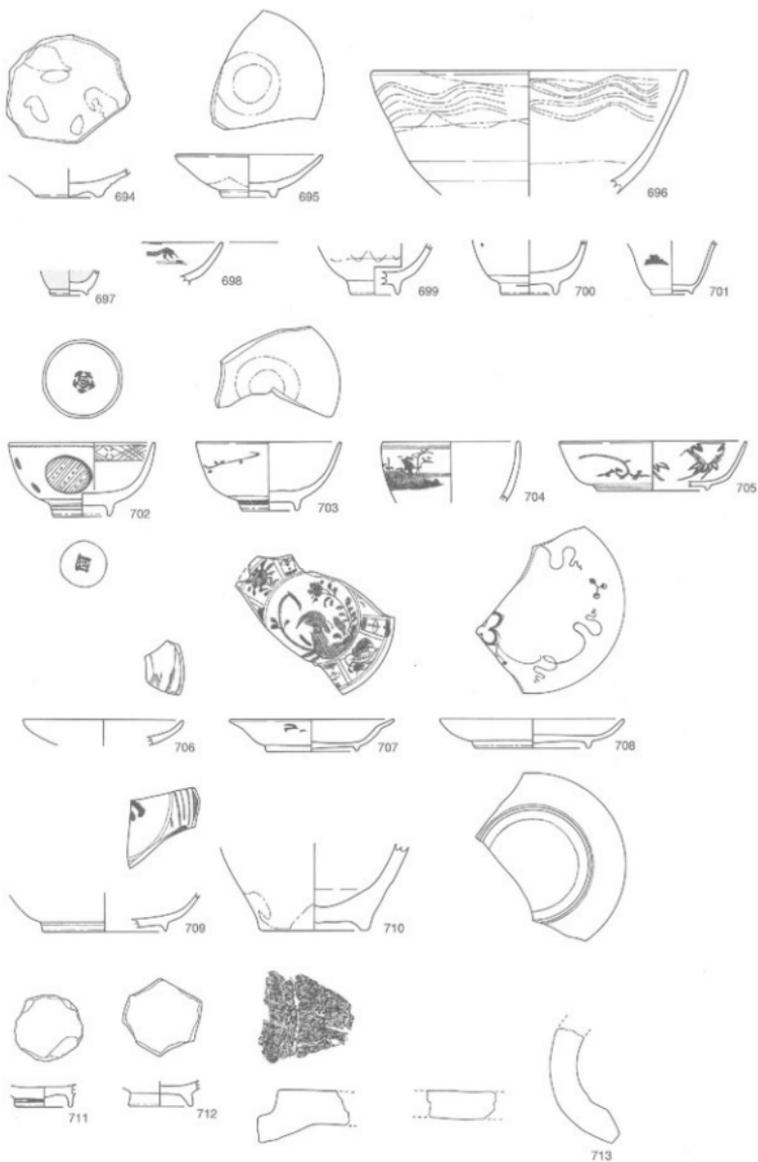
I-5区出土土器①

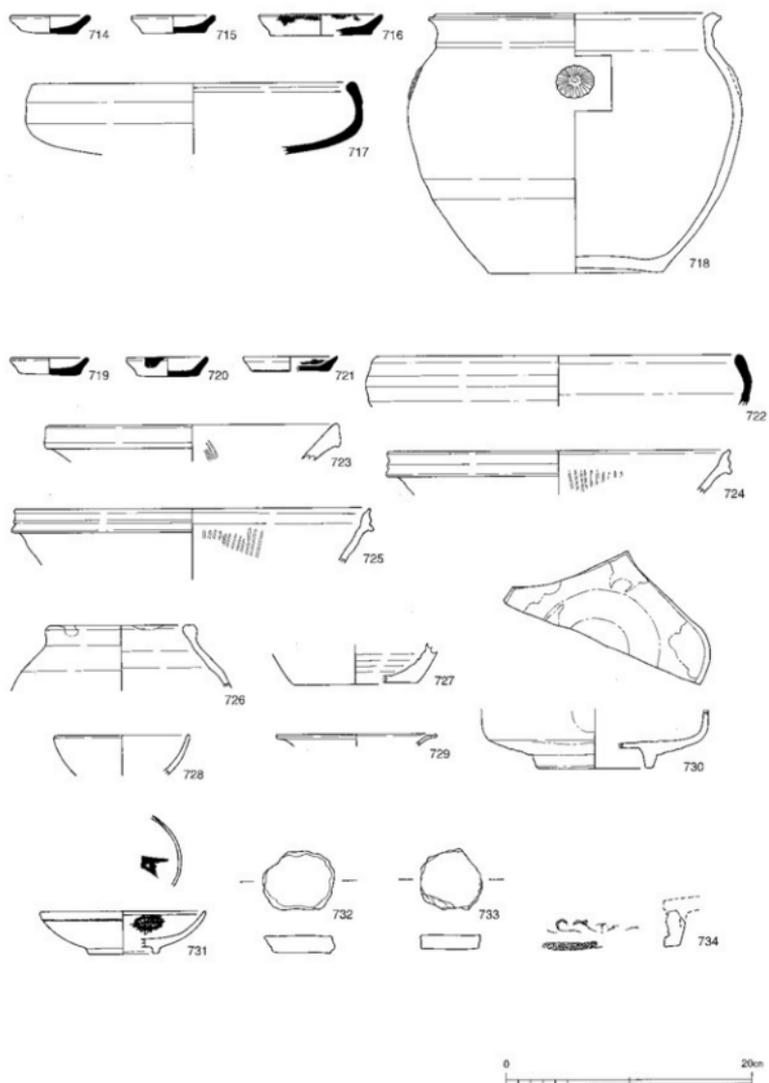


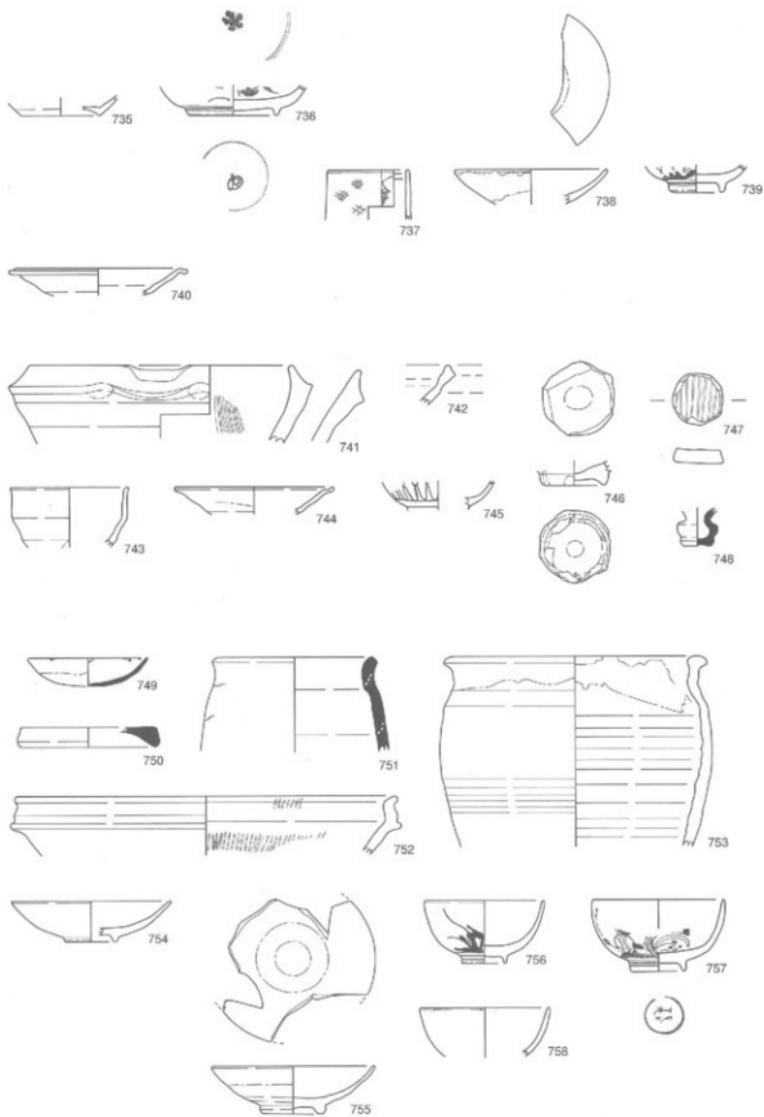
I-5区出土土器②



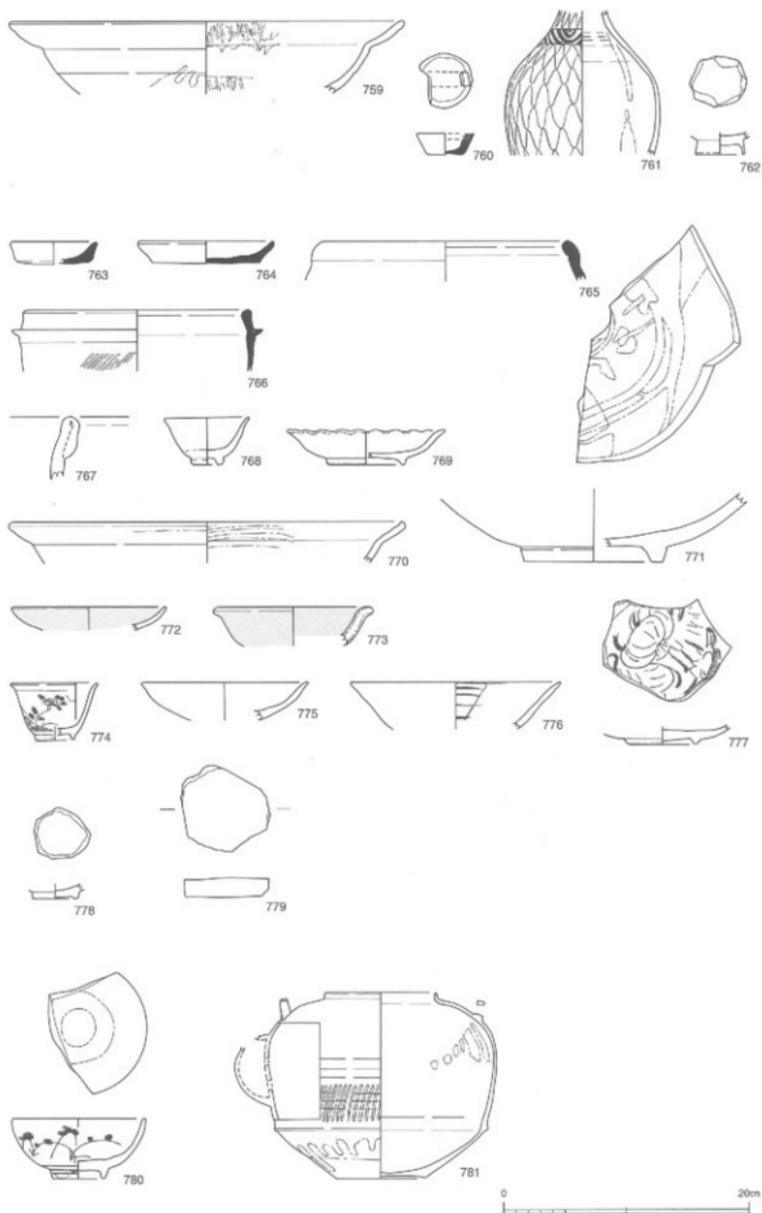
I-5区出土土器③



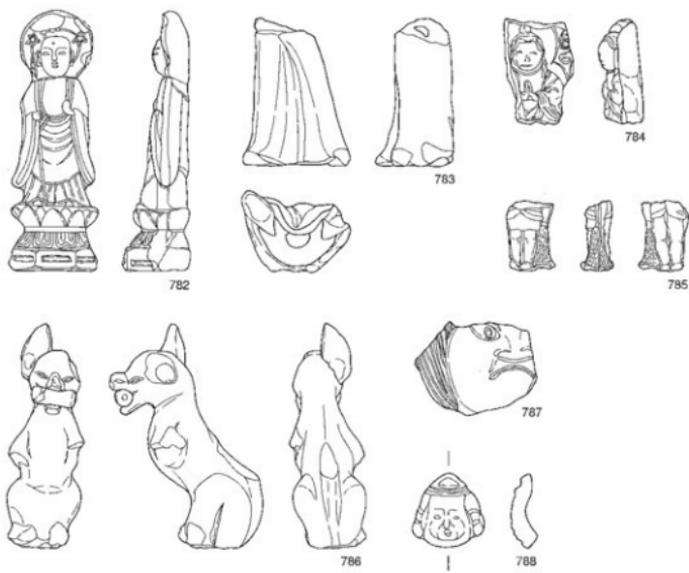


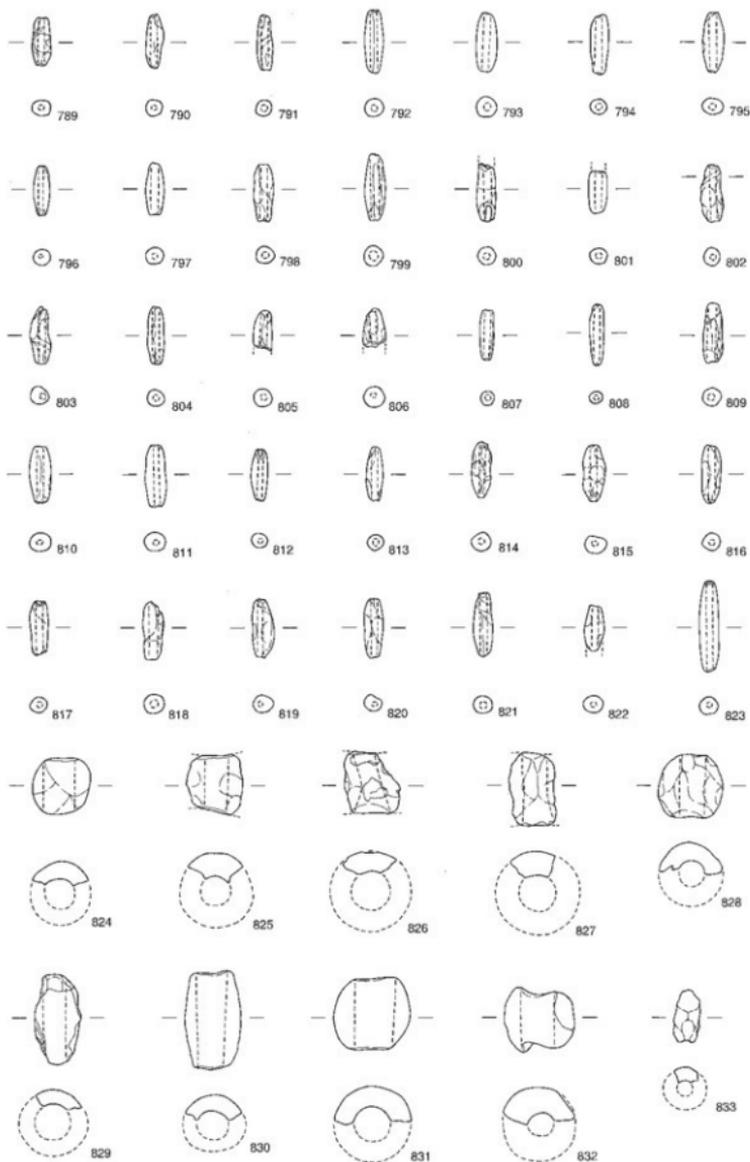


0 20cm

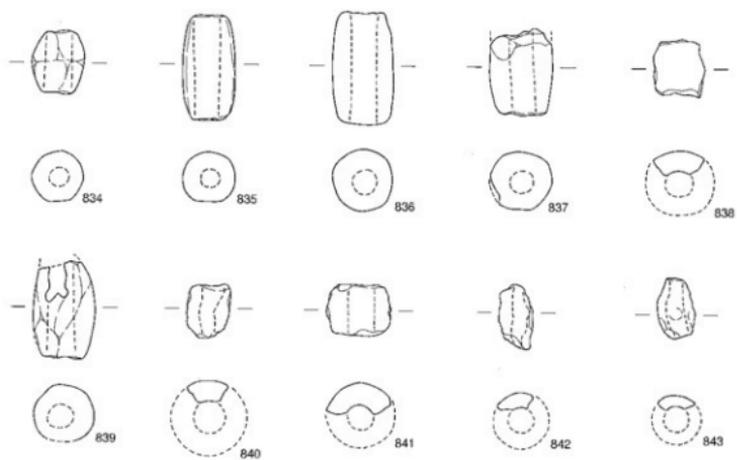


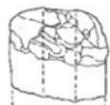
I-7・I-10区出土土器①・その他





土製品② (土錘)

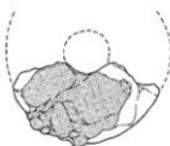




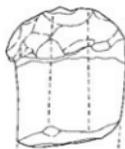
844



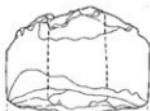
845



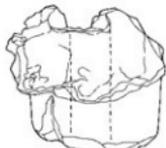
846



847



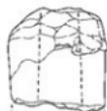
848



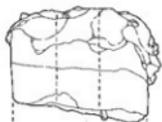
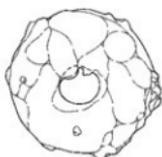
849



850



851

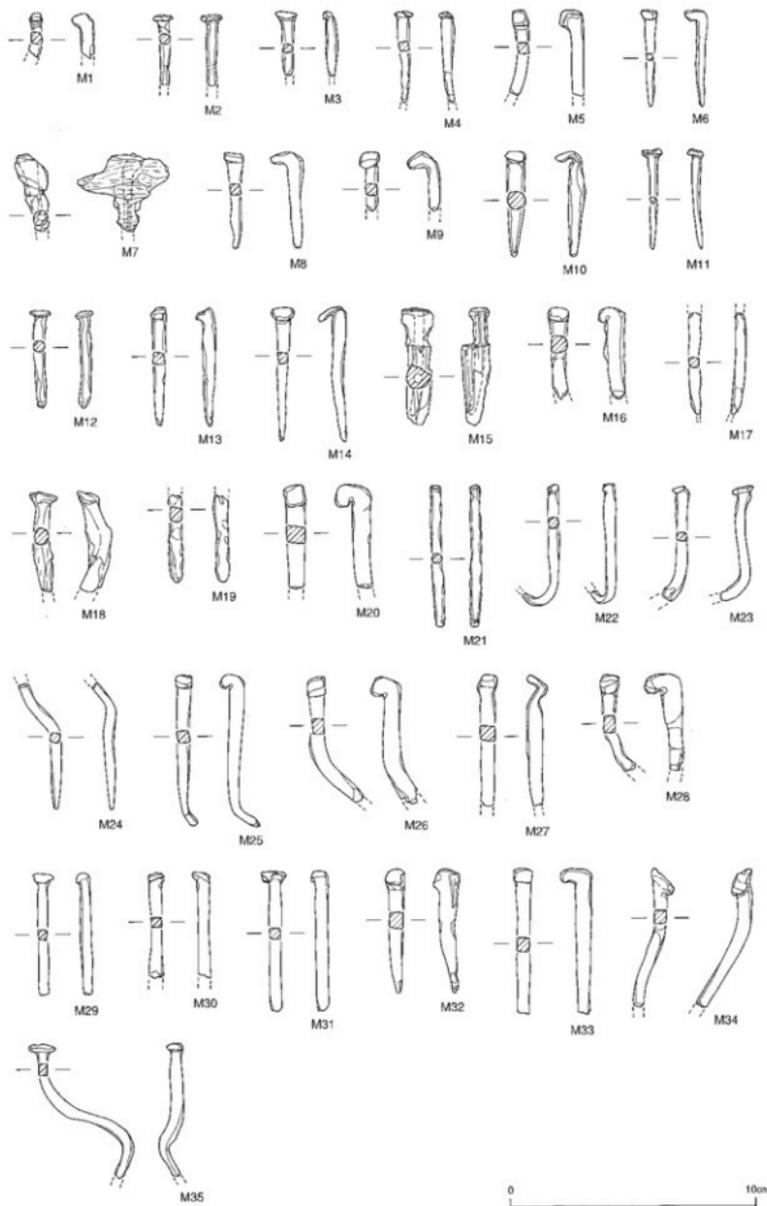


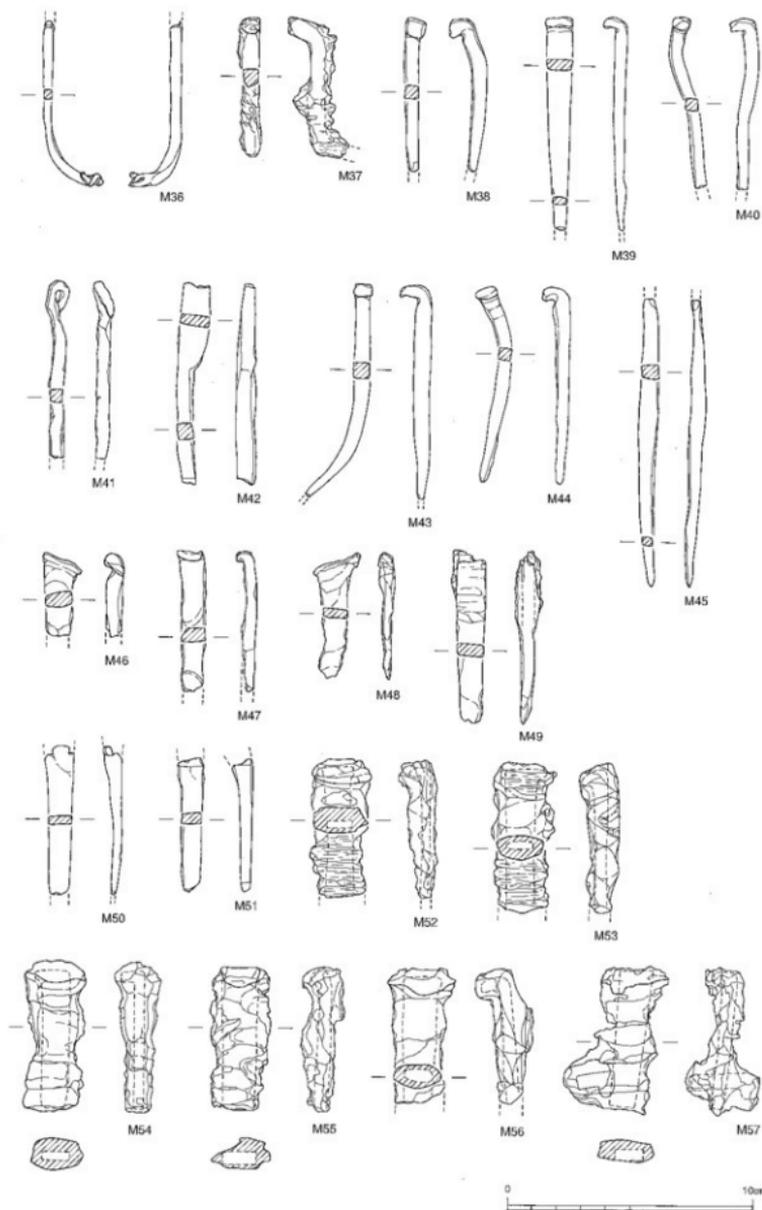
852

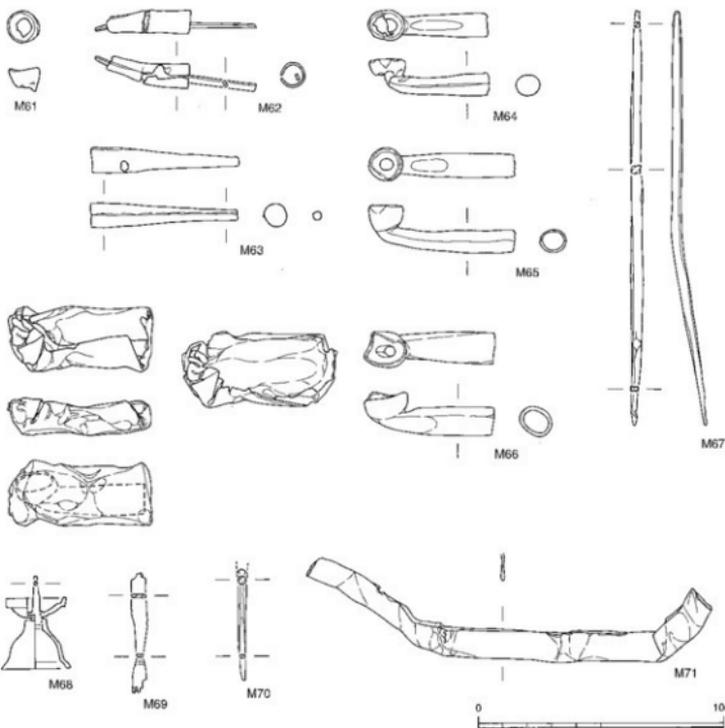
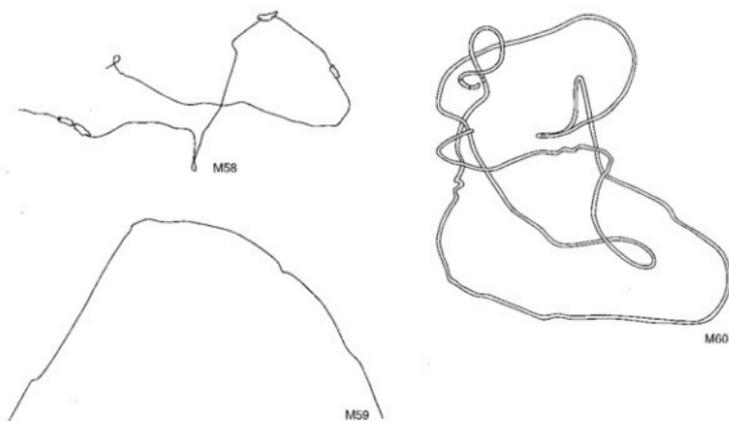


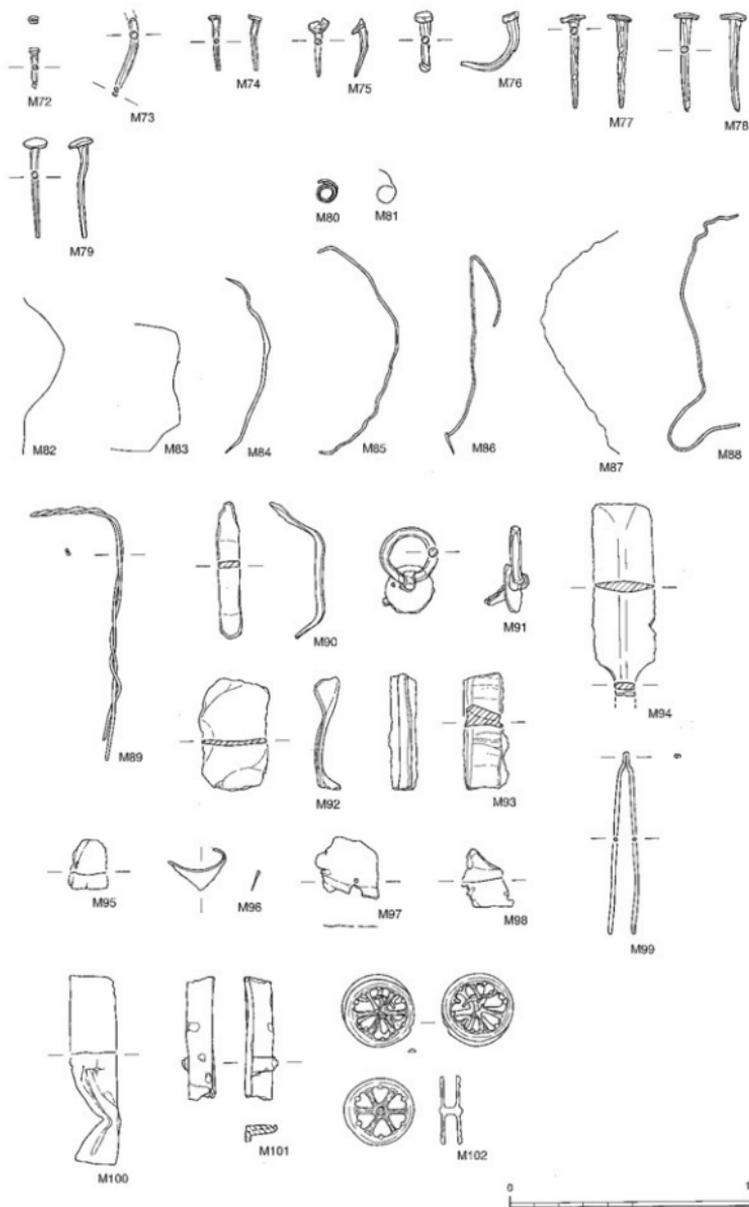
853

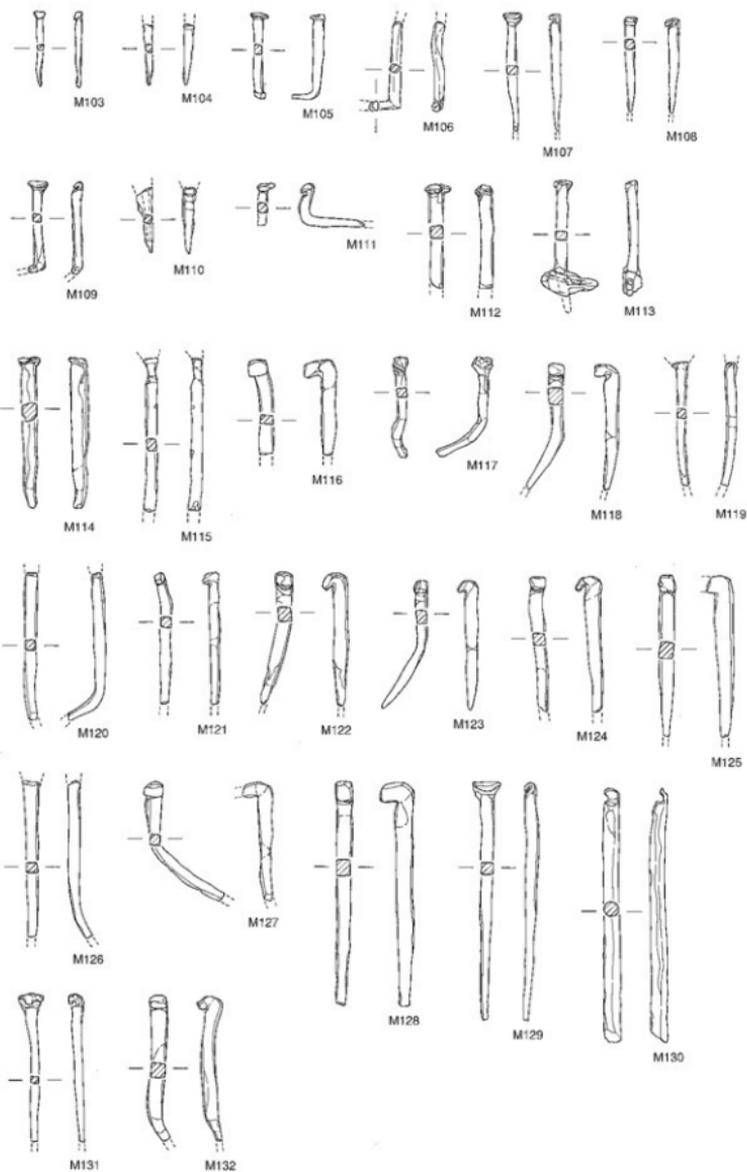


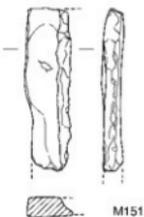
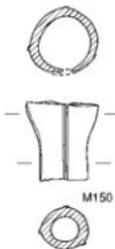
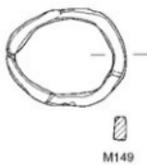
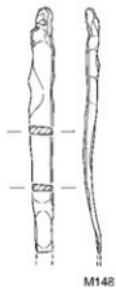
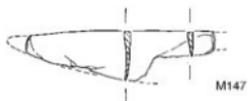
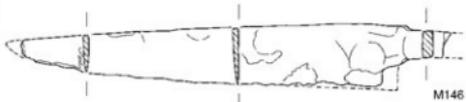
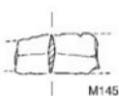
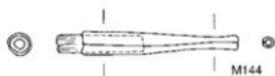
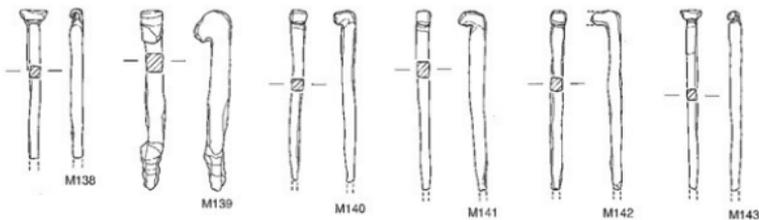
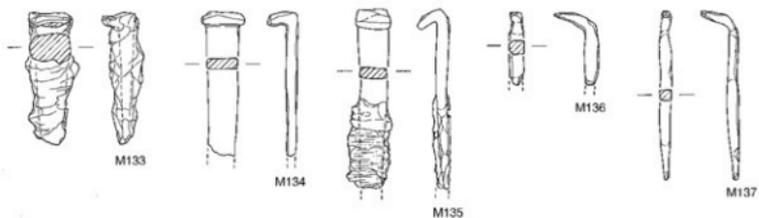


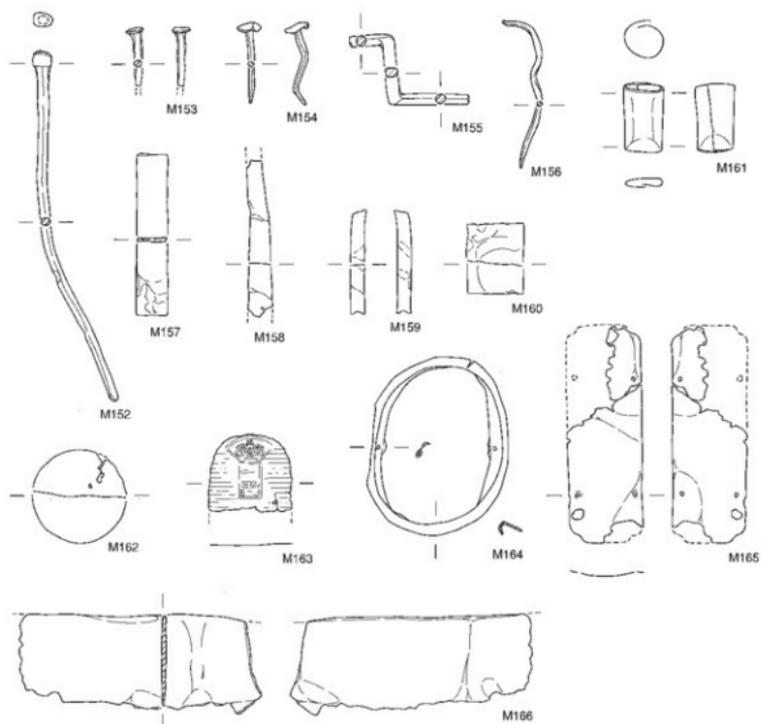


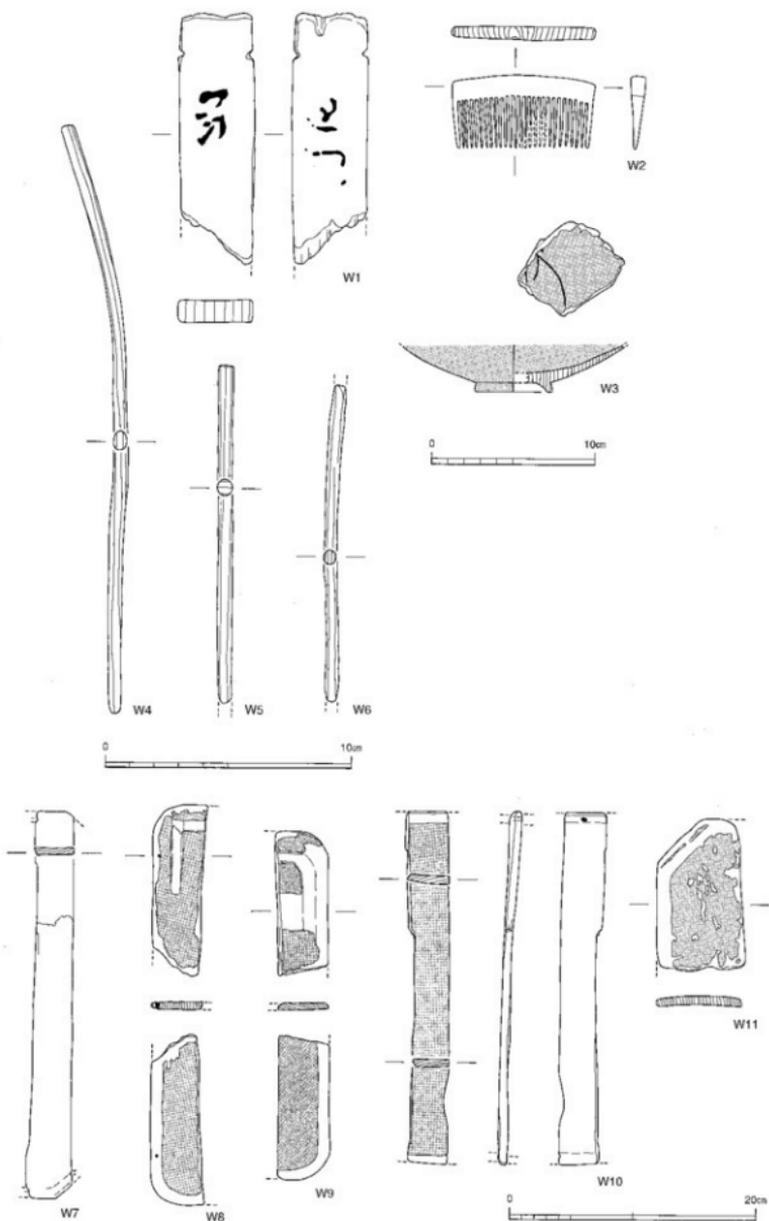




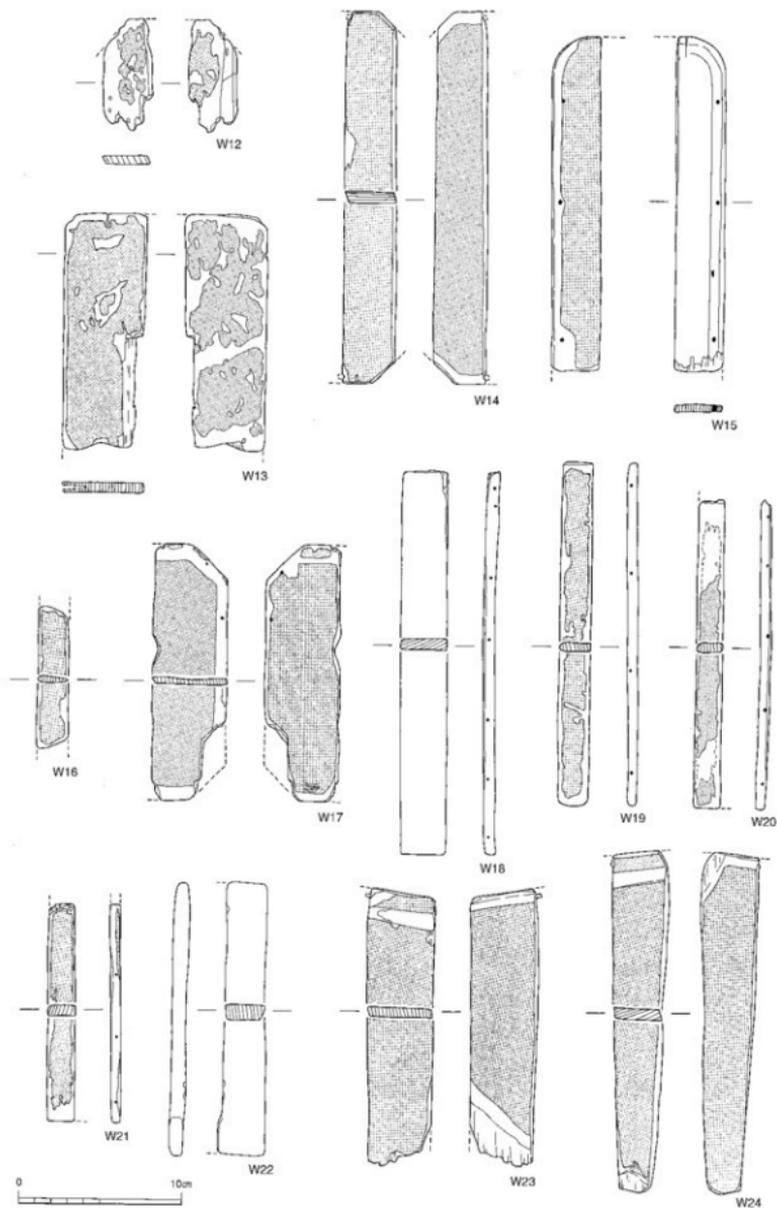


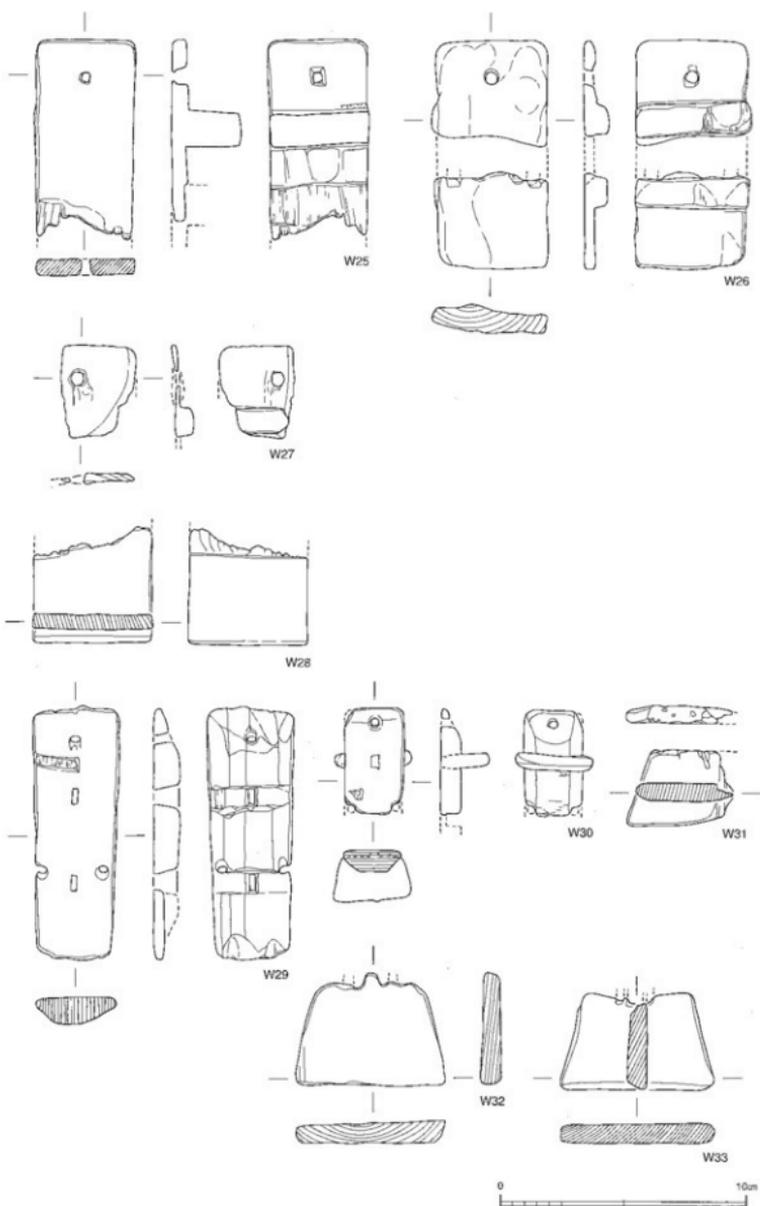




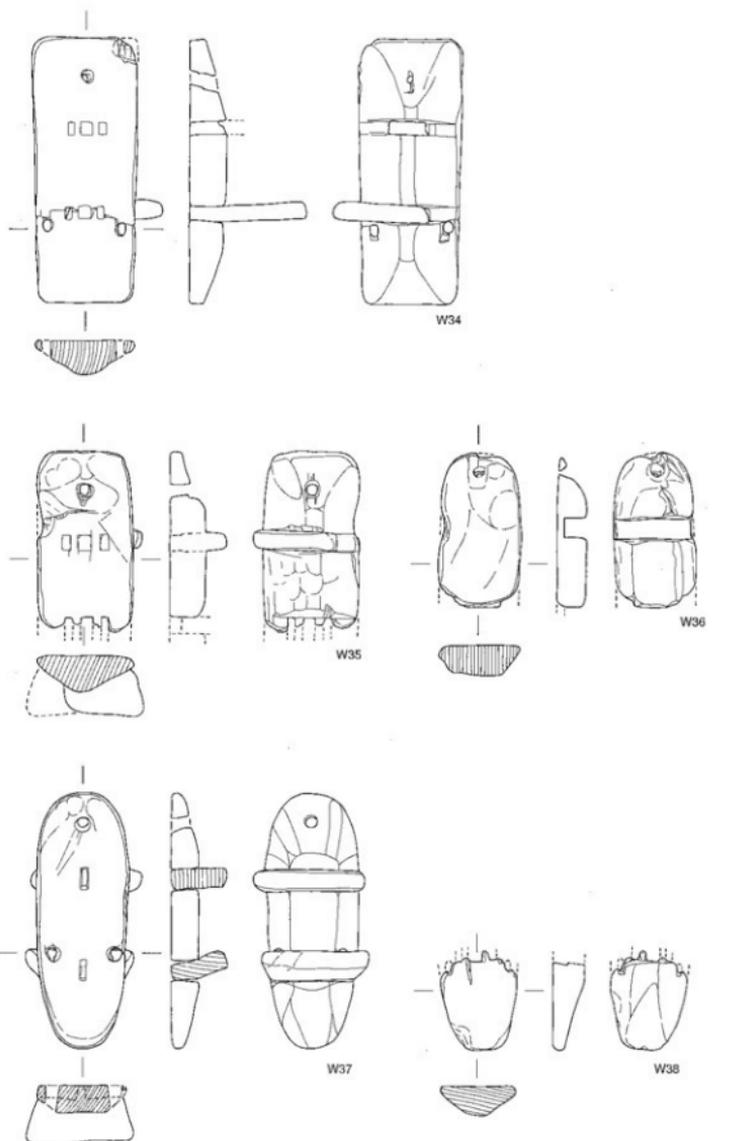


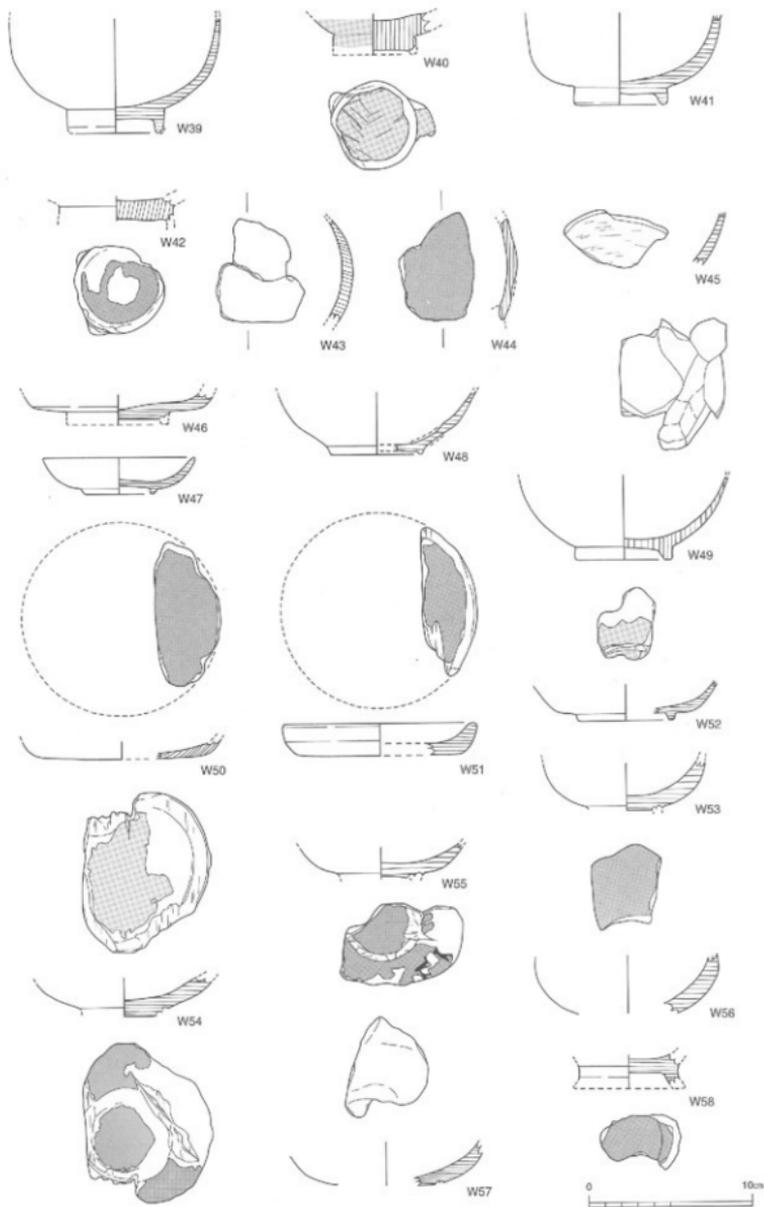
木器・木製品①



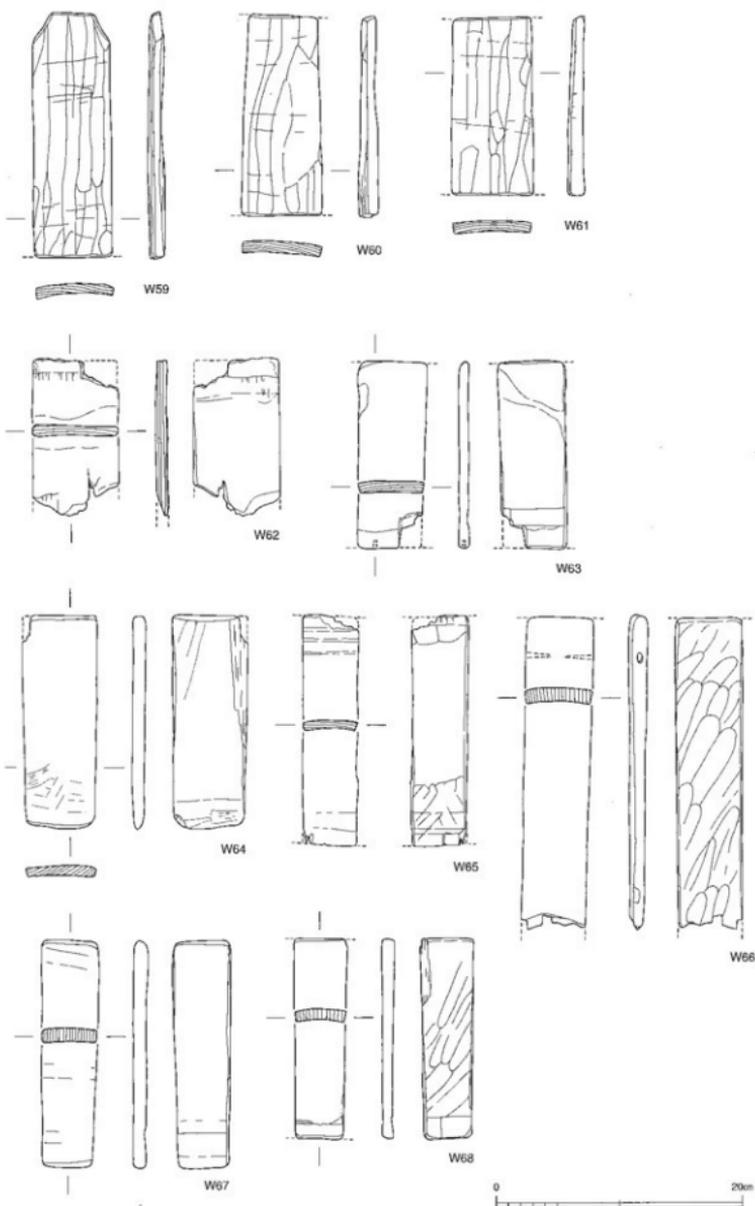


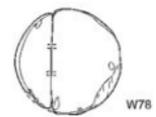
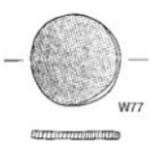
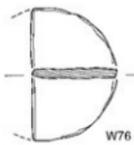
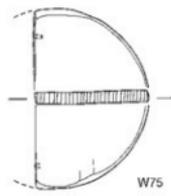
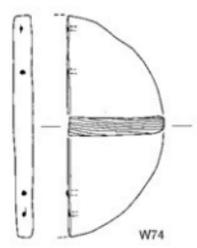
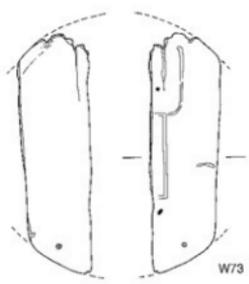
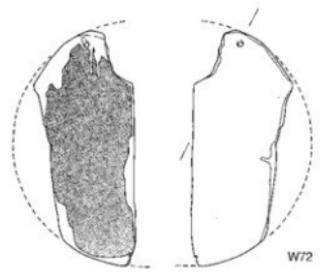
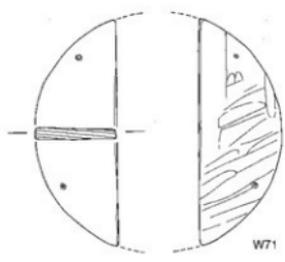
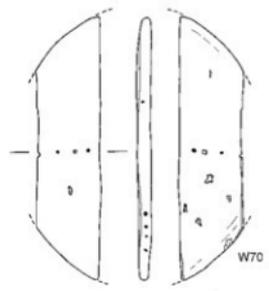
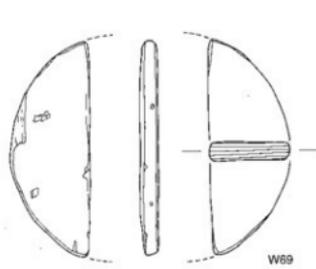
木器・木製品③

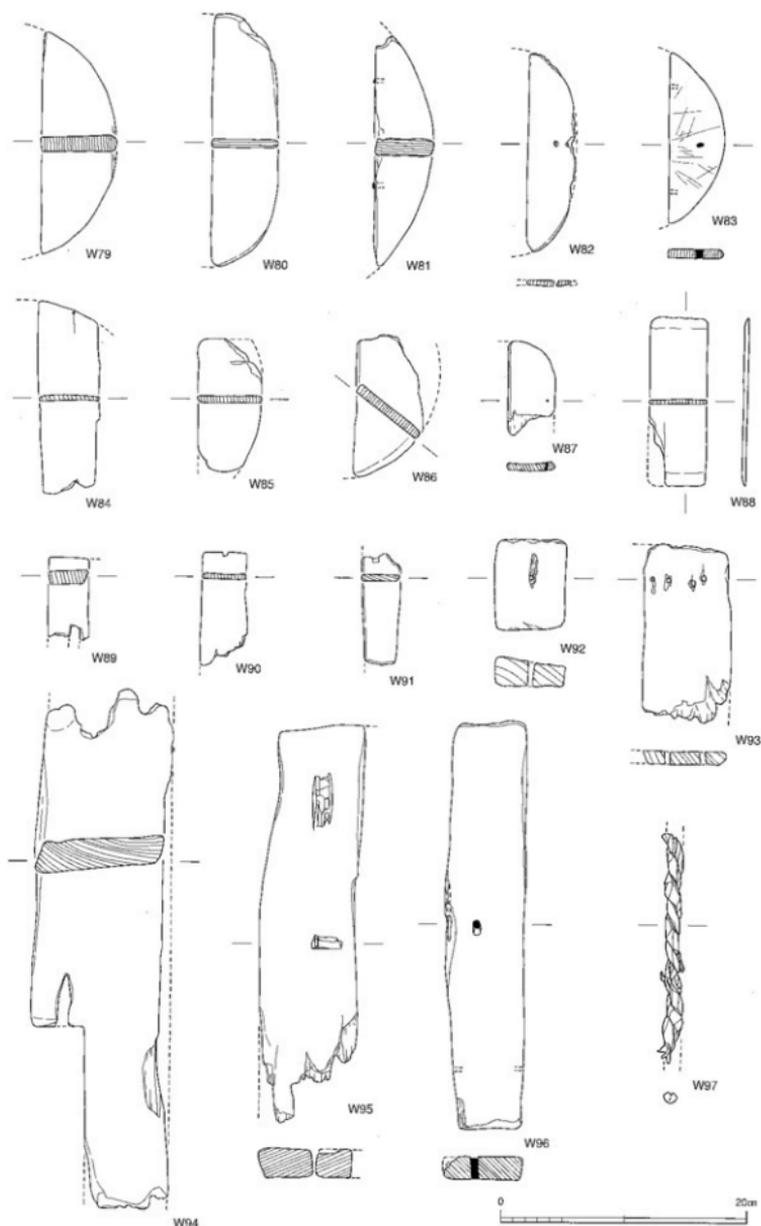




木器・木製品⑤







写真図版



西出地区調査前状況（南側歩道橋から）



西出地区調査前状況（南から）



C区調査前状況



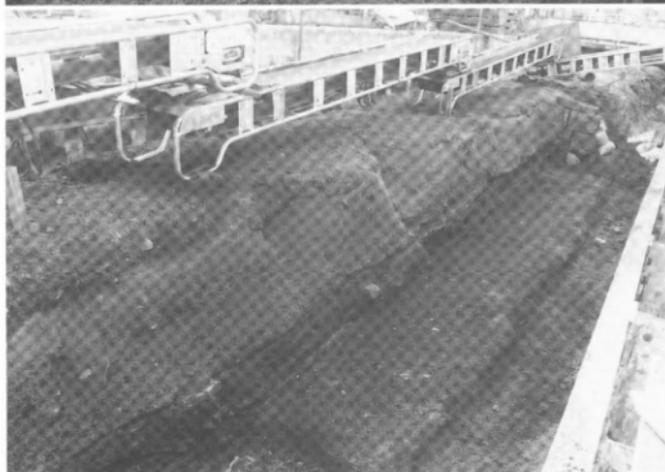
C区畦土層断面
(北から)



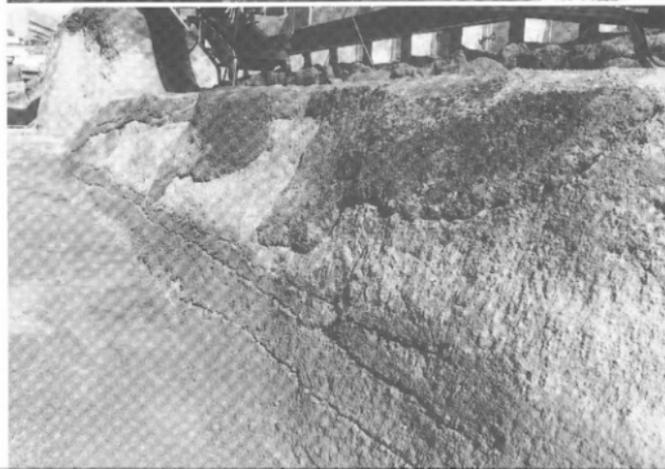
C区全景
(南から)



D区重機掘削状況
(北から)



D区畦石垣2付近土層断面
(北西から)



D区畦石垣1側土層断面
(南西から)



D区北側全景
(南から)



D区石垣1
(南から)



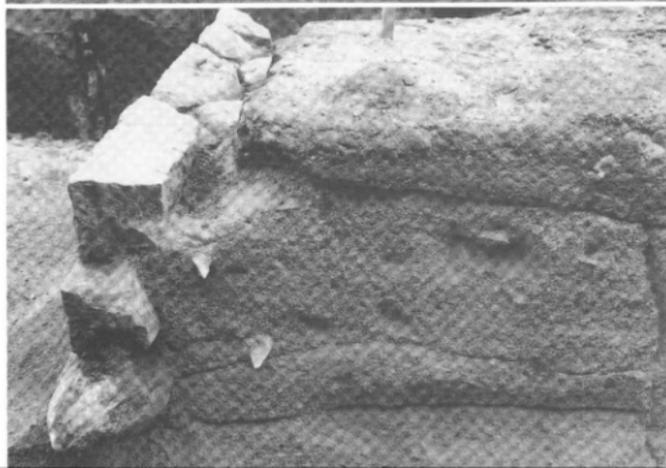
D区石垣1
裏込め土層断面
(北から)



D区南側全景
(北から)



D区石垣2
(北から)



D区石垣2
裏込め土層断面
(西から)



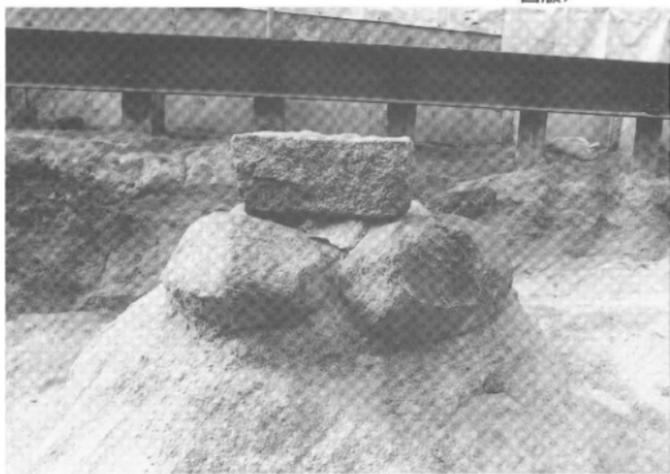
D区南側全景
(北から)



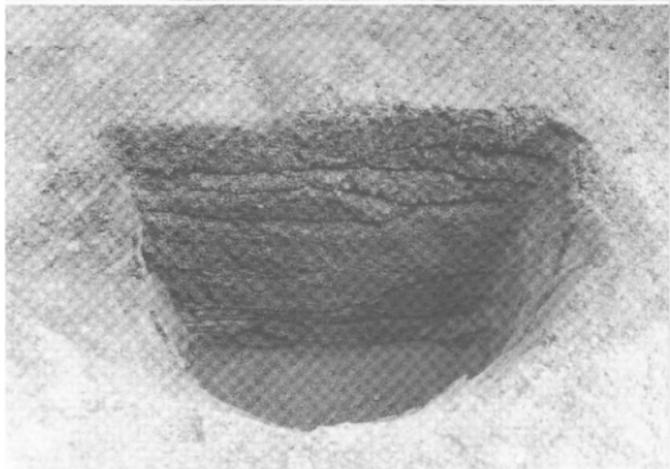
D区石垣3
(北から)



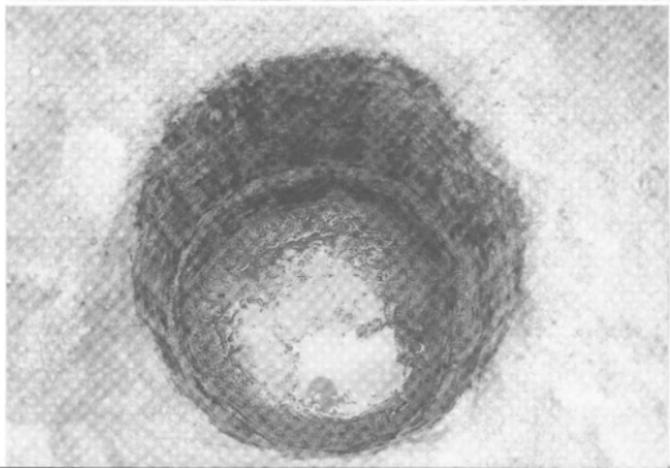
D区石垣3裏込め土層断面
(北から)



D区石組み遺構
(東から)



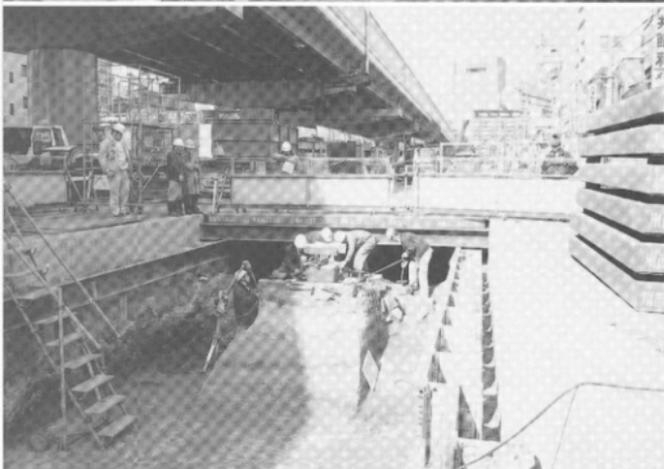
D区SE01断面
(西から)



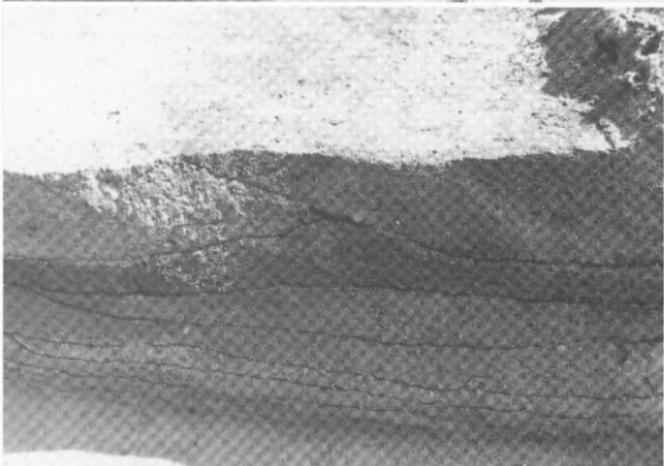
D区SE01
(西から)



E区重機掘削状況



E区調査状況



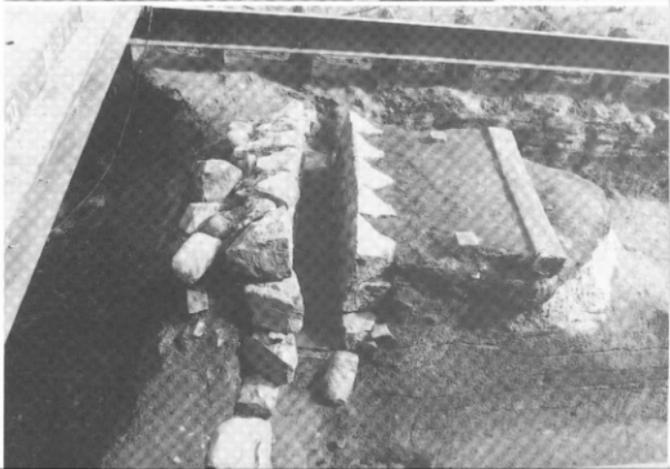
E区土層断面
(西から)



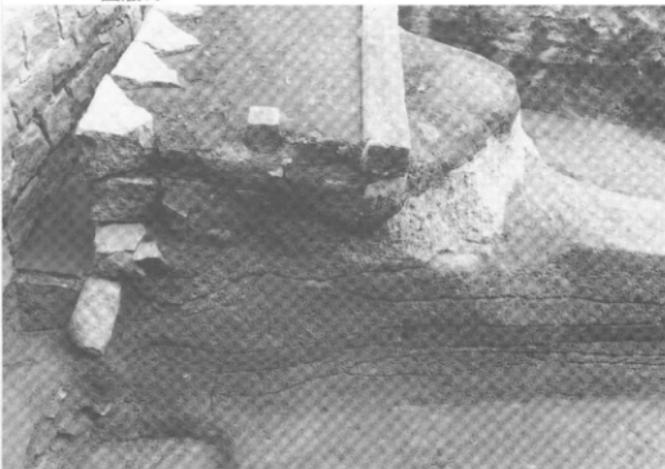
E区全景
(北から)



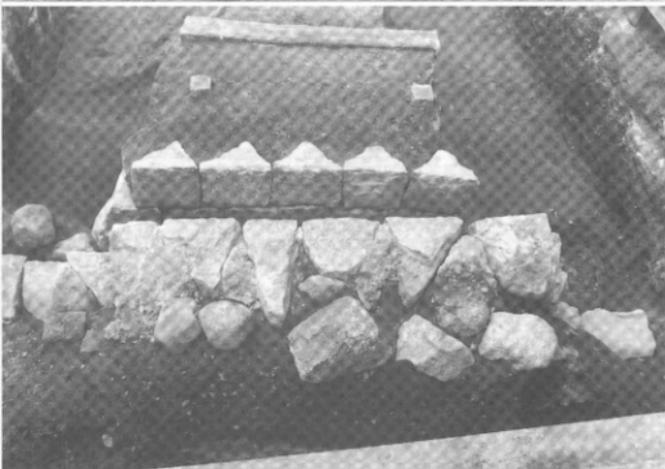
E区石垣4
(南から)



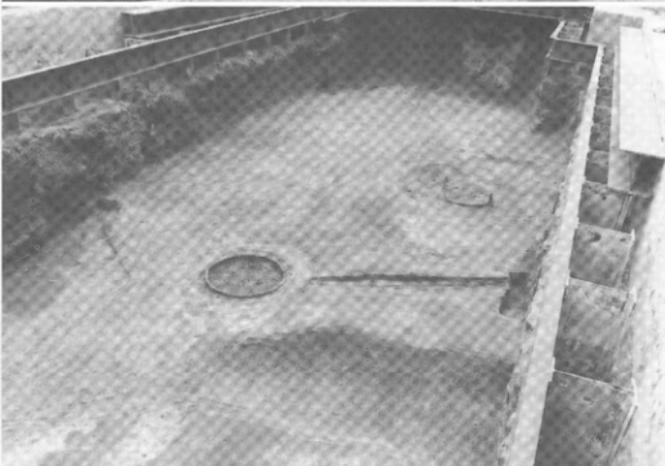
E区石垣4
(西から)



E区石垣4
裏込め土層断面
(西から)

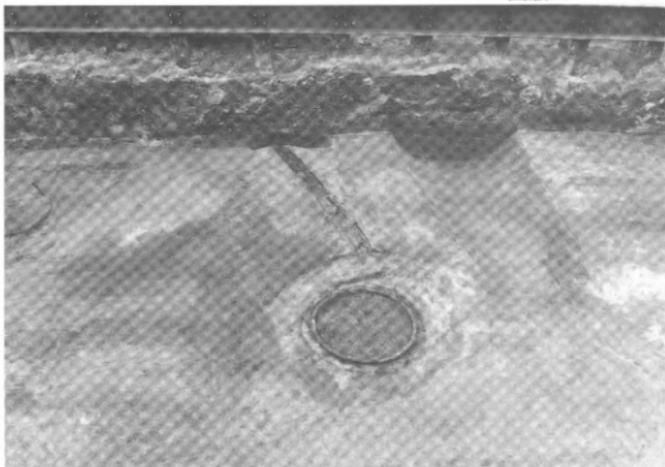


E区石垣4
(北から)

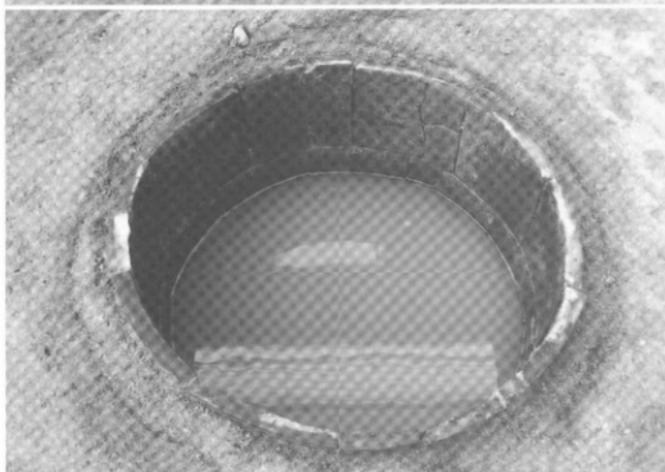


E区南半部遺構検出状況
(北から)

E区SE02検出状況
(東から)

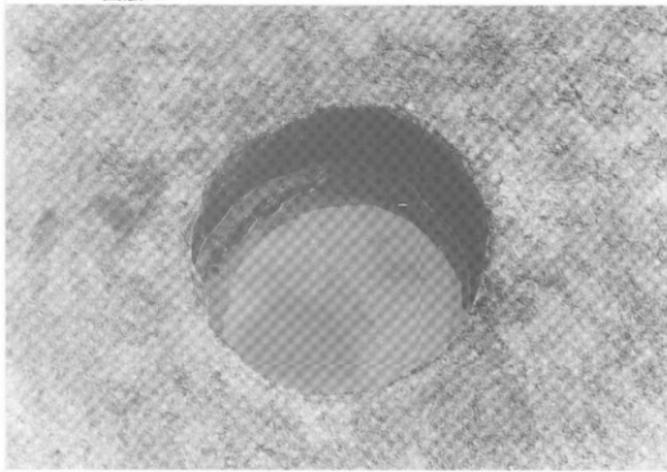


E区SE02
井戸組み状況
(東から)

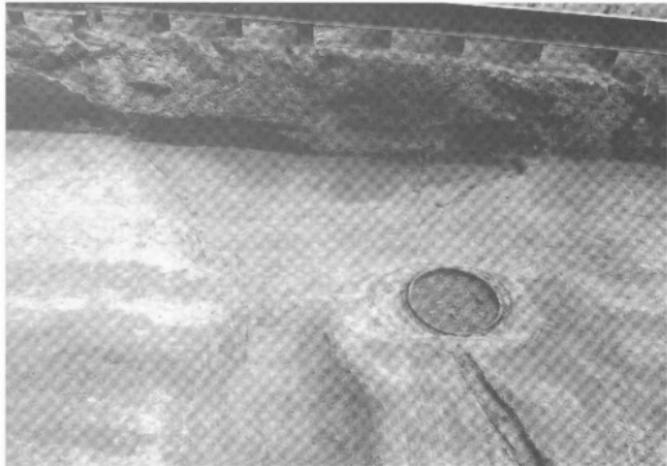


E区SE03検出状況
(西から)

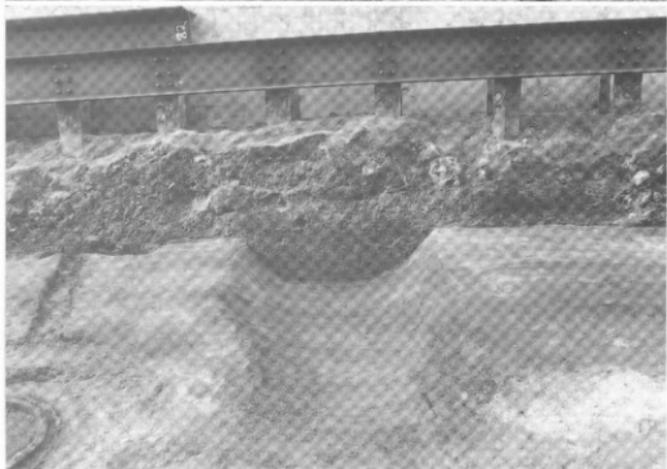




E区SE03
井戸組み状況
(西から)



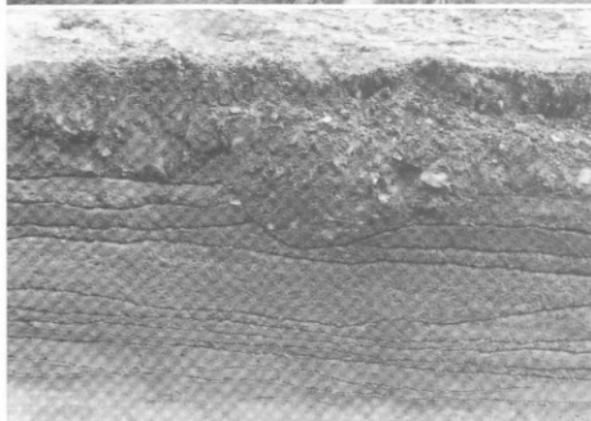
E区SX01検出状況
(西から)



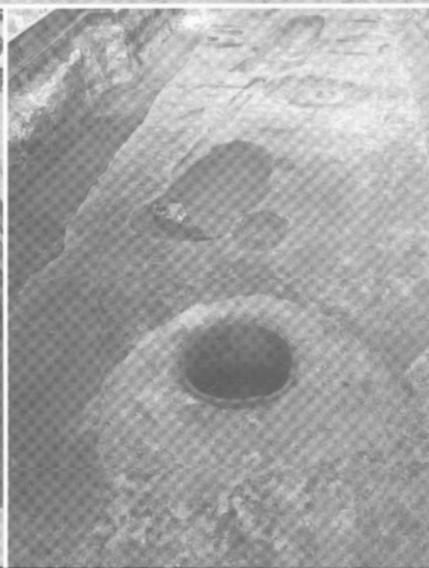
E区SX01付設溝断面
(東から)



F区調査状況



- 上：F区土層断面
(西から)
- 左下：F区上層遺構北側
(北から)
- 右下：F区上層遺構南側
(南から)





F区石垣5検出状況
(南西から)

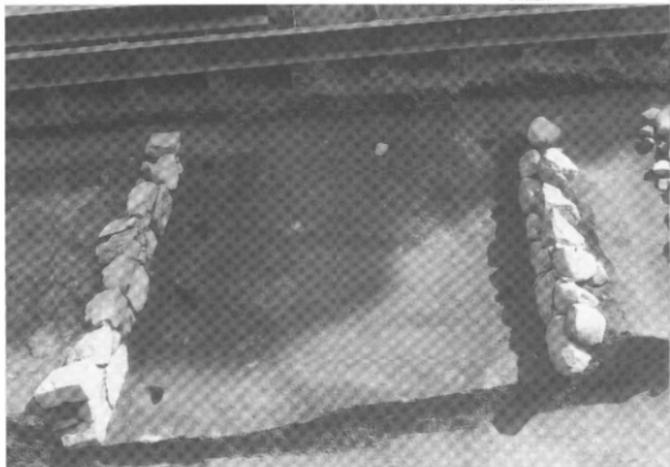


F区石垣5南側
(南から)



F区石垣5攪乱除去後
(南西から)

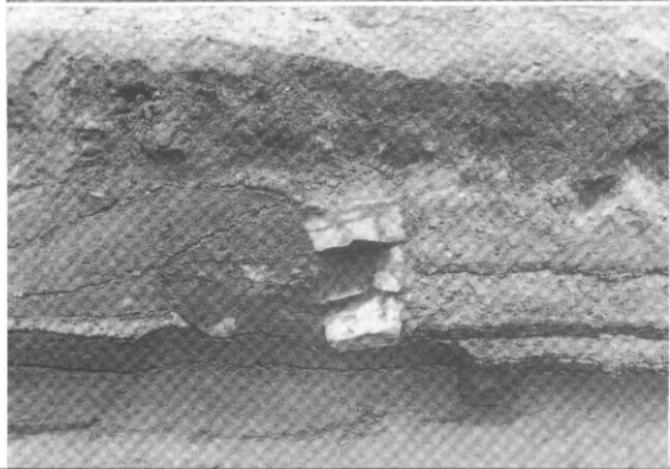
F区SX02
(西から)

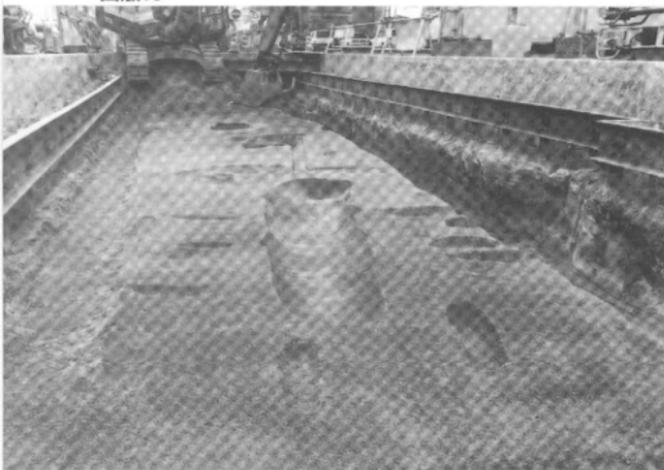


F区SX02北側
(南から)



F区SX02北側
裏込め土層断面
(西から)

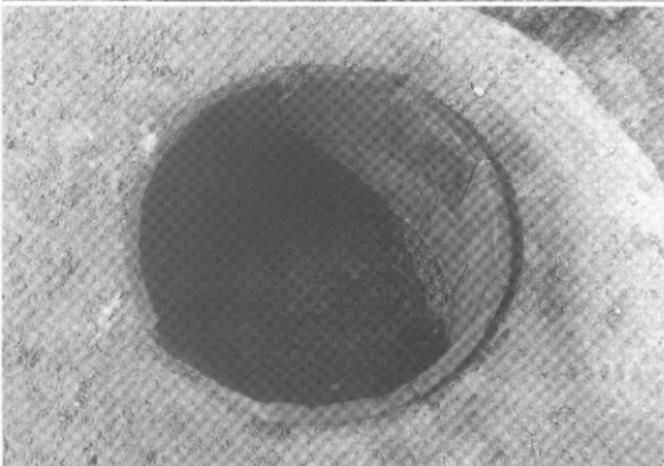




F区上層南側遺構群
(北から)



F区SE04検出状況
(東から)



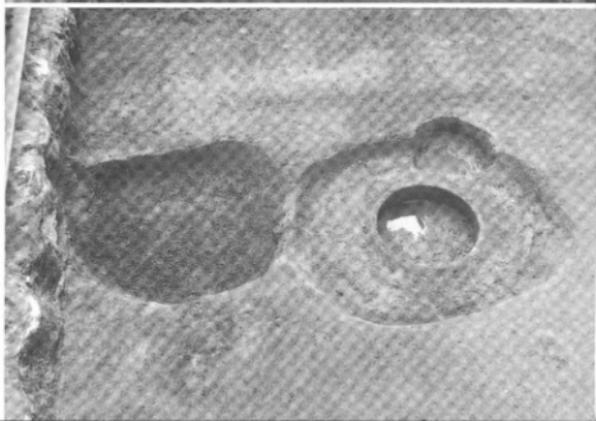
F区SE04
井戸組み検出状況
(東から)



F区下層遺構北側
(北から)



F区下層遺構南側
(南から)



F区下層土坑と上層SE04
(北から)



F区下層SK01
(西から)



F区下層SK05
(東から)



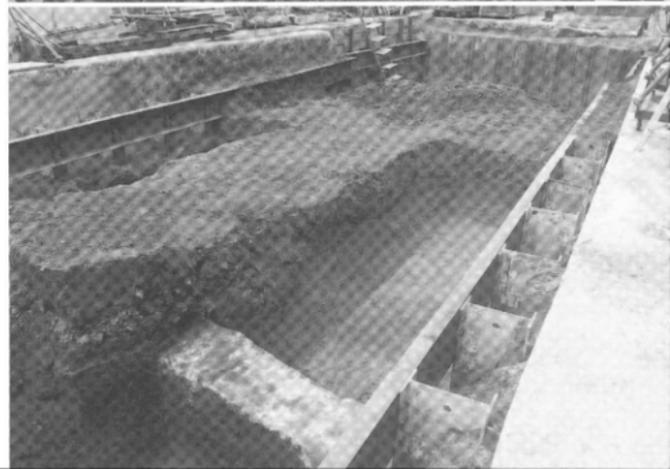
F区下層SK05
(北から)



G区重機掘削状況



G区調査完了状況
(南から)



G区土層断面
(西から)



Ⅱ区確認調査風景（南から）



Ⅱ区確認調査風景（北から）



I-6区調査状況



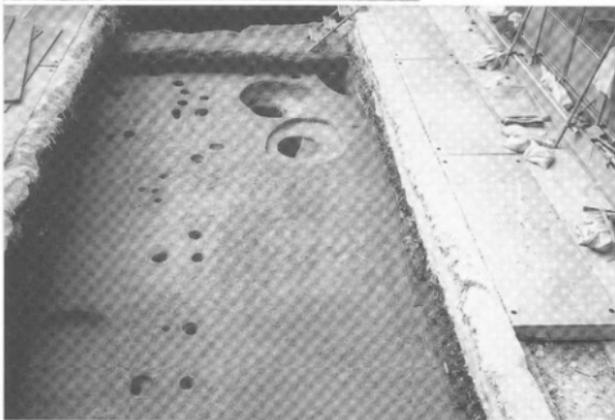
I-6区断面東壁
(南西から)



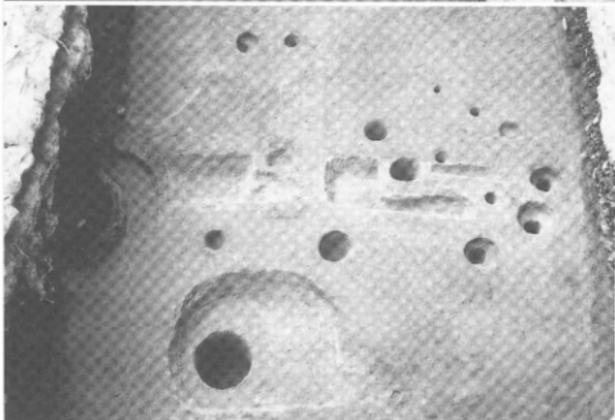
I-6区断面西壁南側
(東から)



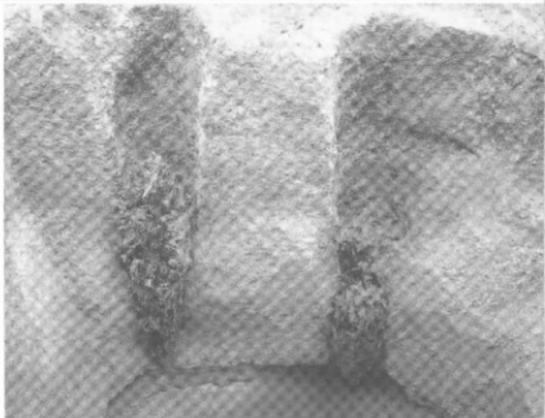
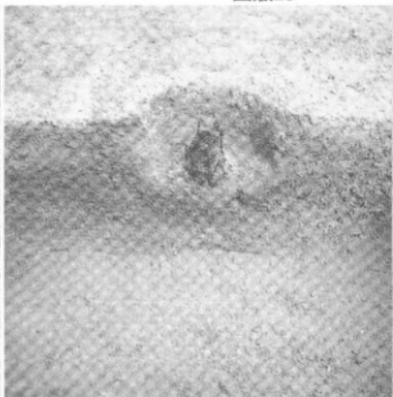
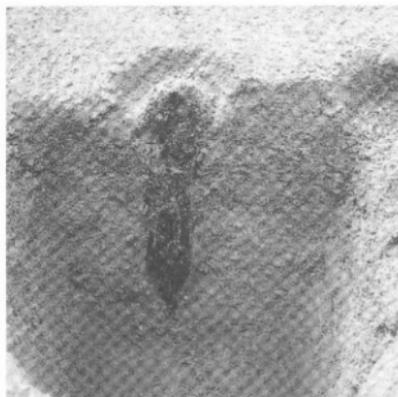
I-6区上層遺構全景
(北から)



I-6区上層遺構南側
(北から)



I-6区上層遺構北側
(北から)



左上：I-6区P-15断割り状況
 右上：I-6区P-17断割り状況
 中：I-6区P-6・7断割り状況
 左下：I-6区P-29断割り状況
 右下：I-6区P-29出土柱材

